

博士論文

論文題目 漢字文化における文字遊戯の近代的形成
—燈謎を例にして—

氏名 吳 修喆

目次

序章 中国近代文化史における燈謎研究の課題と本論文の構成	1
一 本論文の目的と名詞整理	1
1. 燈謎	1
2. 古体謎と今体謎	5
3. 燈謎と謎語	6
4. 謎話	6
二 燈謎研究の現状	7
三 近代における謎史の構築とその問題点	8
四 本論文の構成	9
第Ⅰ部 燈謎の近代的文体の形成	12
第一章 明末の日用類書から見る燈謎	12
一 はじめに	12
二 九種の日用類書	14
三 目録から得られる考察	20
四 日用類書による燈謎の分類	22
五 おわりに	28
附表1 目録比較表	29
附表2 燈謎分類比較表	30
第二章 章回小説との共生をめぐって	31
一 はじめに	31
二 説話と商謎に関する再考	31
三 章回小説から見る燈謎	40
1. 明末清初の世情小説——西周生『醒世姻縁伝』	40
2. 『紅樓夢』及びその続書	42
3. 才学小説——李汝珍『鏡花縁』	49
4. 才子佳人、狎邪小説	60
5. 小説革命以降の章回小説	66
四 おわりに	69
第三章 「燈謎」をめぐる文人意識の変化——謎話から得られる考察	72
一 はじめに	72
二 「博奕猶賢」と「小道可観」の論法	74
三 雑誌・新聞の潮流に乗って	80
四 「博奕猶賢」論の危機	82
五 民俗学との角逐	87
六 おわりに	90
附表 清末民国期の雑誌における謎話初出一覧	91
第Ⅱ部 燈謎の近代的実践形態の形成	95
第四章 二〇世紀台湾の謎社——文化政策の変化を手がかりに	95
一 はじめに	95
二 近代台湾における燈謎活動	96

1. 日本統治時代以前（1661-1895）	96
2. 日本統治時代（1895-1945）	97
三 戦後の文化政策と謎社の復興	100
1. 戦後「中国化」時期（1945-1965）	100
2. 中華文化復興運動期（1966-1976）	104
3. 文化建設から「本土化」へ（1977-現在）	107
四 おわりに	110
附表 台湾謎社簡表	112
第五章 戦後大陸における燈謎の活動環境	113
一 はじめに	113
二 戦後大陸における燈謎活動の概要	113
1. 謎社の分布と種類	113
2. 全国謎人向けアンケート調査の結果	114
3. 全国的な燈謎刊行物と組織	116
三 文革前後における活動様相の変化	117
1. 復活と統制——戦後から文革まで	117
2. 蘇生——文革収束後から八〇年代まで	121
3. 組織の移転と競技化ブーム——九〇年代以降	123
四 おわりに	124
附表 大陸/台湾における文化状況と燈謎事情の略年表	126
終章 結論	127
参考文献一覧	133

凡例

- * 引用にあたって、仮名遣いは原文のまま、引用文中および固有名詞の漢字の旧字体は原則として新字体に統一した。
- * 漢文の引用では、脚注に説明のあるもの以外、句読点及び現代語訳は引用者によるもの。
- * 日本語からの引用では、引用者によるルビには丸括弧を付して、原ルビと区別した。
- * 丸括弧内の丸括弧は亀甲パーレン〔 〕に替えた。

本論文は二〇一七年三月に東京大学総合文化研究科に博士学位請求論文として提出したものに加筆・修正したものである。二〇一七年十月二六日、博士(学術)の学位を取得した。

論文の審査に当たっては、博士課程在学中の指導教授である代田智明元東京大学教授、主査石井剛准教授、村田雄二郎教授、田口一郎准教授(以上東京大学総合文化研究科)、大木康東京大学東洋文化研究所教授、王敏法政大学国際日本学研究所教授より論文の審査を受け、数々の貴重な意見を賜った。ここに改めて深く感謝の意を表したい。

序章 中国近代文化史における燈謎研究の課題と本論文の構成

一 本論文の目的と用語整理

本論文は、燈謎^{とうめい}という文字遊戯を漢字文化の一分野として捉え、その文体及び実践形態の近代的形成の過程を論じるものである。特に燈謎創作者である「謎人」¹のアイデンティティの形成と変化を中心に分析することにより、これまでの研究で見落とされていた近代漢字文化史の新たな側面を明らかにし、日常類書や章回小説などの書誌媒体と繋ぎ合わせて考察をした上で、その近代的形成のプロセスを浮き彫りにすることを主な目的とする。

1. 燈謎

清末から民国にかけて、ブームとなって発展し、今もなお愛好家による活動によって生き続けている漢字文化の一つとして、漢字の形・音・義（意味）を利用し、文学的に書かれる「謎」というものがある。各時代において、こういった謎はさまざまな名称で呼ばれてきたが、現代中国において最も広く用いられるのは「燈謎」である。

1925年に出版された鈴木虎雄（1878-1963）の「支那文学に於ける語戯」²に「燈謎」という一節があるが、そこに引用された史料の中に、「燈謎」ということばは直接に出ていない。すなわち、

呉自牧の夢梁録に、商謎者、先以鼓兒賀之、然後聚人猜謎といひ、周密の武林旧事に、絹燈に詩や詞や汴京の譚語を翦り写して行人を戲弄することあり、都城紀勝に、來客念隱語説謎、名打謎などゝあれば、燈謎は南北二宋以来の事と見えたり。³

とある。『夢梁録』、『武林旧事』および『都城紀勝』はどれも南宋の都であった臨安（現在の杭州）の風物を記録するものであり、南宋の時代には、前に置かれる動詞こそ「念ず」「説く」と異なるが、「隱語」と「謎」が通称として用いられていたことが知られる。

また、明代に書かれた「謎」に関する記述を見ると、劉侗・于奕正の『帝京景物略』には、

（正月）八日から十八日、人が東華門外に集まり、燈市と言う。（中略）詩で物を隠して寺や道観の壁に掛ける習慣があり、商燈と言う。

八日至十八日、集東華門外、曰燈市。（中略）有以詩隱物、幌於寺觀壁者、曰商燈。⁴

とあり、田汝成の『西湖遊覽志余』卷二十「熙朝樂事」には、

¹ 清末民初の謎話には「謎頭」「社家」などほかの言い方も見られるが、現在、台湾では有名な燈謎創作者を「謎家」、燈謎創作に関わる一般人を「謎友」と呼ぶ。大陸では同じく有名な燈謎作者を「謎家」とし、94年の「全国謎人アンケート」などのように、燈謎創作者を指す一般的な用語として「謎人」を使用している。本論文は大陸に準じて、主に「謎人」を使用する。

² 鈴木虎雄「支那文学に於ける語戯」、同『支那文学研究』、東京：弘文堂書房、1925年11月、653-654頁。

³ 同上、653頁。「譚語」とは戯れ言である。

⁴ 劉侗・于奕正『帝京景物略』（宋明清小品文集輯注1）、上海：上海遠東出版社、1996年11月、115頁。

正月十五日が上元節⁵であり、前後五夜に燈籠を掲げる。(中略)物好きは藏頭詩⁶などを書き、人に当てさせ、猜燈と言う。

正月十五日為上元節、前後張燈五夜。(中略)好事者或為藏頭詩句、任人商揣、謂之猜燈。

7

とあり、張岱^{ちやうたい}の『陶庵夢憶』には、

街の交差点で木の柵を組み立て、大きな燈籠を掛け、俗には呆燈^{ほうとう}と言う。上に四書^{しよ}や千家^{せんか}詩の故事を表す絵、或いは燈謎が書かれており、人はその周りに立ちながら謎当てをする。十字街搭木柵、掛大燈一、俗曰呆燈、画四書、千家詩故事、或写燈謎、環立猜射之。⁸

と書かれているように、元宵節などの祝祭日に燈籠の表面に謎を書き、それを当てる風習が根付いたことが窺える。こうした明代の記録から、この風習によって「謎」が「燈」と結び付けられ、或いは「燈」が「謎」の代名詞として使われるようになり、次第に「燈謎」という語が生まれたことが分かる。

世間で流行していた燈謎を収集・編纂した書籍である謎集は宋代から出版されていたと見られるが、清代以前のものはほとんど散佚しており、清代以前の古い燈謎は、比較的まとまった形としては、明末の日用類書に収録されて残されている⁹。清代になると、燈謎活動^{ちよじんかく}が楮人^{けん}撰『堅瓠集』や梁章鉅撰『帰田瑣記』、梁紹壬撰『兩般秋雨盦隨筆』などの筆記作品の中に記録されているほか、謎集も多く出版された。その中には、費源の『玉荷隱語』のような個人による謎集もあれば、『竹西春社鈔』のような謎社^{しよ}同人の作品集もあり、また『十五家妙契同岑集』のような書坊(出版社兼書店)が輯録した多数の作家による合同作品集もあった。それらの謎集に記載されている謎の多くは四書五経などの儒家経典、いわば科挙時代の文人であれば誰もが持っている伝統的教養を材料に創作されたものである。

やがて、清末・民国期になると、そのような文人の謎は、近代新聞雑誌の発達から全面的に影響を受け、一つの都市文化として需要と供給の両面において大きく成長した。そしてそれは、謎人の創作意識の変革を促すことにもなった。1872年に創刊された、中国で最も早い新聞の一つである上海の日刊紙『申報』には、その創刊の年から、既に謎に関する文章が掲載され始めている。例えば、「燈謎二十五則並引」には、

射覆^{せきふ}、商燈^{しようとう}は文人の遊戯であるが、腹を探り合って智闘し、通常とは別の智慧を要するた

⁵ 元宵節と同じく、旧正月の15日。

⁶ 詩の各節行頭から意味のある単語や文が取り出せる詩のこと。

⁷ 田汝成『西湖遊覧志余』(中国文学参考資料叢書)、北京：中華書局、1958年11月、巻二十「熙朝樂事」、355頁。

⁸ 張岱『陶庵夢憶』(宋明清小品文集輯注1)、上海：上海遠東出版社、1996年11月、168頁。「四書」とは『論語』『孟子』と『礼記』中の「大学」「中庸」を言う。『千家詩』とは宋の劉克莊によって編纂された、村塾で童蒙の誦読に用いた詩の本。

⁹ 吳修喆「明末の日用類書から見る燈謎」『中国-社会と文化-』第30号、東京：中国社会文化学会、2015年7月、102-121頁。

¹⁰ 「謎社」とは燈謎の製作者である「謎人」による結社。

め、気軽にできることではない。故に古人は盛会の場において必ず燈謎を創って雅趣を得た。惜しいことに、申江（上海の別称）一帯は人材が雲集し、数多く巧みな文学が書かれ、互いに美しさを競って目を奪わんとし、いかなる珍しいものも見られるというのに、ただ文虎ぶんこの事に関しては欠如している。恐らくそれが詩壇の諸君子にとって、取るに足りない小技だからであろう。

射覆商燈雖属文人遊戯、而其鉤心鬪角別有慧腸、固非率爾者所能從事焉。故古人於盛会之場必制燈謎以博雅趣。惜申江一帯人文雲集、巧製良多、鬪彩争妍、幾至無奇不有、而独於文虎一事、竟属闕如、豈騷壇諸君子以為彫虫小技、鄙而不屑為耶。¹¹

という端書きが付いている。この一篇の記事には、タイトルの「燈謎」以外に、「射覆」「商燈」「文虎」¹²という単語も出てくるが、どれも同じ「文人の遊戯」、すなわち「謎」を指している。また、翌年には「廋詞艷情四集」という文章も『申報』に載せられた。その文中には、

廋詞隱語の由来は久しく、元より人の性靈を啓発し、人に考えさせるものである。しかし、私が見た『申報』に載せられた四五十作以上ある謎は、すべて謎底（謎の答え）を解いて見せるものであり、古人の藏鈎射覆の旨¹³に背いているではないか。夫廋詞隱語由来已久、原以發人性靈耐人尋味。比見申報所載不下四五十条、皆將謎底說破、不与古人藏鈎射覆之意相刺謬乎。¹⁴

との意見が述べられ、読者から解答を募集するという形式が提唱された。そういった流れに乗って、その後の『申報』には「隱語候教（燈謎の応答）」や街で開かれる「射虎会」の告知などが多々見られるようになり、ここに清末から始まる謎ブームの一斑を窺うことができる。

清末における燈謎会の様子は図1に描かれているように、参加者はほとんど読書人であり、主催者は自宅の入り口付近で謎を貼りつけた燈籠を設置し、往来の賓客が燈籠の下に集まり、謎当てをする。その傍らには、新年の挨拶を交わす人も見られている。この絵の上に、少し俗っぽい詩が書かれており、後半の二節によって当時の燈謎の特徴がまとめられている。

新名詞謎が最も新鮮で、 新名詞謎最鮮新
科学方言ものは難しい。 科学方言難煞人
本を身の周りに持込み、 枉却身旁多夾帶

¹¹ 『申報』（上海）1872年12月14日、第2面、署名「柳浦漁子」。

¹² 文虎は燈謎の別称である。梁紹壬『兩般秋雨盦隨筆』（明清筆記叢書、上海：上海古籍出版社、1982年8月）、86頁、『清稗類鈔』「文学類二」の「謎の名称及び原起」（徐珂編、上海：商務印書館、1917年11月）、第29冊202頁参照。

¹³ 藏鈎とは、梁の宗懐撰『荊楚歲時記』の記載によると、二組に分かれ、お互い小石を掌の中に握み、その数を当て合う遊戯である（宗懐『荊楚歲時記』、太原：山西人民出版社、1987年9月、69頁）。射覆とは、『漢書』東方朔伝の記載によると、裏返された器の下に物を隠し、その名を当てる遊戯である（班固『漢書』第9冊、北京：中華書局、1964年11月、2844頁）。したがって、「藏鈎射覆の旨」とは隠されたものを当てるといった程度の意味になる。

¹⁴ 『申報』（上海）1873年1月13日、第2面、署名「護花鈴館控仙史稿」。「廋辭」「廋詞」とは「隱語」「謎語」の意味。『国語』晋語五に「有秦客廋辭於朝、大夫莫之能對也（秦からの客が宮廷で廋辭を使ったところ、大夫たちには対応できる者がいなかった）」とある（左丘明『国語』二十五別史5、濟南：齊魯書社、2005年1月、196頁を参考）。

幾ら捲っても解けない。 翻来檢去没来因
 古文と五経はおろそか、 古文不熟五経荒
 唐詩もすっかり忘れた。 若係唐詩更尽忘
 やはり四書が考え易く、 還是四書用意想
 すぐ当たるから皆喜ぶ。 一猜一得喜洋洋¹⁵

ここで挙げられている新名詞や、科学、方言、古文、五経、唐詩、四書などはすなわち燈謎の答えの種類である。要するに、燈謎の出題範囲は読書人が身につけている知識・教養であるが、この中で最も当てやすいのは四書のような基礎的な儒家經典、読書人なら誰もが暗誦できるものであることを示している。

宋代から始まった燈謎という漢字文化は現在でも、大陸を始めとする漢字文化圏の地域で現存しており、依然として元宵節の民俗イベントとして行われている。図2と図3が示しているように、現代の燈謎はほとんど燈籠を使わずに、謎を書いたカラフルな縦長の紙（謎箋）を壁に貼りつけ、或いは高いところに引かれるロープに吊り下げるなどの形式が一般的となっている。図3の写真は2015年台北燈節の様子である。圓山公園で開かれていたイベントにおいて、燈謎の勝ち抜き戦を行う「燈謎擂台」と、「台湾省城隍廟」と書いてあるスペースで行われた燈謎会が見られる。大陸と台湾で見た燈謎会の共通点は、イベント用の燈謎を提供し、燈謎会を仕切るのはどちらも謎社という組織である。ただ、細かい点においては、作品のスタイルや、活動場所、謎社の組織構成、活動形式、所属など、異なる点が多く見出される。



〔図1〕
 出处『図画日報』第
 百八十七号、上海：環
 球社、1909年、7頁

¹⁵ 『図画日報』第百八十七号、上海：環球社、1909年、7頁。

〔図2〕 中国浙江省湖州市 2015年2月22日（筆者撮影）



〔図3〕 台湾省台北市 2015年3月5日（筆者撮影）



2. 古体謎と今体謎

1928年に出版された錢南揚の『謎史』では、同治光緒年（1862）以降の燈謎を「今体」、それ以前のものを「古体」と称し、「古体」から「今体」への発展について次のように述べている。

清初の謎語は、元・明の伝統を受け継ぎ、同治光緒年以降の流れの端を開いた。例えば毛際可の『燈謎』、周亮工の『字觸』、黄周星の『度詞』及び錢德蒼の『解人頤』、咄咄夫の『一夕話』に見られる謎はなお元・明の古い作風を改めていない。その他、雜記に集録される謎もまた古体のものである。

清初謎語、上結元明之局、下開同光之端。若毛際可之『燈謎』、周工亮之『字觸』、黄周星之『度詞』、以及錢德蒼之『解人頤』、咄咄夫之『一夕話』、猶未改元明之旧也。此外、雜記所収、亦多古体。¹⁶

¹⁶ 錢南揚『謎史』、広州：国立中山大学語言歴史研究所、1928年7月、79頁。

今体の謎が流行してからは、古体の謎が格調の低いものと看做され、士大夫の口から出なくなった。

自今謎盛行、視古謎為卑鄙、不復出諸士大夫之口。¹⁷

「古体」とは、詩や詞などの韻文形式をとる謎のことである。ただし、文体の格調がさほど高くはなく、一般的な題材の詩詞より、やや口語的で、口に出して読んだ場合でも意味が通じやすい。一方、「今体」は主に短句形式となっており、四書五経などの典籍から原文をそのまま借用するなど、古典の知識がなければ解けないような、読書人向けに創作されたものが多い。

具体的な論証は第二章で行うが、「古体」「今体」とは、歴史的な先後関係ではなく、「古体」から「今体」が生まれるという事実はないため、古体謎と今体謎はあくまで燈謎の形式を区別するための便宜上の名称として捉えたい。

3. 燈謎と謎語

こういった「文人の遊戯」である謎を指すのに「燈謎」という名称が定着するようになったのは20世紀の80年代以降、比較的近年のことである。例えば、1986年に出版された陸滋源の『中華燈謎研究』には「燈謎と謎語の分岐」「燈謎と謎語の区別」を説明する節がある。陸はまず、謎を文義謎と事物謎の二種類¹⁸に大きく分け、そこから論を展開している。明代の謎集を読めば分かるように、もともと燈謎イベントにおいて用いられる謎には文義謎と事物謎の両方が含まれていた。しかし、清代以降、「燈謎」という言葉は徐々に文義謎に限定して用いられるようになったと陸は指摘する。一方、「謎語」という言葉も本来、文義謎と事物謎の両方を指すものであったが、現代においては専ら事物謎を指す語となっている¹⁹。『中華燈謎研究』の中では、燈謎と謎語の区別をはっきりさせるために、具体例が出されている。例えば、答えが同じく「蚕」となる謎を、謎語にすれば「可愛い女の子、肉や魚は食わずに葉っぱを食べ、一日中働いて糸を紡ぐけれど、それは他の人が美しい服を作るため〔一個姑娘真可愛、不吃葷腥吃樹叶、成天勞動紡絲線、為了別人好穿戴〕」となるのに対し、燈謎のほうは「石頭老虎（虎の石像）」となる²⁰。これは「石」という漢字の「頭」を取ると「一」という漢字が得られ、その「一」を「老虎」の別称である「大虫」と縦に組み合わせると「蚕」という漢字ができるため、「蚕」と解くのである。この例が示すように、燈謎と謎語の区別は単に文学的価値の有無というより、漢字の独特な性質を利用しているかどうかというところにこそある。その区別によって、燈謎は漢字文化に特有な謎として、世界中に見られる謎語と一線を画すのである。

4. 謎話

ただ、そもそもなぜ燈謎と謎語を区別しなければならなかったのか、その過程を遡ってみれば、

¹⁷ 同上 90 頁。

¹⁸ 文義謎は即ち漢字漢文の特性を利用した文学的な謎であり、事物謎は事物の外形や性質などを述べてその名称を当てさせる所謂「なぞなぞ」である。

¹⁹ 「事物謎」「文義謎」の呼称は陸滋源『中華燈謎研究』（南京：江蘇科学技術出版社、1986年5月）など、燈謎作者や研究者の中で使われる補助的な概念であり、現代中国語における一般的な用語ではない。本稿は記述の便宜上、以下において文義謎のことを燈謎と称するが、引用文の中では「謎」「謎語」「廋詞」「打虎」など異なる呼称となるが、特別に説明する箇所以外、基本文義謎のことを指す。

²⁰ 陸滋源編著『中華燈謎研究』、南京：江蘇科学技術出版社、1986年5月、57頁。

燈謎を漢字文化の一分野として成り立たせる風潮は清末から民国期に書かれた多くの「謎話」^{めいわ}によって創りだされたと考えられる。謎話とは、詩話、詞話などという詩、詞に関するエッセー風の評論文と同じく、謎人の活動状況や燈謎作品に対する評価、燈謎の創作理論などを主な内容としており、清末・民国期の近代ジャーナリズムの発展とともに、謎話は様々な出版物に登場するようになった。それらを通して、清末民国期の謎人がどのように活動を展開し、交流していたか、謎に対する理解がどのように変容してきたかを分析することが可能なため、中国における燈謎の歴史を研究するための重要な一次資料となっている。

二 燈謎研究の現状

1907年から日中戦争が始まる1937年までの30年間、数多くの謎話作品が雑誌に掲載・出版され、燈謎の歴史においてブーム的發展を見せたが、1937年以降は戦乱や文革、社会主義的政策などが原因で、燈謎の發展は長い冬の時代に入った。そして、再び大衆の視野に入ったのは1980年代ごろであり、当時の「文化論ブーム」を背景に、全国各地（台湾・香港・マカオを含む）で新しく「謎社」が結成され、燈謎愛好家の交流が一時期盛んになっていた。詳しくは各章で適宜紹介していくが、もっとも彼らの努力によって資料集がいくつか出版されたものの、学術的研究は未だ殆ど着手されておらず、先行研究が少ない状況が続いている。

海外において燈謎を取り上げた極く少数の論文の中では、Richard C. Rudolph, “Notes on the Riddle in China,” *California Folklore Quarterly*, Vol. 1, no. 1, January 1942, pp. 65-82 が特に参考価値が高い。当該論文自体は中国における事物謎・文義謎及び藏頭詩²¹などの文字遊戯に関して、大雑把な紹介しか行っていないが、時代的に民国末期に発表された論文であり、引用した参考文献には清末民初のものが多い。その中では中国語の文献のみならず、清末民初に外国人研究者が中国の「謎」について書いたものにも触れている。そのような文献の分量は多いとは言えないが、興味深いことに、燈謎も当時においてシノロジーの研究対象として取り上げられていたのである。例えば、鈴木虎雄「支那文學における語戯」²²や那波利貞「元宵觀燈」²³など、日本人研究者の文章もRudolphに取り上げられていた。その他、近藤奎の『支那學藝大辭彙』が燈謎の24種の「謎格」について書いている²⁴こともRudolphに引用されている。Rudolphが「謎は長い歴史を持ち、伝播範囲も広いが、中国人は最近になってからやっとそれに関心を持つようになった。このような軽視を招いた理由の一つは、通俗文学に低い評価を為すという中国学者の伝統があったからである」²⁵と述べているように、こうした「軽視」も燈謎が近代になってようやく分野として成立する理由の一つとして考えておく必要がある。

現在、大陸では、中華燈謎学会という全国的な愛好家団体があり、また、福建省漳州市を代表とする漳州地方では、燈謎芸術記念館が立ち上げられ、国際的な燈謎大会を毎年のように開催さ

²¹ 詩の各節行頭から意味のある単語や文が取り出せる詩のこと。

²² 鈴木虎雄『支那文学研究』、東京：弘文堂書房、1925年11月、645-694頁。

²³ 『歴史と地理』第一巻、史學地理學同攷會編、東京：大鑑閣、1917年11月、648頁。

²⁴ 近藤奎『支那學藝大辭彙』、京都：立命館出版部、1936年12月、955頁。「謎格」は、文義謎を創作する際に使われる特殊なルール。

²⁵ “Although riddles are both old and widely known in China, the Chinese have not paid much attention to them until recently. This neglect may be partly due to the fact that the Chinese scholastic tradition held ‘vulgar’ literature in low esteem.” p. 67.

れている。現代における謎人のコミュニケーションネットワークは、清末民国期に比べて更に広い範囲に及ぼしているものの、それらの交流活動の殆どはアカデミックから離れており、民間団体によって加担されている。

三 近代における謎史の構築とその問題点

本論で筆者が問題にしたいのは二つある。一つは、「今体」「古体」における文体の差がいつ頃に出現し、何を意味するかという問題であり、もう一つは、清末民国期の謎人が特に意識していた「書家」「江湖」の別²⁶の意味合いである。修論で述べたように、近代の謎人は自らが創作する燈謎を「今体」とし、科挙教育の教養が反映されない文化的要素の乏しい「古体」を避け、作品の文人らしさ（「書家」風格）をことごとく追い求めていた²⁷。その反面、「今体」謎の材料として使える儒家經典の文章に限界を感じたため、西洋伝来の新しい学問に燈謎創作の新しいインスピレーションを探求しようとしていた。

しかし、以上の二つは「表側」の問題にすぎない。本論文で解明したい課題は文体と実践形態の近代的形成の「裏側」に隠されている問題である。従来の文体論によく見られるのは、思想的な変化が文体の変化を促すという、作者の主体性が先行する構図である。しかし、燈謎の場合となると、おそらく同じ図式では捉えきれない部分が多く発見されるだろう。なぜなら、「燈謎」が登場した時代と、創作者である謎人が確かな創作意識を持つようになった時代とが、何百年もの差があり、その間に何が起こったか、いままでの「謎史（燈謎の歴史に関する叙述）」には全く説明されていない。そのような問題は何に起因するのか。一つ考えられるのは、「謎史」が近代的に構築されたもの、ということである。例えば、燈謎を知るための基礎資料として、中山大學民俗学会叢書の一つとして出版された『謎史』が広く知られる。中には燈謎だけでなく、先秦時代の隱語をはじめ、清代の市語²⁸まで、「謎」という漢字の意味と関わる言語遊戯・文字遊戯の類が時代順に並べられている。その中に第五章「宋代之謎語」から最後の第十章「余論」までの内容は燈謎がメインである。前述のように、「古体」「今体」というのは『謎史』から誕生した概念であり、現在も多く謎人に使用されているが、果たして『謎史』に書かれているように、「古体」と「今体」は歴史的な前後関係を持っているだろうか。また、『謎史』より14年ほど早く出版された「古今文芸叢書」には「燈謎源流考」²⁹という文章がある。清末民国期の謎話に

²⁶ 近代謎人は自分の創作に対して、明確な理念を主張している。例えば、「底と面の自然な対応関係を追求し、古のいわゆる『玉製の蓋で玉製の箱を覆う』のような謎こそ最も優秀な作であり、謎面はなるべく成句を使うようにする〔余作謎主張典雅一派、必底面天然配合、如古所謂玉合子蓋玉合子底者、乃為上品。面貴成語〕（張起南「橐園春燈話」『小説月報』第七卷第二号、上海：商務印書館、1916年2月、「雜俎」10頁）。燈謎における「書家・江湖（文人・民間）」の区別を非常に意識しているのである。薛鳳昌の『遼漢齋謎話』にもこの「書家・江湖」についての議論が見られるが、それは光緒34年（1908年）に創刊された雑誌『国学萃編』で文義謎の投稿を募集する知らせの中にある「書家（文人）的構想の作だけを掲載し、江湖（民間）的なものは一切掲載できないことをご了承ください〔書家意者方能照登、江湖意者恕不登録〕（徐珂編『清稗類鈔』第29冊、上海：商務印書館、1917年11月、204頁）」という言葉から由来すると考えられる。つまり、当時の謎人は民俗的な謎と一線を画する意欲がかなり強く見られる。

²⁷ 呉修喆「清末民国における漢字文化新分野の形成——文義謎ブームをめぐって——」、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士論文、2012年3月。

²⁸ 市井で使われる隱語。

²⁹ 著者不明「燈謎源流考」、丁惠康「丁叔雅遺集」／胡懷琛「海天詩話」と一緒に古今文芸叢書社編集『古今文芸叢書第三集』（上海：広益書局、1914年3月）に収録されている。

よく見られる燈謎の起源に関する叙述を集約したような内容となっている。ほとんどの「謎史」は、「謎」という漢字の語源から出発し、先秦の隱語、漢代の離合詩、唐宋筆記小説から見る謎に関する典故、明清の燈謎という順番で記述している。このような構築方法は、ほかの民国初期に量産される文学史と同じく、進化史観という底流を共有している。すなわち、自らが立っている「現在」を「近代」とし、語源というスタートラインからゴールとして「近代」まで、その間を連ねる予定調和的なストーリーを描くということである³⁰。

そのモデルによって招いた問題として、まず一つ挙げられるのは、「謎」以外のものを見ないという点である。「謎」の語源から敷衍して、なるべく多くの関連項目を取り入れたつもり「謎史」でも、「謎」と実際それが載っている日常類書や新聞雑誌などといった媒体、筆記小説や章回小説などの文学ジャンルとの関係性を見ていない。もう一つは、「謎人不在」の謎史になってしまう点である。謎史の編纂者が掻き集めた「謎」の中には、名高い文士が作者とされるものも挙げられているが、その多くは筆記小説から見られる逸聞にすぎないため、事実の裏付けが取れない。一方、明清時代の燈謎作品に関しては、作者が確定できるにもかかわらず、ほとんどが民間文学のような集団による創作として取り扱われ、創作者の存在が置き去りにされているという現象が起きている。その結果、近代に書かれた「謎史」では、燈謎の位置づけおよび謎人の創作意識が反映されておらず、「中国の謎」というものは外なる輪郭と内なる範疇が曖昧なまま、ただ継ぎ合わせたような構造となった。そして、以上二つの問題点は燈謎という漢字文化が文学と民俗学両方において周縁的な境地に陥った現状にも繋がっている。

以上の理由により、本論文は文学史的、あるいは民俗学的方法論に基づいて遂行するものではない。燈謎という漢字文化を通して、「今体」「古体」の差を文体論的アプローチで紐解き、「書家」「江湖」の別を社会文化論的に捉え、近代において徐々に形成してきた「謎人」という下層知識人集団の創作意識を分析し、その変容を論じるものである。個々の作品、作者、作風に対する整理と分析も重要な一環だが、本論文では、個別的・具体的な燈謎作品ではなく、主として燈謎をめぐる言説・現象を主な研究材料とする。謎人という創作主体を掘り起こすとともに、漢字文化の近代的形成に対する新たな捉え方を提示し、その根底に潜んでいる爆発力を描き出すことを目指す。

なお、日本語の「近代（モダン）」は中国語においては「現代」と訳されるが、本稿では日本語に準じて「近代」とする。ただ、歴史的時代区分の用語としてではなく、主として自由な個人意識の自覚と主体形成という意味合いで「近代」「近代性」を用いる。

四 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第 I 部 燈謎の近代的文体の形成

第一章 明末の日用類書から見る燈謎

第二章 章回小説との共生をめぐって

³⁰ 内山精也が言う「中国近世文学史の問題点」を参考。内山精也「転回する南宋文学—宋代文学は『近世』文学か?—」『名古屋大學中國語學文學論集』26、名古屋：名古屋大學中國文學研究室、2013年12月、2頁。

第三章 謎話から見る文人意識の変化

第Ⅱ部 燈謎の近代実践形態の形成

第四章 20世紀台湾の謎社——文化政策の変化を手がかりに

第五章 戦後大陸における燈謎の活動環境

終章 結論

第一章では、燈謎という中国特有の漢字文化を研究するための基礎作業として、九種の明末日用類書を用いて、収録された燈謎の内容と編集スタイル、燈謎がどの部門に分類されているか、その部門が目録全体において占める位置及び部門内部での燈謎に対する分類などを比較し、明末社会における燈謎に対する認識と、日用類書が燈謎の創作スタイルにもたらした変化は何かという問題を検証する。

第二章では、燈謎と章回小説の結びつきを、宋代の説話文芸の一つである「商謎」に遡って考察し、「商謎」と燈謎の関係をあらためて整理することで、「商謎」から見られる筆記小説の要素を提示する。『謎史』が提示した燈謎と章回小説の関係について、章回小説に収録されている燈謎はもともと小説の人物描写をより豊かにするための技法であり、それを直ちに燈謎の技法や文体の発展を論じる材料とするには限界があることを示し、銭南揚のいう「時勢」を具体的に、章回小説という文学ジャンルの創作スタイルの変化や小説作者の社会的な地位の変化などと捉え、燈謎の創作趣向の変化との間に存在する関連性について考察する。

第三章では、清末民国期に新聞、雑誌等に発表されるようになった「謎話」を手がかりとして、この時期に事物謎から文義謎までを含む「謎」という雑多性のある大分類から「燈謎」という精錬された概念が分離・析出されてくる過程をたどり、その過程と積極的に関わった人物に見られる意識の変化を、その過程を傍らから見る傍観者や、その対極に立つ中国民俗学の先駆者たちが持つ意識と比較しながら整理・分析し、「燈謎」をめぐる文人意識が変化する時代的・文化的な背景と、燈謎の発展過程に生じる変化との関連性を明らかにする。

第四章では、対抗的な政治イデオロギーに基づいた異なる文化政策の下で、同じルーツを持つ文化ジャンルがどのようにしてローカル・アイデンティティを創出するかを研究する基礎作業として、台湾の謎人と謎社に焦点を与える。漢字文化の受容と近代国家の文化政策の関係性を明らかにするために、文化政策の視点に沿って、台湾における燈謎の歴史と活動状況を整理し、とりわけ、中華文化復興運動前後の様子を比較した上で、清代中期から現在にかけて台湾で燈謎活動が存続する理由、および台湾燈謎が現在直面している問題を中心に検証する。

第五章では、戦後から90年代までの大陸に焦点を当て、近代的な文体が形成した漢字文化の新ジャンルである燈謎がどのように中国共産党の文化政策に包括・統制されるようになったか、謎人の創作意識と燈謎活動形態の変化との関係を明らかにする。

終章では、序章において提示した近代における謎史構築の問題点と課題を、本論文がこれまでの各章で論証して得た新たな研究成果によっていかに解決し得るかという視点から全体を振り返り、各章で得られた知見がどのように関連するのかを改めて整理して提示する。

なお本論文は、以下の既発表（口頭発表含む）論文を改訂して再構成し、新たな記述を加えたものである。

- 第一章 「明末の日用類書から見る燈謎」
(『中国—社会と文化—』第30号、中国社会文化学会、2015年7月、102-121頁)
- 第二章 「燈謎の近代的文体の形成——章回小説との共生をめぐって」
(中国社会文化学会2016年度大会自由論題報告、2016年7月)
- 第三章 「近代における漢字文化新分野の形成—文義謎を例として—」
(『アジア地域文化研究』第9号、アジア地域文化研究会、2013年3月、69-88頁)
「『燈謎』をめぐる文人意識の変化——謎話から得られる考察」
(『アジア地域文化研究』第11号、アジア地域文化研究会、2015年3月、82-108頁)
- 第四章 「台湾謎社史——従文化政策的視角」
(『跨域青年学者台湾与東南亜近代史研究論集』、国立政治大学台湾史研究所、2016年7月、327-362頁)

第 I 部 燈謎の近代的文体の形成

第一章 明末の日用類書から見る燈謎

一 はじめに

「類書」とは中国において古くから作られてきた、各書籍より種々の知識を抜き出して部門別に分類、編集した書籍である。宋代以前の類書は、主に自然・社会の秩序を枠組とした内容を中心にしてきたが、宋、元時代以降、次第に日常生活に関わる内容を取り入れ、四民大衆の日常生活全般の手引書となることを標榜し、実用的な知識を提供する総合的な「日用類書」というものが現れた¹。そういった「日用類書」の多くは「万宝全書」「万用正宗」「不求人」といったタイトルが付けられており、内容の豊富さをアピールするまえがきや広告の文句にも、日常便覧の書という用途が強調されている。例えば、現存する明代日用類書で最も重要な意義をもっているとされる 1599 年版の『三台万用正宗』のまえがきにはこう書いてある²。

類聚三台万用正宗引

百家衆技は繁雑だが、「簡編」でなければ、誰が伝えるのか。それぞれの知識を記載するものはない。ただそうすると、書籍の数は汗牛充棟、浩瀚たる海のような書籍がある中、人はどうしてそれらを遍く観ることができようか。そこで（私は）暇を見つけては、様々な知識を広く集め、部門ごとに分類し、その要点をまとめ、その精華を選び取った。日常生活に必要なあらゆる内容をことごとく網羅し包括している。誠に簡要でありながら完備であり、洗練でありながら適切である。手本として伝承すべき書である。

百家衆技繁、非簡編則孰載孰傳、而策藉充汗、浩如淵海、人亦焉得而徧觀之。乃乘餘閑、博總方技、彙而集之、門而分之、纂其要、擷其芳。凡人世所有日用所需、靡不搜羅而包括之。誠簡而備、精而當、可法而可傳也。³

つまり、日用類書はそれまでの類書と同じく、編集者による素材の取捨選択を経てからできあがった書籍である。その素材となる「百家衆技の書」に比べ、内容が選別されているだけでなく、多様な知識が一つの分類システムに基づいて配列されることで、検索の利便性が高まり、全体として一種の知識の体系として見るのが可能である。したがって、認識の枠組みとして類概念を用いるという性質は従来の類書とさほど変わらないが、エリート階層の参考書である官修・勅撰総合的類書の形式を受け継いだものであるため、数少ない例外を除けば、官修・勅撰の総合的類書と同じく天・地・人・事・物という順序で部門の配列をしている。

一般的に類書と呼ばれる勅撰・私撰の総合的書籍、例えば、『芸文類聚』『初学記』『白氏六帖』

¹ 最初に日用類書に注目し、研究資料として用いた研究者の一人である仁井田陞は、『中国法制史研究 3』（東京：東京大学出版会、1962 年 9 月）の中でそのような類書のことを「日用百科全書」と称しているが、後に酒井忠夫が「明代の日用類書と庶民教育」（林友春『近世中国教育史研究：その文教政策と庶民教育』、東京：国土社、1958 年 3 月、25-154 頁）などの研究で「日用類書」という新しい用語を使用した。その後、坂出祥伸、小川陽一が編集した資料集『中国日用類書集成』の出版によって、「日用類書」という語が日本の学界だけでなく、中国大陸でも広く使われるようになった。

² 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』、東京：国書刊行会、2011 年 1 月、113 頁。

³ 坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』三・四・五収、東京：汲古書院、2000 年。

『太平御覧』などは、思想史研究にとって絶好のテキストであると評価されている。なぜなら、類書の各部門に分類された共通の文献を通して、各時代における一般知識や思想、信仰レベルを推測することが可能だからである⁴。類書は中国社会の特性を表している書籍であると論ずる者もいるくらいである⁵。

ただし、部門名やその配列が従来の類書と一致しているように見えても、その意味内容は想定読者層とその使用目的によって作り直され、新しい意味合いが賦与される場合が多い。こうした日用類書には、従来の知識体系に包括できないものや、位置づけにくい知識などが日常生活において次々と生産される中、既存の知識体系から逸脱しているものを新しく追加した部門に収録し、「日用」という視座から社会知識の体系を補完しようという意図が見られる。従来の類書は儒家経典を骨子とした厳密に定義されたシステムの下でテキスト进行分类するため、エリート階層が掌握する知識体系には内部的な統一性があり、明確な階層的秩序を有していると言われる⁶が、日用類書のために追加された部門はそのような内部的統一性を破壊しないためには、「ほとんどの日用類書で後半部に属し、その内容は卑俗で日常的、かつ怪しげなものが少なくない」⁷とされている。そのような知識は本来、さまざまな書に散在し、重要視されないものであるため、文集や叢書に編入されないかぎりは散佚してしまう可能性が大きい。しかし、素材となる書が散逸したとしても、日用類書に部分的ながら残されるので、そういった部分こそが明代の社会文化を反映している可能性を持つ。したがって、特定の内容がどの部門に属し、全体の目録においてどの位置を占めているかを考察することによって、当時の人々のその事象に対する認識や、それが当時の社会文化構造における位置付けなどを分析することができる。また、日用類書には多数の版本があり、内容に一定の継承性が見られるため、各版本を集めて対照・考察すれば、認識の揺らぎや変化の流れなどを把握することができるのではないかと考えられる。

近年、日用類書を使った研究が活性化している。その資料的価値が注目を集めている理由は、前述した知識の体系性という点のほか、日用類書の発行と流通にも大きく関わっている。明末の日用類書は福建地方の書坊によって出版され、全国的に販売されていた⁸。発行部数が非常に多く、重版回数が多いという事実は書肆の宣伝広告にも垣間見られる⁹。広範囲の流通によって、識字人口である上中階層を垂直に貫通し、日用の面における一般的な作法を形成していた。そ

4 葛兆光「一般知識、思想与信仰世界的歴史」『読書』1998年第1期、北京：生活・読書・新知・三聯書店、1998年1月、102-113頁。

5 松本光雄「類書に表現される中国社会の特性」『東洋史研究』16巻1号、京都：東洋史研究会、1957年6月。

6 商偉／王翎訳「日常生活世界的形成与構築：『金瓶梅詞話』与日用類書」『国際漢学』第21輯、鄭州：大象出版社、2011年5月、93-94頁。

7 小川陽一『日用類書による明清小説研究』、東京：研文出版、1995年10月、36頁。

8 蕭東発「建陽余氏刻書考略（下）」『文献』23期、北京：国家図書館、1985年、244頁）によると「余氏刻書は全国二十以上の地域に流通していた。一部は遠い黒竜江、新疆、青海、雲南にまで行き渡っていた。」また、繆咏禾『明代出版史稿』（南京：江蘇人民出版社、2000年10月）によると大手の書坊は全国各地に販売店舗を持っており、福建・建陽の慎独齋は北京にも店舗を持っていた。（392頁）

9 「此の書は本書堂がもともと編刻したものがあり、既に大いに流行しているが、近ごろ二刻の版本がすり減って朦朧となったため、刻工に命じて翻刻させた〔茲書本堂原有編刻、已經大行、近因二刻板朦朧不便、命刻工繡梓〕」『妙錦万宝全書』1612年刊本、「書坊の間で『万宝全書』が多数刊行されている〔坊間万宝全書、不啻充棟〕」『五車万宝全書』1614年刊本などの広告語から、日用類書の重版回数、刊行数の多さが垣間見える。

のような特徴を指して「明末社会の公約数」と呼ぶ研究者もいる¹⁰。例えば王正華によると、福建地方で発行された日用類書の市場区分と読者層を明らかにするためには、書籍細部の内容及び編集スタイルに対する理解と、他種の日用類書との比較以外に方法はない。特定の内容に対する分析を通してこそ、日用類書が読者のどのような需要を満たし、どのような知識を提供したか、また、明末の社会生活とどのように繋がっているかを解明することができるという¹¹。

そのような明末の社会生活と人々の意識をうかがう視点の一つとして、筆者は日用類書に多く載っている「燈謎」に注目した。燈謎を考察するのに明末日用類書を利用する理由は主に以下の二点である。第一に、専門的な謎書の多くが散逸したからである。例えば現存する数少ない明代謎集の一つである『詩禪』¹²には、『文戲集』『珍珠囊』『謎俠賦』『百斛珠』『謎海』『謎榜』『揆序万類』『風月禪機』¹³などと燈謎専集の書名を挙げているが、その全てが逸書である。そのほか、郎瑛の『七修統稿』にも『文戲集』『百斛珠』をはじめ、『包羅天地謎韻』『千虎文』『自知風月』『謎社便覧』といった燈謎の専門書を挙げているが¹⁴、実物資料は見当たらない。それゆえ既に散逸してしまった謎集の内容を確認し、日用類書に載っている燈謎と対照することが不可能であるが、日用類書は当時流通していた各分野の専門書を基にし、「編纂のみをし、自らは著さない〔纂而不著〕」という特徴を持つため¹⁵、明代の燈謎を知るための資料として極めて参考価値が高い。第二に、筆者が実見した限りでの明末以前の謎集のうち、ほとんどは燈謎作品を分類していない。それに比べて、明末の日用類書のほうは目録における部門の排列だけでなく、燈謎作品を答えの種類によって分類しているため、部門内部においても階層的な性格が見られる。また、その後出版される清代の謎集は、分類した形で燈謎を集録するのが一般的に見られるため、明から清にかけて、燈謎を分類するという変化が生じたと言えるだろう。そのような変容が起きたのはおそらく、明末に盛んに出版された日用類書に影響を受けたからではないかと推測できる。そこで、本章は燈謎という漢字文化を研究するための重要な基礎作業として、九種の日用類書を用いて、収録内容と編集スタイル、燈謎がどの部門に分類され、その部門が目録全体において占める位置、及び部門内部での燈謎に対する分類などを比較し、明末における燈謎に対する認識と、日用類書が燈謎にもたらした変化を明らかにしたい。

二 九種の日用類書

官修・勅撰の総合的類書に燈謎は載っているのか。清の康熙四〇年（1701）に完成した『淵鑑類函』を例にして見よう。『淵鑑類函』は明の『唐類函』¹⁶を底本としたものであり、宋代か

¹⁰ 王正華「生活、知識与文化商品：晚明福建版『日用類書』与其書画門」『中央研究院近代史研究所集刊』第41期、台北：中央研究院近代史研究所、2003年9月。

¹¹ 同上。

¹² 「詩禪」は数多くある燈謎の別称の一つである。燈謎の別称に関しては、呉修喆「近代における漢字文化新分野の形成—文義謎を例として—」（『アジア地域文化研究』第九号、アジア地域文化研究会、2013年3月、69頁）を参照。

¹³ 李開先『李開先集（下）』、北京：中華書局1959年12月、1026頁。

¹⁴ 郎瑛『七修類稿・統稿』、広州：翰墨園1880年、卷五詩文類、「謎序文」。

¹⁵ 張献忠「日用類書の出版与晚明商業社会的呈現」『江西社会科学』2013年第12期、南昌：江西省社会科学院、2013年12月、122頁。

¹⁶ 唐の四大類書である『芸文類聚』『初学記』『北堂書鈔』『白氏六帖』の記載を集め、『歳華紀麗』や『通典』などから記事を補充したものである。

ら明代にかけての類書を主な収録範囲とし、類書の「集大成」とも称されている¹⁷。この『淵鑑類函』には燈謎のひな形である「隱語」¹⁸が巻二六六、人部二五に載っているが、燈謎に関連する記載はない。また、明末において日用類書が流行するようになった背景として、日常生活に関する知識を入れた類書が宋代から作られており、元代を経て明代に至る間に、質・量ともに次第に豊かになったという流れがあるとされる¹⁹。そのような、官修・勅撰の総合的類書と日用類書の間に出現した、『錦繡万花谷』『事林広記』『居家必要事類全集』など日用類書の基となる書、ないし最も古い日用類書の一つである『五車拔錦』にも、燈謎に関する記載は見当たらない。したがって、燈謎を記載するという事は、『五車拔錦』以降に現れた日用類書の内容変化の一つと言えよう。

本章では明末期において代表的な日用類書九種を考察対象とする。

①『三台万用正宗』43巻本²⁰（以下『三台』）

万曆二七年（1599）福建建陽三台館・双峰堂余象斗刊本。第二〇巻「博戯門」の上段²¹に「新增奇巧燈謎」の項目がある。より早い年代の日用類書『五車拔錦』には博戯門も燈謎の記載もないため、博戯門は余象斗が新しく作った部門であると推測される（余以前に誰かが別の類書を出版し、そこにそのような部門があった可能性も否定できない）。燈謎の掲載形式は九種の日用類書において最も独特である。全ての作品が律詩の形式になっており、各燈謎詩にタイトルが付いている。各作品の文章力に若干の差が感じられるが、全体的に作風が統一しており、俗っぽいものや粗悪なものはない。

②『新鍔燕台校正天下通行文林聚宝万卷星羅』39巻本²²（以下『燕台』）

万曆二八年（1600）江西撫州徐會瀛編輯、福建建陽書林静観室詹聖謨刊本。第三五巻「記巧門」の上段に「奇異燈謎」とある。三分の一弱の作品は『三台』から見出されるが、そのほとんどの場合に字句は完全には一致せず、一部変動が見られる。また、全体的に『三台』と掲載形式が違い、各謎詩のタイトルがなくなり、各句に対応する答えの文字が記されている。具体的に下記の例で説明する。

『三台』

有感 四書四句

活きのいい魚を獲った	捉得魚兒活潑鮮
佳人はそれを焼こうとしない	佳人不肯下油煎
包丁とまな板の音を聞けば	聽得厨中刀砧響

¹⁷ 張英・王士禎等纂『淵鑑類函』、1887年上海同文書局石印本より影印、北京：中国書店、1985年8月、序文2頁。

¹⁸ 燈謎と隱語の関係については、呉修喆「言語遊戯から文字遊戯へ—漢字字謎の形成について—」（『伝承文学研究』第八号、國學院大學伝承文学学会、2009年3月）を参照。

¹⁹ 小川陽一「日用類書『万用正宗』『万宝全書』『不求人』など」、『月刊しにか』9-31、東京：大修館書店、1998年3月、62頁。

²⁰ 坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、2000年7月-11月。

²¹ 日用類書のような、民間書坊によって出版される大衆向けの書物は、頁を二段あるいは三段に区切ってそれぞれの段に異なる内容を記載していくような形式が一般的である。本論で使用する日用類書はすべて二段形式である。

²² 北京図書館古籍出版編輯組編「北京図書館古籍珍本叢刊」第76、北京：書目文献出版社、1988年。

精進して仏前で刺繍したがる 情願長齋繡仏前
○見其生不忍見其死聞其声不忍食其肉²³

『燕台』

●書句

生きのいい魚を見て	我視魚兒活澆鮮	見其生
焼かないでと妻に頼んだ	囑婦切莫下油煎	不忍見其死
包丁とまな板の音を聞けば	聽得厨中刀砧響	聞其声
年中精進して仏に奉りたい	情願長齋獻仏前	不忍食其肉

上が『三台』に掲載される形式であり、「有感」という題が付いている。「四書四句」とは、「四書」のなかの四句で答えよ、と答えの種類を示し、答えの前に○が付いている。一方、『燕台』のほうにはタイトルがなく、答えの種類によって「書句」類が作られた。また、各詩句に対応する答えが句の直後に置かれ、分かりやすくなっている。さらに興味深いのは、一部語句の改変があることによって（下線部）、詩の描く情景の主体が「佳人」からおそらく読書人である「我」になっている。その改変によって、詩の内容が『孟子』に我がこととして述べられる答えの句とより近く、一体感を持つようになった。小川陽一はこの書のいくつかの部門について、その素材・典拠であった可能性を持つ文献を指摘し、燈謎の部分の素材としては上海図書館所蔵の『新刻時尚華筵趣楽談笑酒令』（以下『談笑酒令』と略す）を挙げている²⁴。しかし、『明代版刻叢録』を調べると、書林文徳堂刊行のこの『談笑酒令』は『燕台』よりも遅れて、明代天啓年間（1621-1627）に出版された。したがって、『文林聚宝』卷三五記巧門上段の記異燈謎所収の半分以上の作品が、『談笑酒令』卷二上段や卷一上段に見出される²⁵という事実はあるが、それをもって『燕台』の素材が『談笑酒令』であったということとはできない。この一致は、『談笑酒令』が『燕台』を参照したか、あるいは両者に重複する燈謎が、当時広く流行していたかのいずれかであると考えられる。

③『万用正宗不求人』35巻本²⁶（以下『万用』）

万曆三七年（1609）刊本。三五巻の巻末によると「万曆歳次丁未（1607年）、潭陽余文台（余象斗）梓」だが、巻一の標題「崇文閣彙纂」と書院の名がある。また、巻一の冒頭に「万曆己酉歳仲春旦」「京南龍陽子精輯」とあるが、この龍という人物は、引文によれば崇文閣の一員のようである。芸林（出版書坊）の名は削られている。酒井忠夫は、この書は読書人が学業を行う崇文閣と称される書院か塾において、そこに集まった読書人の間で研学のために作製され、書肆によって上梓されて売られたのではないかと推測しているが²⁷、恐らくこの「崇文閣」と⑨の書名にある「天禄閣」は書院や塾の名ではなく、書院が設ける蔵書楼（図書館）ではないかと思われる²⁸。『万用』には、第三五巻「雜覽門」の上段に「新增極巧燈謎」とあり、そこに

²³ 生きた姿を見たからには、それが死ぬことに忍ばず、生きた声を聞いたからには、その肉を食べることに忍ばない。『孟子・梁惠王章句上』による。

²⁴ 小川陽一『日用類書による明清小説研究』、東京：研文出版、1995年10月、51頁。

²⁵ 同上、52頁。

²⁶ 坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、2003年5月-7月。

²⁷ 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』、東京：国書刊行会2011年1月、120頁。

²⁸ 蕭東発「官私兼辦的書院刻書—中国古代出版印刷史專論之七」（『編輯之友』1991年第五期、太原：山西

掲載された燈謎作品の約五分之一が『三台』または『燕台』に見出される。この書の最大特徴は、千家詩²⁹類と字類の少数を除いて、ほとんどの掲載燈謎が一句単位にされたことである。先行の日用類書に見出される燈謎詩は単句に分解され、さらに単句の燈謎が加えられ、分類されている。このような掲載スタイルになったのは、おそらく『燕台』の影響を受けたからではないかと推測される。『燕台』は各詩句の後ろにその句に対応する答えの文字を記しており、それによって従来の燈謎詩が分解可能なスタイルとなったと考えられるためである。『三台』から『万用』の掲載形式の変化から看取できるのは、もともと律詩として書かれた燈謎が律詩という形式の縛りから解放され、長さが短くなり、詩としての完全性を求める必要が次第に失われていったという流れである。後述するが、この変化こそが清代以降の燈謎の主流のスタイルとなっていくのであった。

④『万書淵海』37巻本³⁰（以下『万書』）

万曆三十八年（1610）刊本。扉に江西南昌徐企龍編輯、福建建陽積善堂梓とある。第三七巻「雜覽門」の上段に「上元燈謎」とある。酒井氏は『三台万用正宗』は『万書淵海』に先立つこと五年の万曆二七年（1599）に刊行され、四三巻四三門を収め、現在知られている日用類書では最大規模のものである³¹と述べているが、もし『万書』がその扉に標記されているとおり、「万曆庚戌（三十八年）」の刊行であれば、『三台』のほうはそれに先立つこと11年というのが正しい。また、酒井氏は『万書』の典拠及び『三台』との収録内容の共通関係を知る手がかりを得るために、『三台』の収録内容が『万書』のどこに収められているかを示す表を挙げている。その比較表には『三台』の巻二〇「博戲門」と『万書』の巻三七「雜覽門」のところに「内容的に同じ箇所や共通部分がかなり、ないしやや見出すことのできる場合」³²を示す◎の記号が記されており、また全体の比較によれば、『万書』がかなり『三台』と内容的に共通していることが予想されるという。しかし筆者の調べたところ、燈謎の部分に関しては、それほど共通性が指摘できない。なぜなら、『万書』に所収の燈謎部分の前半はまるごと③の『万用』から引いたものであり、後半は新しく追加したものと見られる。そして、『三台』と重複する作品は全体のわずか七分の一弱である。また答えを掲載する形式も『万用』と一致しており、ほとんどの燈謎が詩としてではなく、単句として掲載されている。したがって、『万書』の燈謎部分は『万用』の燈謎部分を元に、その内容を補充して作られたと見受けられる。

⑤『妙錦万宝全書』38巻本³³（以下『妙錦』）

万曆四〇年（1612）福建建陽安正堂劉双松刊本。第三八巻「雜覽門」の上段に「新增奇巧元宵燈謎」とある。掲載スタイルは『燕台』に類似しており、詩としての形式を保ちつつ、各句の後ろに対応する答えの文字を記している。収録燈謎の約四分の三は『三台』から『万書』のなかに見出されるが、その他は新しく追加されたものと見られる。また、先行類書と重複する

出版集団、1991年5月）、鄧洪波・周郁「試論明代書院的藏書事業及特点」（『高校図書館工作』2005年第五期、長沙：湖南省高等学校図書館情報工作委員会、2005年10月）を参照。

²⁹ 千家詩は唐宋時代詩人の名作を集録した詩集である。ここでは南宋の謝枋得が編纂した『重定千家詩』を指している。

³⁰ 坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、2001年2月-4月。

³¹ 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』、東京：国書刊行会、2011年1月、123頁。

³² 同上、125頁。

³³ 坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、2003年9月-2004年10月。

作品であっても、そのまま採録するのではなく、語句の異なる版本間での取捨選択や一部文字の改変などが行われており、編集に力を入れている様子が伝わる。下記の例をもって説明する（下線部は筆者）。

- a. 『三台』と『燕台』の中から謎として文章構成が優れたバージョンを取る。

『三台』

「愛月」千家詩一句

白々と輝く月が一輪	<u>皎々</u> 明々月一輪
眺めると天の中心にあり	<u>望中</u> 端正在天心
忽然と東から夜明けの色	忽然曙色東方白
漫然と菱花を手にした	謾把菱花手内擎
○皓魄当空曉鏡昇 ³⁴	

『燕台』

<u>皓々</u> 明々月一輪	皓魄
<u>望月</u> 端正在天心	当空
忽然曙色東方白	曉
謾把菱花手内擎	鏡昇

『妙錦』

<u>皎々</u> 明々月一輪	○皓魄
望中端正在天心	○当空
忽然曙色東方白	○曉
謾把菱花手内擎	○鏡昇

この場合、『燕台』では第一句の「皓」という字が、問いにあたる文にも用いられており、謎としてはレベルが低くなる。また、第一句と第二句に「月」という字が重複しているため、『妙錦』は最初の二句は『三台』の字句を採用している。ただ、答えの掲載スタイルのほうは『燕台』を基にしており、しかも『三台』と同じように、答えの前に○を付けることでより分かりやすくするという工夫を加えている。

- b. 『三台』と『燕台』の字句を融合したものにする。

『三台』

「旅懷」伯皆³⁵三句

親は白髪して歩けず	高堂 <u>雪鬢</u> 歩難行
妻は青春妙年年頃	荊室青春總妙年

³⁴ 明月が中天にかかり、曉に鏡が空に浮かぶ。宋代詩人李朴『中秋』による。

³⁵ 「伯皆」とは元曲『琵琶記』の別称である。

万里の山道険しく遠く 十千嶺隘程途遠
手紙が跡を絶ち届かない 鱗鴻絶跡没人伝
○親衰老妻又嬌万里関山音信杳³⁶

『燕台』

高堂白髻難行歩 親衰老
荊室青春惣妙年 妻幼嬌
十千嶺隘程途遠 万里関山
鱗鴻絶跡没人伝 音信杳

『妙錦』

高堂雪髻難行歩 ○親衰老
荊室青春惣妙年 ○妻又嬌
十千嶺隘程途遠 ○万里関山
鱗鴻絶跡没人伝 ○音信杳

c. 先行類書の詩句を改変する。

『三台』：「昭君怨」四曲牌³⁷名

纏足した足で出宮が難しい 金蓮款歩出宮難
哀れな美人が和藩に送り出され 可憐紅粉去和番
愛しい芳容には再会しがたく 慕想芳容難再会
簇擁とした騎兵軍と漢関を出る 簇擁征馳出漢関
○歩々嬌 惜奴嬌 憶多嬌 上馬嬌

『燕台』

金蓮款々出宮難 歩々嬌
可憐紅粉去和番 惜奴嬌
慕想芳容難再会 憶多嬌
簇擁征馳出漢関 上馬嬌

『妙錦』

金蓮款移出宮難 ○歩歩嬌
可憐紅粉去和番 ○惜奴嬌
慕想芳容難再会 ○憶多嬌
簇擁征馳出漢関 ○上馬嬌

各先行研究は日用類書について、編集が粗雑であるというイメージが定着しているが、この

³⁶ 親は老いて妻はまだ幼く、万里の関山で隔たって音信が少ない。元代・高明『琵琶記』第十六齣による。

³⁷ 「曲牌」とは、古典戯曲の旋律型であり、曲牌ごとに句数、字数、平仄、押韻が決まっており、名称が付いている。

『妙錦』は筆者が所見した中で最も編集の質が高いものと言えよう。また、酒井氏も指摘しているが、ほかの日用類書では「冠婚門」というところを、『妙錦』では「伉儷門」という雅な用語で言い換えるといった特徴も見られる³⁸。

⑥『鼎鏤竜頭一覧学海不求人』22 卷本³⁹（以下『竜頭』）

刊行年と出処不明、目録欠、闕卷九～一三。原書は五冊であり、各表紙に巻名が記されている。五冊目にある第二巻「侑觴門」の上段に「新增奇異元宵燈謎」とある。燈謎部分の内容は『妙錦』の一部で編成されている。また、下記の⑦⑧の燈謎に関する部分は『竜頭』の部分的な引き写しであるため、収録作品の多寡の順は『妙錦』>『竜頭』>⑦⑧となる。

⑦『新刻鄴架新裁万宝全書』34 卷本⁴⁰（以下『新裁』）

万曆四二年（1614）刊本。出処不明であるが、冲懷という人物の序文が付いている。第22巻「謎令門」の上段に「奇巧燈謎」とある。全体的に⑧と同じ版木と見られる。

⑧『五車万宝全書』34 卷本⁴¹（以下『五車』）

万曆四二年（1614）江西南昌徐企龍編輯、福建建陽存仁堂・樹徳堂刊本。『新裁』と同じ版木を使っているため、第二二巻「謎令門」の上段に「奇巧燈謎」とあるが、途中に第二巻「卜筮笑談門」の版木が2頁ほど誤って挿入されている。したがって、燈謎部分の内容は『新裁』と全く同じである。

⑨『新刻艾先生天禄閣彙編探精便覧万宝全書』37 卷、仁井田文庫所蔵。

崇禎元年（1628）刊本。巻頭に「新刻眉公陳（陳繼儒）編纂」とあるが、巻一の冒頭に「艾南英彙編」と記されている。また、巻末には「（福建建陽）存仁堂陳懷軒梓」とある。第三七巻「雜覽門」の上段に「新增燈謎」とある。内容は冒頭の四作を除き、ほとんどが『万書』に出される。

以上、この九種の日用類書は明末の三十年間に亘って重版されながら刊行されていた。先行研究が指摘しているように、具体的にどのような書籍が、各日用類書を編纂するさいの素材に使われたかを推察することは難しい。しかし、燈謎という特定の事項を中心に、その内容がどの部門に振り分けられ、どのようなスタイルで記載されるか、といった諸点について、各日用類書を比較すれば、燈謎が明末という時代に持っていた特徴や、当時の人々の燈謎に対する認識の変容などに対して、一層深まった理解ができる。

三 目録から得られる考察

日用類書の知識体系が官修・勅撰の総合的類書を模倣したものである以上、一種の階層的な秩序となるのは予想される。両者で類似する部門名、たとえば「天文・地輿・人紀」などはす

³⁸ 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』、東京：国書刊行会、2011年1月、136頁。

³⁹ 東京大学東洋文化研究所仁井田文庫所蔵。

⁴⁰ 東京大学東洋文化研究所仁井田文庫所蔵。

⁴¹ 坂出祥伸・小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、2001年6月-11月。

でそういった特徴を物語っているが、日用類書特有の新たに加えられた部門ではどうであろうか。既存のシステムの外延として、ただ後ろに付け加えられたにすぎない、あるいは官修・勅撰の総合的類書と同じように、天・地・人・事・物といった階層的秩序を見出すことはできるだろうか。本章では九種の日用類書の部門の配列を表にしたうえで、燈謎の属する部門の位置変動にどういう意味が読み取れるかを分析する。

附表 1 で明らかなおおりに、すべての日用類書が天文地輿を冒頭に置いている。多くの場合、時令や人紀がそのすぐ後ろに配列され、これらが一つのグループと見られる。全体を通して配列が最も秩序的に見えるのは『三台』であり、天地歳時をはじめ、帝王臣紀等を集録する人紀門、外国風土や山海異物などを集録する諸夷門と経史辞章を入れる師儒門と続く。次に政治法律関係の官品門と律法門、九～一五巻は琴棋書画・文翰武備といった技芸、一六巻からは冠婚葬祭・契約訴状・房中術といった生活実用知識、その次に酒令⁴²・燈謎といった応酬交際時に有用な遊戯、商人に有用な商旅門と算法門とある。後半の二三～二八巻は健康・医学に関する部門であり、二九～三六巻はいわゆる「卑俗かつ怪しげな」方術に関する部門である。最後は牧養・農桑といった農業系の部門、仏教・道教に関する知識、格言などの短文を入れる閑中記、及び笑い話の部門である。全体の構成からして、『三台』の巻首標題である「新刻天下四民便覧三台万用正宗」が標榜する「四民便覧」の書という用途に合致しており、四民の配列はおおよそ士、商、工、農といった順番が見て取れる。また、儒教の正統的地位を示す意図からか、仏教と道教に関する知識は全体の末尾近くに置かれている。燈謎が属する博戯門は生活実用知識と商用知識の間に置かれており、四民の配列と併せ考えると、士大夫の嗜む市民文化として、それなりに高い位置付けを与えられていたことがわかる。

『燕台』は天・地・人・時の後ろに農桑門を列し、続いて文翰啓筭、冠婚葬祭という実用知識があり、諸夷、政法、琴棋書画、巧芸の部門はその下に配列されている。後半は風水や医学、方術、商用、武備などの部門がやや入り乱れる配列となっている。雑覧門は末尾に置かれており、種々の文字遊戯が下段に含まれ、上段には『三台』の四二巻「閑中記」のような格言が紙面を占めている。しかし燈謎はそこには入っておらず、新たに作られた記巧門の上段に移され、燈謎の下段は通俗的な短編小説を集録する「情林摘萃」となっている。全体として、生活実用知識の部門と風水、方術の部門が前へ移されている。これはより一層「日用」の手引書としての機能を強化することを意味するのではないだろうか。『三台』と比較した場合、燈謎は非実用的な知識であるとして、小説などと同じレベルに格下げされていると言えそうである。

『万用』『万書』『妙錦』は『燕台』と類似した配列となっており、前半は天地人（時）に続き、どれも政法、実用、技芸の関係部門が配列されているが、ただ『万用』が農桑門を前半に配しているのは特徴的である。後半は方術関係の部門をはじめ、健康・医学、商用、応酬交際の部門が雑多に入り乱れているが、『万書』と『妙錦』には格言・訓諭を収録する勸諭門が新しく設けられている。この三種の日用類書はいずれも雑覧門を末巻に置き、燈謎をその中に収録している。『万用』『万書』『妙錦』の目録後半部分の配列が明確な意図に基づくものであるか否か検証するのは困難だが、燈謎が再び他の文字遊戯と併せられ、末尾の「雑覧」という部門に入れられたこと、また「雑覧」という名からも、『三台』『燕台』と比べ、燈謎の重要度がさらに低くなったことが読み取れる。

『竜頭』は目録がなく、原書は五冊構成となっている。天文から風水が一冊目であり、秘課

⁴² 宴席中に酒を勧めるための遊戯。

から農桑が二冊目、そして、侑觴から啓書、人相から律法、触吉から雑覧がそれぞれ第三・四・五冊とある。表紙に見られる部門名に重複がいくつもあるため、体系的性を考察する材料としてはやや不適切である。雑覧は『万用』『万書』『妙錦』と同じく全体の末尾にあるが、燈謎はそこではなく、酒令と同じく第五冊にある侑觴門⁴³に入れられている。宴席など娯楽の場での実用性がかろうじて認められているといえるかもしれない。

同じ版木を使った『新裁』『五車』は部門設置に特色があり、卜筮と笑談を同じ門に入れたことに部門数を縮減しようという意図が感じられるが、一方では、農民向けの部門が馬経門、翎毛門、耕佈門との三つに拡大された。全体の末端には風水、房中、養生、書体に関する門が置かれている。燈謎は後半の中では上のほうに、酒令と同じの謎令門に入れられている。かわりに雑覧門の上段に入ったのは格言類である。燈謎部分の内容は前述したように、『竜頭』の一部を抜粋したような形でできているため、酒令と合わせられたこともおそらく『竜頭』に影響されたかと考えられる。

最後に『探精』は、最初に配される天・地・人という基本の配列を除くと、残りは実用、政法、農業及び技芸の部門が入り乱れているように見える。また、後半においては方術や健康・医学などの部門が混在している。燈謎と他の文字遊戯は雑覧門に入れられている。燈謎部分の内容を検証した結果、ほとんどが『万書』と一致しており、雑覧門の配置も『万書』と同じく末巻にあった。

以上の考察によると、日用類書の知識体系の流れとして、総合的類書に近い編成から日常生活に実用性の高い部門を前の巻へ持っていくような変化が見られる。編集の質が比較的に高い『三台』と『妙錦』では、用途の近い部門をまとめて一つのグループとして配置するという秩序のある構成となっているが、編集にそこまで力を入れていない日用類書は、日用類書に新たに加えられた後半の部門にはそのような関係が見られない。燈謎をほかの文字遊戯と併せてひとつの部門に収録する日用類書が多く、その部門の位置も全体の後半、特に末巻に定着しつつあるように見られる。文字遊戯のほかに、燈謎の前後に配置される部門と内容の多くは応酬交際時に有用な酒令や、短編小説、格言、對聯、笑い話などの短文である。したがって、燈謎は遊戯と短文の中間的な存在として認識されていたかと思われる。

やがて清代になると、日用類書自体の種類多様性は失われ、「万宝全書」と「不求人」の二系統に収斂したと同時に、部門の数が三十門または二十門に縮減された。そして、このような変化のなかで、末巻にあった文字遊戯の部門が消されたのであった⁴⁴。ただ、日用類書から除かれたということは、ただちに日常文化としての存在が薄れ、民衆に忘れ去られたということの意味しない。実際、清代に入ると燈謎専集の出版が徐々に増えていく。またそうした専集は、作品を答えによって分類する、一句ずつ答えを掲載するなど、日用類書の編集スタイルが引き継がれている。

四 日用類書による燈謎の分類

日用類書に見られる階層的な性格は、目録における部門の配列だけでなく、部門内部の分類にも現れている。前述のように、日用類書より前に出版された燈謎専集の多くは散逸したが、

⁴³ 『竜頭』の第三冊にある侑觴門は闕巻なため、内容確認はできない。

⁴⁴ 三浦國雄「沖縄に傳來した『万宝全書』『文芸論叢』62巻、京都：大谷大学文学研究会、2004年3月、91頁。

わずかに残されているものに李開先の『詩禪』⁴⁵がある。その中に集録されている燈謎は、解法や答えの内容による分類はなされていない。答えは常言（諺）をはじめ、周易の巽名、法律条例、古人名、字、病名、四書語句、故事、元曲の句、仏語、物品、骨牌⁴⁶名、薬名、官名、虫鳥名、職業、詩句、獣名、古文、曲名、書名など実に豊富な種類が含まれているが、分類はされていない。また、日用類書とほぼ同時期⁴⁷に刊行していた徐渭の文集『徐文長逸稿』の卷二四「雑著」の部に燈謎が三十題近く収載されているが、それもまた事物謎と字謎（漢字一字を答えとする謎）が混在する構成となっている。さらに、書林青藜閣が万暦年間に出した「陳繼儒輯」と標記のある『新鐫時尚雅謎鴛鴦鏡』もまた、燈謎を分類せずに収録している。したがって、筆者が管見したかぎり、燈謎をその答えの性質によって分類しつつ収録しているのは日用類書が最も早い例である。もしそれが事実であれば、日用類書が明末から清初にかけて流通していたことから考えて、その分類は後に出た謎書に多大な参考価値を与えていたのではないかと思われる。

先に見た九種の日用類書において、燈謎は具体的にはどのように分類されているか、附表 2 で説明する。

ほとんどの日用類書は四書/書句類を最前端に置き、その次に小学、五経、古文という儒学の基本教養や千家詩、千句文のような初学の教科書などと続く。『三台』は燈謎をすべて題が付く律詩という掲載形式に整えているが、最前端に置かれている儒学関係の三類を除けば、類別の配列が入り乱れている。また、他の日用類書と比べ、『三台』において最も特色のある類別は兵書類と見られるが、中に収録されるのは1題のみであった。同時代に出ている謎書を調べると、兵書の句を答えとするものはほとんど見当たらない。おそらくそのため、他の日用類書は兵書類を設けていない。『三台』の各類別に収録される燈謎の数を見ると、四書類は105題中16題というかなり多い配分になっているが、最も多いのは四書類ではなく、物事類の21題であり、全体の約五分の一を占めている。それは、『三台』の素材となった燈謎についての書に事物謎が多く見られることを如実に表している。しかし『燕台』には、物事類は消され、それと同時に俗語類、兵書類、拆字類（漢字を部分に分解して作られる謎）などもなくなり、かわりに書句、五経、雑書、古人名、花名、菓名、樹名の類が加えられた。その分類は、『三台』と比べ、より秩序的になっていると言える。なぜなら、基本的に儒教の基礎教養、初学の書、律令、文学、文字、一般名称という順番となっているからである。ただ、『燕台』の四書類は『三台』のと性質が違い、四書の句ではなく書名を答えとしている。例えば、以下のような謎が入っている。

『燕台』

●四書

三十歳して初めて読書し	三十年来始読書	大学
前も後もなく一人で愚か	不前不後一人愚	中庸
師と学生が終日話し合い	師生終日商量事	論語
取るに足らない弁論好き	好辨区々一丈夫	孟子

⁴⁵ 『詩禪』には三篇の序文がある。最後に書かれた「詩禪又序」によると嘉靖四二年（1563）に出ている。

⁴⁶ 明代に流行したゲームであり、その牌が獣骨で作られるため「骨牌」と呼ばれる。牌はサイコロを2つ並べたようなデザインであり、21種計32枚から構成される。骨牌名とは骨牌の組み合わせで作られた役の名称である。

⁴⁷ 天啓三年（1623）に出ている。

『燕台』の二番目の書句類こそが『三台』の四書類と同じく、四書の語句を答えとする謎である。そのため、③の『万用』以降は『燕台』の四書類にある謎を書名類に入れ、四書の語句が答えとするものだけが四書/書句という類別に入るようになった。さらに、同じく答えが四書の語句であるとしても、その解法が漢字を部首や筆画などを単位に分解し、組み合わせるとなる場合には、四書類ではなく、字/字謎類に移される。例えば、

羊の群れが散り散りとなり何処へやら 群羊失散竟何之
後学は文才がなくて見つからない 後学無文不見系
一人の人間が頭に板を載せて 一個人児頭頂板
一工と四口が自ら寄り添う 一工四口自相依
○君子不器

この謎は『三台』では四書類に入れられているが、『燕台』と『妙錦』では字謎類に移されている。解く手順を説明すると、「群」の字から「羊」の字を除けば、「君」の字が残る。「学」の俗字である「孝」から「文」を減らせば、「子」となる。「一」の字と「個」の俗字である「个」を、頭に板を乗せるように合わせれば、「不」の字になり、「工」の字と四つの「口」が寄り添うように集まれば、「器」の俗字である「噐」となる。各句にそれぞれ一文字が隠されており、すべて合わせると『論語』にある「君子不器」の句となる。このようなスタイルは離合体と言いい、燈謎の雛形のひとつである離合詩から由来する。離合詩は後漢末期から作られてきたと言われており⁴⁸文の意味から発想するのではなく、専ら漢字の字形を利用するため、字謎と見なされるのが一般的である。特に②の『燕台』以降は、各句の後ろに答えの文字が記されるようになったため、漢字一字を答えとする字謎と形式的により近くなったのである。

③の『万用』は全体的に分類数が少なく、事物類が消され、一般名称に関する類別も減らされた。そのかわりに書句類の数は全体の約三分の一を占めるようになり、さらにその中は大学書句、中庸書句、論語書句、孟子書句などと分けられ、より検索しやすくなっている。

④の『万書』は前述したように、書句類から字類までがほとんど『万用』からの引き写しであるため、半数以上の謎が『万用』に見出されるが、その後ろに地名、官名、禽虫、花菓、俗語、事物の類が追加されている。その中で官名類と禽虫類は先行類書に見られない新しい分類で、地名類と花菓類は『三台』『燕台』にも見られる分類であるが、『万書』の地名類と花果類に収録されているのは、『三台』『燕台』の同じ部類の謎のごく一部にすぎない。また、俗語類と事物類は『三台』にもある分類だが、内容は『三台』と全く重複していない。『万書』には合計 17 類 233 題が収録されており、日用類書の中で最も燈謎の収録数が多いものの一つである。

⑤の『妙錦』は『三台』～『万書』の内容を参考し、それらの精華を集めたような内容になっているため、類別の数が最も多く、その排列も最も秩序的に見える。したがって、明末の日用類書から燈謎を効率よく考察するには、『妙錦』が最適な工具書になるだろう。

⑥の『竜頭』は『妙錦』の一部を引き写したような構成であり、さらに⑦の『新裁』と⑧の『五車』は『竜頭』の一部を引き写して構成されているため、このことから推察されるのは、『新

⁴⁸ 呉修喆「言語遊戯から文字遊戯へ—漢字字謎の形成について—」『伝承文学研究』第八号、東京：國學院大學伝承文学学会、2009年3月を参照。

裁』『五車』に残された類別は、最も主要なものとは編集者が判断したものではないだろうか。

最後に⑨の『探精』は、先頭部分に分類が記されていないが、事物謎が2題、字謎が1題、律令謎が1題入っている。残りの部分はほぼ『万書』の引き写しと思われる⁴⁹。このように、時代の早い日用類書の燈謎部分に分類の見直しや配列の乱れが見られるが、『万書』『妙錦』になると、分類の基準及び配列が比較的固定化し、それが後の日用類書に影響を与えたと見られる。そして清代以降の謎集が一般的に燈謎を分類した形で収録しているのも、日用類書の影響が大きいと推測できる。

どの日用類書にも必ず入れられるのは四書、千字文、千家詩、大明律法、字という五類であるが、『三台』を除き、この五つの分類の前後順序は一致している。またこれらの日用類書の中に見られる部類のうちでは、大明律法類が最も時代的な特徴が強く、当然のことながら、この部類は清代になるにつれて燈謎の書から見られなくなった。また、千字文、千家詩といった、初学の書を答えとする燈謎も清代の謎書において稀に見られるが、清代に主に継承され、大いに発展したのは四書類と字謎類である。例えば、『万用』～『探精』の四書類に見出される以下の七題（一部語句の異同がある）は清末の光緒三年（1877）に琉璃廠書坊によって刊行された『春燈謎匯纂』にも出ている。巻名に「新纂春燈謎」とある。

官吏に列し、諸葛のように身命をなげうって奉公する
位列朝班、効諸葛鞠躬尽瘁 事君能致其身⁵⁰

戈戟森々として、一戦にして良将が死す
戈戟森々、一戰場謀良将死 三軍可奪帥也⁵¹

秋の糧を集収すれば民が去る
収動秋糧百姓去 財聚則民散⁵²

飢饉を救済すれば民が来る
救済飢荒百姓来 財散則民聚⁵³

両目とも盲して物が見えない
両目俱盲難看物 視而不見⁵⁴

范蠡に学んで舟に乗る
学范蠡之泛舟 乘桴浮於海⁵⁵

蒼穹に太陽と月が常に周旋する

⁴⁹ 理由は不明だが、曲牌名類はまるごと消された。

⁵⁰ 君に事えては能く其の身を致す。『論語・学而』による。

⁵¹ 三軍も帥を奪う可きなり。『論語・子罕』による。

⁵² 財が集まれば則ち民は離散する。『大学』による。

⁵³ 財が少なれば民は集まる。同上。

⁵⁴ 見れども見えず。『大学』による。

⁵⁵ 筏に乗って海に浮かぶ。『論語・公冶長』による。

蒼穹日月每周旋 天運循環⁵⁶

これらの四書謎はすべて「会意」（ただし『説文解字』の一つである「会意文字」の意味とは異なる）という方法を用いたものであり、つまり、題の字句の意味から類語を連想し、題の内容を別の字に置き換えて解く方法である。清末の「新纂春燈謎」にも見られるということは、2世紀以上を経て依然としてそれらが主流の燈謎として認知されていたことを示すであろう。

同じく長期にわたって流行したのは離合体の字謎であった。例えば、『詩禪』にも載っている「朱門を閉じて恋人が見えず、吉報を聞きたいが口は開き難し、闌干に寄りかかれば日が沈み、悶々と心ここにあらずして頬杖をする〔閉朱戸不見郎才、問佳音有口難開、倚闌干東君去也、悶無心手托香腮〕⁵⁷という「門」という字と解く字謎だが、下記のように、九種の日用類書において収録回数が最も多い字謎の一つである。

『三台』

「閨情」門字

花間に紅日が沈むのを惜しみ 惜花間紅日西墜
朱門を閉じて恋人が会えず 閉朱戸不見多才
闌干に寄り掛れば日が去り 倚闌干東君去也
気怠く悶々と鏡台にかかる 悶無心懶傍粧台

『燕台』：詩題がなく、語句は『三台』と完全に一致している。

『万用』

門字

花間に紅日が已に沈み 花間紅日已沈西
戸を閉じて恋人見えず 閉戸郎才没処尋
瞬かせるも人がいない 撲々閃時人不見
厭々と煩悶し心有らず 厭々煩悶自無心

『妙錦』、『竜頭』：『燕台』と一致

さらに、日用類書と同時代、また後の時代に刊行された謎集にも、この謎が頻繁に見られる。例えば、明万暦年陳繼儒輯『新鐫時尚雅謎鴛鴦鏡』⁵⁸、明馮夢龍撰『山中一夕話・謎語』⁵⁹、清康熙六年（1667）文治堂刊本、咄咄夫輯『一夕話・雅謎』⁶⁰、清康熙二九年（1690）刻本、楮人獲編『堅瓠集』⁶¹、清乾隆二八年（1763）刻本、錢德蒼輯『新訂解人頤廣集・消悶集』⁶²などにあるように、この字謎は明代から清代にかけて2世紀以上流行しつづけていた。作者名を記さな

⁵⁶ 『大学』による。

⁵⁷ 高伯瑜等編『中華謎書集成』（第一冊）、北京：人民日報出版社、1991年5月、15頁。

⁵⁸ 同上、76頁。

⁵⁹ 同上、96頁。

⁶⁰ 同上、193頁。

⁶¹ 上海古籍出版社本社編『清代筆記小説大観』、上海：上海古籍出版社、2007年10月、1460頁。

⁶² 高伯瑜等編『中華謎書集成』（第一冊）、北京：人民日報出版社、1991年5月、268頁。

い書が多数だが、明の馮夢龍と清の褚人獲は、この謎が楊循吉の作だという。楊循吉は嘉靖二三年（1544）に没した人物であるため、嘉靖四二年（1563）に出た『詩禪』に記されたものが時代的に最もそれに近い。これは典型的な離合体の字謎詩であり、各句がそれぞれ独立した謎と見ることも可能であるが、四句全体で詩としての意味が完成されている。ただ、前記の四書類の謎も同じように、長い年月で伝えられ、語句が異なるものが多種存在する。これは明末に流行していた燈謎の顕著な特徴と言えよう。

全体的にみて、日用類書に収録されている明末の燈謎からは、以下のような特徴が見いだされる。第一に、時代を追うごとに事物類が減り、四書類が増える傾向があり、読書人向けになっていく傾向が見られる一方、全体に謎としての難易度は低く、初学の書を材料とするものが多い。第二に、律詩として書かれているものが多い。『万用』以降の日用類書の掲載形式によってほとんどの燈謎は一句単位に分解できるものとなったが、それでも律詩の一句として書かれた形跡（字数や前後にある謎と対偶関係を持つなど）が残っている。また、字謎類と事物類の作品のうちの一部は単句に分解することができないため、律詩の形式をそのまま留めている。第三に、技巧として主に会意体または離合体を用いている。第二、第三の特徴ゆえに、同じ謎でも書籍によって語句に違いが出るという問題が発生する。なぜなら、会意体と離合体は文字の意味、形を利用するが、答えを解くために使われる一部の文字以外は、ただ詩句を完成させるためのものにすぎないからである。燈謎において、会意、離合の材料となる文字は「実字」と呼ばれ、その他の、詩句を完成するための文字は「虚字」と呼ばれる。虚字の部分が若干改変されても、謎としては同じように解くことができるため、様々に異なる「謎面」が存在するのである。

この問題を克服しようとして清代の燈謎作者が取った行動は、虚字を極力減らす、または儒家經典の成句をそのまま使うことである。例えば、清乾隆四五年（1780）に書かれた謎集『玉荷隱語』の作者である費源は、凡例の中で、

詩句として書かれる旧来の謎はその多くが韻を踏む（ために虚字を使う）。そのさいにでてきた余分な（無関係な）語句は読者を混乱させてしまう（中略）成句を題とし、その答えも成句と解くものは、余分な文字が一つ入っているだけで、それが玉に瑕となる。本書に収録する謎は、虚字があるといえど虚設ならず。

旧謎衍成詩句者、類多趁韻、其支詞臆句、觀者尤易眩目……以成句猜成句、若一字近贅、便成白玉微瑕。集中所載、雖虚字亦不虛設。⁶³

と主張している。彼は前代の謎が持つ欠点を踏まえたうえで、新しい基準を立てて燈謎を製作・収録した。また、『玉荷隱語』及びその付録である『群珠集』の目次は日用類書と似た配列を取っている。日用類書との関係を実証するのは難しいが、日用類書と似たような分類と配列をしているものとして、所見した清代の謎書の中でそれが最も早い例である。その後に出た謎集は『玉荷隱語』の主張と形式を踏襲するものが多く⁶⁴、総じて清代において燈謎の主流は謎面の文

⁶³ 同上、279頁。

⁶⁴ 作者が『玉荷隱語』の主張と形式を参考した、と明確に述べているものは、楊恩寿『灯社嬉春集』（家刻本、1873年）、楊春農『絶妙集』（1880年収録、1922年時選讀書齋影印本）、繆東霖『謎選』（華翰齋1882年）などがある。その他、『玉荷隱語』と似た形式の謎集、『玉荷隱語』を謎集に一部、または全部引き写したものが多数存在する。

学性よりも、文字遊戯としての精巧さを競うものとなっていった。

五 おわりに

これまでの研究は、特定の部門に対する考察を通して、日用類書が流行していた明末の社会文化現象を解説するものが多く⁶⁵、本章は九種の日用類書を通し、燈謎の属する部門の類書全体における位置、燈謎の分類及び収録作品の異同等を比較し、明末社会における燈謎に対する認識の変容を明らかにした。明末の燈謎が持つ特徴を分析しながら、清代の謎集と比較し、日用類書が後代の燈謎に影響を与えた可能性について論じた。

日用類書の想定読者層は識字能力のある民衆であり、士大夫文化と民衆文化の両方にまたがることは明らかである。このように特定の部門を通して考察すると、そこに見出される社会空間は実は錯綜しており、複雑である。燈謎に関しては、士大夫の嗜む民衆文化という認識で編集される場合もあれば、民衆の日常生活において実用性が低いと認識される場合もある。ただ、その実用性の低さは逆に、士大夫文化との繋がりや緊密さを物語っている。なぜなら、日用類書に収録される燈謎の分類の変遷、また内容的に四書類の拡大は、謎を解くうえで儒教的な一般教養が要求されることを示しているからである。一方、広い読者層の需要を満たすためには、燈謎の掲載形式をより理解しやすく、検索しやすいものに変えていく必要があった。その過程において、燈謎自体の形式にも変化が生じていったのである。すなわち、比較的自由に虚字を用いる詩句形式よりも、短い文面の謎が主流となり、これが清代に盛んに作られるようになり、儒家經典の原文を謎面と答えの両方に使う謎へと繋がっていった。明代の燈謎との違いに関する議論は、清代の筆記や謎集にしばしば挙げられている⁶⁶。銭南揚の『謎史』では、同治光緒年以降の燈謎を「今体謎」と称し、それ以前のを「古体謎」と称しているが、「古体」から「今体」へ変化する理由に関する分析はなされていない。本章が考察した明末の日用類書はその理由の一部として認識できることは、注目に値する。

清代以降に見られる燈謎の変容を一言でいうならば、民俗活動や応酬交際の中で人々が集まり、謎を解いて楽しむような本来の姿から次第に離れ、漢字や經典をいかに巧みに利用して謎を作ったか、その出来栄を作者同士で競い合うようなものと変わっていった。言い換えれば、燈謎は一般の人が解いて楽しむためのものよりも、むしろ漢字と經典に精通した、謎を実作する一部の読書人が技巧を凝らし、作って楽しむためのものになったとも言える。その背後には、清代における学風の変容、とりわけ漢字を研究する小学、古典の解釈を実証する考証学の盛行が大きく関わっていると思われる。

⁶⁵ 例えば、商偉／王翎訳「日常生活世界的形成与構築：『金瓶梅詞話』与日用類書」（前掲）、王正華「生活、知識与文化商品：晚明福建版『日用類書』与其書画門」（前掲）、酒井忠夫「明代の日用類書と庶民教育」（前掲）、張献忠「日用類書の出版与晚明商業社会的呈現」（前掲）などがある。

⁶⁶ 例えば、梁紹壬『兩般秋雨齋隨筆』に「近年の人が作った燈謎は、その知力が前人を超えている〔近人作燈謎、心思突過前人〕」とある。（上海：上海古籍出版社、1982年8月、201頁）

〔附表 1〕 目錄比較表

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦⑧	⑨
一	天文門	天文門	天文門	天文門	天文門	天文	天文門	天文門
二	地輿門	地輿門	地輿門	地輿門	地輿門	地輿	地輿門	地紀門
三	時令門	人紀門	人紀門	人紀門	人紀門	諸夷	人紀門	人紀門
四	人紀門	時令門	時令門	官品門	諸夷門	山海異物	諸夷門	文翰門
五	諸夷門	農桑門	体式門	諸夷門	官品門	風水	時令門	体式門
六	師儒門	文翰門	書啓門	律例門	律法門	秘課	官品門	爵祿門
七	官品門	啓劄門	婚娶門	雲箋門	武備門	玉洞書	四礼門	諸夷門
八	律法門	婚娶門	喪祭門	啓劄門	八譜門	博奕	東札門	律法門
九	音樂門	喪祭門	農桑門	民用門	琴学門	琴学	民用門	農桑門
十	五譜門	諸夷門	官爵門	冠婚門	棋譜門	農桑	風月門	時令門
十一	書法門	官職門	卜員門	喪祭門	書法門	侑觴	書画門	四譜門
十二	画譜門	律例門	律法門	八譜門	画譜門	笑談	八譜門	酒令門
十三	蹴鞠門	琴学門	諸夷門	琴学門	文翰門	花菓	医林門	射学門 武学門 笑話門 琴学門
十四	武備門	棋譜門	算法門	棋譜門	啓劄門	貨宝	夢員門	草法門
十五	文翰門	書法門	八譜門	書法門	伉儷門	称呼	相法門	種子門
十六	四礼門	画譜門	書法門	画譜門	喪祭門	孝服	詞狀門	算法門
十七	民用門	八譜門	画譜門	状式門	体式門	追薦	算法門	画学門
十八	子弟門	塋宅門	種子門	星命門	詩対門	分関	戲術門	勸諭門
十九	侑觴門	剋扱門	剋扱門	相法門	涓吉門	立関	舞備門	風月門 閨粧門
二十	博戲門	医学門	武備門	医学門	卜筮門	啓書	塋葬門	相法門
二十一	商旅門	保嬰門	相法門	易卦門	星命門	人相	卜筮笑談門	状式門
二十二	算法門	卜筮門	占課門	保嬰門	相法門	算法	謎令門	夢解門
二十三	真修門	星命門	風月門	訓童門	塋宅門	律法	雜覽門	玄教門 戲術門
二十四	金丹門	相法門	笑談門	勸諭門	修真門	触吉	馬経門	宅経門
二十五	養生門	体式門	星命門	農桑門	養生門	遷術	翎毛門	医学門
二十六	医学門	算法門	酒令門	衛生門	医学門	博奕	剋扱門	養生門
二十七	護幼門	武備門	法病門	笑談門	全嬰門	洗滌	筮譜門	算命門
二十八	胎産門	詩対門	養生門	酒令門	訓童門	算法	耕佈門	数命門
二十九	星命門	侑觴門	修真門	算法門	算法門	談笑	星命門	地理門
三十	相法門	笑談門	戲術門	詩対門	農桑門	奇異	陽宅門	通書門
三十一	卜筮門	風月門	塋宅門	婦人門	勸諭門	侑觴	祈嗣門	卜筮門
三十二	数課門	奇策門	断易門	武備門	侑觴門	雜覽	種子門	法病門
三十三	夢珍門	養生門	医学門	夢課門	笑談門		修真門	訓童門
三十四	營宅門	修真門	詩聯門	法病門	風月門		筆法門	卜筮門
三十五	地理門	記巧門	雜覽門	仙術門	玄教門			対聯門
三十六	剋扱門	法病門		風月門	卜員門			歌曲門
三十七	牧養門	戲術門		雜覽門	法病門			雜覽門
三十八	農桑門	积夢門			雜覽門			
三十九	僧道門	雜覽門						
四十	玄教門							
四十一	法病門							
四十二	閑中記							
四十三	笑謔門							

〔附表 2〕 燈謎分類比較表

	千家詩類	物事類	千文類	字謎類	拆字類	藥名類	州府県類	鳥獸名類	曲牌名類	詞曲類	兵書類	俗語類	大明律法類	古文類	小学類	四書類	①	
	樹名類	菓名類	花名類	藥名類	府州県名類	字謎類	古人名類	曲牌名類	詞曲類	大明律類	千家詩類	千文類	雜書類	五經	書句	四書類	②	
							古人名類	骨牌名類	藥名類	字類	書名類	大明律法類	千文類	千家詩	小詩類	書句類	③	
	事物類	俗語類	骨牌名類	曲牌名類	藥名類	花菓類	禽虫類	官名類	古人名類	地名類	字類	書名類	大明律法	千句文	千家詩	小詩類	書句類	④
花菓類	禽虫類	物事類	官名類	古人名類	俗語類	藥名類	府州県類	字謎類	拆字類	骨牌類	曲牌類	詞曲類	大明律類	千家詩類	小学類	千文類	四書類	⑤
					藥名類	府州県類	字謎類	官名類	古人名類	骨牌類	曲牌類	詞曲類	大明律	千家詩類	千文類	小学類	四書類	⑥
							字類	古人名類		曲牌類	詞曲類	大明律類	千家詩類	千文類		四書類	⑦ ⑧	
	事物類	俗語類	骨牌名類	藥名類	花菓類	禽虫類	官名類	古人名類	地名類	字類	書名類	大明律法類	千字類	千家詩	小詩類	書句類	類別なし	⑨

第二章 章回小説との共生をめぐる

一 はじめに

第一章では、清代における燈謎の主流的な文体である「今体」は、明末日用類書の分類と掲載形式を踏襲し、元・明代の燈謎が持つ欠点を踏まえたうえで成立した可能性を指摘した。すなわち、明末日用類書の編集が主なきっかけとなって、韻文形式の燈謎が一句ごとに分解され、「古体」から「今体」が生み出されたと見られる。ただ、「古体」から、「今体」への変化は、単なる形式面の変化にとどまらず、創作技巧の精緻化という重要な要素が含まれている。

『謎史』では、この創作技巧の精緻化について、以下のように記述している。

清代の小説に、謎語を以て物語を飾り付けるのは、『紅樓夢』に先んじるものなし、『鏡花縁』より数が多いものなし、『品花宝鑑』より精妙たるものなし。『紅樓夢』にある謎はほぼ古体で、今体は稀であるが、『鏡花縁』に見られるのは皆今体となったものの、平易なものが多く、精妙なものが少ない。『品花宝鑑』となると、ほぼ大成に登り詰めたように見える。その所以を推し量ってみると、実に時勢が然らしむるのみ。それゆえ今体謎の進歩を推し測るには、小説に就いて見ればおおよその見当がつく。

清代小説、以謎語点粧事实者、莫先于紅樓夢、莫多于鏡花縁、莫精于品花宝鑑。紅樓夢多古体而鮮今体、鏡花縁皆今体、多平浅而鮮精警、品花宝鑑則寔寔乎将登大成之域。揆其所以、実時勢使然耳。故就説部以推今謎進歩之跡、思過半矣。¹

ここで銭が「平易」と述べているのは口語的な文章で書かれ、当てやすいことであり、「精妙」といっているのは文章の格調が高く、文字遊戯として技巧が優れている、といった内容・技巧面の変化を指していると思われる。銭は、燈謎は清代において、中国古典小説の代表的な形態である章回小説と共生的な関係を結びながら、「古体」から「今体」へと発展してきたと論じている。しかし、その変化を、ただ「時勢が然らしめるのみ」というだけで、どのような「時勢」が、なぜこうした変化を引き起こしたのか、具体的な論証は展開していない。また『謎史』以外に、章回小説を切り口に燈謎の発展を捉える先行研究は知られていないことから、燈謎史研究にはまだ埋めるべき空白が多く残っているのは明らかである。

本章では、銭南揚が提示した燈謎と章回小説の関係について、章回小説に収録されている燈謎はもともと小説の人物描写をより豊かにするための技法であり、それを直ちに燈謎の技法や文体の発展を論じる材料とするには限界があることを示し、彼のいう「時勢」を具体的に、章回小説という文学ジャンルの創作スタイルの変化や小説作者の社会的な地位の変化などと捉え、燈謎の創作趣向の変化との間に存在する関連性について考察したい。

二 説話と商謎に関する再考

魯迅は『中国小説史略』（1923、1924年北京大學新潮社初版）において、伝統文人が書く筆記小説（文語体小説）と近代知識人が推重する白話（口語体）小説の間に隔たる「壁」を打ち破り、

¹ 銭南揚『謎史』、広州：国立中山大學語言歴史研究所、1928年7月、81頁。

初めて「中国小説」という全体像を描こうとした。その内容をダイジェストした講義録『中国小説的歴史の変遷』では、宋代の説話と章回小説のつながりを強調しており、多くの中国小説史研究者がそこから強い影響を受けてきた。現在、章回小説は一般的に白話小説の系譜に属するとされ、その形成は唐代の変文²から宋代の説話へ、短編の市人小説³から長編の章回小説へという文脈で語られるが、もう一つの系譜である筆記小説との関連性については、あまり注目されてこなかった⁴。本節では、燈謎と章回小説の結びつきを、宋代の説話文芸の一つである「商謎」に遡って考察する。「商謎」と燈謎の関係をあらためて整理することで、「商謎」から見られる筆記小説の要素を提示し、そういった要素がいかにか燈謎と章回小説の結びつきにつながるかを考察することで、清代における「古体」から「今体」への変化を文体論的に理解する手がかりが得られると思われる。

宋代の都市文化を記録した書『都城紀勝』（以下『紀勝』）「瓦舍衆伎」篇には、以下のような記述が見られる。

説話に四家ある。一に小説、銀字兒とも呼ばれる。例えば煙粉〔恋愛小説〕・靈怪・伝奇はその類である。または説公案、侠客の武闘や成金の開運物語がそれである。または鉄騎兒、いわゆる武勇伝である。次に説経、すなわち仏書を演説するもの、説参請、すなわち賓主が一堂で参禅悟道などにまつわる話。さらに講史書というものがあり、前代の書史文伝、興廃争戦を講ずる。以上のうち、小説人が最も畏られるのは、蓋し小説は能く一朝一代の故事を以て、頃刻の間に真相を突くからである。このほか合生というのは酒令の起令、随令と似ており、起と随でそれぞれ一事を詠む。商謎とは、旧時に鼓や板など楽器で「賀聖朝」という曲を奏し、人を集めて詩謎、字謎、戻謎〔素人が出す謎〕、社謎〔謎社などに属する謎の玄人が出す謎〕を当てさせる。謎とはもともと隠語である。やり方としては、道謎（来客が隠語や謎を読むこと、別名「打謎」）、正猜（来客が謎を要求し、商者〔商謎の主役〕が謎を出すこと）、下套（来客の特徴と似た物を謎にして来客を嘲ること、人名謎で知恵比べするなど）、貼套（ヒントを出すこと）、走智（物を変えて来客を困惑させること）、横下（来客以外の人に当てさせること）、問因（商者が来客に謎の根拠を喝問すること）、調爽（難題が解けないと偽って同じ答えの謎で仕返すこと）がある。

説話有四家：一者小説、謂之銀字兒、如煙粉、靈怪、伝奇。説公案、皆是搏刀趕棒、及発跡変泰之事。説鉄騎兒、謂土馬金鼓之事。説経、謂演説仏書。説参請、謂賓主参禅悟道等事。講史書、講説前代書史文伝、興廃争戦之事。最畏小説人、蓋小説者能以一朝一代故事、頃刻間提破。合生与起令、随令相似、各占一事。商謎、旧用鼓板吹賀聖朝、聚人猜詩謎、字謎、戻謎、社謎、本是隠語。有道謎（来客念隠語説謎、又名打謎）、正猜（来客索猜）、下套（商

² 仏教の本文を変更して俗人向けに講じたもの。

³ 都市の盛り場で口演される歴史講談を主とした口承文芸。

⁴ 例えば、陳美林・馮保善・李忠明の『章回小説史』（杭州：浙江古籍出版社、1998年12月）では、章回小説が白話通俗小説として、文言小説とは関係性がそれほど緊密ではないとされている（279頁）。また、黄霖『中国小説研究史』（杭州：浙江古籍出版社、2002年3月）からは、文言小説と通俗小説を分けて研究するのが現在中国小説研究領域において一般的であると看取できる（253-270頁）。

者以物類相似者譏之、人名⁵対智)、貼套(貼智思索)、走智(改物類以困猜者)、横下(許旁人猜)、問因(商者喝問句頭)、調爽(假作難猜、以定其智)。⁶

これは宋代説話研究や中国近世文学研究などによく用いられる基礎文献だが、作者である耐得翁の記述が不明確であるため、「説話四家」に関して、後に様々な異説を生むことになり、いまだに最終的な論定には至っていない⁷。

一般的には、魯迅の『中国小説史略』における四家分類が広く受入れられている。しかし、魯迅は小説、談経、講史書、合生を四家と数え、『紀勝』原文において「合生」の後ろに続く「商謎」については何も触れていない⁸。渋谷誉一郎の研究によると、1960年代までに行われた四家説考証は概ね以下の三派に分けることができる。

(一) ①小説、②説経、③講史、④合生。魯迅、孫楷第、嚴敦易。

(二) ①銀字兒、②説公案、説鉄騎兒、③説経、④請〔ママ〕史、①と②を併せ小説とする。張心泰、陳汝衡、李嘯倉、莊因、青木正児。

(三) ①銀字兒、②説鉄騎兒、③説経、④講史、①と②を併せ小説とする。瞿灝、譚正璧、王古魯。①のみを小説とし、②は別に一家とする。胡士瑩。⁹

以上の三派に分かれる状況は、現在の研究状況にも概ね合致しているが¹⁰、ここで違和感を持たざるを得ないのは、四家説において「商謎」に関する議論が非常に少なく、その存在が無視されがちなことである。

⁵ 吳自牧『夢梁録』第二十卷「小説講経史」にある記述は『都城紀勝』に基づいたものであるが、ここの「人名」は「又名」としている。孟元老等著『東京夢華録(外四種)』上海：古典文学出版社、1956年11月、313頁。

⁶ 孟元老等著『東京夢華録(外四種)』、上海：古典文学出版社、1956年11月、98頁。

⁷ 説話四家説に関する整理と検討は、以下の数点を挙げておく。孫楷第「宋朝説話人的家数問題」(孫楷第『俗講、説話与白話小説』、北京：作家出版社、1956年6月、初出：『学文雑誌』創刊号、国立北平図書館、1930年11月)、猪俣庄八「中国小説に關するノオト：白話短編小説の展開」(『北海道大学文学部紀要』2、札幌：北海道大学、1953年3月)、嚴敦易『水滸伝的演變』(北京：作家出版社、1957年3月)、胡士瑩『話本小説概論』(北京：商務印書館、2011年9月、初版：北京：中華書局、1980年5月)、渋谷誉一郎「南宋『説話四家』について」(『藝文研究』49期、東京：慶應義塾大学藝文学会、1986年7月)、劉興漢「南宋説話四家的再探討」(『文学遺産』1996年第6期、北京：中国社会科学院文学研究所、1996年11月)、張毅「關於宋人『説話』的幾個問題」(『南開學報』2000年3期、天津：南開大学、2000年5月)、馮保善「宋人説話家数考弁」(『明清小説研究』、2002年第4期、南京：江蘇省社会科学院明清小説研究中心、2002年12月)。また、商謎に関する主な研究は、居乃鵬「商謎考」(『国文月刊』七十八期、上海：開明書店、1949年4月)、于天池・鄭友善「説商謎」(『文史知識』2000年1期、北京：中華書局、2000年1月)、戴健「商謎三題」(『古典文学知識』2015年第4期、南京：鳳凰出版社、2015年7月)などが挙げられる。本論文における『都城紀勝』引用部分の現代語訳は以上の論文を参考している。

⁸ 魯迅『魯迅全集』第9巻、北京：人民文学出版社、2005年11月、117頁。

⁹ 渋谷誉一郎「南宋『説話四家』について」(『藝文研究』49期、東京：慶應義塾大学藝文学会、1986年7月、46頁。

¹⁰ 馮保善のように、「耐得翁のあの曖昧でいい加減な記述から脱却すべき〔必須從耐得翁那含糊其辭不負責任的『説話四家』中掙脱出来〕」という意見も新たな一派として数えるべきかもしれない。馮保善「宋人説話家数考弁」(『明清小説研究』、2002年第4期、南京：江蘇省社会科学院明清小説研究中心、2002年12月、76頁。

なお、『紀勝』に倣ったとされる呉自牧の『夢梁録』「小説講経史」でも、「商謎」はその記述に含められているから、このような扱いに疑問がある。この点について、渋谷は次のように理由をつけている。

『夢〔梁録〕』では「合生」を「小説講経史」一章に録すが、そもそもこの章には、「合生」に続いて「商謎（謎解き）」についての記載があり、厳格に「小説講経史」に関してのみ取りあげているわけではない。前述の如く、『夢』に見える記載、分章の混乱を考慮すれば、「商謎」と同様に、強いて「合生」を「説話」に関連づけて解釈する必然性はない。¹¹

要するに、渋谷は「商謎＝謎解き」は「説話」ではない、という大前提に立って、都市の娯楽場で語られる口承文芸である「説話」と無関係な「商謎」の記載が入っている事実を「分章の混乱」と理由をつけようとしている。

それに比べ、魯迅同様「商謎」を四家に含めない嚴敦易は、より確定的な口調で、『夢梁録』における商謎は「説話とは絶対に関係ないであろう。呉自牧が誤って入れたと断定すべきである〔這跟説話似乎絶無関係、我們應該断為是呉自牧所誤入〕」¹²としている。魯迅が「商謎」について全く触れないのもそれと似たような考えがあっただろう。しかし、呉自牧が参照した先行の『紀勝』にも合生・商謎が入っているのであるから、呉が誤って入れたという嚴の説は成り立たない。この点に関して、第一派の説を採りつつ、一步進めて、「商謎」もまた「合生」とともに第四家に入れるべきではないか、と独自の提案を述べたのが孫楷第である。

商謎は後の燈謎と同じように、性質が説話とはもともと近くないのだが、『都城紀勝』と『夢梁録』において帰すべき類がないため、とりあえず説話の後ろに付けられ、四家には入れられていない。しかし、その性質はあるいは合生と類似しており、商謎を合生の後ろに附したのは合生と合わせて第四家と数えられるかもしれない。

商謎如後來之燈謎、其性質与説話本不相近、在都城紀勝、夢梁録或以其無類可歸、姑附於説話之後、不入四家。但其性質或類合生、或以商謎附合生後与合生同為第四類、亦未可知。¹³

このように述べた後、孫は「ここで説を確定するのは困難」として、最終的な結論を保留している。

以上のように、孫を除くと、従来の議論では、「商謎」を性質からして説話と近くないと想定し、「説話四家」に含めない議論が主流であることが分かる。それは耐得翁の記述は曖昧であることが一因とされるが、そもそも耐の「商謎」に関する記述は、文全体の半分を占めており、実は最も詳細である。要するに、「商」は「討論する」という意味であり、「商謎」とは普通の意味での「謎解き」ではなく、「客が謎を持ちかけ、主人が謎を解く」あるいは「二人が謎をかけ合い、謎について議論をする」というストーリー性を持った名称と解すべきだろう。

11 渋谷誉一郎「南宋『説話四家』について」『藝文研究』49期、東京：慶應義塾大学藝文学会、1986年7月、52頁。

12 嚴敦易『水滸伝的演变』、北京：作家出版社、1957年3月、60頁。

13 孫楷第「宋朝説話人的家数問題」、同『俗講、説話与白話小説』、北京：作家出版社、1956年6月、20頁。

なお、同じことは「合生」をめぐる議論の混乱にも見られる¹⁴。合生について、孫楷第の解釈では、これは二人の人間が行う、演劇と歌と即興で詠む詩による複合芸術であるという。

洪邁が謂う「指された物を題にして詠じ、命に応じて即興に作成する詩詞」は、『洛陽搢紳旧聞記』に記されている蜘蛛を嘲る故事と『都城紀勝』『夢梁録』が云う「起令随令と相似する」もののが意味的に非常に近い。『都城紀勝』『夢梁録』の解釈から推測すれば、「起令随令」というのは唱和するというので、「それぞれ一事を詠む」というから、参加者は一人ではないと看取できる。『新唐書』にある「襪子、何懿などが『合生』を唱する」¹⁵から見ても、一人で演じるものではないようである。恐らく合生は二人で演奏し、時には踊りと歌をしながら事実や人物を語る芸であり、時には物と指して題を詠み、滑稽で諷刺的な詩詞であろう。踊りや歌であれば、雑劇に近いが、事実や人物を語るのは、説話に近い。滑稽で諷刺を含む指物題詠であれば、商謎のような題に沿って物を当てる類と、風雅を以て遊戯するという点が同じである。したがって、筆者の仮説では、合生は雑劇、説書、商謎の中間に位置するものである。

洪邁所謂「指物題詠、応命輒成」与洛陽搢紳旧聞記所記嘲蜘蛛事合；与都城紀勝、夢梁録所云「合生与起令随令相似」者、意思亦極相近。今以都城紀勝、夢梁録所积合生測之、言「起令随令」、則似唱和；言「各占一事」、則非一人。新唐書記襪子何懿等唱合生、似亦非一人之事。大概合生以二人演奏。有時舞蹈歌唱、鋪陳事实人物；有時指物題詠、滑稽含諷。舞蹈歌唱、則近雑劇；鋪陳事实人物、則近説話；指物題詠、滑稽含諷、則与商謎之因題詠而射物者、其以風雅為遊戯亦同。所以、我假設合生是介乎雑劇、説書与商謎之間的东西。¹⁶

要するに、孫は「歌者嘲蜘蛛」故事の内容と『夷堅志』「合生詩詞」の類似性、また、合生の芸に必要な人数に注目している。ちなみに、北宋張齊賢の『洛陽搢紳旧聞記』にある「歌者嘲蜘蛛」の故事は以下のように書かれている。

楊苧羅という合生と雑嘲に長じる談歌婦人〔女性の説唱芸人〕がいた。能弁聡慧であり、才知にも優れ、当時、彼女に比べられる者がごくまれであった……（中略）……少師はその聡明俊敏を念じ、彼女のことを姪と呼んでいた。時に俗講〔俗人に対する講唱形式の説法〕ができ、文才を有し、機敏に応答できる雲弁という僧がいた。例えば祭祀祝禱用の文章を、相手の名位の高低に合わせて、まるで事前に構想していたかのように、直ちに千字の文をしたためることができるので、少師は特に雲弁を重んじた。雲弁が長寿寺において五月講を行った際、少師も講院に参詣し、雲弁と対座した。その時は談歌婦人も側にいた。そこで突然、大きい

14 「合生」に関する議論は、孫楷第「宋朝説話人的家数問題」（前掲、25頁）、嚴敦易『水滸伝的演變』（前掲、61-63頁）、任半塘『唐戲弄』（上海：上海古籍出版社、1984年10月、279頁）、李拓之「中国的舞蹈（続）」（『厦門大学学报（文史版）』1954年第5期、厦門：厦門大学、1954年10月、75頁）などに見られる。四説の中で比較的妥当であるのは孫・李説だと思われる。孫・李両氏の説にはより詳しく論じるべき部分が多々残っているが、歌舞のような身体表現と詩詞のような文学表現が時に混ざり合い、時に相互に転化するという点に関して、決定的な徴証がないとは言え、概ね同意できる。嚴・任両氏の説に見られる混乱、近代以前の文芸現象を解釈するうえで、社会階級による雅俗二元論や、近代的進歩史観に囚われすぎることの問題を示しており、それらは根底から問い直されるべきである。

15 歐陽脩・宋祁『新唐書』「列伝第四十四・武平一」、北京：中華書局、1975年2月、4295頁。

16 孫楷第「宋朝説話人的家数問題」、同『俗講、説話与白話小説』、北京：作家出版社、1956年6月、25頁。

蜘蛛が軒下から糸と垂らし、ちょうど少師の目の前に降りていた。僧の前で（この句脱字あり）。雲弁は笑って談歌婦人にこう言った。「この蜘蛛を嘲ってみたまえ、よくできた場合は絹を五疋与えよう」と。談歌婦人は考える時間も要らないで即座に応じた。意味は全く蜘蛛から離れていなかったが、嘲る矛先はまさに雲弁に向けていた。少師がそれを聞いて暫く抱腹絶倒し、「和尚、絹五疋を取って来い」と高らかに命じた。雲弁も釣られて笑い、絹五疋を与えたという。談歌婦人が蜘蛛を嘲る詩はこうである。「腹一杯まで食し、糸を辿って寺を廻る。空中で羅網を設け、衆生を殺るのを待つ」と。おそらくそれは雲弁の太って張り出ている腹を皮肉ったものだろう。

有談歌婦人楊苧羅、善合生雜嘲、弁慧有才思、當時罕与比者……（中略）……少師以姪女呼之、蓋念其聰俊也。時僧雲弁、能俗講、有文章、敏於應對、若祀祝之辭、隨其名位高下、對之立成千字、皆如宿構、少師尤重之。雲弁於長壽寺五月講、少師詣講院、与雲弁對坐、歌者在側。忽有大蜘蛛於檐前垂糸而下、正對少師、於僧前（此句有脱字）。雲弁笑謂歌者曰、試嘲此蜘蛛、如嘲得着、奉絹五匹。歌者更不待思慮、応声嘲之、意全不離蜘蛛、而嘲戲之辭、正諷雲弁。少師聞之、絶倒久之、大叫曰、和尚取絹五匹来。雲弁且笑、遂以絹五匹奉之。歌者嘲蜘蛛云、喫得肚墨撐、尋糸繞寺行、空中設羅網、祇待殺衆生。蓋譏雲弁体肥而肚大故也。

17

談歌婦人がその場で披露したのは果たして「合生」であるかは断言できないが、文脈と内容から見ると、『夷堅志』の「合生詩詞」¹⁸が述べている特徴と一致している。また、人物の特徴を嘲るという点は、『紀勝』に書かれている「商謎」の具体形式の一つである「下套」に合致している。「起令」「随令」は酒令の専門用語と言っているほどほぼ酒令の場面に使われる名詞であり¹⁹、酒令文化と「射覆」など占いの文化との関係を考えて、「各占一事」の「占」は、「占い」から転じて「隱喩」と解されるべきである。例えば、日本文学においては、連歌や俳諧に使われる「隠し題（物名）」という技法がそれとよく類似している。すなわち、孫が断言を避けつつも最後に提唱した「合生と商謎は一家」という説は、二人演芸であり、即興詩や謎かけなど、知恵を競い合う遊戯性をもつ、という点できわめて合理的かつ簡明な解釈である。

筆者の問題関心からすれば、現在の史料的状況において合生がどのような内容の演芸だったかを実証できないことは大きな問題ではない。重要なのは、商謎がもともと説話文芸の一つであり、二人以上で行う謎かけ演芸だった、ということである。むろん、商謎の底本²⁰として現存するものは見当たらないため、これについても史料的な根拠はなく、それゆえ従来、商謎が説話四家に入れられてこなかったのであるが、筆者は、唐宋の文語体筆記小説のなかに、『紀勝』の商謎の各型式に一致するような故事が見出せることから、商謎とは、これらの小説の内容を敷衍したものであった、と考える。

17 張齊賢『洛陽搢紳旧聞記』、『筆記小説大観』第二冊、揚州：江蘇広陵古籍刻印社、1983年4月、3頁。

18 洪邁『夷堅志』、北京：中華書局、1981年10月、841頁。

19 劉初棠『中国古代酒令』、上海：上海人民出版社、1992年3月、273頁。

20 魯迅の『中国小説史略』では、説話の台本または底本のことを「話本」としており、その用語は白話小説研究において最も頻出するものとして数多くの研究者に使われてきたが、その定義や用法は未だに一致した見解が示されていないため、ここでは理解の混乱を避けるために「話本」を使わずに、底本と称する。

「話本」をめぐる理解の相違については、勝山稔「白話小説研究における『話本』の定義について—中国白話小説研究における一展望（Ⅲ）—」、『国際文化研究科論集』7巻、仙台：東北大学大学院国際文化研究科、1999年12月を参照。

以下、各型式の説明に合致すると思われる資料を列挙する。そのうち、「道謎」「正猜」「横下」に関しては意味が判然としているため、説明不要と思われるが、その他の形式はそれぞれどういうものかを考えたい。

【下套（商者以物類相似者譏之、人名対智）】

秋官侍郎〔刑部官職〕狄仁傑が秋官侍郎の盧獻を嘲り、曰く、「貴殿に馬を与えれば驢と作す。」獻曰く、「貴方様を中から切り裂けば二犬と成る。」傑曰く、「狄という字は犬偏に火なり。」獻曰く、「犬のそばに火があるというのは、犬が煮えているということだな」と。秋官侍郎狄仁傑嘲秋官侍郎盧獻曰、「足下配馬乃作驢。」獻曰、「中劈明公、乃成二犬。」傑曰、「狄字犬旁火也。」獻曰、「犬辺有火、乃是煮熟狗。」（張鷟『朝野僉載』卷六）²¹

「下套」に関しては、すでに「歌者嘲蜘蛛」故事を挙げたが、上記の故事も「来客の特徴と似たものを謎にして来客を嘲る」典型例として挙げられる。なお、『紀勝』では「人名対智」としているが、『夢梁録』では「又名対智」となっている。両書の継承関係を踏まえたうえでここでは『紀勝』の記載に準ずることにする。確かに「又名対智（別名『対智』とも言う）」のほうが一見引っかけが難しく読めるが、実際、人名の文字を利用して謎を作る故事は唐宋時代の筆記小説にいくつもの例²²が見られるため、「人名対智（人名謎で知恵比べする）」という記述を支持する典拠が豊富にあることから、本来「人名」であったものが、いつしか意味の通りやすい「又名」に誤ったのではないか。

【走智（改物類以困猜者）・貼套（貼智思索）】

曹著は機敏で能弁である。時に客が彼を試すために謎を作った。曰く、「とあるものは座る時も座っており、臥せる時も座っており、立つ時も座っており、歩く時も座っており、走る時も座っている。」著はその声に応じ、すぐに「官地に在るか、私地に在るか」と言った。また、「とあるものは座る時も臥せており、立つ時も臥せており、歩く時も臥せており、走る時も臥せており、臥せる時も臥せている」という謎を作った。客はそれを答えることができなかった。「わたしの謎があなたの謎を呑む」と曹が言うと、客は大いに恥じたという。曹著機弁。有客試之、因作謎云「一物坐也坐、臥也坐、立也坐、行也坐、走也坐。」著応声曰：「在官地、在私地。」復作一謎云「一物坐也臥、立也臥、行也臥、走也臥、臥也臥。」客不能曉。曹曰「我謎吞得你謎。」客大慚。（段成式『廬陵官下記』卷一）²³

上記の例に出てくる二題の謎はそれぞれ「蛙」「蛇」が正解である。文中では、最初の謎をすぐに解けた曹著が答えを直接に言い出さずに、『晋書』「帝紀第四・惠帝」に見られる「蝦蟆」の典故²⁴を借りて答えを指している。故に「在官地、在私地」も一個の謎と見なすことができる。

²¹ 上海古籍出版社編『唐五代筆記小説大観』、上海：上海古籍出版社、2000年3月、74-75頁。

²² 有名な例をいくつか挙げておくと、李公佐『謝小娥伝』と牛僧孺『玄怪録・尼妙寂』にある盗賊の名前を伝える謎、袁郊『甘沢謠』にある「許雲封」という名前を隠す謎、呉处厚『青箱雜記』にある陳亜の「亜」字謎などがある。

²³ 孫家洲編『中華野史 先秦至隋朝卷』、濟南：泰山出版社、2000年1月、983頁。

²⁴ 「帝は嘗て華林園で蝦蟆の鳴く音を聞き、左右に『今鳴っているのは官か、私か』と謂った。ある侍者は『官地にいれば官、私地にいれば私』と答えた〔帝又嘗在華林園、聞蝦蟆声、謂左右曰、此鳴者为官乎、私乎。或対曰、在官地为官、在私地为私。〕」房玄齡等撰『晋書』、「二十四史」（簡体字本）、北京：中華書

このように答えの代わりに別の謎を出して智慧を競う行動は「調爽」と見なせるが、「調爽」に関してはまた後文で説明する。曹著が出した「蛇」の謎は、客が出した「蛙」の謎をそのまま模倣したものとなっており、つまり、「物の類を変えて来客を困惑させる」という「走智」の場面と見える。「走智」は片側の人物が一方的に知恵を見せびらかすという行為であろう。最後の「我謎吞得你謎」は「蛇が蛙を呑む」ことから、相手にヒントを出す言葉となっており、「貼套」の解釈と合致する。

以上の二例は唐代の筆記小説からである。

【問因（商者喝問句頭）】

「東坡与仏印商謎」

蘇東坡は即紙を拾い、一人の和尚を描いた。右手には扇、左手に長柄の箒を握っている姿である。東坡は仏印に「この謎を解けるか」と言った。仏印は長らく沈吟し、「閑睢序の中の語句か」と聞いた。東坡は「何故そう謂う」と問った。仏印は曰く、「風を以て之を動かし、教を以て之を変える、という意味では」と。東坡は「吾が師の本領だ」と言った。高らかに笑い合った。

東坡即拾一片紙、画一和尚、右手把一柄扇、左手把長柄箒籬、与佛印云、可商此謎。佛印沉吟良久、莫是閑睢序中之語歟。東坡曰、何謂也。佛印曰、風以動之、教以化之、非此意乎。東坡曰、吾師本事也。相与大笑而已。（不著撰人『東坡居士仏印禪師語録問答』）²⁵

張政烺によると、『東坡居士仏印禪師語録問答』（略して『問答録』）という書は瓦舎の説話人が「説参請」する時に使用する底本であったという²⁶。張氏は直接的な証拠を示していないが、南宋期に書かれた『貴耳集』『野客叢書』などの書との継承・引用関係を考証しつつ、『問答録』の成立時代を南宋中期と推定し、『五灯会元』に見られる仏印禪師の伝記などと照らし合わせて論じている。この物語の中に書かれている蘇東坡が仏印和尚に答えの解釈を要求する場面は商謎の「問因」を想起させる。本来、「喝問」という表現は一般的に禪問答を連想させるものであり、謎を入れることによって、禪問答語録に多見する謎めいた言葉を俗人向けにパロディとして表現しているのではないかと思われる。

【調爽（假作難猜、以定其智）】

「仏印与東坡墨斗説」

仏印は大工の墨壺を手にして東坡に言った。「吾に二部屋が有り、一部屋を転輪王に貸し、時に一線の道筋を放ち、天下の悪魔に阻める者なし」と。東坡はこう答えた。「吾、琴を一面有し、七本の弦が腹に蔵され、時に馬上でそれを弾き、天下の無声曲を弾き尽くし」と。仏印持匠人墨斗謂東坡曰、吾有兩間房、一間貸与転輪王、有時放出一線路、天下邪魔不敢当。東坡答曰、我有一張琴、七条絲弦藏在腹、有時将来馬上彈、彈尽天下無声曲。（不著撰人『東坡居士仏印禪師語録問答』）²⁷

局、2000年1月、69頁。

²⁵ 不著撰人『東坡居士仏印禪師語録問答』（古本小説集成第五輯）、上海：上海古籍出版社、1995年、17頁。

²⁶ 張政烺「《問答録》与『説参請』」『張政烺文史論集』、北京：中華書局、2004年4月、239頁。初出：『中央研究院歷史語言研究所集刊』第十七冊、北京：商務印書館、1948年4月）

²⁷ 不著撰人『東坡居士仏印禪師語録問答』（古本小説集成第五輯）、上海：上海古籍出版社、1995年、18頁。

秦少游が墨壺の謎を作って東坡に当てさせた。曰く、「吾に部屋が有り、半分を転輪王に貸し、時に一筋の光を放ち、天下の悪魔に阻める者なし」と。東坡は解けないと偽って、もう一つの謎を作った。曰く、「吾、琴を一面有し、琴弦が腹に蔵され、君に憑って馬上で弾き、天下の曲を弾き尽くせ」と。秦は解けることができず、帰って蘇小妹に言った。妹は「私にも謎の一つ持っている。私に舟が一隻有り、一人で櫓を揺らし一人で牽き、行く時はひもを牽いて行き、帰る時は櫓を揺らして還る」と言った。秦は長らく考えたが、やはり解けなかった。小妹は「私の謎はあなたと同じで、あなたのは兄のと同じで、兄のは私と同じ」と言った。

秦少游製墨斗謎与東坡射云：「我有一間房、半間租与転輪王。有時射出一線光、天下邪魔不敢当。」東坡偽射不中、仍作一謎云：「我有一張琴、琴絃藏在腹、憑君馬上彈、彈尽天下曲。」秦亦射不中、帰為小妹言之。妹曰：「我亦有一謎云：我有一隻船、一人揺櫓一人牽。去時牽纜去、來時揺櫓還。」秦思之良久、仍不能射。小妹云：「我的就是你的、你的就是大兄的、大兄的就是我的。」（馮夢龍『掛枝兒』）²⁸

上記の二例を比較してみれば、『掛枝兒』に書かれているのは『問答録』の翻案だということが推測できる。『掛枝兒』は明の馮夢龍が編纂した俗歌集であるが、墨斗の歌に対する批注の中にこの物語を記している。登場人物は『問答録』の二人から蘇軾、秦觀、蘇小妹の三人となり、それに応じて、答えが「墨斗」となる謎も二題から三題に増えている。謎が解けないと偽る場面は「調爽」にあてはまる。

ちなみに、「墨斗謎」は南宋周密の『齊東野語』、元代李治『敬齋古今註』、明代田汝成の『西湖遊覽志餘』にも載っている²⁹ことから、宋元明を亘って広く伝わっていたと見られる。周密は「隱語」編の最後に「今の書会〔説話人の集団〕のいわゆる謎はもっとも味気ない〔若今書会所謂謎者、尤無謂也〕」と締めくくっており、自ら集録した謎を賞賛し、説話人の謎をやや見下すような評価をしているが、成立時代からすれば、『問答録』のほうが『齊東野語』より早く世に出ていた。つまり、南宋末期に文人の口に膾炙していた燈謎と、説話人が商謎などに使用する謎とが、一部共通していた可能性が高く、彼が言うように、説話人の謎は「味気ない」ものだったという確証にはならない。

以上のように、唐宋筆記小説における謎が、商謎に挙げられている型式と一致することから、おそらく商謎では、上記のようなやりとりが実際に説話人によって演じられたと考えられる。文人による筆記小説と商謎の間に、共通して見えるのは、謎そのものの面白さより、人物の機智を表現する手法に重きを置いている点である。白話小説の系譜に位置する「商謎」は、文語で書かれたこうした小説から、こういった機智を表現する手法を継承し、二つの流れがそこで交差していると捉えられる。それは燈謎の「今体」（近代的文体）が形成される前の段階において、謎を取り入れている純文学と通俗文学の両方に共通して言える特徴である。そして、説話の底本が文

²⁸ 馮夢龍『掛枝兒；山歌；夾竹桃』、明清民歌時調集（上）、上海：上海古籍出版社、1987年9月、213-214頁。

²⁹ 「墨斗云、我有一張琴、絲絃長在腹、時時馬上彈、彈尽天下曲」、周密『齊東野語』、王文濡編輯『說庫』第23冊、上海：文明書局；中華書局、1915年10月、卷二十、7頁。「又聞墨斗謎云、我有一張琴、一絃藏在腹、莫笑墨如鴉、正尽人間曲」、李治『敬齋古今註（附拾遺）』、上海：商務印書館、1935年12月、110頁。「墨斗謎云、我有一張琴、絲絃長在腹、時時馬上彈、彈尽天下曲」、田汝成『西湖遊覽志餘』、北京：中華書局、1958年11月、446頁。

人の手によって韻文・散文の混合した形態である章回小説にされるのと、燈謎の概念が徐々に文義謎に収束し、一般名詞化されるのとは、同じく明末以降に見られる現象である。章回小説における燈謎の描写は、「商謎」の特徴を色濃く受け継いだものと考えられる。次の節で、燈謎と章回小説の関係性について具体的に、燈謎が書かれている章回小説を五種類に分けて検証していきたい。

三 章回小説から見る燈謎

1. 明末清初の世情小説——西周生『醒世姻縁伝』

『醒世姻縁伝』（以下『醒』と略す）は明代の山東地方を舞台に、因果応報による夫婦の確執を前世・今世に亘って描いた長編小説である。創作は明の崇禎年間末期から始まり、清の順治十八（1661）年に完成したと思われる³⁰。作者の西周生に関しては、胡適が1931年に書いた「『醒世姻縁伝』考証」で、西周生を『聊齋志異』の作者である蒲松齡と同一人物であろうと推定した³¹。論拠として、『醒世姻縁伝』の物語が全体的に『聊齋志異』の「江城」篇及び蒲松齡が書いた説唱台本『禳妬呪』に類似していること、『聊齋志異』の白話韻文に使われている方言の文字の当て方と意味が『醒世姻縁伝』と一致していること、「知不足齋叢書」の編集者である鮑廷博が「留仙〔蒲松齡〕に『醒世姻縁』という小説がある」と説いたこと³²などが挙げられた。「西周生＝蒲松齡」は定説になっていないが、『聊齋志異』のような短編文言小説を俗人向けの説唱文芸に敷衍し、さらに長編の章回小説に翻案したという流れをめぐる推論は、『醒』のみならず、章回小説というジャンルから多くの例が見られるので、その見当は間違っていないと考えられる。視野をやや狭めて見てみれば、その流れは、筆記小説の中の謎を説話において商謎という形で講釈し、商謎の手法を章回小説で燈謎をとおして再現する流れと同じ文脈に置かれており、高い共通性を有している。

具体的に見てみると、『醒世姻縁伝』の第五十八回に、主人公の狄希陳とその友人相于廷が酒飲みの際、酒令の代わりに燈謎（打虎）を行う場面が描かれている。燈謎に関する評論である李保華の「独杉堂謎話」は、章回小説の中で最も早く燈謎を入れたものとして『醒』を挙げ、『謎史』の「『紅樓夢』に先んじるものなし」という説が成立しないことを明らかにした。なお、李氏は、『醒』の中に書かれている燈謎はすべて文義謎であり、民間の謎語（事物謎）とはっきり区別している点を高く評価しているが、後の『紅樓夢』や『鏡花縁』などに出てくる燈謎に比べるとやや俚俗で稚拙なものだと論じている³³。しかし、その評価を下す根拠となる二題の燈謎——「鶏屁股拴線」と「孩子跑在哥前面」は、いずれも作品の主人公である狄希陳が出した謎であり、つまり、狄の人物像に沿って創作されたものと考えられる。この点を、李保華と『古今優秀燈謎鑑賞辞典』³⁴は見過ごしている。

³⁰ 『醒世姻縁伝』の作者及び成書年代に関しては諸説あり、成書年代を確定するには至っていない。筆者は上海古籍出版社「古本小説集成」版の前言に従い、1661年を成書年代とする。また、具体的には池田麻希子「『醒世姻縁伝』研究序説：作者と成書年代を中心に」『藝文研究』第74期、東京：慶應義塾大学藝文学会、1998年6月、42-59頁を参考。

³¹ 胡適「『醒世姻縁伝』考証」、歐陽哲生編『胡適文集5』、北京：北京大学出版社、1998年11月、269-311頁。

³² 楊復吉『夢闌瑣筆』による。胡適「『醒世姻縁伝』考証・後記二」、『胡適文集5』、前掲、312頁。

³³ 李保華「独杉堂謎話」、江更生主編『中華謎海』、上海：学林出版社、2000年11月、856-858頁。

³⁴ 趙首成、邵濱軍主編『古今優秀燈謎鑑賞辞典』、桂林：漓江出版社、1991年6月、806頁。

『醒』の主人公である狄希陳は、第三十三回のタイトル「劣書生が廁で杭を削る」に書いているとおり、一介の「劣書生」であり、童生試³⁵にも受かることができないほど学力が低い。小説の第三十七回では、友人である薛如卞と相于廷が県試³⁶の際に彼の代わりに文章を書いて替え玉受験する話を書いている。要するに、第五十八回の原文に見られる以下の四題の燈謎は、人物の学力差を鮮明に現しており、謎面となる文章からもそれぞれの個性が垣間見える。

狄希陳が相于廷に酒令をやれとさそった。「どうせ二人だけじゃないか。酒令はできないよ。謎をやろうか。僕が出して兄さんが解く。兄さんが出して僕が解くと交代でやろう。解けなかったら罰杯だ。じゃ僕から出すよ。『浄土に遍遊して闍黎を訪ねる』、四文字の謎を当てよう。」「その言葉自体どういう意味か分からんよ。どう解くんだい。」「凡そ庵や道観、寺院などはみな浄土さ。『土』の字は『度』と読んで、『闍黎』は和尚のことだ。『遍遊』とはあっちこっちと遊ぶって意味さ。」「そりゃ『串寺尋僧』だろう。」「そう、その四文字。よくご承知でした。じゃ兄さんの番だ。僕が解くよ。」「『鶏の尻に糸を繋ぐ』、答えは二文字だ。」「ちっとも難しくないね」と于廷は笑った。『扯淡〔くだらないおしゃべり、デタラメ話の意〕』の二文字だろう。じゃ僕だ。『内を恐れる人が団營を掌す』、七文字の人物を当てよう。」希陳はしばらく考え込み、「俺には解けんよ。罰杯を飲むから教えてくれ」と言った。「答えは『恐妻家の都元帥』さ。」希陳は苦笑しながらいった。「じゃ俺が出すから解いてみる。『子供が兄の前を走る』、四書からの五文字を当ててみる。」「『幼に而て遜弟不ず』だろう。」

狄希陳催著相于廷行令。相于廷道：「脱不了咱兩個人、怎麼行令？咱打虎³⁷罷。我說你打、你說我打、咱一遞一個家說。我先說起：遍游浄土訪闍黎、常言四字。」狄希陳道：「你說的這番語、我先不省的。可怎麼打？」相于廷道：「凡庵觀寺院俱是浄土、土字念度字、闍黎就是和尚、遍游是各處都要游到。」狄希陳說：「這是串寺尋僧。」相于廷道：「就是只四個字。該你出、我打你的。」狄希陳道：「雞屁股拴線、常言兩字打。」相于廷笑道：「這有甚難解？是扯淡二字。我再出你打：惧内掌団營、人物七字打。」狄希陳想了一会、說道：「我没處去打、我吃鐘、你說了罷。」相于廷道：「是怕老婆的都元帥。」狄希陳笑說：「我也出与你打：孩子跑在哥前面、四書五字打。」相于廷道：「這是幼而不遜弟。」³⁸

相が最初に出した「遍遊浄土訪闍黎」という謎は、典型的な「今体」謎であり、「遍遊」「浄土」「訪」「闍黎」の四語をそれぞれ同じ意味を持つ言葉に替えて解く、いわゆる「別解法」という技巧を使っている。しかし、狄はそれらの言葉の意味が分からないというから、相は丁寧に解説をして、謎を解くためのヒントを与えている。狄が出した謎は、相の謎と違って、題の文章を全体的に理解し、その文章全体の意味を別の言葉にする、またはその置き換える言葉と同じ発音の文字にする、いわゆる「会意法」「諧音法」という技巧を用いている。文章の品格が低いため、「今体」謎と似た技巧を使用しているが、駄作である。相が出した二題目の「惧内掌団營」

³⁵ 秀才になるための基礎的な科挙試験。

³⁶ 童生試の第一関門、県で行われる試験。

³⁷ 「打虎」とは、射るのが難しいことから「謎当て」の意味に転じた言い方。燈謎の別名「文虎」と同じである。

³⁸ 西周生『醒世姻縁伝』、上海：上海古籍出版社、1994年11月、1581-1582頁。西周生著／左並旗男訳『醒世姻縁伝』、東京：兄弟舎、2002年4月、426頁を参考。

は、一題目より難易度が下がっており、難しい用語はほとんど使われていないが、狄の学力からして依然と解けない。この謎の答えとなる「怕老婆的都元帥」³⁹という言葉は、まさしく狄の人物像に当て嵌まるものとなっている。狄はすぐにそのことに気づき、次の謎で反撃を仕掛けることにした。「孩子跑在哥前面」という文章は完全に口語的であるが、答えは書生なら誰もが熟知する「四書」からの言葉「幼而不遜弟」である。つまり、自分より年下でありながら自分のことを燈謎で揶揄した相于廷を指しているのだ。したがって、以上の場面は単に燈謎のかけ合いを記述したものではなく、知恵の競い合い、且つ相手を嘲る場面でもあり、商謎の「下套」「貼套」に非常に類似したやりとりとなっている。短い段落に織り交ぜた四題の燈謎をとおして、人物の性格や学力・教養をきちんと描き分けられているということは、作者が燈謎の技巧や品格に関して、相当な理解を持っていることを意味する。しかし、後に謎人が書いた謎話などの文章では、小説から燈謎だけを切り出し、文脈を無視して燈謎の優劣を評価する傾向が強いため、偏った印象にされてしまっている。したがって、『醒世姻縁伝』を例にして、明末清初における燈謎の主な特徴を証明することは困難だと考えられる。

2. 『紅樓夢』及びその続書

章回小説に書かれた燈謎と言われれば、恐らくほとんどの人が最初に思い浮べるのは『紅樓夢』だろう。『紅樓夢』以降、燈謎を取り入れた小説の多くは『紅樓夢』の伝統を受け継いだものであり、実際、その中の半数ほどが『紅樓夢』の「続書」に該当する。曹雪芹が書いた八十回の中では、燈謎を行う場面は二回あり、そのほか、第五回と第五十一回は、それぞれ讖語と懷古詩が書かれている。讖語や懷古詩なども時々燈謎と一括りにされるが、遊戯性を持たないため、似て非なるものである。本節は、第二十二回と五十回を中心に考察したい。ただし、『醒世姻縁伝』と同じく、『紅樓夢』に見られる燈謎作品も後世の謎人に高く評価されることはほとんどない。作中の燈謎が事物謎を中心にしているため、詩文の形式を踏んでいるとはいえ、文義謎とはやや離れていると思われる。前述のように、宋明時代の謎書や明末の日用類書には、詩文形式の事物謎が多く、事物謎と文義謎の両方が燈謎に含まれていたが、燈謎=文義謎の時代、すなわち謎話や燈謎専門書が大量に出版されるようになった清末以降になると、「今体」謎を推重する謎人から見れば、事物謎はもはや文人の嗜みとしては品格が足りないものとなったのだ。事物謎が多く書かれていることから、『紅樓夢』の時代には、まだ文義謎を主流とした風潮ができていなかった⁴⁰、あるいは、曹雪芹は燈謎に関して全く無知⁴¹、などと論じる人もいるが、これもまた、小説の文脈から燈謎だけを切り出して見た時に生じた偏った印象にほかならない。言い換えれば、『紅樓夢』の中の燈謎は『醒世姻縁伝』と同じように、文脈・場面・人物に合わせて意図的に創作されたものだからである。

第二十二回「宝玉曲文を聞いて禅機を悟り、賈政燈謎を作って讖語を悲しむ」では、章の後半部分で燈謎を借りて、人物の運命を仄めかす内容となっている。燈謎をめぐるストーリーは正月二十二日、宮中で暮らす元春から燈謎が届いたところから始まる。

³⁹ 清中叶繆良編『文章遊戯初編』巻六に「怕老婆的都元帥」という八股文があり、また、清末王文濡編『香艷叢書』第七集巻二に無名氏撰「惧内供状」にも「怕老婆之都元帥」との一文がある。出処不明だが、明末清初或いはそれ以前から流行していた俗語の可能性はある。

⁴⁰ 趙首成・邵濱軍『古今優秀燈謎鑑賞辞典』、桂林：漓江出版社、1991年6月、序「中国燈謎芸術溯源」20頁。

⁴¹ 南京謎人周之屏（1933～1984）が「石城謎話」でこのように評価した。江更生主編『中華謎海』、上海：学林出版社、2000年11月、530頁に参照。

忽然と「貴妃様が燈謎を送ってくださいました。皆さま当ててみましょう。当てたら各人一つ燈謎を作って宮中に差し出すように」という知らせがあった。四人〔宝玉、黛玉、湘雲、宝釵〕はそれを聞いて急いで部屋から出て、賈母（史太君）の上房に来た。そこには一人の若い太監が白紗張りの四角い燈籠を持っている。もっぱら燈謎用に作ったもので、その上にはすでに燈謎が一個貼ってあった。皆が争うようにそれを見て当てようとしていた。「お嬢様方には、謎を解けになれましても答えを口から言わずに、各自紙にお書きになってください。封をして一斉に宮中にお送りいたしますので、貴妃様をご自身で正解か否かを判定なさるとのことでございます」と太監が伝えた。宝釵たちがそれを聞き、近寄って見ると、そこには七言絶句の形式をした燈謎が書かれており、さほど新奇なものではないが、口では賞賛しといて、難しい謎ですねと、わざと思案するふりを見せるが、実は最初から答えが分かっていた。宝玉、黛玉、湘雲、探春もみな解けて、各々時間をかけて答えを書き出した。賈環や賈蘭たちも呼んできて、全員それぞれ思惑を持ちながら答えを紙に書いた。それから一人ずつ物を選んで謎を作り、丁寧な楷書で書いて燈籠に下げた。

忽然人報、娘娘差人送一個燈謎來、命他們大家去猜、猜後每人也作一個送進去。四人聽說忙出來、至賈母上房。只見一個小太監、拿了一盞四角平頭白紗燈、專為燈謎而製、上面已有了一個、衆人都爭看亂猜。小太監又下諭道：「衆小姐猜著、不要說出來、每人只暗暗的寫了、一齊封送進去、候娘娘自驗是否。」寶釵聽了、進前一看、是一首七言絕句、并無新奇、口中少不得稱贊、只說難猜、故意尋思、其實一見猜著了。寶玉、黛玉、湘雲、探春四個人也都解了、各自暗暗的寫了。一併將賈環、賈蘭等傳來、一齊各揣機心猜了、寫在紙上。然後個人拈一物作成一謎、恭楷寫了、掛在燈上。⁴²

この場面では、燈謎の内容こそ全く書かれていないが、後で出される燈謎を理解するための手がかりが隠されている。つまり、「それぞれ思惑を持つ〔各揣機心〕」⁴³がキーワードとなり、燈謎という正月の遊びに参加するといった単純なシーンではなく、少年少女の機智と処世術に重点を置いているのである。次の場面から具体的な謎が出てくるにつれ、燈謎にまつわる思惑のやりとりと燈謎に持たせている隠喩の役割が次第に展開していく。元春が燈謎に興じているのを見て、賈母は上機嫌になり、謎用の燈籠を作らせて姉妹たちにも燈謎を作らせた。和気あいあいと酒席を設ける場面が続くはずだが、朝廷から帰った家長格の賈政がそこに加わると、空気が一気に窮屈なものに変わった。賈母が自分をここから追い出して、孫と孫娘たちを楽しませたいだろうと察しつつも、賈政はその場を退かなかつた。場を和ませようとして、賈母と謎の出し合いをしたのである。

⁴² 曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』、東京大学東洋文化研究所蔵程乙本（倉石武四郎教授旧蔵倉石文庫、乾隆57年〔1792〕木活字印本）、東京：汲古書院、2014年10月、157-158頁。日本語訳は曹雪芹・高鶚著／松枝茂夫訳『紅樓夢』、東京：岩波書店、1973年7月；曹雪芹・高鶚著／飯塚朗訳『紅樓夢』、東京：集英社、1980年1月；曹雪芹・高鶚著／井波陵一訳『紅樓夢』、東京：岩波書店、2013年10月を参考。

⁴³ 日本語訳の多くはこの一文を「それぞれ脳味噌をしばって」（松枝茂夫訳、東京：岩波書店、1973年7月、60頁）、「それぞれ知恵をしばって」（飯塚朗訳、東京：集英社、1980年1月、245頁）、「知恵を絞って」（井波陵一訳、東京：岩波書店、2013年10月、116頁）と訳すが、筆者は「機心」を「思惑」と訳した。

猿は身軽に梢に立つ〔猴子身軽站樹梢〕 果物一つ 荔枝⁴⁴

という賈母が出した謎々に対し、賈政が返した謎は、

体は四角で 身自端方
肌身は堅い 体自堅硬
ものは言えぬが 雖不能言
言葉に必ず応じる 有言必応
物一つ 硯⁴⁵

となっている。両方とも簡単な事物謎ではあるが、賈政が出したものは言葉から答えとなる品物まで、読書人氣質が滲み出ている。書中注によると、この「硯」は同音の「驗」の字とかけしており、本章中に出てくる燈謎に隠されている識語はすべて「応驗（当たる）」するという意味が含まれているという。また、脂硯齋が庚辰本に施した批注によると、賈母が出した謎には「樹倒猢猻散（権勢が崩れると周りの人間が散り散りになる）」という賈家の命運を仄めかすメッセージが隠されているという。このような隠喩的な手法をめぐって、すでに数多くの紅樓夢研究者が論じているため、後文の識語と同様に、ここでは割愛して、燈謎の形式と文章スタイルに焦点を当てたい。要するに、『紅樓夢』では、人物の性格や文才に見合った燈謎を出しているが、前記の商謎と『醒世姻縁伝』のように、「下套」「走智」「問因」「調爽」などの型式を取って知恵の対峙を表して楽しませるためではない。一族で高い地位を持つ人物から俗っぽい謎が出されたとしても、それを賞賛したり、故意に間違った答えを書いたりして、目上の人を立てるという、別の意味での知恵のかけあいが描写されている。そのような表現から、曹雪芹自身が燈謎というものに対し、どのように認識し、どれほどの創作実力を持っていたかを見定めるのは、非常に難しい。謎の内容が小説の文脈と緊密にリンクしているうえ、中に隠喩が含まれていることも章回タイトルで明示されているため、当時市井で流行していた燈謎をそのまま小説に取り入れたという可能性は低いと思われる。また、『紅樓夢』に見られる燈謎がすべて同じ形式をとっているというわけではないため、作品の成立当時の燈謎の主流的な形式と一致するとは考えにくい。

ちなみに、二十二章に出てくる識語となる燈謎は以下である。

元春作
妖魔の胆さえ潰す 能使妖魔胆尽催
姿は束ねた絹のようだが氣勢は雷の如し 身如束帛氣如雷
一声震えば人は恐れ 一声震得人方恐
振り返って見ればすでに灰と化している 回首相看已化灰
玩具一つ
爆竹

⁴⁴ 同音の「立枝」とかけて。曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』、東京大学東洋文化研究所所蔵程乙本、東京：汲古書院、2014年10月、158頁。

⁴⁵ 同上159頁。

迎春作

天運も人功も理は窮まらず 天運人功理不窮
功あるも運なくば逢い難し 有功無運也難逢
何ゆえ終日紛々として乱れるか 因何鎮日紛々乱
ただ陰陽の数が同様でないが為 只為陰陽数不同
物一つ
算盤

探春作

階下の童が面を仰ぐ時 階下兒童仰面時
清明節の粧点に最も宜しい 清明粧点最堪宜
游糸一度断ちて力無くし 游糸一断渾無力
春風に別離を怨むなかれ 莫向東風怨別離
玩具一つ
凧

宝釵作（程甲・乙本黛玉作）

殿中の香煙を誰かが両袖に携え 朝罷誰携両袖煙
琴の辺りにも褥の中にも縁が無し 琴辺衾里総無縁
夜明けに鶏人の知らせを用いず 曉籌不用雞人報
五更に侍女に灯油を注ぎ添える煩瑣もなし 五夜無煩侍女添
毎朝毎晩に頭を焦がし 焦首朝々還暮々
日々と年々に心を煎る 煎心日々復年々
流れゆく光陰を惜しめ 光陰荏苒須当惜
風雨陰晴に何の関係もなく 風雨陰晴任變遷
物一つ
更香⁴⁶

宝玉作

南面して坐れば 南面而坐
北面して向かう 北面而朝
象が憂えば憂い 象憂亦憂
象が喜べば喜ぶ 象喜亦喜
物一つ
鏡

宝釵作

目あるが目玉なしで腹の中は空 有眼無珠腹内空
蓮が咲く頃に相逢うのを喜び 荷花出水喜相逢

⁴⁶ 夜の時計替わりに焚く線香で、時刻が分かるように印をつけてある。

桐の葉が落ちる頃に離別し 梧桐葉落分離別
夫婦の恩愛も冬に至らない 恩愛夫妻不到冬
物一つ
竹夫人⁴⁷

以上の燈謎は全て事物謎であり、その中のほとんどが七言詩の形を取っているが、文章を読むときほど精練したものではなく、通俗的な詩といった印象を受ける。共通の特徴として、これらの燈謎からは、正月の遊びに相応しくないような悲観的な雰囲気が漂っている。賈政はこれらの燈謎から不安な気配を感じ、「讖語を悲しむ」場面に転じていくが、その中に唯一、宝玉の作と知らずに「絶妙である〔妙極〕」と称賛したのは「鏡」の謎である。この「鏡」の謎はほかの六作と比べると、語句がシンプルであるが、ほかの謎と異なるのは、四書から文章をそのまま引用していることである。下の二句「象憂亦憂、象喜亦喜」は、『孟子』「万章章句」から引いたものであり、『孟子』の原文における「象」は人名（舜の弟）であるのに対し、謎の中では人の姿を指す「象（しょう）」に意味が転じている。つまり、「絶妙である」と評価されたのは、詩句の出来栄えというより、典故が入れられていることだと考えられる。このように、作者が人物の細かな言動を通して、燈謎の雅俗や優劣を評価する一面が窺える。

第五十回「蘆雪庭に争って即景詩を聯ね、暖香坞に雅やかに春燈謎を製る」では、李紈をはじめとした若者が燈謎を作る場面があり、巧妙な燈謎とはいかかなものか、「雅俗共賞」な燈謎とはどういったものかをめぐる議論が見られる。文中に李紈・李紋・李綺の三姉妹が出した四題の謎は、それぞれ「四書」の句を答えとするものと「五経」の典故を利用したものとなっており、作中では良作として満場一致の称賛を受けている。

李紈作
観音未だ「世家」「伝」あらず〔観音未有世家伝〕
四書一句 善なりと雖も微無し〔雖善無微〕⁴⁸

池いっぱい青草は何の名ぞ〔一池青草草何名〕
四書一句 蒲蘆なり〔蒲蘆也〕⁴⁹

李紋作
水は石辺に向かって流れ出て冷ややか〔水向石辺流出冷〕
古人名一 山濤⁵⁰

⁴⁷ 竹製の納涼用具、寝る時に出して涼を取るもの。以上六題は曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』、東京大学東洋文化研究所蔵程乙本、東京：汲古書院、2014年10月、159頁。

⁴⁸ 答えは『中庸』第二十九章より。この謎に関して幾通りの解釈が見られるが、筆者は次のように理解している。「世家」とは『史記』の中で諸侯などの名家の歴史を記録した部分であり、「伝」は『史記』における「列伝」の略である。謎の題と解答を合わせて解説すると、つまり、観音は仏教において至善の象徴であるが、微（証拠、実証できる事柄）がないため、「世家」や「列伝」に記録されないという意味である。

⁴⁹ 『中庸』第二十章より。蒲と蘆はいずれも池などの水域で大変生えやすい植物であるため、謎の題から簡単に連想できる。

⁵⁰ 晋代の詩人、竹林の七賢の一人である。山濤のあざなは巨源、「水」から「濤」、「石」から「山」、「流出」から「源」と連想して解く謎となっている。

李綺作

蛩 字一 花⁵¹

以上、李紈と李紋が作った燈謎はいずれも七文字の短句を題にしており、「今体」の特徴を表している。李綺の字謎については、宝琴と黛玉がそれぞれ「これは意味深長〔這個意思卻深〕」「とても面白い〔妙的狠〕」⁵²と評価している。実際、題と解答が両方とも一文字となる燈謎は非常に珍しい。なぜなら、題が短すぎるゆえに解くための手がかりがなかなか見つからないからである。この謎は『礼記』『月令』にある「腐草、蛩と為る〔腐草為蛩〕」という句から発想したものであり、「蛩」を「草から化したもの」と理解するうえで、「草(艹)」と「化」の二文字を合わせて「花」と解くのである。『紅樓夢』の燈謎が全体的に近代以降の謎人から低評価を受けている中、この一作が高く称賛されるのも、こういった二段着想に理由があると思われる。すなわち、作中人物のセリフから見える曹雪芹の燈謎に対する評価の傾向は、実は近代以降の謎人とほぼ一致するということである。そこで、宝釵は「どれも結構ですが、お祖母さまのお考えには合わないでしょう。分かりやすくして浅近なものを作って、だれにも楽しめるものを作ったほうがいいではないでしょうか〔這些雖好、不合老太太的意思、不如做些淺近之物兒、大家雅俗共賞才好〕」⁵³と言いつし、史湘雲は俗っぽい謎(事物謎)を作ってみたと申し出ると、宝釵、宝玉、黛玉の三人も「雅俗共賞」を目指して、以下のように新たに事物謎を作っている。

湘雲作

溪谷に別れを告げ	溪壑分離
浮世で戯れ遊ぶ	紅塵遊戯
何が面白いことか	真何趣
名利もなお虚しく	名利猶虚
後ろのことは継ぎ難し	後事終難 ⁵⁴

解答：猿回しの猿

宝釵作

檀梓を幾重に刻む	鏤檀鏤梓一層々
名工が積み上げしものでなく	豈系良工堆砌成
半天の風雨が過ぎるとも	雖是半天風雨過
梵鈴の音は何ぞ曾て聞こえぬ	何曾聞得梵鈴声

宝玉作

天上と人世から遥かに隔たり 天上人間兩渺茫

51 以上四題は曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』、東京大学東洋文化研究所所蔵程乙本、東京：汲古書院、2014年10月、348頁。

52 同上。

53 同上。

54 「名利も」の句は猿回しの猿は官吏の服を着せられることを皮肉しており、「後ろの」の句は猿の尻尾を切ってしまうという猿回しの慣習を指している。

琅玕、節過ぐれば心せよ　　琅玕節過謹隄防
鸞鶴の便りに目を凝らすべし　鸞音鶴信須凝睇
啜り泣きをして天に答えん　　好把唏噓答上蒼

黛玉作

駿馬には手綱の束縛要らず　　駱駝何勞縛紫繩
城を馳せ壕を逐ってすさまじく　　馳城逐壑勢猙獰
主人の命令で風雷のごとく動き　　主人指示風雲動
三山背負う鰲のごとく独り名を立つ　　鰲背三山独立名⁵⁵

上記四題の燈謎に関しては、『紅樓夢』研究者によるさまざまな解説と分析がされており、この謎も人物の結末を隠喩しているという意見が通説となっているが、単純にこの場面を見れば、これらの燈謎創作からは、黛玉の機智、探春の聡明、宝釵の円滑、湘雲の明朗快活など、各々の個性が鮮明に描かれているのが明らかである。そして、宝釵、宝玉、黛玉の三人が書いた「雅俗共賞」的な事物謎は、第二十二回にある彼らの燈謎より、文章が明らかに精練になり、典故が多用されている。これは恐らく三人が本気で詩才を發揮した結果として書かれているだろう。第二十二回の俗っぽい燈謎に対するある種のリベンジのようにも見えて、曹雪芹自身が持つ趣向は、これに近いのではないかと考えられる。つまり、彼が考える「雅俗共賞」とは、俗人向けの事物謎を品格の高い詩句で創作することであり、内容の「俗」と形式の「雅」が合わさることである。「『紅樓夢』にある謎はほぼ古体で、今体が稀である」という銭南揚の評価は間違っていないが、『紅樓夢』の燈謎と人物描写の関係をつなぎ合わせて考えると、燈謎創作に関する曹雪芹の趣向は、彼と同時代を生きた謎人⁵⁶が持つものとそれほど離れていなかった。したがって、彼が燈謎について十分な理解がなく、創作能力が低かったという評価は適切ではない。

そして、『紅樓夢』の続書は嘉慶朝を中心に大量に出版されるようになっていたが、小説自体の文学性が高くないため、燈謎が作中における役割は『紅樓夢』とかなり異なっている。例えば、嘉慶四年（1799）に成書した陳少海の『紅樓復夢』は、第九十七回に燈謎会を行う場面が描かれており、ずらりと並ぶ燈謎はそのほとんどが「雅謎」、つまり、「今体」の謎である。しかし、単に文中に羅列されているため、人物の性格、学問及び言動との関連は全く見られない。嘉慶十九年（1814）刻本の臨鶴山人『紅樓圓夢』では、第九回に燈謎で知恵を競い合うシーンがあり、すべての燈謎が「今体」である。会話の中に燈謎を織り込んでいるため、商謎の名残を感じさせる。内容的に各人物の学問、性格、運命と一定的な関連性を見せているが、『紅樓夢』に比べると直観的であり、味わいが劣っている。嬢嬢山樵の『補紅樓夢』は嘉慶二十五年（1820）に出版され、『紅樓夢』の続書の中において燈謎が最も多く書かれているが、燈謎を当てるのが原作の主要人物の子女であるという設定なため、童生⁵⁷向けの簡単なものが並べられている。その中の大半は難易度が比較的到低い「今体」謎であり、「謎格」⁵⁸及び解き方まで詳しく解説されてい

55 以上四題は曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』、東京大学東洋文化研究所所蔵程乙本、東京：汲古書院、2014年10月、348頁。謎底が出されていなかった。後に謎人らが仮に当てた答えは「松かさ」「凧」「走馬灯」である。

56 燈謎の創作に関して、「(謎の)文章に典故を含ませる〔語出有典〕」「文雅」と主張した費源。

57 秀才になる前の段階、私塾などで基礎的な儒家教育を受ける児童。

58 特定の燈謎を解くために使用されるルール。

る。燈謎が人物描写を豊かにするために使用されているのではなく、人物の口を借りて燈謎の良作を読者に紹介し、解説することが目的であるように見られる。第三十四、三十五回では、『紅樓夢』原作中の燈謎を「すこし難しすぎる〔未免太深了些〕」と評価しており、特に第三十五回には多くの燈謎が出されているが、その一部は『鏡花縁』や『来生福弾詞』⁵⁹などに見出されるもの、または『紅樓夢』原作の燈謎がそのまま入れられている。おそらく作者自身が小説のために新しく創作したものではなく、当時世間で流行していた燈謎を採録しているであろう。

3. 才学小説——李汝珍『鏡花縁』

作者の才学を見せびらかすことを一大主旨とする小説分野を、魯迅は『中国小説史略』において、「才学小説」という新しい名称を与えている。その「才学小説」の代表的作家である李汝珍は章回小説の形式を参考にしながら、自身の経史、音韻に関する学問をはじめとして、燈謎、酒令などの遊戯にいたるまでの知識を物語の中に織り込んだが、ストーリーの枠組や人物描写などに対してはそれほど関心を持たなかったと言われる⁶⁰。こういった特徴に関して、魯迅は「万宝全書と隣り合わせである〔然亦与《萬寶全書》為鄰比矣〕」⁶¹と評価している。主人公が架空の国々を遊歴する前半に比べ、百人の才女がその才芸をひたすら競い合う小説の後半部分は比較的の不評であり、「冗長すぎて、読んでいと疲れてくる。文字の中に人物像が非常に薄く、或いは人物像がほとんど見えてこない〔嘵嘵叨叨、令読者不勝其疲倦、這些冗長的文字中形象稀薄或幾乎沒有形象可言〕」⁶²と評されることもある。また、物語の時代設定に混乱するところがあり、唐代初期を背景にしたストーリーのはずだが、明らかに唐代初期以降に発生した典故や史実を憚ることなく小説の中に織り混ぜているなど、宋代に発生した燈謎を入れているのもその一例である。燈謎の題となる詩句は、中唐、晩唐、あるいは宋代の詩人によるものなどがそのまま使用されている。銭南揚が書いたとおり、「『鏡花縁』に見られる燈謎は皆今体」となっているが、燈謎の役割と捉え方に変化が生じていることに注目してほしい。

燈謎が書かれているのは第三十一、三十二、六十四、八十、八十一回の五回であり、場面で数えれば三回に分けられる。まず、前半の第三十一、三十二回では、主人公の唐敖と同行の林之洋、多九公が「智佳国」に到着し、そここの中秋節の風習である燈謎会に参加したという話が書かれている。「智佳」という国名から察せるように、国民はみな智力が高く、作中の解釈によると、「ここでは天文、卜筮と三角法が最も好まれ、様々な細工や工芸、何ひとつとして優れていないものはない。おまけに勝ち負けに執着があり、ある限りの知恵を絞って人の意表に出て、人の上に出ようとするから、隣国からはみな智佳と呼ばれている〔此處最好天文、卜筮、勾股算法、諸様奇巧、百般技芸、無一不精。並且彼此争強賭勝、用尽心機、苦死悪想、愈出愈奇、必要出人頭地、所以隣国俱以「智佳」呼之〕」⁶³のである。この国の特徴を表現するのに燈謎を選んだというのは、作者が燈謎に抱く印象をそこに投影しているということほかならない。つまり、李汝珍から

⁵⁹ 橋中逸叟〔生卒約 1758-1832〕『来生福弾詞』、上海：商務印書館、1931 年。

⁶⁰ 李時人「出入『乾嘉』：李汝珍及其『鏡花縁』創作」『国学研究』第四卷、北京：北京大学中国伝統文化研究中心、1997 年 7 月、386 頁。

⁶¹ 魯迅『魯迅全集』第 9 卷、北京：人民文学出版社、2005 年 11 月、260 頁。

⁶² 何満子「古代小説退潮期の別格——『雑家小説』——『鏡花縁』膚説」『社会科学戦線』1987 年 1 期、長春：吉林人民出版社、1987 年 1 月、269 頁。

⁶³ 李汝珍『鏡花縁』、上海：亜東図書館、1923 年 5 月、第三十一回 3 頁。

見た燈謎は、「ある限りの知恵を絞って人の意表に出る」ための競い合いである。この場面に出されている燈謎の具体的な内容は以下に整理した⁶⁴。

第三十一回

- ①万国咸寧 『孟子』六文字 天下の民すべて安寧〔天下之民挙安〕⁶⁵
- ②はっきりと目の前にいる人は千里の旅路に出る〔分明眼底人千里〕 国名 深目⁶⁶
- ③千金之子 国名 女兒⁶⁷
- ④永く不老を賜う〔永錫難老〕⁶⁸ 国名 不死
- ⑤蟹（絵） 国名 無腸

第三十二回

- ⑥比肩民 『孟子』五文字 自ら歩くのができない〔不能以自行〕⁶⁹
- ⑦関山は越え難く、誰が路を失う人を悲しむのか〔関山難越、誰悲失路之人〕⁷⁰
薬名 生地
- ⑧足と足が絡まる〔腿兒相压〕⁷¹ 国名 交脛
- ⑨顔と顔が寄り添う〔臉兒相偎〕⁷² 国名 両面
- ⑩幼い子供〔孩提之童〕⁷³ 国名 小人
- ⑪高郵人 国名 元股⁷⁴
- ⑫游方僧 『孟子』四文字 通り過ぎる所の者は教化される〔所過者化〕⁷⁵
- ⑬大晦日の晩に眠らず朝を迎える〔守歳〕 『孟子』一句 以て来年を待つ〔以待来年〕⁷⁶

上記 13 題のうち、作中に出てくる架空の国名と解く燈謎が 8 題含まれており、物語に応じて創作されたものと思われる。全体的に見ると、『謎史』に書かれているように、これらの燈謎は言葉が分かりやすく、簡単に解けるといって「平易」なイメージを与えるが、典籍の原文を答として解く、あるいはさまざまな書物から原文を引用して題にしているため、読書人向けという特徴が非常に鮮明である。その特徴を利用し、作中では、「学問に詳しくない」ものの、頭の回転は速い林之洋という人物を生き活きと描き出している。林之洋のデタラメな解き方に対して、学問に詳しい主人公の唐敖は次のように述べている。「『孟子』は誰もが知っております。舅兄さん

64 同上、第三十一回 15-17 頁、第三十二回 1-2 頁。

65 謎面は『後漢書』より、謎底は『孟子・公孫丑下』より。

66 謎面は『西廂記』より。作中人物による説明は、「『千里』で『深』の字に当てるとは絶好の思いつき〔以千里刻畫深字、真是絶好心思〕とある。

67 謎面は『史記・越王勾踐世家』より。作中人物による説明は、「娘のことを『千金』と呼ぶ〔俺聽有人把女兒叫作千金〕とある。

68 『詩経・泮水』より。

69 謎面は『爾雅・釈地』より。謎底は『孟子・離婁上』より。

70 王勃「秋日登洪府滕王閣餞別序」より。

71 『西廂記』より。

72 同上。

73 『孟子・尽心上』より。

74 作中人物による説明は、「高郵人のアダ名は『黒尻』〔高郵人綽號叫作黒尻〕とある。元は黒の意を持つ。

75 『孟子・尽心上』より。

76 『孟子・滕文公下』より。

が覚えていないなら、我々に聞けばいいのに。舅兄さんは口まかせでデタラメなことを言うので、彼らがみんな笑ってしまったじゃないですか〔那部『孟子』乃人所共知的，舅兄既不記得，何妨問問我們。你只顧隨口亂謔，他們聽了，都忍不住笑〕⁷⁷と。このセリフからも、読書人の遊びである燈謎は読書人が持つ共通の知識を基に成り立っていることが読み取れる。

第六十四回では、女性を中心とした酒宴で燈謎が一題だけ出されている。物語の背景は、朝廷の兵が倭寇を平定したという消息が都に届いたということである。その事柄を表す「勝戦の知らせを赤い旗を持つ兵が朝廷に報告する習わし〔紅旗報捷〕」を題にした燈謎が出され、答えは『孟子』からの一句、「君は勝利を告ぐ〔克告於君〕（梁惠王下）」となっている⁷⁸。ここでは作中の「時勢」との繋がりがポイントとなっており、燈謎の創作に即興的な要素が好まれるということが伺える。この回では解くヒントが会話の中から出されているが、この謎に対する評価は第八十回に見出される。

第八十、八十一回では、燈謎を計 53 題書かれており、才女たちが集まって燈謎を出し合いながら議論や評価をする場面が描かれているが、燈謎の内容と物語・人物描写とはほとんど関連性が見られない。人物による燈謎論評を下記のように整理した⁷⁹。

第八十回

①天上の碧桃は露とともに植えられ、日の傍らに赤い花を咲かせる杏の木は雲に寄りかかって植えられている〔天上碧桃和露種、日辺紅杏倚雲栽〕⁸⁰ 花名 凌霄花

評：すっきりとした立派な題面だから答もいいのに決まっている。大体の人は花名の謎を作ると、前の文字だけを取って、花の字を言わないものだ。例えば、牡丹花の場合は牡丹の二文字だけ、花の字を中に入れない。でもこの謎は全体的に花に重点を置いている（中略）これは花謎の中の絶品と数えられよう。

好乾淨堂皇題面、這題里一定好的。往住人做花名、只講前幾字、都将花字不論、即如牡丹花、只做「牡丹」兩字、並未將「花」字做出、誰知此謎全重「花」字（中略）也可算得花卉謎中絶調了。

②官界でまるで演劇の場のように振る舞う〔直把官場作戲場〕 『論語』一句 仕えて優なれば〔仕而優〕⁸¹

評：この題面はまたもや雅で風流だな。きっと答もいい言葉でしょう。これは「凌霄花」より一層すばらしい。字義の借用はさておき、この「而」だけでも躍動的で、描写し尽くしたと言えよう。

這題面又是儒雅風流的、不必談、題里一定好的。這個比「凌霄花」又高一籌了、他借用估置不論、只這「而」字跳躍虛神、真是描写殆尽。

③吹 『易経』二句 離を火と為し、日と為す〔離為火、為日〕⁸²

77 李汝珍『鏡花縁』、上海：亜東図書館、1923年5月、第三十二回3頁。

78 同上第六十四回9頁。

79 同上第八十回1-10頁、第八十一回4-13頁。

80 高蟾「上高侍郎」より。

81 『論語・子張』より。

82 『易経・説卦伝』より。

評：「離」の字の使い方が非常に面白い。一般的に拆字格（文字をパーツに分ける方法）を使用する時はそうはつきりと分けて書けないものだが、これはとても生き生きとした分け方をしている、拆字格の新たな一面を創り出している。

這個「離」字用的極妙。往往人用拆字格、都混淪写出、不象這個拆的這樣生動、這是拆字格的另開生面。

④昱 『詩經』一句 その音を上下する〔上下其音〕⁸³

評：「日」の字を下に移し、「立」を上に移すと「音」字になるでしょう。利発でしゃれているだけでなく、自然と「其」という字が（答えのなかに）生まれてくる。この「其」という字が「昱」の字全体を生き生きと撥ねさせているようだ。さっきの「吹」の謎と比べて天と地くらいの差がある。

若将「日」字移在下面、「立」字移在上面、豈非「音」字麼。不但靈動可愛、並且天然生出一個「其」字、把那「昱」字挑的周身跳躍、若将「吹」字比較、可謂天上地下了。

⑤信とは何ぞや〔何謂信〕 『論語』一句 人を失わず、また言を失わず〔不失人、亦不言〕⁸⁴

評：これもまた拆字格の新境地〔這個又是拆字格的別調〕。

⑥これ止めるのみ〔斯已而已矣〕 『孟子』一句 退くべきだとすれば退く〔可以止則止〕⁸⁵

評：五つの虚字 でできているこの謎には、題の文字と一文字も重複しないような答えの句はなかなか見つからないだろうと言った矢先、このピッタリとはまる「可以止而止」が出てきたわ。もはやほかに当てられる答がない。しかもその「則」という字は最も当て難いし、「可以」の二文字も掴みどころがないし、「斯」と「而」の二文字だけで「可以則」を引き出せるなんて、まさに神がかりだ。

我只說這五個虚字、再没不犯題的句子去打他、誰知天然生出「可以止而止」五字来緊緊扣住、再移不到別處去。況且那個「則」字最是難以挑動、「可以」兩字更難形容、他只用一個「斯」字、一個「而」字、就把「可以則」的行樂図画出、豈非神来之筆麼。

⑦天地は一つ大きな炉である〔天地一洪爐〕 県名 大冶

評：これはいい謎だ。この「大」字じゃないと、「天地」を包括できないから、明確でありながら、適切であり、のびのびとしている。

這個做的好、不是這個「大」字、也不能包括「天地」兩字、真是又顯豁、又貼切、又落々大方。

⑧橘は淮北に生ずれば枳になるが、江北に生ずれば橙になる〔橘逾淮北為枳、橘至江北為橙〕

⁸⁶ 州名 果化

⁸³ 『詩經・邶風』より。

⁸⁴ 謎面は『孟子・尽心下』より、謎底は『論語・衛靈公』より。

⁸⁵ 謎面は『論語・憲問』より、謎底は『孟子・公孫丑上』より。

⁸⁶ 『周礼』『淮南子』『晏子春秋』より。

評：そんな博学な題面である以上、答は絶妙なものでないと、その思いつきの巧妙さは現せない。

既有那個淵博題面、自然該有這個絕精題里、不然、何以見其文心之巧。

第八十一回

⑨廂 『西廂』七字 布団と枕を見ると〔眼看著衾兒枕兒〕

評：拆字格であれば、きっと「目」と「床」に分けて、寝台を見ているという意味だ。

若論拆字格、必是以目視床之意。

⑩亥 『西廂』四字 一時半刻

評：謎格から言えば、会意格に破損格、趣向をこらして、旧来の型を脱している。しかもきっぱりとしていて、一文字一文字が鋭い。このような燈謎は言葉の響きがなんとも素晴らしい。

若以此謎格局而論、却是会意帶破損、不但獨出心裁、脫了旧套、並且斬釘截鉄、字字雪亮、此等燈謎、可謂擲地有声了。

⑪花鬪 『西廂』十五字 纏足した足で牡丹の芽を蹴散らし、玉の簪が茶蘼花の棚に引っかかった〔金蓮蹴損牡丹芽、玉簪兒抓住茶蘼架〕

評：この十五文字は一つ一つ躍動感があり、花が競い合っている行楽図画そのままだ。

這十五字個個跳躍而出、竟是花鬪一幅行楽図。

⑫婿が住む館〔甥館〕 『西廂』四字 女孩兒家

評：一文字一文字が適切に使われていて、少しも外れていない〔字字借的切當、毫不浮泛〕

⑬科挙の各試験で連続して一位を取った者〔連元〕 『西廂』八字 またも文章の雄一人〔又是一個文章魁首〕

評：「連」という字が答の「又」という字を掴んで飛び出てくるようだ。

「連」字直把題里的「又」字擒的飛舞而出。

⑭秋江 『西廂』五字 清い霜にきれいな緑色の波〔清霜浄碧波〕

評：ぴったりと合っていて明るだけでなく、秋の江水の表情まで描き出している。

不獨工穩明亮、並將秋江神情都描写出来。

⑮比干を嘆く〔嘆比干〕 『西廂』八字 意図的にやるより、無心にやったほうがいい〔你有心争似無心好〕

評：『史記』の「微子が去り、比干が強く諫めたが、紂が怒り、比干を解剖してその心を観た」という典故によれば、この謎にはきっと「心」という字が入っていて、しかも「嘆」の字と合わせて意味がぴったりとなるだろう。この句はとても「嘆」の神韻を得ていて、さらに「争似無心好」の五文字は非常に感慨深いもので、比干の悼辞にも匹敵できるほど。このような燈謎、遊びといえど、細かく吟味すると、『論語』の「君子は世を没するまで、名の称せられざるを疾む」という意が含まれていて、我々に目覚めさせるものも少なくない。

按『史記』「微子去、比干強諫、紂怒、剖比干、觀其心。」以此而論、他這謎中必定有個「心」字在內、但必須得他嘆字意思才切。此句狠得「嘆」字虛神、並且「争似無心好」這五個字、真是無限感慨、可以抵得比干一篇祭文。此等燈謎、雖是遊戲、但細細揣度、却含著「君子疾没世而名不称」之意、真是警励人不少。

⑯夕日の中で鞭を一振り〔一鞭残照里〕⁸⁷ 『西廂』四字 馬は西に向かう〔馬兒向西〕
評：「残照」の二文字が「向西」を直接引き立たせていて、意味もぴったりと合っていて、語句も自然で絶妙な佳作だ。
這「残照」二字、把「向西」直托出来、意思又貼切、語句又天然、真是絶精好謎。

⑰偷香 『孟子』三字 密かに聞く〔窃聞之〕⁸⁸
評：「偷香」の二文字が一風変わっているから、きっといい謎だ。この「偷」は窃盜という意味でしょう。これはまだ簡単だが、「香」は影も形もないから、考えるのが難しい。もしかすると、中に「嗅ぐ」という意味が含まれているかも。
他這「偷香」二字出的別緻、必定是個好的。我想這個「偷」字、無非窃盜之意、倒還易猜、第「香」為無影無形之物、却令人難想、莫非內中含著「嗅」字意思麼。

⑱子を取り換えて教える〔易子而教之〕 『孟子』四字 賓客と主人を更迭する〔迭為賓主〕⁸⁹
評：今の人は先生のことを「西席」または「西賓」と呼ぶ。これは「仕而優」「克告於君」ほど借用がうまいわけではないが、正面から字義を解するすばらしい謎と言えよう。
今人称師為「西席」、又謂之「西賓」。雖不如「仕而優」「克告於君」借用之妙、也算正面出色之筆了。

⑲間違えてもそのまま押し通し、間違ったまま人に伝わる〔將錯就錯、以訛伝訛〕 『孟子』一句 全員が嘘をつく〔相率而為偽者也〕⁹⁰
評：題も答も、一文字一文字の意味が当てはまっていて、実にいい思いつきだ。
題里題面、個個字義無一不到、真好心思。

⑳蟾宮曲 曲牌名 月兒彎
評：曲牌で曲牌を当てるのも一風変わっている。この「曲」の字の借用が非常にうまくて、意味も利発だ。
以曲牌打曲牌、倒也別緻。這個「曲」字借的巧極、意思亦甚活潑。

㉑農民の子は恒に農民となる〔農之子恒為農〕 『孟子』一句 耕す者は変わらない〔耕者不変〕⁹¹

⁸⁷ 『西廂記』より。

⁸⁸ 『孟子・公孫丑上』より。

⁸⁹ 謎面は『孟子・離婁上』、謎底は『孟子・万章下』より。

⁹⁰ 『孟子・滕文公上』より。

⁹¹ 謎面は『国語・斉語』、謎底は『孟子・梁惠王下』より。

評：この謎は生まれつきのように決まっているな。この題にはこの答しかないだろう。
此謎可謂天生地造、再無他句可以移易了。

②鴉 『孟子』二句 爵位の身分が一つ、年齢が一つ〔爵一、齒一〕⁹²

評：たぶん拆字格だね。とても簡潔にできている〔大約是拆字格。此謎做的簡淨〕。

③重慶 『孟子』一句 父と子の間には親愛の情がある〔父子有親〕⁹³

評：「親」という字の借用が面白い〔這個「親」字借的有趣〕。

④その水はすぐに枯れてしまう〔其涸也可立而待也〕⁹⁴ 薬名 雨水〔無根水〕

評：「無根」の二文字でないと「立待其涸」は当てはまらない。適切かつ自然である〔非「無根」二字不能「立待其涸」、真是又切當、又自如〕。

⑤まばらな影が横たわり、水は清くて浅い〔疏影横斜水清浅〕⁹⁵ 曲牌名 梅花塘

評：この七文字もまた、まるで梅花塘を描き写しているようで、題のままに發揮されて一文字も余っていないし、一文字も不足していない。

這七個字又是梅花塘一個小照、真是如題發揮、一字不多、一字不少。

⑥父母に事える場合、父母に過ちがあれば優しく諫める〔事父母幾諫〕⁹⁶ 鳥名 子規

評：「事父母」の三文字は「子」の字とぴったり合っていて、「幾諫（優しく諫める）」は「規」に当てはまっていて、適切かつ自然にできている。鳥名謎の中を独歩できる佳作だ。「事父母」三字把個「子」字扣定、「幾諫」二字把「規」字扣定、真是又貼切、又自然、可以算得鳥名謎中獨步。

⑦地を這うような風が吹く〔刮地風〕（曲牌名） 物名 払塵

評：この謎のうまいところは、「地」の字が「塵」とぴったり合っているところだ。もし「地」の字がなければ、物だったら大体払えるから、払塵だけを指す謎にはならなかった。此謎之妙、全虧「地」字把個「塵」字扣的緊緊的、若無「地」字、凡物皆可払、豈能獨指払塵。

⑧兵を撤退させる合図として銅鑼を鳴らすこと〔鳴金〕 『孟子』三字 戦を止めさせる〔使畢戰〕⁹⁷

評：「畢」の字の借用がうまいだけでなく、「使」の字もいい味が出ている〔此謎不但「畢」字借的切當、就是「使」字也有神情〕。

⁹² 『孟子・公孫丑下』より。明清時代の文官の官服において、四角い鳥の刺繍があり、鳥の種類で官爵を象徴する。そのため、牙=齒、鳥=爵と連想する。

⁹³ 『孟子・滕文公上』より。謎の中では「親」を「結婚」と理解し、「父と子が同時に結婚する」ということで「慶祝が重なる」、「重慶」と解く。

⁹⁴ 『孟子・離婁下』より。

⁹⁵ 林逋「山園小梅」より。

⁹⁶ 『論語・里仁』より。

⁹⁷ 『孟子・滕文公上』より。

上記の引用が示しているように、『鏡花縁』の第八十、八十一回で繰り返されている燈謎談義は、それ以前の章回小説及び『鏡花縁』前半で見られる燈謎に関する描写に比べて、最も大きな変化はすなわち、謎を当てる側の人物または読者側からではなく、謎を創作する側の視点に立って論評するようになったことである。具体的に見てみると、例えば、上記の①番、③番、⑤番などは、燈謎の一般的な創作方法より本作が優れているところや創新した点を評価しており、②番と⑧番は謎の題・答となる文章の品格や学問的内容の面から評価している。⑪番、⑭番、⑲番は、謎の文学性を中心に鑑賞を行っている。⑯番や⑳番、㉑番などは、題と答の組み合わせがいかに自然かつ巧妙であるかという点から論じている。また、㉒番は燈謎から見出せる儒家的な思想について説いている。

さらに、上記以外にも、李汝珍は燈謎の優劣に関して、登場人物の口を借りて、以下のような議論を小説の中に入れていく。

それぞれ長所があると言うのはいいのだが、区別がないというのは間違っている。一つは「正面」⁹⁸、もう一つは「借用」⁹⁹、両者は全く異なっている。前者は例えば、前に姉妹たちがここで集まった時、玉芝さんが出した「紅旗報捷」という謎、宝雲姐さんが「克告於君」と解いたよね。これは「直把官場作戲場」の謎が「仕而優」と解くのとと同じ類型である。後者は例えば、人名を借りて虚字として使う、または虚字を借りて人名として使う、どれも巧妙な文人心を尽くすもの。凡そ謎は借用を第一の方法にすべきであり、正面はそれに次ぐ。しかしその「借用」にも二等に分けられる。例えば、「国土無双」という謎を「何謂信」と解く¹⁰⁰、「秦王除逐客令」という謎を「信斯言也」と解くものがある。二例とも借用法を使用しているが、題の文字から直接連想するのではなく、題に隠された文脈から発想しなければならないから、題の文字を直接に借用する謎に比べると、大きく劣る。近年、典故を並べるような謎もあって、作者は類書を片手に調べて作っただろうが、そのような謎は大体、貼る糊も乾かないうちに一掃され、あっという間に当てられてしまうのだ。それはもはや三流だ。

若講各有好处倒還使得、若說並無區別這就錯了：一是正面、一是借用、迥然不同。前者妹子在此閑談、聞得玉芝妹妹出個「紅旗報捷」、被寶雲姊姊打個「克告於君」；這謎却與「仕而優」是一類的：一是拿著人借做虛字用、一是拿著虛字又借做人用、都是極盡文心之巧。凡謎當以借用為第一、正面次之。但借用亦有兩等借法、即如「國土無雙」、有打「何謂信」的；「秦王除逐客令」、打「信斯言也」的；此籌雖亦借用、但重題旨、與重題面迥隔霄壤、是又次之。近日還有一種數典的、終日拿著類書查出許多、誰知貼出面糊未乾、早已風捲殘雲、頃刻罄淨：這就是三等貨了。¹⁰¹

⁹⁸ 題の意味を読み解き、別の言葉で当て嵌める方法、「会意法」とも呼ぶ。

⁹⁹ 文字の意味を故意に誤読する方法、いわゆる「別解法」。

¹⁰⁰ 『史記』李斯列伝によると、秦の皇帝嬴政が国内の客卿（他国から来て大臣の位にある者）に追放令を出した後、李斯が政に手紙を出して追放令の撤回を求めた。それが「秦王乃除逐客之令」であり、それで李斯は再び信任され、官位を取り戻したという。司馬遷撰『史記』、北京：中華書局、1959年9月、2546頁。嬴政が李「斯」の「言」を「信」じたという典故から『孟子』万章編にある「信斯言也（この言葉が真実ならば）」という文に結びつき、一個の謎となる。史次耘註訳『孟子今註今訳』、台北：台湾商務印書館、1973年3月、247頁。

¹⁰¹ 李汝珍『鏡花縁』、上海：亜東図書館、1923年5月、第八十回3頁。

凡そ謎を作るには、適切に書くべし。ぴったり当てはまるが故に解きやすい。清き池に映る月影のように、遥かに映り合い、誰でもそれがはっきりと見える。当てやすいからと言って良い謎ではないと、あの「凌霄花」の謎を見てもそう思うか。当てやすくて絶妙ではないか。古来の「黄絹幼婦外孫齋白」などは今でも美談として伝わっているのは、解き方がはっきりとしているからだ（中略）難しすぎる謎は大体、意味が外れているか、言葉が晦渋すぎるからだ。それはまるでこの場で誰かが足の指を動かしているようなことで、足の指を動かしている本人以外、誰もそんなことを知る術がない。だから、意味が明確でない、適切でない燈謎のことは「足指動」と称したほうが最も趣がある。

大凡做謎、自応貼切為主；因其貼切、所以易打；就如清潭月影、遙々相映、誰人不見？若說易猜不為好謎、難道那「凌霄花」還不是絕妙的？又何嘗見其難打？古來如「黃絹幼婦、外甥齋白」、至今伝為美談、也不過取其頭豁（中略）那難猜的、不是失之浮泛、就是過於晦暗。即如此刻有人脚趾暗動、此惟自己明白、別人何得而知？所以燈謎不顯豁、不貼切的、謂之「脚趾動」最妙。¹⁰²

これらの議論は個別な作品から一步離れ、燈謎の創作全体において、普遍性のある主張となっている。以上のような燈謎の創作方法や作品の優劣についての議論が行われている部分は、後に「謎話」の雛形と考えられる。実際、1907年に書かれた謎話『紙醉廬春燈百話』は、『鏡花縁』のこの箇所を真似て書かれたと言われている。謎の優劣とその難易度は比例しない、燈謎は難しければ難しいほど優れたものというわけではない、という『鏡花縁』のこの指摘は、『紙醉廬春燈百話』をはじめ、後に書かれた多くの謎話に承認され、継承されていると見られる。つまり、（『鏡花縁』の中の燈謎には）平易なものが多く、精妙なものが少ないという銭南揚による評価は、この主張に沿った実践にすぎない。燈謎の発展段階を如実に反映していた、または反映されていたという事実関係はない。ただ、李汝珍が燈謎創作者の視点から出発した論点は小説の主線自体と関わりがなく、明らかにそれ以前の章回小説から見られる燈謎の扱い方と大きく異なっているため、『鏡花縁』を転換点と捉えることができるのではないか。

前述したように、『鏡花縁』の時代設定は唐代初期となっているが、唐代初期以降に発生した典故や史実も中に織り混ぜており、燈謎の題・答となる文章は中唐から清までのものを幅広く採用している。何満子によると、これは李汝珍の注意が足りなかったわけでもなく、また今日の作家のように「荒誕小説」を狙って故意にそう書いたわけでもない。物語の時代設定と作中に使われている文章典故の時代が合わないのは、李汝珍の思う「小説」概念に理由がある¹⁰³。つまり、李汝珍は考証学者として、中国の伝統的な図書分類に従い、経史子集に属さない短文残片を「小説」として理解し、章回小説を創作しつつ、士大夫文人が筆記小説を書く時に取る方法で、自身が経験した様々な技芸、博覧強記したものを作品の中に放り込んだのである。このことは『鏡花縁』第百回の末尾にある、下記の作者の自叙からはっきりと伺える。

¹⁰² 同上第八十回 6-7 頁。

¹⁰³ 何満子「古代小説退潮期的別格—『雜家小説』—『鏡花縁』膚説」『社会科学戦線』1987年1期、長春：吉林人民出版社、1987年1月、271頁。

四庫の奇書を読んで、半生の清福を享受した。心に余裕があり、筆の赴くままに趣と成る。長い夏や冬の終わり、灯の前や月の下で文を以て遊戯とする。一年また一年と、ついにこの『鏡花縁』百回を編撰したが、いまだ半分しか完成していない。その友人は鬱病を患っていたが、この小説を読むと口を大きくあけて笑ったり、嘔飯したりして、長年の病がすぐさまに治ってしまった。そして、「あなたは懶な人で、筆も遅い。原稿を全部書き終わろうとするといつになるか分からない。いっそこの百回分をさきに出版して、後々続編に取り組むのはどうだ。四海の読者も先に半分が読めて喜ぶだろう」と友人は言った。ああ！小説家の言葉は重要でない。十数年の心血を注いだが、大千世界の中の微小な文章にも数えられないだろう。もともと、書いた時は文才が溢れ出て自ら面白いと思っていたし、他人が読んでみてもきっとそれが通じると思う。これもまた何かの縁だ。まさに、よく磨いた鏡に真の才子が映り、旧来の稗官小説を一新した、と。

読了些四庫奇書、享了些半生清福。心有余閑、涉筆成趣。每于長夏余冬、灯前月夕、以文為戲。年復一年、編出這『鏡花縁』一百回、而僅得其事之半。其友方抱幽憂之疾、読之而解頤、而嘔飯、宿疾頓愈；因說道、「子之性既懶而筆又遲、欲脱全稿、不卜何時。何不以此一百回先付梨棗、再撰続編、使四海知音以先睹其半為快耶？」嗟乎！小説家言、何閑輕重？消磨了十數多年層々心血、算不得大千世界小小文章。自家做來做去、原覺得口吻生花；他人看了又看、也必定拈花微笑。是亦縁也。正是：鏡光能照真才子、花樣全翻旧稗官。¹⁰⁴

この自叙からは、当時章回小説を執筆する文人の社会的地位や自ら小説家という稼業に対する態度などが示されている。生活に困らない文人が自らの学識を生かした文学遊戯を「大千世界の中の微小な文章」と言いつつも、「旧来の稗官小説を一新した」という自負を抱えているように読み取れる。「稗官小説」と明言しているのは、要するに、文言筆記小説を基準に描かれたものであるから、それを超越して、作品像を一新するためには、「旧来の稗官小説」を十分に理解しなければならない。当然、それまでの章回小説と同じように、一般の識字民衆向けではなく、「才学小説」である以上、同等レベルの学識及び近い嗜みを有する読み手が必要であった。彼が自叙で書いたように、李汝珍にとって書き手と読み手は、この小説という「鏡」の外と内で向い合って立つ実体と鏡像のような関係にあった。

李汝珍の詳しい履歴は分からないが、研究者によって掘り起こされた僅かな情報によると、彼は經学家・音韻学家の凌廷堪に師事し、『李氏音鑑』を著し、考証学・音韻学以外にも、囲碁や漢方医学などに優れた才能を持っていた。しかし、彼は科挙試験を受けた経験があるようだが、最終的に功名に辿り着くことができず、生涯の大半は兄の李汝璜の幕客として召しかかえられていた。自叙に書いているとおり、「半生の清福を享受した」のである。また、自叙に登場している友人は具体的に誰のことを指しているかは分からないが、彼の交友関係において、特に注目して欲しいのは許桂林という人物である。李汝珍は許桂林の同族である許氏を妻として迎えたため、許桂林の義兄に当たる。李汝珍と許桂林の二人の人物像を比較してみると、いくつかの共通点を見出すことができる。例えば、二人とも実兄が官職を持っていた士大夫でありながら、自身は長年その兄弟の師爺（幕客）として寄食していた。生涯科挙に成功したことのなかった李汝珍と違い、徐子方の「李汝珍年譜」によると、許桂林は嘉慶二十一年（1816）に郷試に合格し、

104 李汝珍『鏡花縁』、上海：亜東図書館、1923年5月、第一百回8-9頁。

36歳でついに挙人となった。しかし、その6年後に病没した¹⁰⁵。また、許桂林も音韻学の造詣が深く、『李氏音鑑』の序文を執筆し、自らも『許氏説音』など音韻学の書を著したことがある。ここで考察したいのは、主に『鏡花縁』の後半に見られる燈謎にまつわる描写と許桂林の文言小説集『七嬉』との関係である。

『七嬉』には、道光十七年(1837)三味堂刊本などの版本が見られるが、許桂林の生卒年を考えると、『鏡花縁』とほぼ同時期に書かれたことが分かる。『七嬉』は上下二巻に分け、全七篇からなり、題名が示しているように、「文を以て嬉(遊戯)とする」ものであり、つまり、文字遊戯が主な内容となっている。七篇のうち、第二篇の「氷天謎虎」は、燈謎を掲載していて、その解答は第七篇の「幻影山得氷天謎虎全本」に載せている。『七嬉』にあるこの二篇の最大な特徴は、従来の謎集や燈謎を掲載する章回小説などと違い、燈謎が小説の物語を豊富させるためのものとしてではなく、むしろ物語そのものが燈謎を紹介するために書かれているという点である。これはある程度、『鏡花縁』の第八十・八十一回に類似しているとも言えるが、ただ、『鏡』よりも徹底的に重点を燈謎に置いてあると見られる。二篇の物語は、呉明試(「無名氏」とかかっている)という伊犁將軍の記室(長官のもとで文書記録を司る官職)となる人物が、冰山に位置する「氷天謎場」と海の中にある「幻影山」という架空の二ヶ所を見聞するものである。「氷天謎場」に出されている燈謎は計128題、その内訳は、「四書謎」が40題、「五經謎」40題、「西廂記謎」32題、そのほか、「曲牌」「地名」「人名」「物」を当てる謎が各4題となっている。そのうち、『鏡花縁』の第八十・八十一回に見られる燈謎と重複したものは16題となる。さらに、同様の燈謎を使用しているだけでなく、燈謎創作の趣向に関する観点も李汝珍とほぼ一致しており、「会意法」を最も雅な創作技法として推重している¹⁰⁶。ただ、その一点を除いて、人物の会話などを通して燈謎を評価・議論するシーンは見られない。そして、「氷天謎虎」編の末尾に、下記のように、松石道人(李汝珍の号)の評が付けられている。

松石道人曰く、氷天主人とは旧知であり、自らも燈虎¹⁰⁷を其の窓に貼ったことがある。余はほかの燈虎も多く持っている。世の中に、もし呉君と同じ嗜好を持つ者がいれば、「鏡花縁」内で教えを請いたい。「知音」とも逢えるし、きっとこの氷天謎場で、「寒いでガタガタ震える」より快適だろう。

松石道人曰、予与氷天主人有旧、亦曾以燈虎粘其窓。予尚別有謎虎甚多。世有与呉君同癖者、当于鏡花縁内請教。「知音」喜遇、却比氷天謎場上、免「凍得戰兢々」¹⁰⁸耳。¹⁰⁹

おそらく、「氷天主人」というのは作者の許桂林自身を指しているのであろう。この評からすると、李汝珍は許桂林と同じく燈謎を愛好していたため、交流が多かった。ここでは、許桂林の作品を評しているのではなく、『七嬉』の読者に向けて呼びかけているように思われる。同じ嗜

¹⁰⁵ 徐子方「李汝珍年譜」『文献』2000年第1期、北京：国家図書館、2000年1月、162-171頁。

¹⁰⁶ 棲雲野客「七嬉・氷天謎虎」、高伯瑜等編『中華謎書集成』(第一冊)、北京：人民日報出版社、1991年5月、461頁。

¹⁰⁷ 燈虎、謎虎、文虎はともに燈謎の別称である。虎を射るのが難しいことから、当てにくい謎の比喩に転じた。

¹⁰⁸ ここの「知音」と「凍得他戰兢々」は、作中に出されている「氷天聴琴(『西廂記』二句八文字)」という燈謎の答えとなる「凍得他戰兢々、知音」を引用している。棲雲野客「七嬉・氷天謎虎」、高伯瑜等編『中華謎書集成』(第一冊)、北京：人民日報出版社、1991年5月、466頁。

¹⁰⁹ 同上、467頁。

好を持つ者への呼びかけとして、『鏡花縁』の後半で読み取れる趣向と非常に似ている。『鏡花縁』の後半部に描かれている才女らの論学談義に関しては、一見『ヘテログロシア』¹¹⁰だが実際は『モノログ』である¹¹¹と指摘する研究者もいるが、果たして「モノログ」という理解は適切だろうか。許桂林の『七嬉』と燈謎が重複していることや燈謎創作をめぐる主張が一致しているなどの事実から見れば、才女同士の会話として書かれている燈謎講評は、作者一人の「モノログ」というより、周囲の同好者との交流を再現したものだと考えられる。ただ、その同好者の輪はおそらく、相当狭かったのではなかろうか。それは「氷天謎虎」に使われている「氷天」や「凍る」などの表現から明らかに感じられるものである。したがって、『紅樓夢』の「雅俗共賞」から李汝珍と許桂林が持っていた「知音喜遇」への変化はすなわち、学のない一般民衆にも楽しんでもらえる燈謎から、作者と同等レベルの教養を持つ読書人および燈謎愛好者同士向けの燈謎への変化である。そういった意味で、「ヘテログロシア」でもなく、「モノログ」でもない、その中間となるような「場」が小説の中で形成されていったと言えよう。

4. 才子佳人、^{きょうしや}狎邪小説¹¹²

「雅謎」の爛熟期とも言える 19 世紀中葉になると、章回小説の作品数が急増した。しかし、その中には続書や模倣作、翻案などが多数を占めるようになり、題材の選択も徐々に狭まってきたと見られる。才子佳人小説の恋愛物語の舞台はやがて妓楼に移り、多くの狎邪小説が生まれた。謎話などから、燈謎の精緻化と小説の文学性の低落の間にアンバランスが生じ、燈謎は小説の文学的表現に加勢するものではなく、それ自体の存在感が高まり、小説を読んだことをきっかけにより多くの人が燈謎の技巧を追求するようになった、というような変化が窺える。燈謎が章回小説から離脱する大きな理由はそこにあると考えられる。

道光二十九年（1849）に初刊された陳森の『品花宝鑑』は、錢南揚が評価したように、章回小説において、最も優秀な燈謎が書かれている作品と言われている。作者の陳森は、江蘇省常州に生まれ、道光初年に北京へ移り、某刑部官吏の幕客を務めつつ、『品花宝鑑』の最初の十五巻を書いた。その後、八年間広西省に遊幕¹¹³し、広西から北京へ帰る途中で続きの十五巻を書き、その間、数度の科挙試験に挑んだが、四十歳を過ぎるまで科挙に成功することなく、やがて仕途に就く希望を捨てたという。彼の書を愛読する某官吏の催促を受け、その後、さらに三十巻を書き足し、最終的に六十巻本として出版されるようになった¹¹⁴。『品花宝鑑』のほか、彼の作品として知られているのは、道光四年（1824）に出版した『梅花夢』という戯曲のみである。僅かの資料を通して見えてきた陳森の人物像は、長年科挙受験を続け、孤独な遊幕生活を送っていた知識人、といったところである。彼の交遊関係および『品花宝鑑』を完成するまでの経緯から、この小説を最初に受け入れた読者は上層の文人仕官であると指摘されている¹¹⁵。

110 多様な言葉の同時的な存在を表す「ラズノレーチエ」というミハイル・バフチンが言語論に用いる術語、日本語ではしばしば「言語的多様性」と訳されるが、英訳は heteroglossia、中国語訳は「衆声喧嘩」である。つまり、小説のような、作者がひとりで書いた言葉の中には、他者の言葉が入り込んでおり、そこに対話的交流が存在する、という状況を表す。

111 劉富偉・郭豫適「文人小説と平民小説的分野と兼容——論清代嘉道時期章回小説的創作格局」『學術月刊』第 38 卷 2 月号、上海：上海市社会科学界聯合会、2006 年 2 月、116 頁。

112 妓女との交際を描写する小説。

113 地方官の任処に滞在し、學術事業に従事すること。

114 陳森『品花宝鑑』、古本小説集成（道光 29 年〔1849〕初刊、上海古籍出版社蔵後刊本影印）、上海：上海古籍出版社、1992 年、前言 1 頁。

115 胡瑜「陳森交遊事跡考述」『常州大学学报（社会科学版）』第 13 卷第 4 期、常州：常州大学、2012 年 10

乾隆嘉慶朝以降、北京の士大夫階層において盛んだった「狎優」¹¹⁶という風潮が『品花宝鑑』のストーリーの背景として知られている。士大夫と若い京劇役者との間で生まれる「才子佳人」を彷彿させた同性愛を中心に、政界の腐敗や科挙にまつわる不正行為などへの批判も織り交ぜつつ、物語が展開されている。本来娼妓の代替品として士大夫に売春する京劇俳優を相手に、一部の名士文人は体の関係を強要せず、相手を「花」と見立てて、その容貌と芸を楽しむ、というプラトニックな付き合いは「狎優」でなく、「友優（俳優を友人として接すること）」と呼ばれていた。そして、陳森はそのような「雅」な関係性である「友優」を「正途」として賞賛し、一方、官能的な欲求を満たすためだけの、俗っぽい「狎優」を「邪道」とし、対照的な書き方をした。したがって、作中では、「正途」とされる士大夫と俳優の付き合いは、文人同士と同じように、詩作や話術、酒令など、才知と教養を要求する雅趣のある遊びを通して行われている。燈謎もまたその中の一つとして、「文人遊戯」の特徴を強調するためか、『紅樓夢』の「雅俗共賞」と『鏡花縁』の「平易」から一歩進んで、より精緻化したものが書かれているのであった。ただ、燈謎を楽しむ場面が描かれているものの、人物が燈謎に対して評価するシーンはほとんどない。以下の10題¹¹⁷は第九回に出されている燈謎である。

①つがいの燕が煩惱もなく並び住み、廬家の鼈甲で飾ったうつばりを覚えている

〔双棲穩宿無煩惱、認得廬家玳瑁梁〕

『礼記』一句

彼らは安楽しており、乱れることがないだろうと分かる

〔知其能安燕而不乱也〕¹¹⁸

②幾多の山や川で隔たっている、手紙は届くだろう

〔任他万水千山遠、雁帛魚書總得來〕

『易経』一句

険しい状況にありながら誠実さを失わない〔行險而不失其信〕¹¹⁹

③花が落ちて一人が佇み、二羽の燕が微雨の中を飛ぶ

〔落花人独立、微雨燕双飛〕¹²⁰

字一

倆

④雨露が降る荒村では早めに寝るべし、風霜が多い野外の宿では遅めに起きるべし

〔荒村雨露眠宜早、野店風霜起要遲〕¹²¹

月、62-66頁。胡瑜「再談陳森生平著作的若干問題」『明清小説研究』2012年第2期、南京：明清小説研究編輯部、2012年、193頁。

¹¹⁶ 明清時代において、士大夫階層は娼妓との交際が禁止されていたため、その代わりに、梨園の若い役者の売春を受ける風潮が盛んになった。

¹¹⁷ 陳森『品花宝鑑』、上海：上海古籍出版社、1992年、355-377頁。

¹¹⁸ 『礼記・郷飲酒義第四十五』より。

¹¹⁹ 『易経・彖伝』より。

¹²⁰ 翁宏「春残」より。

¹²¹ 『西廂記』より。

古人名
息夫躬¹²²

⑤鳥の背越しに見る夕日は明るい〔鴉背夕陽明〕

『礼記』一句

日は翼宿の方向にある〔日在翼〕¹²³

⑥

あの娘のことを昼も夜も思い出して 記得児家朝復暮
秦淮河の歌何曲か彼女は口ずさんだ 秦淮幾折繞香津
雨は花を打つから降らないでほしい 雨糸莫遣催花片
彼女の姿が暗くなるから月影を嫌う 月影偏嫌暗風塵
夜は長すぎて漏刻の音も既に絶えた 長夜迢遙聞斷漏
気晴らししようとしても心身が弱る 中年陶写漫勞神
鳥が対になって皆穏やかに飛んだら 鴉兒卅六双飛穩
遠方からの客を遊郭から見送るべし 応向章台送遠人
古樂府八題

子夜、金陵曲、休洗紅、夜黃、五更鐘、莫愁樂、鳥生八九子、折楊柳

⑦辰巳の年に生まれる〔降生辰巳之年〕

『詩経』一句

毛に属さず〔不屬於毛〕¹²⁴

⑧一文字も書かずにありっただけの風流を得る〔不著一字尽得風流〕

唐詩一句

李白の詩は無敵である〔白也詩無敵〕¹²⁵

⑨春風の中で聞く一曲は相当の金品を費やさなければならない〔春風一曲費纏頭〕

戲名一

秋を楽しむ〔賞秋〕

⑩馬よ早く追いつけ〔馬兒快快隨〕

戲名一

馬車を駆り立てる〔趕車〕

122 『漢書』に名が記されている前漢の官吏である。ここでは、題の詩から「きちんと休みを取り、みずから体を大事にして」という意味を読み取り、「息」を「休息」の意とし、「躬」を「自ら」、「夫」は感嘆詞とする。

123 『礼記・月令』より。

124 『詩経・小雅・小弁』より。辰巳の年とは、龍と蛇の年であり、十二支の中において、これだけが毛のない動物である。

125 謎面は司空圖『詩品』より、謎底は杜甫「春日憶李白」より。

謎面の言葉がかなり文学的であり、そのうち7題は引用した語句ではなく、創作した詩句で作られている。とりわけ、「落花人独立、微雨燕双飛」という謎は、後世の謎人にも公認されるほどの名作であり、作中では直接な講評が書かれていないが、この一題に充てがわれる賞品が最も高価なものという描写があるため、作者自身もこの謎に対しては高い評価を下しているのが明らかである。この謎が名作と評されたことは、漢字の絵画的な構造性が注目されたことを意味するように思われる。そのほか、注目に値するのは上記6番の「古楽府¹²⁶八題」という謎であるが、七文字八句となる謎面の詩は、句ごとに古楽府の題目を一個に対応しているのである。論者はこの形式を「集錦式」と呼んでいる。「集錦式」は謎面の長さから見れば、宋明時代の詩詞謎、つまり「古体謎」と一致しているかのように見えるが、詩詞謎の多くは、一首の詩、または詞を謎面として用いて、最後に一個の答えに導くものであるため、句ごとに異なる答えが求められるものではない。要するに、「集錦式」は清代以降になって生まれた詩詞謎の新しい形式である。『品花宝鑑』は、「集錦式」の詩詞謎という形式をさらに発展させ、以下のような「長文集錦式」の燈謎文を創り出している。

薬名

去年のことを少し思えば、金閨でゆっくり会って、笑いながら彦星を指差して見ましたね。漆を塗った馬車で迎えに来てくれて、才能の低い私が、薫香した衣を着た雅な一行に加わることができました。先の道のりが長く遠く、官吏を目指す貴方を送り出すことに後悔しています。痩せこけた姿でただ独り住んでいても、なお生きようと思っています。貴方の心をいま占めているのは誰なのかを聞きたいのですが、手紙が頻繁すぎて嫌がられるのではないかと怖いです。貴方はまだ若く、恐らく私は先に死んでしまうでしょう。ただ礼を申して自制して、残った歳月で帰りを待つしかありません。指を折って数えて、もうすぐ帰るかと思えば、この心に感じる苦しさは全て消えてしまいます。この手紙が貴方に届いたら、すぐに返信していただきたいです。五月望日、玉瞻より。

小憶去年（細辛）、金閨¹²⁷款聚（蘇合）、黃姑¹²⁸笑指（牽牛）。油壁香¹²⁹迎（車前）、猥以量斗¹³⁰之才（百合）、得逐薰衣之隊（香附）。前程万里、悔覓封侯¹³¹（遠志）。瘦影孤棲、猶思續命（独活）。問草心誰而主（王孫）、怕花信之頻催（防風）。雖傳粉郎君、青糸未老（何首烏）。而侍香小史、玉骨先寒（腐婢）。惟有申礼自持¹³²（防己）、殘年独守（忍冬）。屈指瓜氣之將及（当帰）、此心荼苦之全消（甘遂）。書到君前（白及）、即希裁答（旋覆）。五月望日（半夏）、玉瞻肅枉（白斂）。

花名

手紙から香りが伝わってきて、色彩が流れているような感じがしました。この過ぎた一年間、

126 楽府とは、前漢時代に採集された民間歌謡に基づいて発展した漢詩の一形式である。漢魏時代の古曲に基づくものが古楽府と呼ばれている。

127 蘇州地名。

128 彦星の別名。

129 晏殊の「無題」に「油壁香車不再逢」との句があるため、「油壁香」を「車」と連想する。

130 尺貫法における体積単位。一斗=十升=百合、とのこと。

131 王昌齡『閨怨』「悔教夫婿覓封侯」

132 曹植『洛神賦』

私も内心が非常に苦しかったです。前回夜会したことを思い出せば、離れたことを嘆き恨みます。美しい君が投壺する時に唇をやや開いている姿や、小さな足が地に沿って優雅に歩く姿などが脳裏に焼き付いています。長安に来て以来、財布の中に恥ずかしいほどお金がありません。まるで洛水に帰るのが遅くてもう女神に会えないような気持ちです。君はきっとまだ美しいままでしょうが、僕はもう白髪になって習慣も忘れたくらい老いたでしょう。花は九十日経てばいくばく落ちるが、僕と君は大千世界に同じ茎にある花のように、三世に亘って咲き続けましょう。北斗星の柄が寅卯の間を指すこの頃、お金を数えていつ会えるのかを推し量ります。手紙を出しますが、出発はもう少しかかりそうです。二月十六日寅刻、署名は別のところで。

尺縑¹³³伝馥（素馨）、芳東流丹（刺紅）。腸宛轉以如回（百結）、歲循環而既改（四季）。憶前宵之歡會（夜合）、悵祖道之分飛（將離）。玉女投壺¹³⁴、微開香輔（含笑）。金蓮貼地、小歩軟塵（紅躑躅）。一自遠索長安、空憐羞澁（米囊）。遲回洛浦、乍合神光（水仙）。在卿則胭脂粉奩、華容自好（扶麗）。在我已雪糸霜鬢、結習都忘（老少年）。過九十之春光、落英幾點（百日紅）。祝大千之法界、並蒂三生（西番蓮）。計玉杓值寅卯之間（指甲）。庶鈿盒卜星辰之會（牽牛）。裁成霜素（剪秋羅）、欲發偏遲（徘徊）。二月十六日（長春）、寅刻名另肅（虎刺）。¹³⁵

この二通の燈謎文は、一句または二句ごとに一個の答えが要求されている。そのうち、一通は答えが全て薬名となっているが、もう一通はすべて花名となっている。そして、最も称賛されているのは、二通の燈謎文が往復の恋文として書かれているところである。全体的に優美な言葉で綴られている駢儷文であり、文章自体の文学性を損なわないように注意する上で、句ごとに燈謎としても成立できるように書かれている。これが相当高度な技巧を要することは言うまでもない。「古体」の詩詞謎と比べると、形式の精緻化が一目瞭然である。明末日用類書を通して看取できるように、宋明時代に流行していた詩詞謎には、詩詞自体の文意を完成させるために、謎として解く際に不必要な「虚字」¹³⁶を文章の中に入れざるを得ないという弱点がある。しかし、別の角度から見れば、そこは精緻化する余地が多いに残っている部分でもあった。「今体」はまさに燈謎作者がその弱点を克服するために、「虚字」をできるだけ削った結果である。ただ、短句形式の謎面が定着するようになるにつれ、謎面自体の文学性を顕すことが難しくなり、文学性の低い、或いは文学性のない単純な文字遊戯になってしまう例がある。その流れの中で、「古体」と「今体」の長所を融合させた新しい形式として、「集錦式」と「長文集錦式」が生まれた。ただ、創作するのが非常に困難なため、この形式は一般的に広まらなかった。

魏秀仁の『花月痕』は、魯迅の『中国小説史略』において、『品花宝鑑』と同じく「狎邪小説」と分類されている。最も早い刻本は 1888 年のものがあり、文学性に関する評価は『品花宝鑑』より高いが、『品花宝鑑』を模倣する痕跡が多く見出せる¹³⁷。燈謎を使用するシーンもまさに模

133 絹地、手紙のことを指す。

134 壺に向かって木の棒を投げ入れる宴会余興用のゲーム。

135 括弧内は答えである。二通の長文燈謎は、陳森『品花宝鑑』、上海：上海古籍出版社、1992 年、382-384 頁。

136 ここの「虚字」は漢文文法における虚字ではなく、謎の解説と関係のない文字のことを指す。

137 遲崇起「試論『花月痕』對『品花宝鑑』的模倣和抄襲」『河北師院學報（社会科学版）』1997 年第 4 期、石家莊：河北師範學院學報編輯部、1997 年 10 月、53-60 頁。

倣の一例である。例えば、第三十二回に燈謎を楽しむ場面では、『品花宝鑑』と似たような恋文の形をした長文集錦式燈謎が書かれている。

君が雁門に赴いたのは、まさに河も山も凍りついていた時でした。酒盃を前に分かれの涙を流していました。夜中に現を抜かした魂となって君に付いていきたいと思いました。魂の代わりに手紙を出し、離れた距離に感傷しました。帰りが待ち遠しいです。思うままに行動できないことを嘆き恨みます。昨日正月一日にやっと一通の消息を得まして、美しい春景色を年とともに喜んで迎えます。豆蔻の香りとともに手紙が来て、梅の微香と合わせて読みました。私は少し年を取ったが、髪はまだ黒いです。求愛の曲を奏でます。春半ば二月の上旬に謹んで良い日を選んで、馬車で迎えに行きます。必ず前の約束通りにします。この返書を読めば、君もきっと涙を拭って笑顔になるでしょう。

憶自卿赴雁門（唐人詩題一）¹³⁸、時正河冰山凍（菓名一）¹³⁹。兩行別淚盡在尊前（花名一）。半夜痴魂願隨君去（詩經一句）。比代飛之燕雁（書名一）¹⁴⁰、感分逝之輪蹄（西廂二句）¹⁴¹。竟使目斷長途（四書一句）¹⁴²、深恨行止不能自主（花名一）。昨于新正一日、始得一伝消息（花名一）。喜迓韶光、与年俱至（花名一）。芬含豆蔻偕錦字以同來（菓名一）。瘦比梅花与暗香而並詠（曲牌一）。僕貌慚傅粉、剩有青糸（菓名一）¹⁴³。曲譜求凰、好調綠綺（地名一）。定于仲春上浣、謹挾良辰（詩經一句）¹⁴⁴、油壁先迎（菓名一）¹⁴⁵、堅如前約（菓名一）¹⁴⁶。想此半幅殘箋（菓名一）、卿見之必破涕為笑也（美人名一）。¹⁴⁷

上記の燈謎を綴った恋文は、『品花宝鑑』のものに比べ、より流暢であるが、ただ、手紙はこの一通のみとなっており、作中の言葉とおり、「半幅殘箋」となっている。また、注釈部分（括弧内）に書かれているのは解答ではなく、謎目（答えの種類）であり、つまり、それぞれの句に対応する謎目は同じではない。そして、解答はすべてではなく、一部のみが作中人物の会話の中に書かれている。そのほか、詞の形式で書かれる集錦式燈謎も見られるが、『品花宝鑑』の「古樂府八題」を意識したものかと思われるものであり、それも謎目が不揃いになっている。『品花宝鑑』のように、文章自体の文意・文采と燈謎としての巧妙さを両立させることの難しさが窺える。

ほぼ同じ時期に刊行された兪達の『青樓夢』は、半自伝的な作品であり、作者自身とその友人の「狎妓」経験に基づいて書かれた狎邪小説である¹⁴⁸。題名から推測できるように、意識的に『紅樓夢』を模倣して書かれた作品である。燈謎が出てくるのは第七、九、四十五、四十九回であり、

138 答えは「北征」。

139 答えは「香附」。

140 答えは「春秋」。

141 答えは「車兒投東、馬兒向西」。

142 答えは「望道而未之見」。

143 答えは「何首烏」。

144 答えは「二月初吉」。

145 答えは「車前」。

146 答えは「信石」。

147 魏秀仁『花月痕』、古本小説集成（光緒14年〔1888〕福州吳玉田刊影印）、上海：上海古籍出版社1990年8月、782-783頁。

148 兪達『青樓夢』、古本小説集成（鄭州大学図書館蔵活字本影印）、上海：上海古籍出版社1994年、前言1頁。

『品花宝鑑』や『花月痕』などより回数が多い。ただ、上記の二作に比べ、燈謎作品に卑猥な言葉や意味合いが入っており、文雅な燈謎を推奨する清末民国期の謎人に言及されることはほとんどなかった。

5. 小説革命以降の章回小説

1902年に梁啓超が雑誌『新小説』を創刊し、「小説界革命」を呼び起こして、小説の地位向上を図り、小説を利用して政治的、社会的革命を促そうとした。梁啓超から執筆要望を受け、『新小説』で連載を始めた小説の一つとして、吳趸人の『二十年目睹之怪現狀』が広く知られている。この作品は1903年から1904年にかけて『新小説』において四十五回連載し、その後、1906年から1910年にかけて単行本が八冊発行された。燈謎をめぐる書かれている部分は、第六十六、六十七、七十四、七十五の計四回である。そのうち、第六十六、六十七回では、酒席での燈謎の競合を描写しており、燈謎はすべて人物の会話を通して出されている。この形式は『鏡花縁』を想起させるが、『鏡花縁』とやや異なるのは、登場人物のセリフを通して燈謎創作者側の視点から出発した説明・評価だけでなく、燈謎の一般的なルールや用語などに関する解説も加えている。第六十六、六十七回に見られる燈謎を下記のように整理した¹⁴⁹。

①一画、一豎、一画、一豎、一画、一豎；一豎、一画、一豎、一画、一豎、一画
字一
垂

②丿丨

四書一句

何一つ人に与えようとしない〔一介不以与人〕 或いは 是非の心〔是非之心〕¹⁵⁰

解説：「一介不以与人」が答だと、良く作られた謎とは言えない。「以」の字が余ったからだ。「一介不与人」だったら良いのに。作者が設定した正解ではないけど、「是非之心」のほうが良い答になっている〔這個做的本不甚好，多了一個「以」字。若這句書是「一介不与人」就好了。那猜錯的是「是非之心」，卻是比原做的好〕。

③光緒帝の命令により、天下の暴官汚吏を殺し尽くせ〔光緒皇帝有旨、殺尽天下暴官汚吏〕
四書一句

この時世に政治に関われるのは危険である〔今之從政者殆而〕¹⁵¹

解説：謎当てはこんなに文字通りに理解してはいけない。題文の側面から着想すべきである。その中に虚々実々、それぞれ神妙なところがある。本当に文字通りに解くものだったら、朱子の注で四書を解くしかないじゃないか〔猜謎不能這等老实，總要從旁面着想，其中虚々実々，各具神妙；若要刻舟求劍，只能用朱注去打四書的了〕。

149 吳趸人『足本二十年目睹之怪現狀』、上海：世界書局、1939年7月、280-284頁。

150 「一介不以与人」は『孟子・万章上』より、「是非之心」は『孟子・公孫丑上』より。

151 『論語・微子』より。

④情を含んで重ねて恋人に聞く〔含情迭問郎〕

四書一句、唐詩一句

夫子、どうしておられる〔夫子何為／夫子何為者〕¹⁵²

解説：これもまた巧妙だね。美人の艶やかな口調を生き活きと描いている〔這個又妙，活画出美人香口来〕。

⑤刺しても死なない〔戳弗殺〕

『西廂記』一句

銀のように見えるが実ははんだで作った槍先〔銀様蠟槍頭〕

解説：これは良くないって自分でも分かっている。ちょっと簡単すぎた〔我也知道這個不好，太顯了〕。

⑥（諸侯たちは）孟津に集結した〔大会於孟津〕

『孟子』二字

商業に対する課税〔征商〕¹⁵³

⑦曹丕が漢に代わって天下を有す〔曹丕代漢有天下〕

三国人名一

劉禪

⑧この時代の孔夫子〔今世孔夫子〕

古文篇名一

『後出師表』

解説：孔夫子は万世の師表で、一人しかいない。題は今世の孔夫子だから、つまり、また一人孔夫子が出てきたということ、だから「後で出てきた師表」じゃないか〔孔夫子只有一個，是万世師表。他出的是今世孔夫子，是又出了個孔夫子了，豈不是後出的師表麼〕。

⑨大勢を処決すること〔大勾決〕

『西廂記』一句

この筆で五千人を一掃する〔這筆尖兒橫掃五千人〕

⑩ネ

四書一句

見れども見えず〔視而不見〕¹⁵⁴

⑪柝形を山の形にし、柝に水藻の模様を描く〔山節藻柝〕（素腰格）¹⁵⁵

『三字経』一句

152 『論語・憲問』、李隆基「経鄒魯祭孔子而嘆之」より。意味は同じ。

153 謎面は『封神演義』より、謎底は『孟子・公孫丑下』より。

154 『大学』より。

155 『論語・公冶長』より。「素腰格」とは、答えの中の一文字を同音の文字に替えることによって、謎と

有婦（亀）藏

解説：素腰格はすなわち白字格。もし頭の文字が白字（当て字）だったら白頭格と呼ぶ。最後の一字が白字だったら粉底格、素腰格は要するに真ん中の一字が当て字なのさ〔素腰格就是白字格：若是頭一個字是白字，叫白頭格；末了一個是白字，叫粉底格；素腰格是白当中一個字〕。

⑫南京人（卷簾格）

『三字経』一句

漢業建（建業¹⁵⁶漢）

説明：つまり、答えの句を逆さまに読む。ほら、簾を巻く時って、下から巻くでしょ〔要把這句書倒念上去的。你看卷簾子，不是從下面卷上去的麼〕。

⑬善人も悪人も混じり合っているから、刑罰が使い尽くされる〔良莠雜居、教刑乃窮〕

『孟子』二句

たとい毎日鞭打って齊語を叩き込もうとしてもものにならない〔雖日撻而求其齊也、不可得矣〕¹⁵⁷

上記の引用が示しているように、ここで出されている燈謎は、簡単に解けるものから燈謎を精通する人以外到底解けそうにないような、「謎格（燈謎を解く際に指定される特定なルール）」を使った難しいものまで、難易度が徐々に上がっているように思われる。また、燈謎が登場するほかの章回小説に比べ、特徴的な点が二つある。一つは、使用する燈謎は良作に限定していないこと、もう一つは「謎格」に対して詳しい説明を施している点である。

そして、第七十四、七十五回では、人物が燈謎会に参加する時の所見をありのままに書いたかのように、燈謎をずらりと並べ、解答は人物の会話の中に織り交ぜるという形式をしている。そうすることによって、読者は燈謎会に参加する、あるいは謎集を読む疑似体験ができていないだろうか。このような書き方の変化から、作者が読者に燈謎というものを教えようとする意図が垣間見える。これは小説革命以前の章回小説には見られない特徴であり、主な変化として捉えることができる。要するに、『鏡花縁』や『品花宝鑑』など以前の章回小説において、燈謎は一部の文人が嗜好する「雅趣のある遊戯」として紹介され、限られた愛好者向けに書かれる色彩が強く、燈謎の優劣に関する評価などからも、作者層の教育背景によって、士大夫文化を正統とした伝統的な文学趣味が鮮明に現れている。しかし、科擧の道を放棄し、自ら新聞や雑誌を立ち上げ、文学という自由業に就いた呉趼人は、従来が「自娛」と揶揄してきた燈謎という遊びに近代的な価値を付与しようとした。大きく膨張した文人階層が持つ旧文化的な趣味に迎

しての連想過程を完成させること。この謎の場合は、謎面の「山節藻稅」が「子曰、臧文仲居蔡、山節藻稅、何如其知也」という句の一部であるため、「臧文仲」の典故を想起させる。この句を通訳すると、「魯の大夫臧文仲は、諸侯の真似をして占い用の亀甲を有していた」となる。そこから、「亀を有する」「亀藏（三易の一つと言われる中国古代の占い書）」と連想し、「有亀藏」と解いてから、さらに「亀」の字を同音の「婦」に入れ替え、最終的に『三字経』の「有婦藏」という答えに繋がる。

¹⁵⁶ 南京は三国時代に「建業」と称されていたため、南京人は「建業の漢」と置き換えて、その「建業漢」を逆さまに読むと、答えの「漢業建」となる。

¹⁵⁷ 『孟子・滕文公下』より。

合するために、娯楽要素として燈謎などの遊びを利用すると同時に、新世代の読者に興味を持たせるために解説を加えたのである。

1906年に雑誌『月々小説』に書いた序文で、彼は次のように述べている。「小説を読む者は、大体面白さを求める。新しい知識がその面白さに隠されているため、面白さとともに知らずのうちに人の心に浸透していく…(中略)…小説の面白さと感情を借りて、道徳の一助になればと願う〔読小説者、其專注在尋繹趣味、而新知識實即暗喻于趣味之中、故隨趣味而入之而不自覺也…(中略)…庶幾借小説之趣味之感情、為道徳之一助云爾〕」¹⁵⁸と。これは小説革命の核心でもある「改良」の思想を忠実に反映していると思うが、あくまで小説創作全体に対する主張であり、小説の中に入っている個々の娯楽要素に新しい知識を盛り込んでいく実践段階には達していなかった。燈謎の部分に関しては、むしろ、古い知識を新しい読者層に広める行為に当たるのではないだろうか。ただ、『二十年目睹之怪現狀』のような作品や『新小説』で連載されていた「小説叢話」などから小説革命思潮の刺激を受け、詩話や詞話に似せた「謎話」を書いて小説雑誌で連載し、燈謎に新しい知識を取り入れて、意識的に燈謎という文化そのものの改良に取り掛かったのは、清末民国期において主体性が向上した「謎人」たちであった。その経緯については、次章で考察したい。

四 おわりに

従来、文学研究者の間では、燈謎など学識を見せびらかすような文字遊戯の類は小説にとって文学性を損なう贅筆にはかならないという評価が多かった¹⁵⁹。例えば、陳平原は『中国小説叙事模式的轉變』で、燈謎などの文字遊戯を「中国古典小説によく見られる静止的な飾りつけ」として認識している。

笑い話や逸聞などを小説に入れる場合、時には構成上において添削できない大きなエピソードとして物語の本筋に織り込まれるが、時には、あってもなくてもいいような、小さな装飾として機能する。前者は小説の喜劇的なスタイルと歴史的価値に影響することが多く、例えば、『儒林外史』の気ままに始まって気ままに終わるスタイルに近いものであるが、物語の完全性にはほとんど影響しない。後者は飾りつけであるが、しかし中国古典小説によく見られる燈謎、酒令、歌謡、對聯、匾額などのような静止的な飾りつけとも異なる。それは動作であって、まとまったストーリーを構成することはできない、生活の断片である。言い換えれば一種の動作性を持った飾りつけ、或いは飾りとしての動作である。真に「新小説」的な特徴を形成し、かつ小説の叙事スタイルの変遷を促したのは、前者ではなく後者である。笑話、軼聞入小説、可能是織入情節主線，在佈局上「不可增刪」的大穿插，也可能是在佈局上「可有可無」、只起裝飾點綴作用的小穿插。前者更多影響於小説的喜劇風格与歷史價值，更接近《儒林外史》的隨意起迄，但情節大致完整。後者雖是點綴，可又不同於中国古典小説中常見的燈謎、酒令、歌謡、對聯、匾額等靜止的點綴；是動作，可又構不成完整的情節，只

¹⁵⁸ 陳平原・夏曉虹『20世紀中国小説理論資料』第一卷、北京：北京大学出版社、1989年3月、187頁。

¹⁵⁹ 例えば、陳幸蕙『「二十年目睹之怪現狀」研究』、台北：国立台湾大学出版委員會、1982年6月、171-172頁。

是生活的片断——一種動作性的點綴或點綴性的動作。真正構成「新小説」特色并促成小説敘事模式變遷的，恰恰不是前者而是後者。¹⁶⁰

要するに、陳平原は小説の本筋に織り込まれる笑い話や逸聞など動作性の持った飾りつけ、あるいは飾りとしての動作こそが「新小説」的な特徴を形成し、かつ小説の敘事スタイルの変遷を促したと述べており、一方、中国古典小説によく見られる燈謎などは「静止的な飾りつけ」であると評している。

本章の考察は、燈謎のような「飾り付け」と古典小説の関係性をめぐって新しい視点を提供した。まず、文人筆記小説の中の謎にまつわる逸話が説話によって俗人向けに翻案され、その表現スタイルが明末以降の章回小説に継承されたことを明らかにした。章回小説は基本白話小説の一脈と思われ、文人墨客の筆のすさびである筆記小説とは違って、民衆的な基盤の上に成り立ったものと理解されてきたが、燈謎と章回小説の結びつきを宋代の説話文芸である「商謎」に遡って考察すると、南宋末期に文人の口に膾炙していた燈謎と「商謎」という演芸に使用する謎とは、一部共通していた可能性が高いと考えられる。そして、白話小説の系譜に位置する「商謎」は、文語で書かれた筆記小説から、人物の機智を表現する手法として謎を取り入れ、説話人によって演じられた。説話の底本が文人の手によって章回小説にされ、燈謎の概念が徐々に文義謎に収束し、一般名詞化されるのは明末以降である。早期の章回小説における燈謎の描写は「商謎」の特徴を色濃く受け継いだものと看取できる。西周生の『醒世姻縁伝』は典型的な一例である。したがって、『醒世姻縁伝』と『紅樓夢』に対する考察を通して、清代前中期の章回小説に見られる燈謎をめぐる描写は、人物像を表現するための文学的技法の一種であることが明らかになった。ゆえに、燈謎を「静止的飾り付け」と認識するのは妥当ではない。

一方、「飾り付け」が中国小説の敘事スタイルの変遷を促すことはなかった、との主張はあったものの、小説敘事スタイルの変遷が「飾り付け」の近代的文体の誕生にきっかけを与えた可能性については、いままで看過されてきた。『醒世姻縁伝』と『紅樓夢』に対する考察で明らかになったように、章回小説に見られる燈謎を根拠に、「古体」が清代前中期まで燈謎の主流だったと結論付けることはできない。燈謎の「古体」「今体」とは、歴史的な先後関係ではなく、「古体」から「今体」が生まれるという事実はない。形式から分けようとすれば、『醒世姻縁伝』に見られる燈謎はすでに「今体」であり、さらに遡ると、説話底本である『問答録』の中の詩經謎も「今体」と言えよう。したがって、「古体」と「今体」はあくまで燈謎の形式を区別するための便宜上の名称として捉えたい。それを認識したうえで、章回小説と燈謎の結びつきこそが、読者に「今体」謎に興味を持たせた主なきっかけであったという結論を提示した。さらに、清末民国期になると、『鏡花縁』や『二十年目睹之怪現狀』などの章回小説から見出される「燈謎論評／講座」が謎話という専門的な燈謎評論の誕生を促し、「今体」謎の創作ブームを引き起こした。このように、もともと存在自体が曖昧な「中国文学」という括りの中で、非正統視されてきた「小説」が正統になっていく文学運動において、章回小説との関係性によってその流れに乗せられ、燈謎の近代的文体が形成されていったものと考えられる。

また、章回小説に収録された燈謎から、その技法や文体の発展を客観的に論じるためには、作者という主体の問題が重要であることが明らかとなった。清代中期の最盛期以降、文人作者による章回小説の創作趣向は筆記小説に戻りつつあった。小説という媒介を借りて文才を寄託する

¹⁶⁰ 陳平原『中国小説敘事模式的轉變』、上海：上海人民出版社、1988年3月、181頁。

という、曾て筆記小説にしか見られない創作動機が口語体の章回小説にも現れた。特に清代中期の才学小説は、筆記小説の伝統を再現する過程において、万宝全書や燈謎集などから燈謎の良作を採録しつつ、作者自身と周囲の燈謎愛好者の作品も時に小説に取り入れ、フィクションの場で評価と議論を行った。その結果、作者自身が燈謎に対する好みや創作の心得などは徐々に「表」に露出していた。具体的に言うと、章回小説の中の燈謎描写はもともと、学力の差を持つ人物を表現するために、趣向の異なる謎や、解き方の賢さまたは拙さを利用しながら書かれていたが、清代中期以降は、作者の文人化は一転して「読者の文人化」として捉えることができるようになったのである。つまり、『鏡花縁』のように、同好者への呼びかけという意味を含めた内容として燈謎が持ち出されていた。そして、『品花宝鑑』や『花月痕』のような、才子佳人小説の延長として創作された狎邪小説では、主人公のほとんどが才知に富んだ人物像にされているため、燈謎などの文字遊戯は知能の差を表現するための手段というより、燈謎自体の優劣に関心が移るようになり、燈謎作品の鑑賞と創作談が一つの目的となった。

第三章 「燈謎」をめぐる文人意識の変化—— 謎話から得られる考察

一 はじめに

前章で述べたように、謎話の元になったと考えられる議論は、実際には清末より以前、既に謎集の前書きや章回小説などの中で芽を吹いていた。例えば、明代の嘉靖朝に書かれた李開先編の謎集『詩禪』の序文は、まず謎の別称である「詩禪」ということばの由来について、

人心が少し変わり、真っ直ぐな道を貫くことが困難となり、それによって託興（託つけること、隠喩）、俚詩（言葉が通常と異なる詩）、諷諫（諷刺と諫言）、寓言、隠語、廋詞といったものが生まれた。それらを俗に謎と謂うが、士大夫はそれらを詩禪と呼ぶ。

人心稍変、直道難行、有託興、有俚詩、有諷諫、有寓言、有隠語、有廋詞、俗謂之謎、而士夫謂之詩禪。¹

と解説している。恐らくこれが、謎の呼称が社会階層によって区別されることを書いた最初の文章ではないかと考えられる。ここでは、同じ文化事象を異なる名称で呼ぶことが、社会的アイデンティティの確立と関係する可能性を示唆している。ただこの時点では、「詩禪」と「謎」はあくまでも名称の違いであり、内容の区別に関しては触れていない。おそらく、文人が書く謎の多くが詩の形式を持ちながら禪問答と似た雰囲気をもつことから、「詩禪」という名称が付いたのではないかと推測できるが、実際には、「詩禪」という言葉は広まらなかった²。

『詩禪』の編者である李開先は、その序文で、明・景泰二年（1451年）の科挙において状元³の称号を取った柯潜が説いた論を引用しつつ、あるべき「詩禪」の形について以下のように論じている。曰く、

我が朝の状元柯潜はこう謂う。謎の句は必ずや事の変化を觀、古今に通達すべし。ただ、時事に近づきすぎれば癒着の陋があり、逆に時事から遠ざかりすぎれば、雲をつかむように、根拠に乏しいという嫌いがある。また、文字通りの意を取ると固執に流れるが、文字から巧みに意を仮借すると狡猾に流れる。故に、隱僻の理を深く求め、それを謎という行動にうつさせるべし。日用の常から出ないようにしていれば、謎の三昧を得たと言えよう。

我朝柯狀元潜謂：謎句須覽觀事變、通達古今。切於事情、則有黏皮帶骨之陋；遠於事情、則又有捕風捉影之嫌。意是字真、流于固執；意借字巧、流于變詐。當深求隱僻之理、過為詭異之行、然不出乎日用之常、亦云得謎之三昧者也。⁴

柯潜の「謎三昧」論に含まれる主張は主に謎と時事の関係、謎と文字の関係の二つにある。その中で特に注目し得るのは、明末の時代、既に謎と日用・時事の関係性が説かれていたことである。というのは、清末以降の謎話を見ると、彼のこのような議論が継承されて、謎人の典型的な考え方の一つとなっていくからである。例えば、徐枕亜は「談虎偶録」で「謎に時事を入れれ

¹ 李開先『李開先集』（下）、北京：中華書局、1959年12月、1012頁。

² 李開先の『詩禪』以外の用例は見られない。

³ 状元とは、天子が行う最終試験（殿試または廷試）に首席で及第した者を言う。

⁴ 李開先『李開先集』（下）、北京：中華書局、1959年12月、1028頁。

ば、遊戯の中で現実に対する警戒心を呼び起こす、という意図が託されるため、作品に目新しさが生まれ、人の心を動かすことができる〔時事入謎、於遊戯之中、寓警惕之意、既覚親穎、且可動人〕⁵と論じている。要するに、「(文人の) 遊戯」に変化をもたらすのに「時事」というのが重要な文脈であるという認識は、明末からほとんど変わらなかったのである。

また、「時事」のような歴史的、社会的な文脈以外にも、謎が文学作品の中に入れられた場合、文学的な文脈が存在する。清代には多くの章回小説に燈謎が登場するが、その中で最も知られているのは恐らく曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』であろう。第二十二回と第五十回には集中的に燈謎が書かれている。登場人物の運命を文中の燈謎を通して仄めかすという表現手法は、これまで文学評論などの中で盛んに論じられてきた。『紅樓夢』に書かれる燈謎は小説の文脈に深く関わるため、物語にとって欠かせない一部であると考えられているが、清末になるにつれ、物語との関係性が希薄でありながらも、ただ登場人物が燈謎をする場面を長々と描写する小説が現れた。その典型が吳趸人の『二十年目睹之怪現狀』である。その中で、燈謎活動に関わる叙述は実に4章分にのぼり、その描写も単に燈謎を羅列しただけのものではなく、燈謎のルールや術語に関しても登場人物の口を通して細かく解説され、作者が読者を教えようという意図が垣間見える。

前述のように、従来、文学研究者の間では、燈謎など学識を見せびらかすような文字遊戯の類は、小説にとって本質的な要素ではなく、かえって文学性を損なう贅筆にほかならないという評価が主流であった。しかし、「才学小説」の代表的作家である李汝珍は、章回小説の形式を参考にしながら、自身の経、史、音韻に関する学問をはじめとして、燈謎、酒令(酒席で酒を勧めるための遊び)などの遊戯にいたるまでの知識を物語の中に織り込んだが、物語の枠組や人物描写などに対してはそれほど関心を持たなかったと言われる⁶。李汝珍の『鏡花縁』には、才女百人が集まって燈謎をする盛大な場面が描かれており、さらに、小説第80回には登場人物の口を借りて、謎に対して総合的な議論が挟まれている。この燈謎の創作方法や作品の優劣についての議論が発せられている部分も、後に謎話の雛形になったのではないかと考えられる。実際、1907年に書かれた謎話である『紙醉廬春燈百話』⁷は、『鏡花縁』のこの箇所を真似て書かれたと言われている⁷。謎の優劣とその難易度は比例しないという『鏡花縁』の指摘は、『紙醉廬春燈百話』をはじめ、後に書かれた多くの謎話においても承認され、継承されている。要するに、謎話という形式の誕生より以前から、文人らは謎に対し、何らかの評価基準を持っていたことが章回小説の描写から看取できるのである。

以上に述べた謎話の雛形から得られる考察をまとめると、一つは「謎」を指す名称を社会階層の違いによって分ける傾向が明末から見られ、その名称と社会的アイデンティティ認識とが関連付けられること、二つは現実社会における時事が「文人遊戯」の文脈として扱われること、三つは表意文字である漢字を利用するのが燈謎の中核であること、この三点である。この三点は清末以降においても鮮明に現れており、継承されていたことが明らかであるが、注目したいのは、二点目に見られる「文人遊戯」という言葉の性格が、20世紀初頭に入ると密かに変化したことである。

そこで本章は、清末から中華民国期に新聞、雑誌等に発表されるようになった「謎話」を手が

⁵ 徐枕亜「談虎偶録」『吳人謎話文獻三種』(中華謎書集成・謎話專輯叢書、『蘇州謎苑』増刊)、蘇州：蘇州市謎学研究会、2009年12月、97頁。

⁶ 李時人「出入『乾嘉』：李汝珍及其『鏡花縁』創作」『国学研究』第4巻、北京：北京大学中国伝統文化研究中心、1997年7月、386頁。

⁷ 亢聘臣「紙醉廬春燈百話」『吳人謎話文獻三種』、蘇州：蘇州市謎学研究会、2009年12月、35頁。

かりとして、この時期に事物謎から文義謎までを含む「謎」という雑多性のある大分類から「燈謎」という精練された概念が分離・析出されてくる過程をたどり、その過程と積極的に関わった人（燈謎の創作者と謎社のメンバー）に見られる意識の変化を、その過程を傍らから見る傍観者や、その対極に立つ中国民俗学の先駆者たちが持つ意識と比較しながら整理・分析する。なぜなら、その意識の変化は清末・民国期の中国文化が直面する新旧知識の取捨やエリート文化と通俗文化の対抗と融合、文人の社会的アイデンティティなど様々な問題をプリズムのように屈折／反射するからである。それによって、「燈謎」をめぐる文人意識が変化する時代的・文化的な背景と、燈謎の発展過程に生じる変化との関連性を明らかにしたい。

二 「博奕猶賢」と「小道可觀」の論法

筆者の旧稿⁸では、最も早く雑誌上に掲載された謎話文は古銘猷の「謎話」⁹であるとしていたが、その後新たな資料が見つかったことで、古銘猷「謎話」よりも早いと見られる謎話は少なくとも二作あることが判明した。筆者が現在実見した限りでは、雑誌に掲載された最も古い謎話文は、1889年に上海で発行されていた半週刊（週二回発行）の『益聞録』¹⁰に見られる「燈謎説」という記事である。そこには以下のように書かれている。

燈謎のもう一つの名は燈虎であり、どこから意味を取って定義付けられたかは知らない。経傳（四書五経などの儒教の正典とその注釈）・詩文・諸子百家・伝奇小説・俗諺・人物などを用いて事物や言葉を暗に指し、燈籠に貼り付けて人に当てさせる。当たった者には筆・墨・紙・硯・巾（布切れ）・扇・香・囊・果物などが贈呈され、それらは謎贈と呼ばれる。文人や賢者、比較的に智慧を持つ人なら少々思考を巡らせれば解せるが、頭の鈍い者は壁に面して何時間経っても茫然として解けない。謎によって智識が啓発され、娯楽の効果が得られることが実に多い。（中略）しかし、文章を巧妙に操作する謎はただ中国のみが有するというのは甚だしい誤解である。何故なら、西洋人にも判じ絵〔rebus〕というものがあり、人物を描いてアルファベットを書き、その音から意味を推測させるという西洋の謎がある。文字こそ異なるが意図においては同じである。故にどうして吾が族類でないという理由だけで（西洋人を）蔑むことができようか。かつまた燈謎は小技であり、遊びに近く、婦人らがやる謎々とそれほど違わない。かの物好きの輩は自らの智巧を誇示し、人のできないことができ、人の知らないことを知っていると思いが上がるが、それもまた度量の小さいことである。燈謎一名燈虎、不知何所取義、法以経傳詩文、諸子百家、伝奇小説、俗諺人物等、陰指一事一語、貼與燈上、令人商揣、中者得筆墨紙硯、斤扇香囊、果品之類、謂為謎贈。文人慧者、心志較靈、稍索之而遽獲。魯者面壁移時、茫然不解。謎之啓智識、娛人情、洵足多也（中略）或謂取巧于文、惟中国有此、失之遠甚。蓋西人有雷步思者、畫人物書字母、取其音以測写意、此西国謎也。文字異而取義同、詎可以非吾族類也而遂鄙薄之乎。況燈謎小技近于嬉戲、較之婦人猜謎之法不甚相懸。彼好事之儔、自誇智巧以為能人所未能、知人所未知、亦見之小焉者矣。¹⁰

⁸ 吳修喆「近代における漢字文化新分野の形成——文義謎を例として」『アジア地域文化研究』第9号、東京：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2013年3月、69-88頁。

⁹ 初出は『国学萃編』第1期（1908年12月）、第2期、第4期、第6-8期（以上1909年1-4月）。

¹⁰ 『益聞録』901期、第11冊、上海：徐家匯報館、1889年9月、440頁。

作者は燈謎を有益な娯楽として評価しながら、最終的に「遊びに近」い「小技」と決めつけている。また、西洋にも似たような文化があることを提示することによって、「度量の小さい」「物好きの輩」を否定的な文脈で取り上げている。この文脈からは、清末当時において燈謎を中国特有の高度な文化現象と認識し、それを人前で誇示する「謎人」の姿が浮かび上がるが、少なくとも「燈謎説」の作者から見れば、燈謎を過大評価するような傾向は一笑に付すべき現象だったのである。

しかし、「燈謎説」以降に発表される謎話には、そのような一歩距離を置いた見方が徐々に見られなくなっている。例えば、20世紀初頭の1904年に雑誌『新新小説』に掲載された「ていがくしつ棟蓐室談虎」は、「小技」というキーワードを受け継いで、「彫虫の小技、壯夫は為さず。隱語度詞など、末のまた末なり」という一文から始まるが、それに続けて、

しかしながらこれも亦、わが国の古き時代の文人社会における一種の道楽であり、いわゆる心を用いる所無きにはまさ賢るものである¹¹。しかも博奕（はくえき双六や囲碁など勝負を争う遊び）に比べるとむしろ大いに優れており、ともかく及ばないことはないだろう。故に一つの遊戯として受けいれてもよろしいではないか。

雖然、是亦吾国旧時文人社会一消遣法、所謂賢于無所用心、較諸博奕、猶覺有過之無不及、列為一遊戯品、不亦可乎。¹²

と、『論語』の教えから「賢於無所用心／博奕猶賢」を切り出して謎の価値を説いている。1908年に書かれた古銘猷の「謎話」にも、

詩は性情を整理する効果があり、謎も亦、寂悶を破る効果がある。夜遊びするよりも謎燈に癒されたほうがよい。無為徒食の日々を過ごすよりは博奕のほうがまだよいと言われるが、それなら謎を作ったほうがなおよいではないか。

詩以理性情、謎亦可破寂悶。与其秉燭夜遊、何若謎燈之為愈也。飽食終日博奕猶賢、況制謎乎。¹³

とある。同じく燈謎の遊戯性から出発している論であるが、19世紀末の「燈謎説」に比べ、明らかに文脈は肯定的なものへと変わっている。これが「文人遊戯」という言葉に対する意識の変化の始まりであった。

そのような意識変化には、見過ごせない歴史的背景が存在する。それは、義和団事件が終わった1901年から辛亥革命が勃発する前の1911年まで、中国では下層社会に対する啓蒙運動が盛

¹¹ 『論語』陽貨第十七「子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博奕者乎、為之猶賢乎已（子曰わく、飽くまでも食いて日を終え、心を用うる所無きは、難いかな。博奕なる者有らず乎、之を為すは、猶お已むに賢れり）」。朱熹撰『四書章句集注』北京：中華書局、1983年10月、181頁。読み下し＝吉川幸次郎『論語』下、新訂中国古典選第3巻、東京：朝日新聞社、1966年1月、283頁（ルビは適宜省略）。

¹² 著者不明「棟蓐室談虎」『新々小説』第1巻第3期、上海：新々小説社、1904年11月、頁番号なし。

¹³ 古銘猷「謎話一卷」、初出は『国学萃編』第3期、晨風閣叢書甲集、北京：国学萃編社、1909年であるが、原文は見つかっていないため、蔡建榮主編『謎話匯編十八種』、温嶺：杏林文虎書齋、2011年7月、290頁に参照。

んに進行していたことである¹⁴。そうした啓蒙運動の一端を窺わせる例として、1904年3月の『警鐘日報』に掲載された「馬将牌改革議案」という文章がある。筆者は文の冒頭で以下のように述べている。

国の盛衰を観るには、必ずしも大事を観るべきではなく、些細な事を見れば既に明白である。かの欧米・日本には武事を遊戯に寓することが多く、或いは物理化学的な技術を以て遊戯とする。わが国を顧みれば、そのような事例が一つもない。規国之盛衰、不必觀其大事也。觀其細事已可見矣。彼欧美日本常寓武事于遊戯之中、又或以理化之術為普通之遊戯。反觀吾国、乃無一焉。¹⁵

そこで筆者は、馬将（マージャン）なら下層社会においてできない人がいないほど普及していることを理由に、マージャン牌の表面に地理や政治、新知識を彫れば、遊びながら啓蒙を行えるという、一見奇想天外な改革案を真剣に提案し、博奕の代表格であるマージャンでさえ利用しようとすることで、啓蒙への熱意を表明している。この論は同時期に現れた「博奕猶賢」の旗を掲げる謎話と合致しており、故に「博奕猶賢」論の出現も啓蒙運動に応じた自然な流れとすることができるだろう。そこには、一方的に「時事」を「文人遊戯」の文脈に取り入れるにとどまらず、啓蒙の道具として利用することによって、かえって時事に影響を与えようという積極的な意識が生じていた。その後が生じた燈謎の意識変化はそこから出発したと言えよう。

「賢於無所用心／博奕猶賢」よりいっそう多用され、決まり文句と言えるほど謎話によく見られるのは、「雖小道猶有可觀（小道といえども、猶觀るべきものあり）」という表現である。例えば、古銘猷の「謎話」は「小道といえども、亦心の声である〔謎雖小道、亦心声也〕」¹⁶と書いており、「遼漢齋謎話」には「謎は小道といえども、古今盛衰の変異を見るに足りる〔謎雖小道、亦足見今昔盛衰之異〕」¹⁷、また、徐枕亜の「談虎偶録」には「文虎は小道なり。しかし心智が鋭敏である者以外、此れを語るに足りず〔文虎小道也、然非心靈手敏者、不足以語此〕」¹⁸とある。

「小道」とは、先秦諸子の文脈において「大道」と対置される概念で、「つまらない、取るに足らないもの」を意味し、清代において「小道」と言えば多くの場合「小説」を指していた。この「小道可觀」論は『論語』子張第十九の、

子夏曰わく、小道と雖も、必ず觀る可き者あらん。遠きを致すには恐らくは泥まん。是を以て君子は為さざるなり。

（子夏の言葉、たとえ微小な学説でも、なんとかきつと取り柄はある。しかし、それに沿って、遠くまで行こうとすると、恐らくは泥沼におちこんだように、ぬきさしのならぬことになる。だから君子は、それに従事しない。）

¹⁴ 李孝悌『清末の下層社会啓蒙運動：1901-1911』台湾學術叢書、石家庄：河北教育出版社、2001年11月、23頁。

¹⁵ 『警鐘日報』（上海）1904年3月14日、第2面。

¹⁶ 古銘猷「謎話卷一」『国学萃編』第2期、北京：国学萃編社、1909年、3頁。

¹⁷ 薛鳳昌「遼漢齋謎話」『小説月報』第6巻第5号、上海：商務印書館、1915年5月、「慧因室雜綴」46頁。『小説月報』には通し頁数がなく、各作品にそれぞれ頁数が付けられている。「遼漢齋謎話」は余白の埋め草として、この作品の46頁目に載っている。以下、『小説月報』からの引用では、作品ごとの頁番号を示す。

¹⁸ 徐枕亜「談虎偶録」『吳人謎話文献三種』、蘇州：蘇州市謎学研究会、2009年12月、87頁。

子夏曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不為也。¹⁹

に由来する。漢代になると「儒術独尊」という文脈において、「小道」を担う稗官はいかん術士²⁰が「小説家」と称された。それは『漢書』芸文志「諸子略」において、

小説家者流は、蓋し稗官より出ず。街談巷語、道聽途説者の造る所なり。^(ママ)孔子曰わく、「小道と雖も、必ず観る可き者あらん。遠きを致すには恐らくは泥まん」と。

(小説家の一派は、思うに稗官から出た。小説類は、通りや路地など、道端で聴いた話をすぐに伝え説く人間が作ったものである。孔子曰く、「小道と雖も、必ず観る可き者あらん。遠きを致すには恐らくは泥まん」と。)

小説家者流、蓋出於稗官。街談巷語、道聽塗説者之所造也。孔子曰：「雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子弗為也。」²¹

と、小説を小道に結びつけた。当然ながら、諸子略における「小説」は後世の文学ジャンルとしての「小説」と同じ概念ではないが、「稗官小説」＝「小道」という文脈の転換を通して、「小説」は「小道」であるという理解が定着していったと見る議論もある²²。

しかし、「小道」と謎とは如何なる関係性を持つのか。それを説明するには、南朝・梁の劉勰りゅうきやう撰『文心雕龍』の第十五「諧讒かいせん」(諧辞と隠語)編を見るべきである。そもそも「謎」の語源を説明する際に頻繁に引用されるのがこの「諧讒」編にある、

謎なる者は、其の辞を廻互して、昏迷ならしむるなり。

(「謎」とは、言葉をぐるぐる変化させて、相手を迷わせるようにすることである。)

謎也者、廻互其辞、使昏迷也。²³

という解釈であり、また、同じく「諧讒」編には、

文辞に諧讒が有るは、九流の小説有るに譬ふ。

(文学の世界に諧辞や隠語が有るのは、学問の九派の中に「小説家」があるようなものである。)

文辞之有諧讒、譬九流之有小説。²⁴

という説明も見られる。「諧讒」とは「謎」であるから、この箇所は、謎の文学における地位は、

¹⁹ 朱熹撰『四書章句集注』188頁。読み下し・通釈＝吉川幸次郎『論語』下、313頁(ルビは適宜省略)。

²⁰ 「稗官」は民間の風聞を集めて奏上した下級役人。「術士」は、医術や占いなどの方術に優れた人。

²¹ 班固『漢書』第6冊、北京：中華書局、1964年11月、1745頁。

²² 饒龍隼「諸子「小説」正義」、全国重点学科・中国古典文献学教育部百所重点研究基地・四川大学中国俗文化研究所編『新国学』第4巻、成都：巴蜀書社、2002年12月、31-57頁。

²³ 劉勰著／范文瀾註『文心雕龍註』上下、中国古典文学批評理論叢刊、北京：人民文学出版社、1962年12月、271頁。読み下し・通釈＝戸田浩暁『文心雕龍』上、新釈漢文大系64、東京：明治書院、1974年11月、223頁(ルビは省略)。

²⁴ 同上、272頁。読み下し・通釈＝戸田浩暁『文心雕龍』上、224頁(ルビは省略)。

九流²⁵の最後に小説家があるのと同じく、文学の末端に置かれるべきものだ、という意味であり、この『文心雕龍』の認識が、自然と文人の中で広まったのであった。市民文化の時代である宋代に入ると、小説に関する伝統的な観念は大きく転向し、歐陽脩の『崇文総目叙釈』「小説類」には「小説を廢してはならない。(中略)俚言巷語も亦取るに足るところあり〔是小説之不可廢也(中略)俚言巷語亦足取也〕」²⁶とあり、稗官小説の類が再び「必ず観るべき者あり」の位置に戻された。恐らくその評価の転向が謎話に応用されたのが、「小道可観」論の原点ではないだろうか。

もともと中国においては、詩文詩賦などに関して「～話」という評論文体が存在したが、それは一つの文学ジャンルが一定程度に発展し、社会において一定の地位を占めるようになったときに、自然と発生する一種の付随的な批評文である。そして、「～話」によって個々の作品の置かれる大きな文脈が取り沙汰され、作者の主体性が浮かび上がるようになり、文学議論の場が作られたとも言えよう。こういった様々な「～話」の中で、最も謎人に刺激を与えたのは恐らく「小説話」の出現であったと考えられる。²⁷ 元聘臣は自身が謎話を書く動機について、次のように述べている。

詩に話あり、文に話あり、詞に話あり、賦に話あり、且つ経に話あり、八股文²⁷に話あり、対聯に話あり、ただ小説に話は無かった。しかし近人が「飲氷室小説叢話」²⁸を書き、『新小説』雑誌に掲載したため、話無き者(小説)も話を有するようになった。燈謎と言え、慶詞は左氏伝から始まり、隱語は史記に載せられ、その淵源を遡れば遙か古き時代に既に存在した。文人墨客の中にも謎を嗜む者が多い。そもそも謎は放蕩三昧で行う、ほろ酔いついでの娯楽であり、その場での遊びにすぎないため、話が無くとも構わないはずだが、やはりこれにもまた話が無ければならぬ、話を有すべきである。

詩有話、文有話、詞有話、賦有話、且経有話、八股有話、楹聯有話。小説無話、近人作「飲氷室小説叢話」掲策『新小説報』、而無話者亦有話。若夫燈謎、慶詞起於盲左、隱語載於腐史、遡厥淵源、夙乎遠矣、文人墨客嗜之者夥。紙醉金迷之所、眼花耳熱之娛、逢場一戲、斯固不必有話、而亦不能無話、不可無話者也。²⁹

ただ、小説話はあくまでも謎話創作を促した刺激であり、内容から考察すると、謎話に盛んに持ち込まれる「小道可観」論に直接的な影響を与えたのは、小説話というよりも清代の詩話、詞話であったと見られる。清より以前に書かれた「～話」に「小道可観」論は殆ど見られないのに対し、清代中期以降にそれが見られるようになるのは、おそらく次のような理由による。清代には、古学復興と考証学隆盛の反動で、「考拠・義理・文章」以外の詩詞曲小説といった文学の類は地位の下落を免れなかった。この変化に応じて、清中期からの「詩話」「詞話」のような文学批評に、「小道可観」論が「捨てられたものを拾い上げる」を肯定的な意味で用いられるように

²⁵ 中国古代思想家の流派。班固は『漢書』芸文志で、儒家者流・道家者流・陰陽家者流・法家者流・名家者流・墨家者流・縦横家者流・雑家者流・農家者流の九流に分けた。

²⁶ 歐陽脩「崇文総目叙釈」『歐陽文忠公文集』四部叢刊本(景上海涵芬樓藏元刊本)、上海：商務印書館、1929年、文集一百二十四。

²⁷ 「八股文」とは、明清時代に、科挙の答案として用いられた特殊な文体のことである。

²⁸ 梁啓超が編集長を務める『新小説』雑誌の第8号(1903年8月)から連載し始めたコラムである。

²⁹ 元聘臣「紙醉廬春燈百話」『吳人謎話文獻三種』、蘇州：蘇州市謎学研究会、2009年12月、43頁。

なった。その場合、当然ながら、「遠きを致すには恐らくは泥まん」の部分には言及されない。特に、「詞は小道といえども、范文正、歐陽文忠も曾て好んで為していた〔詞雖小道、范文正、歐陽文忠嘗樂為之〕³⁰のような、先代大儒の名を挙げて詩や詞の由緒正しさを強調しようとする論法は容易に謎にも当て嵌めることができた。そのため、民国の謎人たちはこの論法を借り、謎を士大夫が作ってもよいものであると説いたのだが、そのため、常に民間の俗なる事物謎との区別、すなわち「謎」の「雅／俗」の別が意識されることになった。

謎の雅俗を分けるべきだと最初に説いたのは、1913年の「すいかんさいめいわ邃漢齋謎話」であった。作者のせつほう薛鳳昌は、

謎には書家・江湖の別があり、即ち雅俗である。意が俗であっても語は俗でないものもあれば、語が俗でも厭らしさはなく、雅の道に傷つかないものもある。(中略) そういった謎は書家の意から脱していないため、誠に文人の遊戯と言える。

謎之有書家、江湖之別者、雅俗耳、然亦有意俗而詞不俗者、並有詞亦俗而不厭其俗、一似無傷雅道者。(中略) 然仍不脫書家意、洵是文人之遊戯也。³¹

と強調した。「書家の意」とは具体的にどういうものか、彼は例を用いて「字学に通じる謎」「訓詁に通じる謎」「数学に通じる謎」「経学に通じる謎」と、作品を分類し、それらの例に関して「必ずこのような謎こそが、初めて書家の意を得ていると言えよう〔必如是、始可謂之得書家意〕³²と評価した。つまり彼にとって、清代に重んじられた学問である「小学」「訓詁」「数学」「経学」を謎に応用することこそ、「書家の意」(文人気質)と評価されるかどうかの基準であった。この基準は、清代考証学の影響を受けて洗練された、清代の燈謎あってこそその評価である。

さらに、謎の「小道」論はただ「観るべき者あり」と主張するにとどまらず、同時に「小道」を極めることの難しさが強調された。「邃漢齋」は「謎は遊戯に属すると言うが、無学な者には断じてできない〔謎雖屬遊戯、必非胸無点墨者所能従事〕³³と主張するが、その難しさは学問を要求するということだけから来ているのではなく、旧来の学問を保ちながら変通していけるような、いわゆる「別才」も必要とされる点にあるのだという。すなわち、通常の考え方から逸脱できるような思考力のことである。

謝明新は「謎語」においてこう語っている。

謎を当てるのは難しいが、謎を作るものまた容易なことではない。平素の読書において特別な心得がある者でなければ、恐らく一作もできないだろう。(中略) 謎に最も要求されるのは渾成(語句が自然であること)であり、一旦鄙俗とかかわれば文人口調を失うことになる。猜謎難、制謎亦非容易。非平日読書別具心得者、非必能道隻字也(中略) 謎語最要渾成、一涉鄙俚、便失文人口吻。³⁴

³⁰ 陸鏗「問花楼詞話・自序」、唐圭璋編『詞話叢編』第1冊、北京：中華書局、1986年1月、2537頁。范文正(仲淹。989-1052)は「岳陽楼記」で知られる北宋の政治家・文学者。歐陽文忠(修。1007-72)は唐宋八大家に数えられる北宋の政治家・文学者。「文正」「文忠」はいずれも諡。

³¹ 薛鳳昌「邃漢齋謎話」『小説月報』第5巻第6号、1914年9月、「吁齋童話」8頁。

³² 同上、第4巻第7号、1913年11月、「小木工」10頁。

³³ 同上。

³⁴ 謝明新「謎語」『学生雑誌』第1巻第6期、上海：商務印書館、1914年11月、15頁。

しかし、完全に俗と隔離する必要はなく、徐枕亜の「談虎偶録」に書かれているように、「俗語を謎に取り入れる場合、俗を雅に化せる謎こそが良い謎である〔俗語入謎、能化俗為雅、方为佳謎〕³⁵という捉え方もあった。このように「学」「別才」「雅」が清末民国期の謎話において共通のキーワードとなったのは、「小道可觀」論を超越しようとする意識の変化を示したものであった。

三 雑誌・新聞の潮流に乗って

以上は、清末から、おもに1910年代までを対象に、謎話の雛形と、謎話の典型的な論法の思想的水源を探ってみたのであるが、そこからは、小説話が注目されたことに刺激を受け、謎人たちもまた創作主体の声を「～話」という文学ジャンルを通して外界に届けようと試みたことが見えてきた。その中には、創作者の地位上昇への欲求が隠されていると考えられる。すなわち、謎を正統文学に仲間入りさせ、生業の一つとして成り立つほど謎の注目度を上げたい、それこそが謎話創作の真の目的だったのではないだろうか。民国になって謎話の数が急激に増えたのは、近代ジャーナリズムの激増によって拍車が掛かったためと容易に想像しうるが、「燈謎」をめぐる文人意識の変化がどのように近代ジャーナリズムに影響を与えたかについても考察の必要がある。この節では、謎話が新聞雑誌の力を借りて発展する様相を眺めながら、その影響のあり方を明らかにしたい。

梁啓超は1902年に雑誌『新小説』を創刊し、啓蒙の大旗を掲げ、小説を社会改良に結びつけ、大きな反響を呼び起こしていた。小説と文芸評論以外にも戯曲や笑い話、歌謡なども付録として掲載したため、その形式は後に創刊された多数の小説雑誌に踏襲され、付録の範囲も次第に広がっていった。こういった状況は1910年以降になると、更に新たな変化が見られるようになり、「小道集成」を目指していた小説雑誌には「小道」に関する理論的な文章も掲載されるようになった。例えば、1910年に創刊した『小説月報』は、第1巻第2号に「征文懸賞」（懸賞論文公募）を發し、詩詞、雑著及び遊記、隨筆、異聞、軼事の作の投稿を呼びかけ³⁶、そこには総合的な筆記以外に、伝統文人の「韻事」を主題にする雑記が次々と載せられていた。いわゆる「文人韻事」には、琴棋書画や文字遊戯、古玩、花鳥虫魚などが含まれるが、近年の研究ではこれらの事物を「文化微物」と呼んで、こういった「微物崇拜」の文化現象を中国特有の近代性と繋げて考える研究者もいる。胡曉真の研究によると、微物崇拜は文人の伝統的教養を直接継承し、習得するきっかけであり、その中には伝統文芸を学術化する試みも含まれており、その学術化の傾向は謎話の出現において最も典型的に見られたという³⁷。

ここで『小説月報』を例に、編集者の編集スタイルによって謎話の境遇がどのように変化し、そしてその変化が如何に編集者の理念に影響したかを考察する。『小説月報』は創刊後の第1、2巻と第3巻の第1号から第4号までは王蘊章が編集長を務めていた。創刊号の「編集大意」からは王の編集スタイルが読み取れる。「各小説の末にさらに訳叢、雜纂、筆記、文苑新智識、伝奇、改良新劇など諸類の文を置き、説部（小説）の範囲を広め、報余（余白）の編集の一助とす

³⁵ 徐枕亜「談虎偶録」『呉人謎話文獻三種』、蘇州：蘇州市謎学研究会、2009年12月、104頁。

³⁶ 「征文懸賞」『小説月報』第1巻第2号、1910年9月。

³⁷ 胡曉真「知識消費、教化娛樂与微物崇拜——論『小説月報』与王蘊章の雜誌編輯事業」『中央研究院近代史研究所集刊』第51期、台北：中央研究院近代史研究所、2006年3月、55-89頁。

る〔末更附以訳叢、雜纂、筆記、文苑新智識、伝奇、改良新劇諸門類、広説部之範圍、助報余之採擷〕³⁸と。したがって、謎と謎話も彼にとっては、余白を埋める材料の一つにすぎなかった。実際、創刊した年から謎は余白の中でのみ取り上げられている。

最初に『小説月報』に載せられた謎話は「簧冷軒謎語」³⁹であり、謎に関する三つのエピソードが書かれている。しかし、第3巻第5号から第8巻までは編集長が王蘊章から惲鉄樵へと変わっており、そのバトンタッチによって、『小説月報』の編集スタイルも徐々に変化した。惲鉄樵は王蘊章に比べ、もともと雅文学雑誌を作る志向が強く、彼はいくつかの欄を調整し、小説以外の内容を更に増やしたのである。例えば薛鳳昌の「遼漢齋謎話」は第4巻から二年に亘る長い連載が始まったが、大まかな掲載枠は王蘊章が編集長を務めていた時から継承されてきたものであるため、「遼漢齋謎話」は細かく段落分けされ、各段落が1頁という長さで、依然として余白の所に細々と入れられていた。

ところが、謎話の掲載ルールはとあるきっかけによって覆された。それは第6巻第8号の「本社函件最録」コーナーに載せられた「張君起南來函」である。張起南は手紙の中で「遼漢齋謎話」を称讃し、第6巻第5号で連載が終了したことに対する遺憾の意と、次なる謎話文への期待を述べた。続いて彼は編集者に、

材料が豊富であれば、紙面を1、2頁くらい開放し、この種の文章を掲載すべきである。単に余白の埋め草として、日常短文や広告と同じ扱いでは勿体無い。ただ、書家と江湖兩派の取捨選択は必ず厳格にして頂きたい。

如材料豊富、当拓一二紙專印此種、不宜作補白、与談屑廣告同科、惟書家江湖兩派棄取必嚴

40

と提案した。そして彼も「小道可觀」論を説き、「謎は小道といえども、わが国の文学において美学的な要素の一つであり、今から保存していけば尚知る者はいるが、数十年後になると、恐らく難澁不可解との嘆きが聞こえてくるだろう〔謎雖小道、亦吾国文学中美術之一端、及此保存尚有知者、閱数十年後誠恐有解人難索之嘆矣〕⁴¹という憂慮も示したのである。

その手紙に対し、次の号に惲鉄樵は返答を載せ、同時に「文虎」という欄を新たに設けた。「文虎」欄の創設に当たって、惲鉄樵は以下のような考えを述べている。

凡そ文虎は必ず四書五經、詩、古文と関連する。文虎は国粹（文化・芸術の精華）とは言えないが、四書五經、詩、古文はすなわち国粹である。故にこのご時世に文虎をやるのは、単に物好きなためではなく、上述したような国粹が今日の人にとれほど覚えられているかを究明できるのではないかと考えるからである。

凡文虎必与四子五經、詩、古文辞為縁。文虎非国粹、四子五經、詩、古文辞則国粹也。是今兹所為不但好事、抑亦可覩此等国粹之存於今日人心者尚有幾何矣。⁴²

³⁸ 「編集大意」『小説月報』第1巻第1号、1910年8月。

³⁹ 同上、第2巻第10号、1911年12月、「諧文」10頁。

⁴⁰ 同上、第6巻第8号、1915年8月、「本社函件最録」1頁。

⁴¹ 同上。

⁴² 同上、第6巻第9号、1915年9月、「余霞」1頁。

このように、編集長惲鉄樵の強い後押しを受け、張起南の「橐園春燈話」が『小説月報』第7巻から余白ではなく、「雑俎」という欄で連載されるようになり、その後の謎話に多大な影響を及ぼした。

しかし、『小説月報』第8巻第1号に載せられた「編集余談」を読むと、小説という「正文」が少なくなり、筆記や雑俎などの付録のほうが逆に多くなったことを疑問視する読者が現れたことも分かる。そのような批判の声に対し、惲鉄樵は「それも亦国粹を保存するための一つの道である〔抑亦保存国粹之一道也〕」⁴³と、少しも妥協しなかった。それが直接的な理由となったかどうかは確定できないが、次の年には惲鉄樵の編集長職が解かれ、第9巻からは王蕙章が再び編集長の座に返り咲いた。その後も『小説月報』に謎や謎話類の文章は載せられているものの、「遼漢齋」や「橐園」のような長編連載は見られなくなったのである。

上述のように、『小説月報』において謎話の連載は一旦下火になった。ところが、およそ同じ時期に『申報』の文芸面「自由談」に「謎話」という欄が創設された。そして1916年11月から1918年12月までの二年間、「謎話」欄には多数の謎話文が掲載された。全国的に発行部数の多い『申報』の影響で、「謎話」が社会的に馴染みのある語彙となったのではないかと考えられる。「謎話」欄の文章は、最初は「自由談」編集部の編集者、特にその中の一人、鴛鴦蝴蝶派⁴⁴の代表作家である陳栩^{ちんく}が「栩園」と署名して書いたものが多い。また、栩園が自分の周りにいる謎人の名前や良作と思う作品を「謎話」欄で紹介すると、名前が挙げられた人物が彼の代わりに次の「謎話」欄に投稿するようなこともある。こうして徐々に「謎話」欄の執筆者はバトンタッチされていった⁴⁵。

また1917年7月6日の『申報』には、同年4月に刊行された謎話集、薛鳳昌編纂／惲樹珏校訂『遼漢齋謎話』と張起南撰『橐園春燈話』（いずれも文藝叢刊甲集、上海：商務印書館）の書籍広告もたびたび載せられており、そのキャッチコピーにも「此れ小道と雖も、国粹の託す所なり」という言葉が入っている。さらに、『申報』「自由談」の「謎話」欄にも長編連載が現れ、例えば1918年10月11日から謝会心の「文虎識略」が14回に亘る連載作品として掲載されたが、その「文虎識略」の冒頭にも「文虎は国粹とは言えないが、四書五経、詩、古文などはすなわち国粹である〔文虎非国粹、四子五経、詩、古文辞則国粹也〕」⁴⁶と惲鉄樵の言葉がそのまま引用されている。このように、謎を国粹保存の手段と観るべしという説は「小道」論に次いで広く用いられた。

四 「博奕猶賢」論の危機

1920年代に入ると、五四・新文化運動の衝撃を全面的に受け、一部の小説雑誌が新文化思潮に乗って編集方針を変えた。例えば、同じく王蕙章が編集長を務める『婦女雑誌』には、1919年の第5巻まで「謎画徴射」の欄が設けられ、燈謎が載せられていたが、1920年から白話を主体

⁴³ 同上、第8巻第1号、1917年1月、「編輯余談」6頁。

⁴⁴ 「鴛鴦蝴蝶派」とは民国初期において活躍した文学グループ。主に才子佳人の恋愛小説を多く創作した。その名は晩清の小説家魏子安の作品『花月痕』中の詩句に由来する。

⁴⁵ 『申報』「自由談」の「謎話」欄は1916年11月13日から創設され、13日、16日、17日、20日の文章が署名「栩園」である。そのうち20日の謎話に鄭琴薫の「愛菊軒謎」が紹介され、その次に掲載された11月25日の「謎話」は鄭琴薫による投稿となっている。その後の二年間、「謎話」欄は週に一回ぐらいの頻度で「自由談」に登場し、読者投稿の数が多くなる。

⁴⁶ 『申報』（上海）1918年10月11日、第14面。

とする文体に変わり、謎のほうも「白話謎語」と変わった。一方、一部の雑誌は「足を削って靴に合わせる〔削足適履〕」⁴⁷ように新文化思潮に同調することを拒否し、停刊を決意した。そんな中、北京、上海における影響力の大きい謎社は次々と解散した⁴⁸。

しかし、20年代中期になると再び謎が流行するようになる、という興味深い現象が見られる。1925年に『東方雑誌』第22巻第8号に掲載されたW生の「謎之話」は、当時上海で流行っていた「詩謎」について、次のように記し、評価を下している。

近来上海で新しい流行病が発生している。その流行りはあまりにも速く、広く、何ヶ月も経たないうちに、少しでも文字を識っている人には殆どこの病が感染した。この新しい病を「詩謎狂」と呼ぼう。詩謎は本来、雅人たちが行う盛事（めでたい行事）であったが、現在は上海において最も普及した遊戯となった。上海の遊戯場と公共娯楽地に行けば、あららこちらに詩謎の屋台が見られる。殆どの小報（赤新聞のような頁数の少ない新聞）の後ろに「詩謎徵射」という広告がずらりと載っている。最も遊び好きだった上海人は、こぞって音韻諧律に浸り、国粹であるマージャンも、ヨーロッパ伝来のトランプも、全て投げ捨てた。結局古本屋がいい商売になり、昔から売れない知られざる詩集や試帳詩（科挙試験に応じて作られた詩）、『詩韻合璧』『佩文韻府』⁴⁹などがすべて売り切れとなった。前人曰く、六朝時代は野菜を売る傭人ですら風雅な気質を帯びていたと。今日では、上海の洋行（外資企業）職員や店の店員、誰も彼もみな詩人となっている。「雅道が喪われた」という憂慮はもはや要らないだろう。

近来在上海発生了一种新的流行病、流行的很快、很广。不上几个月、差不多识几个字的人都传染这病了。这个新病可以称作「诗谜狂」。诗谜本来是一种雅人胜事、但现在却变成了上海人的最普遍的游艺。走进上海的游艺场和公共娱乐地、东也是诗谜摊、西也是诗谜摊。每张小报的后幅、都登满了「诗谜徵射」的广告。最爱「白相」的上海人、现在却大家都在那里干那咿唔咕啾的勾当、把国粹的麻雀、欧化的扑克、都弃而不顾。结果是旧书摊做了好生意、向来自少人过问的冷本诗、试帖诗、以及诗韵合璧、佩文韵府、都销售一空。从前人说、六朝卖菜傭、都带风雅气、现在上海的洋行朋友、商店夥计、却个个都变了诗人。我们可以不用再忧什么「斯文道丧」了。

現代になると、物質の進化が精神の進化より迅速であるがため、現代人は朝から晩まで現実の物質的な生活にしか関心を持たず、誰も智慧を使う遊戯などに参加する時間は無かった。テニス、サッカー、水泳、映画、ラジオは現代青年にとって数少ない娯楽である。頭を絞ってやるような文字遊びは当然やる人が殆どいなくなった。最近流行りの詩謎とクロスワード・パズルは、現代における一種の反動と見ていいだろう。ただ当然、その反動が良い現象なのか、悪い現象なのかは別問題である。

到了現代物質的進化比精神的進步更快。現代人一天到晚注意現實的物質的生活、誰也沒時間去作智慧的遊藝。網球、足球、游泳、電影、無線電、是現代青年唯一的消遣品。那種絞腦勞

⁴⁷ 「小説新報停刊啓事」『小説新報』第6巻12期、1920年12月、頁番号なし。

⁴⁸ 北京の北平射虎社は1918年に解散し、その後同人らが隱秀社を成立させたが、1922年に隱秀社も解散された。上海の萍社は1907年に成立し、1921年に解散した。

⁴⁹ 湯文潞輯『詩韻合璧』（1859年）と張玉書・陳廷敬・李光地他奉勅撰『佩文韻府』（1704年）は両方とも清代の韻書（漢字を音韻によって分類する書物）である。

神的文字遊戯、自然没人去過問了。所以最近流行的詩謎与十字謎的遊戯、可以說是現代的反動現象的一種。至於這種反動現象是好的或是壞的、這当然是另一個問題。⁵⁰

新文化の波を押し返して、謎ブームが再来したとも見られるような現象だが、果たしてこの文章の言う通り、それは物質的な生活に対する反動であり、智慧を使う遊戯なのか。まず、そもそも「詩謎」とは何か。主な形式としては、聞きなれない詩句をお札に書き、その中の一文字か二文字を○などで隠し、その隣に四文字か八文字の選択肢を書いて、元の字を当てさせるという「敲詩」または「打詩宝」という別称を持つものである。詩謎に関しては、既に清末に書かれた『津門雜記』の中に記録があり、「風雅に名を託すが、実は賭博なり〔託名風雅、実則賭博也〕⁵¹とされている。この形式は後に徐々に一種の賭け事となり、詩句の文脈に関係なく単なる運試しとなったため、流行りだした二三年後にはすっかり人気を失ったという⁵²。これは、詩句の韻律や文脈にすべて合わせないと字謎が解けない仕組みになっているが、逆に元の句を知っていれば簡単に解答できるため、まさに『鏡花縁』の言うところの「三流の謎」である。「古書店がよい商売になった」のもそれが原因であった。「博奕猶賢」の論と対照して考えると、頗る風刺的な状況とも言えよう。しかし、なぜ新文化運動の後に詩謎が流行り出したのか、恐らくそれは燈謎の低迷と時勢の不安定によって大規模な謎社が解散したためであろう。遊楽場用の燈謎を新たに創作する人がいなくなり、さほど智力と技術も要らずに参考書さえあれば大量に作れるこうした詩謎がそれにとって代わった。

詩謎が賭博の一種へと墮落した状況を経過した後、1927年の「涓廬謎話」は、このような偽りの繁栄に対して、国学の衰微にあわせて下り坂を歩み続ける燈謎の行方を憂慮しながら、最大規模の謎社である「萍社」が解散される前の時代の、上海の遊楽場における燈謎の盛況を懐かしんだ文章である⁵³。それと歩調を合わせるように、『申報』の「自由談」にも十数年ぶりに謎話が再び掲載されるようになった。1927年2月15日には呉蓮洲の「春燈謎話」(第16面)が載り、16日には陳栩の「度詞小例」(第17面)が載った。さらにその一年後、萍社の元メンバーによる大中虎社が成立し、1928年3月27日の「自由談」に「大中射虎記」(第17面)が掲載された。その後も「自由談」には大中虎社の活動の告知や「射虎余談」⁵⁴などが載せられていた。

各々の新聞紙、雑誌に掲載するだけでは交流と議論を交わす場がまだ十分ではないと感じる人々により、燈謎及びそれに関する創作談などの文章をまとめて掲載する専門誌の必要性が認識されるようになった。まずは上海で1930年から1931年にかけて全2巻27期発行された『文虎半月刊』には、主に創作論が載せられ、燈謎の学術化の傾向が最も鮮明に現れている。1931年の第2巻10期に掲載された謝会心の「科学謎話」に書かれているように、「昨今科学が発達し、文化が日々進歩している。古籍旧書の類は大体放棄された。潮流に同調する為には全ての謎を新

⁵⁰ W生「謎之話」『東方雜誌』第22巻第8号、上海：東方雜誌社、1925年4月、67-70頁。

⁵¹ 張燾『津門雜記』、沈雲龍主編・近代中国史料叢刊第五十七輯、565、台北：文海出版社、1970年10月、232頁。

⁵² 茸餘「詩謎」『申報』(上海)1935年8月13日、第12面。

⁵³ 楚聲「涓廬謎話」『錢業月報』第7巻第1-2期、上海：錢業公会、1927年2-3月、186-88頁、190-92頁。

⁵⁴ 『申報』1928年4月5日、5月4日、5月19日(「自由談」の余白)に燈謎会の告知があり、7月28日(第17面)に穹漢の「射虎余談」が載せられる。1929年から1930年にかけて謎話が時々『申報』「自由談」に載る。1929年10月10日(第18面)に思圃「西泠謎話」、11月10日(第17面)に養田「新世界射虎記」、12月26日(第11面)に荆夢蝶「射虎小紀」、1930年2月20日(第17面)に養田「射虎大会誌略」、12月19日(第11面)に蔗根「滑稽謎語」、12月29日(第13面)に薛韻柏「文虎小語」などがある。

しい面目に変えなければならない〔現今科学昌明、文化日進、古籍旧書、類多放棄。為迎合潮流計、所有謎語、又不得不換新面目〕⁵⁵と、謎人が積極的に新しい変化を求める姿勢を打ち出している。その後は戦争の影響によって編集者が上海を去り、1936年に湖北武昌で再開された。梁実秋はその年に「科举が廢れ、謎の一道は衰えていくだろう〔科举已廢、猜謎一道將要式微了罷〕」⁵⁶と書いているが、実際には、その後も上海に『黒皮書』、『虎会』など謎の専門誌が創刊され、謎話の掲載数は減らなかった。そんな中、「謎話小史」⁵⁷のような「謎話についての話」も現れたのである。これは、燈謎を国粹保存の一端とみなす意識よりさらに一步進み、そこに新思潮を組み込もうとする変化を示している。

清末民初期に出版された謎話本の中で、最も代表的なのは張起南の『橐園春燈話』である。張起南は、字は味鱸、号は橐園、福建省永定県出身の謎人である。73000字という文字量は当時ほかの謎話本を遙かに超え、創作理論を説明する際に例として挙げられる自作文義謎も3000題ほど書かれている。『橐園春燈話』のために序を書いた人の中に、張起南と同郷である桐城派古文家・翻訳家りんじよの林紓がいる。林紓は当時『小説月報』において、漢文体で外国小説を翻訳することで名高い文化人であった。張起南とは同じ地域の出身ということで、恐らく学縁的な繋がりを持っていたのだろう。もう一人の序文作者は同光派詩人の陳衍であり、彼もまた福建省の出身である。彼は序文の中で、自分も少年であった頃に文義謎を愛好し、自作の文義謎は張起南と似たような作風だったと告白している。さらに、

それは文字学の方法を用いて文字の意義を転化させており、経典が今文学家と古文学家に読まれる場合に意味が異なるのと同じく、上下の句読を移動させているからこそ、意表をついた変化をし、日々無窮なアイディアを出すことができるのだ。

故非用小学通段之法、以轉移文字、与今古文家読経各異之例、以上下句読、亦安能出奇变化、日出而不窮哉。⁵⁸

と文義謎のメカニズムに関する叙述もしている。『橐園春燈話』は、林紓と陳衍のような当時の文化界における有名な人物に序文を書いてもらうことで、他の謎話本より高い宣伝効果が得られた部分もあったのではないだろうか。

『橐園春燈話』の最大の特徴は、作者自身の経験と作品とを中心とした叙述及び分析にある。創作理論を論じる前に、彼はまず自分が置かれていた地域社会の環境や、一人の謎人として成長してきた過程、及び自分の努力によって出身地以外の地域で文義謎ブームを引き起こした経緯などをかなり詳しく述べている。特に、科举教育を受けた旧知識人の一員として、どういった流れで文義謎に出会い、それに魅了され、一創作者として文義謎ブームに身を捧げたかといった内容は、実は既出の他の謎話本にも謎書にも筆記類にも見られず、他の謎人が語らなかったものである。『橐園春燈話』には、謎人の交流が生き生きと披露されている。

さらに、張起南は自分の創作に対して明確な理念を主張していた。つまり、「底と面の自然な対応関係を追求し、古人が言う『玉製の蓋で玉製の箱を覆う』ような謎こそが最も優秀な謎であ

⁵⁵ 『文虎半月刊』の原本が入手できないため、趙首成・邵濱軍主編『古今優秀燈謎鑑賞辞典』（桂林：漓江出版社、1991年6月）、789頁から引用。

⁵⁶ 梁実秋「談謎」『緑洲月刊』第1巻第2期、北京：緑洲月刊社、1936年5月、214-16頁。

⁵⁷ 范煙橋「謎話小史」『衛星』第1巻第2期、蘇州：国学会、1937年2月、49頁。

⁵⁸ 陳衍「序四」、張起南『橐園春燈話』（上）、漳州：福建省漳州市燈謎協会翻印、1986年、2頁。

り、謎面はなるべく成句を使うようにする〔余作謎主張典雅一派、必底面天然配合、如古所謂玉合子蓋玉合子底者、乃爲上品。面貴成語〕⁵⁹ということである。彼は謎における「書家・江湖（文人・民間）」という区別を非常に意識していた。この「書家・江湖」についての議論は『邃漢齋謎話』にも見られるが、それは光緒34年（1908年）に創刊された雑誌『国学萃編』で、文義謎の投稿を募集する知らせの中にあつた「書家（文人）的構想の作だけを掲載し、江湖（民間）的なものは一切掲載できないことをご了承ください〔書家意者方能照登、江湖意者恕不登録。〕」⁶⁰という言葉に由来すると考えられる。つまり、当時の謎人には、民俗的な謎と自ら一線を画する意識がかなり強く見られたのである。しかし、張起南が推賞する「玉製の蓋で玉製の箱を覆う」という創作方法には、一つ不利な点がある。それは、

謎面と謎底が自然に配合している文義謎の多くは、すでに前人に先取りされている。わざと剽窃したわけではないにも拘わらず、読者から見れば、どうしてもその疑いがあるように見える。

謎之底面天然者、前人已捷足先得。雖非有心抄襲、而見者終不免有掠美之疑。⁶¹

という問題である。このような現象について、張起南は「限りのある書が限りのない文義謎創作者に使われているため、重ならないほうが不自然だ〔以有尽之書供無窮制謎家之用、万無不同之理〕」⁶²と述べている。つまり、彼は典故成句を使う創作方法を高く評価し、推賞しながらも、それに伴う大きな限界を認識し始めたのである。その限界を克服するためには、文義謎創作の材料を伝統的教養から新時代の教養へと少しずつ移行させるか、または新しい創作方法を見つけて変化を求めるとしかなく、文義謎創作に対する理論的な思考が必要とされた。

近代化が進む中、旧知識人が共有してきた伝統的知識をどう活かせるか、様々な試みが行われていたわけだが、新文化運動の時期に入ると、文義謎の中に新しく白話文体や西洋から伝来した「新学」の内容なども含ませようと、謎人らは試行錯誤を繰り返した。例えば、謎面は依然として儒家經典などを用いるが、解答のほうが近代的な名詞や時事に関するものになる文義謎も多く創作された。文義謎を通して、旧学と新学を繋ごうとする傾向が見られるのである。こうした近代文学・近代思想の要素が含まれる新しい形の文義謎の発生経緯を解明するための一次資料としても、謎話本は非常に重要だと考えられる。

亢聘臣の『紙醉廬春燈百話』は、文義謎の新しい動向について、近年では白話文体が流行しているため、白話で燈謎を創るのも新鮮であると書いている。また彼は、浙江省の謎人・許紹蘭らが半月形の燈籠を用いた燈謎を行い、燈籠を東西半球に分け、東半球には黄色い紙、西半球には白い紙を貼り付け、東半球に書かれる謎は伝統的内容を謎底にしたのに対し、西半球に書かれるのは新学、つまり欧米の学問知識を内容にしたものになっている、と他の地域で行われた新しい活動形式を紹介している⁶³。

⁵⁹ 張起南「橐園春燈話」『小説月報』第七卷第二号、1916年2月、「雑俎」10頁。引用文中の「玉合子蓋玉合子底」とは、宋代の尤袤『全唐詩話』の中に記録されている唐代の詩人・劉昭禹の言葉であり、原文は「玉合子底、必有蓋、但精心求之、必獲其寶」とある。尤袤『全唐詩話』王雲五主編叢書集成初編、上海：商務印書館、1936年、61頁。

⁶⁰ 徐珂編『清稗類鈔』第29冊、上海：商務印書館、1917年11月、204頁。

⁶¹ 張起南『橐園春燈話』（下）、漳州：福建省漳州市燈謎協會翻印、1986年、50頁。

⁶² 張起南『橐園春燈話』（下）、50頁。

⁶³ 亢聘臣「紙醉廬春燈百話」『吳人謎話文獻三種』、蘇州：蘇州市謎学研究会、2009年12月、

1917年に王文濡が編集した『春謎大観』の序文には、

近年に張起南君の『橐園春燈錄』があり、中では博学文雅なもの、または斬新なアイディアに長じた謎、或いは曲がりくねった奇抜な謎など、要するに全部が新しい機軸を出しており、旧来のスタイルを脱している。

近又有張起南君橐園春燈錄、或以博雅見長、或以新穎擅勝。非不自成機杼。⁶⁴

と書かれている。張起南は新時代に応じて、文義謎に入れるべき内容を詳しく分類した。科学のジャンルには、天文・地理・算学・図画（美術）・音楽・外国語などが入っており、政治のジャンルは外交・内務・財政・陸海軍・司法・教育・農商・交通などに分け、さらに時事のジャンルには総統・人材・政体・改革・文明・新政・経済・外患・内憂などが含まれている。彼が考えた「新機軸を出」す文義謎を挙げてみよう。

Morning 漢字一 譚⁶⁵

解釈：morningを「西」洋人が「言」う「早」朝のことであると解釈し、「言」「西」「早」の三文字を組み合わせると「譚」になる。

孫文反抗政府 左傳一句 中山不服（『春秋左氏傳・定公四年』）⁶⁶

解釈：孫文の字が「中山」であるため。

彼は謎かけが漢字文でなければならないという認識を根本的に覆し、また現に発生している大きな歴史的な事件を材料に、時代の流れを即時に記録し表現する手段として、新しい創作手法を試みたのである。さらに、彼は文義謎の創作を化学的過程に譬えている⁶⁷。それは、文義謎を創作する時の経典の使い方と一般の学問をする場合とはかなり異なっており、逆転する発想やインスピレーションが必要だからである。文義謎的思考法とも言えるこういった思考回路を持っていなければ、恐らく儒家経典などを謎の材料として認識することは不可能であろう。つまり、化学的過程のように、本来の性質を変えることである。どんなに重要な思想が書かれている聖賢の経伝であっても、文義謎の材料にすれば、必ず本来の意義から離脱しなければならない。「故に古い観念を捨てきれずにいる人には文義謎の創作ができない〔故迂拘之士不可以言謎也〕」⁶⁸と彼は強く主張した。

こうして、漢字・漢文自体の存廃さえも問題提起される中、文義謎は経学とほぼ同じ長い時間に亘って漢文学に依存しながらも、漸く自らの分野を確立し始めた。張起南などパイオニア的な謎人らが緊迫感を持ち、それぞれ文義謎を生き残させるための試みを行ったからである。

五 民俗学との角逐

⁶⁴ 萍社同人輯『春謎大観』（国立北京大学中国民俗学会民俗叢書）、台北：東方文化書局、1974年、1頁。

⁶⁵ 張起南『橐園春燈話』（上）、28頁。

⁶⁶ 同上 29頁。

⁶⁷ 同上 20頁。

⁶⁸ 同上 21頁。

既に述べてきたように、謎話は最初の「博奕猶賢」論から「小道可觀」論、「国粹保存」論まで、雅文学志向を次第に強めながら、謎人の中で広く行き渡ることになった。こうした謎話に見られるように、文人の謎を民間の謎や児童の謎と区別しようとする傾向が徐々に鮮明になる一方、新文化運動の波に押され、燈謎は時には低調に陥り、時には活路を見出し、試行錯誤しながら新しい形式を模索していたものと見られる。

20年代末から始まる謎話の再興と同じ時期に、民間に流布する謎が、誕生して間もない中国民俗学の分析の視野に入ることとなった。周作人は「謎語」という文の中で、

原始の制作は常に豊富な想像、新鮮な感覺、醇朴にして奇抜な連想や滑稽を具有するがゆえに、多く詩的趣味を含み、後來の文人の燈謎のようにもつばら織巧さと双関（とば）および暗射（あてこり）をもって手並を見せようというのとは違ふ。すなわち謎語は原始の詩であるのに反して、燈謎は單なる文章工場内の小細工にすぎないのだ。

原始的制作、常具有豊富的想像、新鮮的感覺、醇朴而奇妙的聯想与滑稽、所以多含詩的趣味、与後來文人的燈謎專以織巧与双関及暗射見長者不同：謎語是原始的詩、燈謎却只是文章工場里的細工罷了。⁶⁹

と書いている。

また、広州の中山大学語言歴史研究所によって「民俗学会叢書」として立て続けに三冊の本が出版された。その三冊とは、錢南揚の『謎史』（1928年7月）と劉万章編『広州謎語』（1928年9月）、それに白啓明編『河南謎語』（1929年1月）である。例えば劉万章『広州謎語』には、鍾敬文⁷⁰による序が付いており、そこで文人の謎についてこう述べている。

作品の階級性から言えば、既に半貴族的なものであり、純淨なる民間のものではない。しかし、民衆の中においてその影響力は小さくない。

但就作品的階級論、已可說是半貴族的、而不是很純淨的民間的東西了、雖然在民衆口頭上它的勢力是不小的⁷¹

つまり、民俗学者は「純淨」な「民間的」なものにこだわる姿勢を持っているのだが、一旦民間に降りて収集してみれば、結果的に集められるものは、多くが通俗化された燈謎にすぎないというのである。

さらに、1930年に出版された陳光堯『謎語研究』は、

現在のいわゆる「謎」は二種類に分化している。一種は民間の謎語であり、その性質及び構造には天然の美が現れているため、芸術的価値が極めて高い。（中略）そしてもう一種は旧時の文人が嗜好する詩文謎であり、すなわち前述したいわゆる「虎」または「燈虎」である。

（中略）この種の謎文はとっくに芸術的価値を失っており、完全に彫琢された枯木である。

⁶⁹ 周作人「謎語」、松枝茂夫訳『周作人隨筆』（富山房百科文庫）、東京：富山房、1996年6月、8頁。原文は周作人『自己的園地』晨報社叢書第11種、北京：晨報社、1923年12月、48頁。

⁷⁰ 中国民俗学の開拓者の一人である。

⁷¹ 劉万章編「広州謎語」、高伯瑜等編『中華謎書集成』（第三冊）、北京：人民日報出版社、1997年5月、2529頁。

ただ旧文人らにとって痼習を改めるのが難しく、幾ばくもない余命をかりうじて繋いでいるだけである。

現在所謂的「謎」、有兩種分化：一種是民間的謎語、這種謎語的性質和構造、都有「天然」之美，故極富藝術上的價值（中略）還有一種、則是一般旧文人們所嗜好的詩文謎、亦即上文所謂「虎」或「燈虎」（中略）這一種謎文、早已自失了藝術上的價值、完全是一種雕琢僵枯的死東西。不過一般旧文人們的痼習難改、致他們得以苟延其殘喘罷了。⁷²

と評価を下している。しかし、彼の予想とは裏腹に、科挙時代が過ぎ去り、生命力を失っていたはずの燈謎は21世紀の現在になお生きている。

30年代に発表された謎話の中でとりわけ注目すべきなのは梁実秋の「談謎」であるが、実際、これを謎話のジャンルに入れるべきか否かを判断するのはやや難しい。梁実秋の「談謎」は白話文体で書かれており、謎話というよりも雑文またはエッセーと言ったほうが適切かもしれない。彼は中国における文学的な謎について以下のように論じた。

民間で流行る謎と児童読本の中の謎はさて置き、謎と文人の関係だけを言えば、中国と外国の状況はかなり異なっていると認めざるをえない。外国の謎も文人が書いたものではあるが、性質から見ると民間の、児童の謎とそれほど差はない。どちらも「状物」⁷³の類に属し、題は描写的な文章であり、答えは事物となっている。それに対して中国文人による謎は本物の文字遊戯であり、題と答えの両方とも文字の綴りでできている。故に中国文人の謎は外国の謎よりも奥深く、曲折的で巧妙である。（中略）中国の文人は文筆を弄ぶのが上手く、互いに腹を探り合うような文章を書くのが得意である。八股文や策論を書くのが職業であれば、謎を創って解くのは余興であろう。一貫して文字上において手管を弄することである。後天的に習得するものが遺伝するか否かは言えないが、文字を弄する習慣はもはや中国文人の天性になったのではないだろうか。

不過撇開民間流行的謎和児童読物里的謎不談、單說謎与文人的關係、我們不能不承認、中外的情形相差很遠。外國的謎、雖然是文人做的、在性質上也和民間的兒童的謎沒有多大分別、都是屬於「狀物」一類、其謎面是一段形容、其謎底是一件事物。中國的文人的謎、則真正的是文字遊戯、謎面是一句文字、謎底還是一句文字。因此、中國文人的謎、比外國的深奧、曲折、工巧（中略）中國文人最善於「舞文弄墨」、最善做勾心鬪角文章、做八股文做策論是他們的職業、做謎猜謎也是他們的余興、一貫的是在文字上翻花樣。後天獲得的習性是否遺傳、我們不敢說、不過在文字上翻花樣的習慣、確像是已變成為中國文人的天性了。⁷⁴

同じく謎人ではなく、謎人を傍観する文人が書いた評価として、梁実秋のこの文章は1889年に書かれた「燈謎説」に比べると意識の変化が著しい。「燈謎説」は燈謎と西洋の謎が共通点を持っていることを強調しているのに対し、梁実秋は中国文人の謎と外国の謎とに性質上の差を見出し、両者における最大の区別は文字にあることを指摘している。

梁実秋と同じように、燈謎と八股文の関係に関しては、周作人も1930年に「八股文を論ず」

⁷² 陳光堯編『謎語研究』王雲五主編・百科小叢書、上海：商務印書館、1930年12月、2頁。

⁷³ 「状物」とは、主に物体や景色を描写する文章を指す。

⁷⁴ 梁実秋「談謎」『緑洲月刊』第1巻第2期、北京：緑洲月刊社、1936年5月、63-65頁。

や1940年前後に書かれた「漢文学の伝統」などで度々論じていたが、1932年に行った講演「中国新文学の源流」では燈謎を「低級」なものと呼んでいる⁷⁵。これは彼が民俗学者として抱いた民衆文化観を拠り所とするものであった。

このように、文人の謎が時代遅れの旧物であるという意見は民俗学の中で高まっていた。民俗学者は「謎語」を選んで純朴な民間の謎を指すことにし、「燈謎」「燈虎」などの積弊を不純物とみなして排除しようとした。一方、謎人のほうは既に彼らの中で文人の謎に関し、一つの理想像を作り上げていた。その理想像には、博奕より有益な娯楽性を持ち、小説と同じく文学性と啓蒙性に優れ、儒家經典や伝統的教養と同じく国粹保存の対象として大事に扱われるべしといった要素が詰められていた。中国の「謎」のあり方に対する両者の認識が葛藤し、歩み寄りにくい状況に陥った。したがって、「燈謎」と「謎語」概念の分離は謎人と民俗学者両方に引き裂かれた結果と言えよう。

六 おわりに

本章の議論を最後にまとめておきたい。本章はなぜ現代中国語において「燈謎」と「謎語」の区別が一般化したか、という疑問から出発し、一次資料として謎話という時代的特徴のある文学スタイルを取り上げた。謎話に見られる意識の変化は、清末民国期における社会運動に対する中国文人の独自の解答という側面を有していた。謎話は漢字の表意文字としての特徴と長い科挙時代を経て累積してきた伝統的教養とに基づき、新文学運動による新思潮を吸収しつつ、近代ジャーナリズムの波に押されるだけでなく、自らも積極的に社会に影響を与えてきたことが明らかである。

本章では、科挙時代の伝統的教養を存続させようとしながら、執拗に新文化運動に抵抗するのではなく、新旧知識の流れを漢字文化で統合しようとした、独自の道を拓く文人集団としての「謎人」の活動を分析した。謎人らが使った代表的な論点である「博奕猶賢」「小道可觀」「国粹保存」はいずれも一見伝統的な儒家思想だが、文脈を考察していくと、それぞれ当時の社会的思潮を取り入れており、積極的な意識の変化が見られる。それらの意識の変化には四つの段階がある。博奕を超えて啓蒙への変化、そして、「小道可觀」を超えて「小道実難（小道を極めることの難しさ）」へという意識の変化、さらに、燈謎に対する認識は「やってもやり損じないもの（文人遊戯）」から「保存すべきもの（国粹）」へと発展し、最後には、「保存」と新しい作品スタイルの「創造」が繋がった。燈謎が現在もなお存続しつづける理由は、中核的な要素である漢字が持つ巨大なる生命力や漢字文化の包容性などのほか、前述したような文人集団の意識の変化が大きな推進力となっていることにある。ただ、「燈謎」と「謎語」の関係をどのように理解し、燈謎の学術化が民俗学を始めとする近代的学術にどのように接近したかに関しては、視座を変えて考える必要がある。

本章は清末から民国期に発表された謎話及び関係する資料を分析し、代表的な論点を選択して「燈謎」と「謎語」が異なる概念となった過程について考察を試みたが、各謎話の中で展開される具体的な論点や燈謎作品の分析に関しては考察が及ばなかった。漢字文化の背景にある社

⁷⁵ 周作人「論八股文」、同／止庵校訂『看雲集』周作人自選文集、石家庄：河北教育出版社、2002年1月、77頁。周作人「漢文学的伝統」同／止庵校訂『葉堂雜文』周作人自選文集、石家庄：河北教育出版社、2002年1月、10頁。周作人／楊楊校訂『中国新文学的源流』二十世紀国学叢書、上海：華東師範大学出版社、1995年12月、33-34頁。

会的思潮の変遷に沿って考察すれば、そこにはまだ多くの解明すべき「謎」が残されている。漢字文化の一事象である燈謎を開口部にし、漢字とイデオロギーの関係性の解明を今後の課題にしたい。

[附表] 清末民国期の雑誌における謎話初出一覧（筆者が原文把握したもののみ）

初出年	篇名	作者	雑誌名（出版地）	巻号
1889年	燈謎説	不明	益聞録（上海）	第901期
1904年	棟蓴室談虎	不明	新々小説（上海）	第1巻第3期
1908年	謎話巻一	古銘猷	国学萃編（北京）	第1期
1909年				第2、4、6-8期
1911年	簧冷軒謎語	心月	小説月報（上海）	第2年第10期
1913年	慧観室謎話	周効璘	庸言（天津）	第1巻第5、6、10期
	慧観室謎話（転載）		民国匯報（上海）	第1巻第3期
1914年	邃漢齋謎話	薛鳳昌	小説月報（上海）	第4巻第1-3、5-7、9-10号 第5巻第1-12号
	謎語	謝明新	学生雑誌（上海）	第1巻第6期
	邃漢齋謎話	薛鳳昌	小説月報（上海）	第6巻第1、4-5号
	談虎偶録	徐枕亜	中華小説界（上海）	4月
1915年	談虎	蟄夫	江蘇省立第五中学校雑誌（常州）	第1期
	制謎叢話	慧因	文星雑誌（上海）	第1、2期
1916年	留有余齋謎話	誥	清華週刊（北京）	第74、77、79期
	橐園春燈話	張起南	小説月報（上海）	第7巻第1-12号
1917年	別有会心室談虎	張惟一	小説新報（上海）	第2巻1-11期
1918年				第2巻12期、 第3巻1-11期
1918年	芬陀利室隨筆	不明	小説月報（上海）	第3巻12期
1919年				
1920年	春燈談虎録	窃九生	小説月報（上海）	第11巻第12号
1921年	弗措齋謎話	劉樽	鐵路協會會報（北京）	100期
	滴翠齋謎話	謝雲声	新声（上海）	第6期
	廢物謎話	王文濡	遊戯世界（上海）	第1期
1922年	謎話	廉	蘆墟（江蘇省蘆墟）	創刊号
1925年	謎之話	W生	東方雑誌（上海）	第22巻第8号
1926年	吳諺謎話	蔣吟秋	新月（上海）	第1巻第6期
1927年	龢仏説謎	（不明）	坦途（北京）	第4期

	渭廬謎話	楚聲	錢業月報（上海）	第7卷第1、2期
1928年				
1929年	謎話：謎格	趙宗仁	學生文芸叢刊（上海）	第5刊第4期
	談謎	今勇齋	文芸月刊（北京）	第1期
1930年	謎學概論	施鵬翼	東北大學週刊（瀋陽）	第86-88期 第89、90期
	文虎話	紺珠室記者	墨海潮美術月刊（上海）	第2期
1931年				
1932年	謎話	笨	前驅（漳州）	第58期
	謎屑	紅羊	萬歲雜誌（上海）	第1卷第7期
	談虎	沈中路	珊瑚（蘇州）	第1卷第9期
	紙醉廬謎話（轉載）	亢聘臣		第1卷第1、3、5、7、9、11期 第2卷第1、4期
1933年	謎話	剪刀	十日談（上海）	第5期
	謎話	沈中路	珊瑚（蘇州）	第1卷第11期、第2卷第2、8、9、11期 第4卷第1期
1934年	蘆廬謎話	楊潔溪	協力月刊（北京）	第2卷第4-7期
	春燈溯源	楊汝泉	國聞週報（天津）	第11卷第9期
	春燈辨疑	楊汝泉		第11卷第13期
1935年	談人名謎	鹿萃	清華暑期週刊（北京）	第10卷第1期
1936年	如是我聞·打燈虎兒	關宗瓚	華語月刊（上海）	第56期
	談謎	実秋	綠洲月刊（北京）	第1卷第2期
	觚哉軒謎話	王壺隱	現象月刊（上海）	第14、15期
	不變色的談虎/輟耕談虎錄（謝會心）、季芳談虎錄（不明）、謎壇雜錄（碧波）、談虎百則（李笠僧）、願無病廬謎話（胡緗青）、我之謎生活（管雪齋）、叙謎（鄔鴻軒）			文虎半月刊（武昌）
1937年	春燈談虎錄	李鐘承	衛星（蘇州）	第1卷第2期
	謎話小史	範煙橋		
	謎話	阿倩	江南汽車旬刊（南京）	第68-71、74、75期

1938 年	遺鴻樓譚/談虎 (張東海)、射餘錄 (放翁)、文虎雜譚/談 (海)、文虎摭譚 (祁仲書)、含犀霏玉軒談虎 (律西)、見青山館謎話 (周見公)、一知半解室談謎 (振)、拾唾錄 (二王館主)		黑皮書 (上海)	
1939 年	秋燈夢憶	打虎將	立言畫刊 (北京)	第 37 期
	寄影軒謎話	鷓鴣		第 45 期
	文虎雜譚	祁仲書	五雲日昇樓 (上海)	第 1 卷第 4-11、13-21 期
	春雨軒談虎	行者		第 1 卷第 8、10-17、19-20 期
	春燈新話	舜年		第 1 卷第 35-43 期
1940 年	春節話春謎	袁之	新民報半月刊 (北京)	第 2 卷第 4 期
	談燈虎	趙征麟	公餘生活 (桂林)	第 3 卷第 6 期
	一十一草堂謎話	一士	立言畫刊 (北京)	第 114 期
完顏氏		第 127、130、164 期		
1941 年	古謎叢談	趙璧如	五雲日昇樓 (上海)	第 2 卷第 12 期
	古今謎話	張郁庭	北華月刊 (北京)	第 1 卷第 2-4、6 期、第 2 卷第 1、2 期
1942 年	謎話 (轉載)	古銘猷	芸林月刊 (北京)	第 116 期
	一十一草堂謎話	完顏氏 / 一士	立言畫刊 (北京)	第 180 期、第 213 期
1944 年	謎學	嘒虹	光化 (上海)	第 1 卷第 2 期
	談文虎	啞因	古今半月刊 (上海)	第 38 期
	燈謎餘談	宓雅		第 54 期
1947 年	猥褻謎話	禹	公平報 (香港)	第 1 卷第 11 期
		禹門	新上海 (上海)	第 65 期
1948 年	說燈謎	朝春	宇宙文摘 (重慶)	第 2 卷第 1 期
	梅廬謎話	戈歌		
	燈謎小談	陳漢章	平漢路刊 (漢口)	第 38-42 期
	春燈隱語	知止居士	永安月刊 (上海)	第 106 期

1948 年	拉雜談謎/謎話/謎談 /談謎/謎語（王壽 富）、談虎說謎（鐘 靈）、文虎拾零（周 濁）、文虎談叢/文虎 閑話（心觀）		虎会（上海）	
--------	---	--	--------	--

第Ⅱ部 燈謎の近代実践形態の形成

第四章 二〇世紀台湾の謎社——文化政策の変化を手がかりに

一 はじめに

1937年の日中全面交戦開始後、大陸における燈謎がついに発展の勢いを失い、活動する謎人と謎社の数が大幅に減少した。終戦後、大陸の燈謎活動は一度回復するが、1966年からの文化大革命によって、燈謎はおよそ10年間大衆の視野から完全に姿を消した。約40年間にわたる低調な時期を経験した後、改革開放政策の実施とともに、とりわけ改革開放第二段階の1989年以降は、中華全国総工会が全国で設立した労働者福祉施設である「工人文化宮」の燈謎活動グループが次々と立ち上がったことをきっかけに、大陸各地のみならず、台湾、香港、タイ、シンガポール、マレーシアなどの地域との交流も盛んに行われるようになり、ようやく燈謎活動は活気を取り戻した。

一方、台湾においては、大陸の文革とほぼ同時期に中華文化復興運動が推し進められており、これを背景に燈謎活動は活発化の様相を呈していた。台湾海峡を跨って眺望すると、以下のような特徴が看取できる。燈謎活動は20世紀前半において、社会的な文化様相の変化に大きく左右されていたが、それ以後は近代国家の文化政策に統轄されるようになった。香港や東南アジア諸国の華人社会などにおいても燈謎活動は見られるが、範囲と影響が比較的に小さいため、大陸と台湾のように文化政策との緊密な連動性は確認できない。言うまでもなく、長い植民地支配による漢字文化の衰退と漢字漢語のマイノリティ境遇が主な理由となるだろう。したがって、漢字文化の受容と国家の文化政策の関係性を明らかにするためには、大陸と台湾における燈謎事情が恰好の事例であり、対抗的な政治イデオロギーに基づいた異なる文化政策の下で、同じルーツを持つ文化ジャンルがどのようにしてローカル・アイデンティティを創出するかを研究するには、大陸と台湾を比較して考察する価値がある。本章はその基礎作業として、台湾の謎人と謎社に焦点をあてる。

大陸と同じく、台湾では燈謎を学術的に捉える研究はいまだに少ない。出版された関係書籍は主に謎集や入門書、或いは燈謎の歴史を紹介する書籍に限られている。近年書かれた燈謎に関する修士論文は3篇ほどあり、いずれも地域に密着し、それぞれ言語学、民俗学、地域文化の視座から行った研究である¹。台湾の文化政策に関する実証的な研究は、台湾の林果頭と日本の菅野敦志のものが代表的である。これらはいずれも政府側の動向を中心とした分析であり、文化政策の実施効果が主に記されており、民間レベルにおいて展開される具体的な文化活動の内容についてはほとんど言及していない。例えば、林果頭は『中華文化復興運動推行委員会』之研究（1966-1975）」の中で「文復会が成立する前に行われた多くの活動は、元々あった娯楽に文復という衣を着せたものであり、マジックショーや登山、遠足などが本当に中華文化の発揚につながるのか、謎をやれば固有道徳への理解を深めることができるのか²という疑問を呈している。こうした反応から見ると、文化政策に従って活動を組織する側、活動に参加する民衆側に着目した検討が欠落していると思われる。

ただ、本章の考察対象はあくまでも謎社を中心とした台湾の燈謎活動であり、台湾における文化政策の全貌ではないため、文化政策の視点に沿って、台湾における燈謎の歴史と活動状況を整理し、とりわけ、中華文化復興運動前後の様子を比較した上で、燈謎と文化政策の連動性について考察した

¹ 王思明「屏東市慈鳳宮、帰来慈天宮元宵燈謎研究」、国立屏東教育大学中国語文学系碩士論文、2009年7月；陳淑慧「台語燈謎語義處理認知過程之研究」、国立新竹教育大学台湾語言与語文教育研究所碩士論文、2009年7月；王淑芬「鹿港当代燈謎研究」、国立彰化師範大学台湾文学研究所台湾文学教学碩士論文、2012年7月。

² 林果頭『中華文化復興運動推行委員会』之研究（1966-1975）」、国立政治大学歴史研究所碩士論文、2001年7月、53頁。

い。政体の更迭と社会の激変がある中、清中期から現在にかけて台湾における燈謎活動はなぜ継続されてきたか、台湾燈謎が現在直面している問題などを中心に検証していきたい。

二 近代台湾における燈謎活動

台湾における燈謎の歴史については、先行研究に前述した王淑芬「鹿港当代燈謎研究」のほか、婁子匡・朱介凡編『五十年来的中国俗文学』の「台湾謎学」³が挙げられる。また、台湾謎人による記述もいくつか見られる。例えば、1956年の黄文虎「台北謎学史」⁴、1967年の陳其寅「台湾燈謎之今昔」⁵、1969年の吳朝綸「台湾謎学沿革史」⁶、1977年の吳朝綸「概説台湾謎学」⁷、1995年の范勝雄「五十年来的府城燈謎」⁸、2011年の朱瑞壙「台湾的謎壇」⁹などがある。本章はまず、これらの資料を基に近代台湾における燈謎の歴史を簡単に整理し、近代以降の変容を分析するための土台としたい。

1. 日本統治時代以前（1661-1895）

燈謎が台湾に伝わった時期を鄭氏政権期に遡る論者がいたり¹⁰、また民間では「鄭成功設謎招賢士」¹¹という説話が伝承されていたりするようであるが、史実資料が見当たらないため、仮説の域を出ていない。台湾における燈謎に関する最も古い記載について有力な説は、乾隆16年（1751年）に巡台御史として着任した錢琦によって書かれた「台湾竹枝詞」であろう。そこには次のように記されている。

樹木のような花火が壁際に打ち上げられ 煙火花樹弘壁辺
燈籠に貼られている多くの謎を映し出す 映帯春燈謎語多
突然轟く太鼓が聞こえてきたと思えば 忽聴鼓声震喧地
緑旗の野営地で田植え歌が歌われている 緑旗営裏唱秧歌¹²

そのほか、『彰化県誌』「歳時」の一節には、

十五日は上元節であり、その日の夜は元宵と呼ぶ。城中の多くは灯籠が灯され、花綵が飾り付けられ、人々は管弦歌曲をし、朝まで歓遊する。それが「鬧庁」という。煙火花樹、ここかしこに

³ 婁子匡・朱介凡編『五十年来的中国俗文学』（現代中国文芸史叢書）台湾：正中書局、1963年8月、194-200頁。

⁴ 台北市文献委員会編『台北文物』第4巻第4期、台北：台北市文献委員会、1956年2月、111-128頁。

⁵ 羅慶雲主編『中華燈謎』第三十六・三十七期合刊、基隆：基隆市謎学研究会中華燈謎雜誌社、1967年7月25日、第1面。

⁶ 陳祖舜編『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日、第1面。

⁷ 吳朝綸『静閣謎話』（台湾文献類編・台湾先賢詩文集彙刊第八輯 15）、台北：龍文出版社、2011年5月、1-4頁。

⁸ 台南市文献委員会、台南市政府民政局編『台南文化』新三十八期、台南：台南市政府、1995年2月25日、97-101頁。

⁹ 朱瑞壙『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、25-43頁。

¹⁰ 吳朝綸「台湾謎学沿革史」、陳祖舜編『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日、第1面；朱瑞壙『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、25頁。

¹¹ 林祖武「福建謎史初探」、福建省晋江県文化館燈謎協會編『晋江謎苑』第二輯、泉州：泉州師專印刷廠、1986年10月、68頁。

¹² 清代詩文集彙編編纂委員会編『澄碧齋詩鈔八』（清代詩文集彙編 315）、上海：上海古籍出版社、2010年12月、334頁。

映る。物好きは詩謎を作り、俗に言う燈猜である。

十五日日上元節、是夕曰元宵。城中多結綵燃燈、弦管歌曲、歡游達旦謂之鬧庁。煙花火樹、在在映帶、好事者或作詩謎、俗曰燈猜。¹³

と記している。また、『安平県雜記』の中にも清代士人が旧暦8月15日に燈謎を作る風習についての記載がある¹⁴。19世紀中葉には、新竹士人林占梅が台湾最初の園林である「潜園」を建造した後、当地の名流文人による「潜園吟社」が定期的に潜園に集まり、詩を吟じ、燈謎を行ったという¹⁵。その後、1891年に台湾布政使に任じられ、1894年9月15日より最後の台湾巡撫に着任した唐景崧は当時、官庁の庭園である「斐園」に文人を集め、詩と燈謎の創作を提唱し、1893年の冬に2巻本の謎集『謎拾』（得一山房六種に所収）を出した。彼の燈謎は典型的な清代中期以降の主流的な燈謎スタイルであり、高度な儒家的教養が必要とされる作風であるため、直接彼から影響を受けた謎人には「科挙出身の人が多かった」¹⁶という。「唐景崧は台湾で詩謎¹⁷の種を撒いた第一人者であると、詩謎家によって公認されている」¹⁸ため、台湾における燈謎の歴史を語る際、真っ先に彼の名を挙げる人が多い。彼は台湾だけでなく、当時大陸でも名高い謎人であった。清末民初期に絶大な影響力を持っていた謎話である「藁園春燈話」もしばしば『謎拾』を引用、評価していた。『謎拾』が出たわずか2年後に、台湾が日本による植民地支配に置かれるようになったが、唐景崧によって拓かれた台湾の「謎運」は次の時代に続いていった。

2. 日本統治時代（1895-1945）

日治時代早期には、すでに燈謎の風俗が原住民社会に及んでいた。1898年2月6日の『台湾新報』の記載によると、

旧時の風俗として、元宵節には詩人らが燈謎を娯楽とし、そこから多少の佳趣を得て、幽情を気ままに述べていたという。昨日某番戸が出したいいくつかの謎を聞いたが、さほど巧妙ではなく、味わいが足りていない。

旧時風俗、每逢元宵佳節、詩人韻士最好以燈謎做樂、所謂於此中得少佳趣、亦足以暢叙幽情也。乃昨聞某番戸所出若干、則皆無甚巧妙、不足耐人尋味也。¹⁹

『謎拾』は「清末に刊行された書ではあるが、実際、日本統治時代の台湾で流行していた」²⁰。黄永武の「斑瑜謎稿序」によると、次のとおりである。

謎の風は清代から台湾に吹き込まれたが、最初は盛んとは言えなかった。後に版図が一変し、日

¹³ 彰化県文献委員会編纂組『彰化県誌』（道光版）、彰化：彰化県文献委員会、1969年7月、476頁。

¹⁴ 台湾銀行經濟研究室編『安平県雜記』（台湾文献史料叢刊第二輯35）台北：大通書局、1959年、7頁。

¹⁵ 黄文虎「台北謎学史」、台北市文献委員会編『台北文物』第4巻第4期、台北：台北市文献委員会、1956年2月、111頁；呉朝綸「台湾謎学沿革史」、陳祖舜編『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日、第1面；朱瑞壙『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、26-27頁。

¹⁶ 黄文虎「台北謎学史」、台北市文献委員会編『台北文物』第4巻第4期、台北：台北市文献委員会、1956年2月、111頁。

¹⁷ すなわち詩文謎、燈謎。

¹⁸ 婁子匡・朱介凡編『五十年来的中国俗文学』（現代中国文芸史叢書）台湾：正中書局、1963年8月、194頁。

¹⁹ 「未能免俗」『台湾新報』（台北）、1898年2月6日。

²⁰ 王淑蕙「日治時期台湾『燈謎』对『詩經』的運用」、『高雄師大學報』第二十九期、高雄：国立高雄師範大学、2010年、75頁。

本軍の鉄騎によって侵され、左衽の服が礼装となり、経典は禁書となった。そこで遺民らは斯文が墜ちないように、春燈射虎をするたびに経史を使い、文を以て酒宴を催し、時に隠語を多用したため、一時期は謎人を輩出し、辺地でありながら盛事となっていた。

清季謎風伝入台員、初不甚盛、後因版図易色、倭騎憑陵、左衽用作礼服、經典列為禁書、於是遺民欲保斯文之不墮、每假春燈射虎、出入經史、文酒高会、時用隱語、一時謎家輩出、海隅為盛。

21

似たような叙述は『五十年来的中国俗文学』などにも見られる。文化の日本化が強いられる中、なおも燈謎が人々に愛され続けていた理由は何だろうか。菅野敦志によると、「国語」（日本語）教育は当時、日本においても形成途中の段階にあり、さまざまな議論や論争が起こったが、同じ「漢字文化圏」としての統合作用が期待されていたため、日本は台湾統治の後期段階に至るまで漢文や台湾語を排除しなかった²²。しかし、漢文と台湾語が一気に排除されなかったというものの、科举制度が廃止されたというのは確実だった。日本統治者は台湾で近代教育を普及させたが、高等教育機関は1919年になるまで設立されなかった²³。つまり、前時代まで存在した出世ルートが寸断され、次なるルートがまだ用意されていない断層的な時期に、当時の文人たちの間で、持て余された前時代の知識と素養を用いて遊び、文化に費やすという現象が発生したのであった。当時、台湾の漢文教育は植民政府による重圧がかけられたが、漢文学の中に唯一奇跡的に存命させられ、ひいては生々発展していたのが漢詩である。なぜなら、日本統治者にとって、詩人らの活動に時々加わることが台湾の知識人を懐柔するための恰好な手段であったからだ²⁴。その状況は次のような当時の詩文からも読み取れよう。

台湾が割拠された後はどうなったか	台湾割後竟如何
漢学を学ぶ儒生の多くは落ちぶれた	漢学儒生落拓多
八股文は使い所をなくなり	八股文章無用処
ほとんどが詩魔と化した	大都個々變詩魔 ²⁵

実際、日本統治時代には台湾に300前後の詩文社があったといわれている。詩文社活動の傍らには、燈謎も行うのが一般的な状況であり、多くの詩社に燈謎部が設けられていた。出版物においては『台湾日々新報』などにたくさんの燈謎が載っていた²⁶。

そして、日本統治時代中期には、詩文社から燈謎部が独立し、純粋な燈謎社团として「觚觶謎学会」と「万華学謎会」が1920年に成立した。連雅堂が1924年に立ち上げた雑誌『台湾詩薈』には、唐景崧の『謎拾』が連載され、清末の刊行から30年ぶりに台湾で流行したのであった。当時の燈謎活動の様子を書いた張純甫の「古陶漁村人四時閑話・春燈話」も1924年創刊の『台湾詩報』で連載され始めていた。それだけでなく、日本統治初期に定められた台湾人が自由に離島できるという政策によって、日本統治中期まで台湾の謎人は大陸側としきりに交流を行っていた²⁷。福建省泉州蚶江談虎樓謎社の林桂舟は、1930年に台湾へ渡航した際、当時大陸で流行していた謎書、薛鳳昌『遼漢齋謎話』や

²¹ 陳瑛琳『斑瑜謎稿』、高雄：富進印書有限公司、1976年、1頁。

²² 菅野敦志『台湾の国家と文化「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』、東京：勁草書房、2011年11月、25頁。

²³ 同上、26頁。

²⁴ 黃慧貞『日治時期台湾「上流階層」興趣之探討——以「台湾人士鑒」為分析樣本』、台北：板橋市：板橋稻鄉出版社、2007年9月、149、151頁。

²⁵ 頼雨若「有感」、林文龍編『台湾詩錄拾遺』、台北：台湾省文獻會、1979年、208頁

²⁶ 『台湾日々新報』には大正13年6月1日からの二ヶ月半以上の期間で毎日燈謎とその解答を掲載した。

²⁷ 朱瑞壩『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、30頁。

張起南『橐園春燈話』、王文濡編『春燈大觀』などを台湾に持ち込んだ。台湾の謎人もまた当時は大陸の燈謎雑誌に寄稿し、台湾の燈謎概況を大陸謎人に紹介していた²⁸。ただ、日本統治下に置かれた50年の間、台湾で出版された燈謎書は見当たらず、雑誌や新聞紙を通してしか当時の燈謎作品を確認することができない。日本統治期に燈謎を積極的に掲載した新聞紙として『三六九小報』が特に知られている。その新聞社を立ち上げたのは謝国文であり、彼の父である謝友我は唐景崧の斐園で燈謎を学んだ士人の一人である。謝国文自身は1927年から燈謎活動を始め、「醒廬文虎社」という謎社を創立し、1930年に『三六九小報』を立ち上げた。『三六九小報』は昭和6年6月6日（第80号）から「文虎待射」という欄を開設し、黄文虎が執筆する「謎学全史」を昭和9年4月23日から計108回に分けて連載した。

日本統治が始まって30年以上経ったその時代に、台湾の燈謎にはようやく地域的な新発展が芽生えてきた。いわゆる「和文謎」（その多くは日本人名謎）がそれである。例えば以下のような謎が当時の燈謎大会に出されるようになっていた。

絶頂を急いで登る〔絶頂急登攀〕 日本時人一 尾崎行雄

大河の上に虹が勢よく空に刺さり、夜明けに将軍と戦士が瀋東を出る
〔江上虹梁勢挿空、平明将士出瀋東〕 日本時人一 高橋是清

遠い旅から帰った舟がはじめて着陸し、澄みきった春の水が舟を流す
〔万里帰帆初着陸、盈々春水自行舟〕
日本時人一 上山満之進²⁹

このような変化に関して、謝国文は「対燈謎大会之感想」（1934年3月5日）という文の中で次のように述べている。

学校児童の趣味に応じて、和文謎も混ざっており、やや雑乱な感じがするが（中略）五経古文に関して南北両地の人がみな疎くなったのは時勢然り、私の意見としては、作者は創作方法を幾分変通して、新たな方向に道を拓くべきである。例えば、諺や和文の中の漢字など、謎底³⁰として使えるものがなお多く発見できる。

和文之謎応学校児童趣味要求、亦混在其中、稍感雑乱而已（中略）對於五経古文則南北皆已生疏時勢使然也。以予鄙見作者須幾分變通弁法、向新方面關門徑、如諺語及和文中之漢字、可作謎底者尚多。³¹

そして、「方法を変通して、新たな方向に道を拓く」ための具体的な方法については、次の年に発表した「省廬文虎研究」という文章の中で以下のように説明を加えた。

²⁸ 1931年3月25日に上海で出版した『文虎半月刊』に台北謎人黄文虎が寄稿した「台湾台北之謎学概況」が載っていることは楊文権『四知謎集』（自刊本2009年）などに書かれている。『文虎半月刊』の現物は所蔵不明なため、確認できていない。

²⁹ この三例は1925年に基隆市復旦吟社が主催した燈謎大会で出されたものである。黄文虎「台北謎学史」『台北文物』第四卷第四期、1956年2月、128頁。

³⁰ 謎の答えのこと。

³¹ 謝国文『省廬遺稿』（台湾先賢詩文集彙刊第2輯）、台北：龍文出版社、1992年（台北：大明印刷廠、1954年初版）、182、186頁。

種々の理由により、私は去年3月初旬、新民報社主催の燈謎大会の感想において、謎を創作する際に方法を変通し、新たな方向に道を拓くことこそ時世に適すると主張した。経書がそのうち十分の一、二に過ぎず、新聞に載っている共通性のある常識事物を材料にすれば、普遍性のある謎が作れる。それこそがいわゆる平民の文芸となるものである。12月初旬、台湾新民報に掲載した拙作（諧声俗語謎）は高級文芸の中に置かれれば価値が全くないのは知っているが、台湾の歌・劇・曲調などに比べれば、性質は違うが、さほど頹落していないと自覚している。例えば、広東の新聞にはしばしば外省人が読めないような広東語の曲詞が載っているのに比べ、拙者の謎には、適した文字で当てられない諺がなお多い。ただただ自分の研学が周到でないことを悔恨するのである。しかし、我々の言語を実際に使用する試みとして、到底台湾人の面目を失うことなく、慚愧する必要がないであろう。

綜合種々理由、故予於去歲三月初旬、對新民報社主辦燈謎大會之感想、主張作謎須變通弁法、向新方面關門徑、方適合時世。經書不過十分一二、摺報紙上刊載之常識名物有共通性者為謎材、可函普遍、則所謂平民的文芸也。十二月初旬、台灣新民報所刊拙作（諧声俗語謎）固知置諸高級文芸中、全失價值、然較諸台灣歌劇曲調、性質雖不同、自覺不甚頹落、而況粵報常刊廣東白話曲詞、外省人皆不得了解者、拙謎尚有許多諺語乏適當字面可表、只恨研究未周、徒呼負々。然而究勘實用吾人白話、終不失台灣人面目、何慚愧之有。³²

つまり、彼が主張する平民文芸という路線は、近代教育の衝撃を受けた上で、近代出版物の力を借りて燈謎の生機を探し出そうとする一種の選択と試みであった。彼が提唱する台湾燈謎のローカル化は、光復以降は新たな問題をもたらすことになるが、光復する前の当時から見れば、自然的かつ時代に適した選択と言えるだろう。

文化の日本化が全面的に浸透する中、台湾の燈謎は内容的な変化のみならず、活動の面においても独自の発案があった。1935年に新竹出身の燈謎新人である吳朝綸は黃文虎や張純甫、謝国文などの協力を得て、台北の龍江信用組合を活動拠点に「的社」という謎社を立ち上げ、独創的な活動形式を広めた。『的社半月刊』という雑誌を発行して燈謎創作交流の場を提供したのはさほど特殊な事例ではないが、斬新なのは、過去のようにただ謎人の作品を雑誌に載せるのではなく、「矢部」と「函部」という二種類の応募形式を作ったことである。矢部は新聞紙などでよく見られる「燈謎徵射」と同様、題を出して答えを募集するという形式だが、函部とはその逆から出発した、謎底を提示して謎面を募集するというものである。つまり、矢部が読者向けに設けられた競技の場だとしたら、函部は作者向けに設けられた切磋琢磨の場となった。この矢部、函部という応募形式はたちまち大反響となり、参加者数は毎回100人に上っていた³³。大陸に住む謎人からの投稿もあり、海を跨いだ燈謎交流が実現された。しかし、1937年以降になると、日本統治者による皇民化運動の強行によって、漢文書籍は全面的に禁止され、『的社半月刊』や『三六九小報』などの漢文出版物もあつげなく廃刊を余儀なくされた。活動および交流の場を失った台湾の燈謎は当時の大陸と同じく低調期を迎えたのである。

三 戦後の文化政策と謎社の復興

1. 戦後「中国化」時期（1945-1965）

1945年10月25日の「光復」を境に、それより以前から台湾に籍を設けて住んでいる人々は本省人と

³² 謝国文『省廬遺稿』（台湾先賢詩文集集刊第2輯）、台北：龍文出版社、1992年、175-176頁。

³³ 吳朝綸「台湾謎学沿革史」、陳祖舜編『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日、第1面。

され、それ以降に国民党とともに来台した人々は外省人として区別されていた³⁴。文化的なヘゲモニーは外省人エリート集団に占有され、本省人による自主的な文化活動はほぼ寸断された状況に陥った。そんな中で発生したのが二・二八事件³⁵である。その後、「省籍矛盾」が台湾の社会文化全体において露呈し、ますますはっきりと本省人／外省人の境界線が引かれるようになった。

1937年までに相当勢い良く発展していた本省人の燈謎活動は光復後間もない頃に再開され、徐々に活気を取り戻した。例えば、黄文虎と彼が率いる高山燈謎社は毎年の元宵節に台北市龍山区公所で燈謎大会を開催し、町を賑わせていた。しかし、1949年以降台湾にやってきた外省謎人による謎話を読むと、彼らは本省人謎社の存在を知らなかったようだ。例えば、かつて北京丁卯謎社³⁶のメンバーだった程哲民は『謎海』の中で外省謎人が見た50年代の台湾燈謎事情を書いている。大陸の都市に比べても遜色ないほど、燈謎大会は元宵節や中秋節などの祝日に行われており、新聞紙上も多くの燈謎が載っていると程氏は見ていた³⁷。しかし、程氏によると、台湾では燈謎社がなく、文人学者からの支持も見られない。また、「台湾に来て2年、燈謎会に計12回参加した。書き留めた謎も数少なくないが、技巧に優れた良作は稀である」³⁸という。さらに、第八章の「籌開大会」の部分では、台湾人による燈謎大会のやり方はとても非効率的で娯楽性が低いとまで評価している³⁹。良作の多寡や大会の効率性などはさておき、本省人謎社の活動状況は、前述の台湾燈謎史に関する資料や、同じく50年代に書かれた「芸文齋謎話」などの本省謎人の謎話で分かるように、実際の状況は程氏の叙述と食い違っている。作品の質に関しては、黄文虎が次のように説明している。

けだし、現在は専門的な謎書がなく、上述のような佳作は近年一二種発見されているが、謎学においてはレベルが低すぎる。まして主稿を一人で担当できるのは台北中を探しても数人程度しかおらず、市中十区からの招聘依頼にすべて応じることが難しくなっている。有数な虎将〔燈謎当てる名人〕まで無理やり主稿として呼ばれている。

蓋今無専門謎書、如上述之佳者、近雖発見一二種、於謎学水準太差。況能獨当一面主稿、以台北中不過数人、已難足応十区之聘請、有数之虎將、又被強邀作主稿。⁴⁰

要するに、そういった状況を招いたのは、一つは日治時代に燈謎専門書の出版がなく、燈謎創作が停滞していたこと、二つは光復後燈謎活動が急増し、時間的に集中していること、この二点の理由が看取できる。

50年代台湾における燈謎活動の活発化は、本省人謎社の活動回復と外省謎人の参加だけによって促されたものではない。当局の承認と提唱も一役買っている。発端は蒋介石が1953年に書いた「民生主義育楽兩編補述」であり、文中に正統娯楽が提唱されているため、その後、1955年に台湾当局は「民間正当娯楽示範週⁴¹」を設け、「正当娯楽」の該当範囲に「燈謎」という項目を入れた⁴²。1956年の元

³⁴ 菅野敦志『台湾の国家と文化「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』、東京：勁草書房、2011年11月、9頁。

³⁵ 1947年2月に発生した全島的な大衆蜂起。

³⁶ 1927年に北京で成立し、1937年まで活動していた謎社。

³⁷ 例えば、1950年、51年に『全民日報』に掲載された燈謎への応募者数は毎回1万人以上だと推測されており、社会的認知度も相当高かったことがうかがえる。程哲民『謎海』、台北：世界書局、1974年12月（1952年初版）、「弁言」1頁。

³⁸ 同上、「弁言」2頁。

³⁹ 同上、122頁。

⁴⁰ 黄文虎「芸文齋謎話」、『詩文之友』第五卷第六期、彰化：中国詩文之友雜誌社、1956年7月、53頁。

⁴¹ 旧暦正月9日から15日までの一週間。

⁴² 黄文虎「芸文齋謎話」、『詩文之友』第五卷第六期、彰化：中国詩文之友雜誌社、1956年7月、53頁。

宵節においては、政府が各縣市郷鎮役所に積極的に燈謎活動を行うようにと呼びかけた⁴³。ただ、このように政府から助力を得て社会的な普及が順調に行われる一方で、同じく燈謎愛好者であるにもかかわらず、本省謎人と外省謎人の間に交流がほとんどないという状況が続いた。無論、「省籍矛盾」という大きな問題がそこに介在していたが、もう一つの理由としては言葉の隔たりが挙げられる。それは、本省人の燈謎には福建方言が多く取り入れられていたからである。謝国文が1934年に書いた「省廬文虎弁言」によると、日本統治時代以前の台湾謎人は「諧声格」⁴⁴を好んで創作していた。なぜならば、経典の句を用いて経典の句を当てるといふ謎、いわゆる「玉合子蓋玉合子底」⁴⁵の謎はほとんど前人に先取りされてしまったからである。前人との雷同を避けるために、福建方言を取り入れて創作のバリエーションを増やそうとしたのだろう。しかし、福建方言は種類が多く、文字の発音も千差万別であって、文字が当てられない語彙も多いため、方言を使って作られた謎は限られた一部の地域でしか意味が通じないという問題がある⁴⁶。一方、大陸では揚州などの地域を除けば、ほとんどの地域では「諧声格」で謎を作る習慣がない。張起南曰く「この格で書かれた佳作は非常に少ない。世間で見られる諧声格の謎はほとんどが俗っぽいものであり、文人が書いたようなものではない」⁴⁷。つまり、外省謎人から見ると、本省謎人が作った「諧声格」燈謎は駄作であり、況してや方言自体が通じないから、そのような謎を解くのに必要な基礎知識すら持ち合わせていなかったのである。台湾では50年も続いた日本統治時代に、中国語の国語教育は当然として展開されていなかったため、国民党政権に入った最初の頃はほとんどの本省人が日本語か方言でしか話せなかった。言葉が通じない状況はしばらく続いたから、外省謎人は当時の燈謎大会に参加する時に「言語の隔たりに苦しみ、紙と筆を喉舌の代わりにした」⁴⁸という。本省謎人との交流がままならなかったものの、政府の提唱が功を奏し、各縣市郷鎮で燈謎大会が盛んに開かれるようになった。大陸から渡ってきた外省謎人らは次第に燈謎大会でお互いに出会う機会が増え、こうして、徐々に外省謎人だけの交流の輪ができていった。1959年7月、戦後初めての外省謎人による謎社、「集思謎友社」が台北市に成立した。それ以前の謎社と異なるのは、政府の承認を得た民間団体として登録していることである⁴⁹。ただ、政府の関与は活動経費の一部を補助するところに留まり、活動自体はあくまでも民間的なものとされていた⁵⁰。

この時期の台湾燈謎に見られるもうひとつのキーワードは「反共イデオロギー」である。日本統治時代においては、燈謎文化の存続に関わるため、政治色を露わにしなかったが、国府の遷台と総動員体制下における「反共文化政策期」⁵¹（1950～1965）が始まってからは、台湾燈謎の政治色が一気に濃くなった。例えば、以下のような燈謎がある。

反共 字一 并⁵²

共産党統治地域の新しい婚姻法〔匪区新婚姻法〕

⁴³ 徐立『燈謎叢話』、台北県中和市：民族正気出版社、1982年2月（1957年初版）、顧培根序2頁。

⁴⁴ または「梨花格」という。方言に当て字をして燈謎に使うスタイル。

⁴⁵ 玉製の器に玉製の蓋をかける。つまり自然な掛合いということを比喻している。

⁴⁶ 謝国文『省廬遺稿』（台湾先賢詩文集彙刊第2輯）、台北：龍文出版社、1992年、194-195頁。

⁴⁷ 張起南「棗園春燈話」『小説月報』第七卷第四号、上海：商務印書館、1916年4月、19頁。

⁴⁸ 袁定華『布衣齋謎集』、台北：集思謎社、1975年4月、序10頁。

⁴⁹ 「集思謎社成立十周年社慶」、陳祖舜編『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日、第1面。

⁵⁰ 朱瑞埔『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、37頁。

⁵¹ 菅野敦志『台湾の国家と文化「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』、東京：勁草書房、2011年11月、19頁。

⁵² 程哲民『謎海』、台北：世界書局、1974年12月、118頁。

『孟子』一句

あたかも一杯の水で〔猶以一杯水〕⁵³

さらに、燈謎作品自体だけでなく、謎話なども時々、共産党の残虐性を語る文章になっていた。例えば、程哲民『謎海』の第七章に「謎禍」という節があり、共産党を猛烈に批判している。

謎は我が国で数千年の歴史を持っている。作風は何度も移り変わってきたが、その役割はただ二つ、一つは人の覚悟を促し、昨非今是の過ちを正すこと、もう一つは知力の格闘としての暇つぶしの遊戯であることだ。このような小技を殺人の道具として使われることなぞ今まで聞いたことがない。しかし、大陸が共匪の反乱によって窃取されてからはことが変わった。彼らはこの数千年も伝承してきた文字技巧を殺人の手段にした。かつて独裁暴君が文字獄を興したように、匪区では謎をただで身を滅ぼす災難になるとは、誰が思いつくだろう。匪区から台湾に逃げてきた友人から聞いた話によると、匪党が某慶祝大会を開く時に、その会場で燈謎を掲げて余興として行った。その中には「日本人無条件投降（古人名一）」という謎があった。当時それを当てようとした共産党員が2人いて、一人は「屈原」と解き、日本人が投降したのは原子爆弾の脅威に屈服したという意味であったが、もう一人は「蘇武」と解き、つまり日本人の投降はソ連の武力に畏怖した結果であると言った。結果、「屈原」と解いた党員はアメリカに傾く思想を持つ者とされ、「国特」（国民党の工作員）に疑われて銃殺されたが、もう一人のほうは同志に忠実する思想の持ち主として奨励されたという。意外にも、謎は匪区において変質し、理不尽な理由として人を殺すものとなった。謎が共匪の残民暴政にすら利用されるとは、謎にとってなんと不幸なのか。

謎語在我国有数千年歴史、作風雖屢經演變、但其作用、僅有促人覚悟糾正了今世而昨非的錯誤、与角智鬪思作為消遣遊戯這兩種作用、從未聞以此雕蟲小技作為殺人的工具、自共匪叛乱窃拋大陸、可就不同了、他卻利用這綿延数千年的文字技巧、作為殺人的手段、專制暴君曾興文字之獄、誰知在匪区猜謎語亦能惹出殺生之禍、昔有友人自匪区逃來台湾、談及匪徒某次開慶祝大会、亦張燈懸謎、以助余興、中有一条謎面為「日本人無条件投降。」射古人名一。同時有甲乙二匪競射、甲射屈原、意謂日本人投降、是屈服於原子彈威脅、乙射蘇武、謂日本人投降、是畏蘇俄的武力、於是甲匪被認為有傾向美帝思想、被指為国特而被捕槍殺、乙匪被尊為忠実同志而加獎、想不到謎語在匪区亦變了質、他可以強詞奪理運用而殺人、共匪的殘民暴政、謎語猶可利用、謎語何其不幸也。⁵⁴

しかし、これは信憑性に欠ける話である。真相は突き止めにくいが、実はこの謎に関する話はある程度知られており、他の書籍や記事などにも取り上げられている。例えば、李庚禹の「一個謎語兩個底」⁵⁵もこの謎についてかなり詳しく書いているが、李氏によると、この謎は1945年の日本無条件投降の数日後、当時昆明市の新聞に掲載されたものであり、その後答えが公開される際、某新聞は「蘇

⁵³ 同上、121頁。国民党は共産党のことを「共匪」とし、共産党統治地域のことを「匪区」としていた。「匪区新婚姻法」はおそらく1950年に共産党が頒布した最初の婚姻法であり、その最大な特徴は一夫一妻制の規定である。「水」は女性を指す隠語であるため、「猶以一杯水」（『孟子・告子上』より）で「一夫一婦」を暗喩している。ちなみに、民国初期及び1930年の国民党民法典では妾を暗に承認するような規定が設けられていた。西田真之「近代中国における妾の法的諸問題をめぐる考察」『東洋文化研究所紀要』第166冊、東京：東京大学東洋文化研究所、2014年12月、184（101）～136（149）頁を参考。

⁵⁴ 程哲民『謎海』、台北：世界書局、1974年12月、119～120頁。

⁵⁵ 雲南省文史研究館編『滇雲片羽』（蕭乾主編、新編文史筆記叢書第二輯14）、北京：中華書局、2005年、110頁。

武」としたが、別の新聞には「屈原」という全く異なる答えが載っていたという。共産党の燈謎に対する検閲はもっぱらの捏造というわけではない。現在の大陸謎人の謎話にも、文化大革命前後において燈謎が原因となった冤罪のエピソードが語られている。例えば、陳振鵬主編の『謎話』の「前言」によると、彼が持っていた張起南の『橐園春燈話』は文革中に取り締まれたという⁵⁶。また、同書の中に蘇才果が書いた「謎案三則」は、文革期に燈謎が原因で「現行反革命」の冤罪に貶められた謎人や燈謎活動が禁止された話である⁵⁷。ただ、大陸謎人が叙述した事例の発生時期は文革期に集中しており、イデオロギー的な批判は見られない。50年代における国民党の反共文化政策と緊密な連動が見られるというのは、台湾の外省謎人にのみ見られる特徴である。

2. 中華文化復興運動期（1966-1976）

1966年11月12日、孫文生誕100周年を記念して建てられた台北陽明山の中山樓中華文化堂の落成典礼が行われた。蒋介石はそこで記念文を発表し、三民主義と中華文化の不可分の関係性を示唆したうえで、中華文化の保全と発揚に関して緊急に対処すべきだと言及した。翌月、国民党中央委員会による第九期中全会で「中華文化復興運動推行綱要」が採択され、孫文の生誕日である11月12日が「中華文化復興節」と制定された。そこから、戦後台湾における最大の文化運動とも言われる「中華文化復興運動」（以下「文復運動」と略す）が始まったのである。翌年、「文化復興委員会」（以下「文復会」）が発足されたが、ただ、委員会の性質について蒋介石は、「社団法人でなければ財団法人でもない。政府機関と民間団体を結合させ、文化復興運動に共同で尽力する社会運動機構である」と述べており、特殊な位置付けとした。文復会は全省規模の組織として政府機関や学校を中心に支部が設置された⁵⁸。文復運動は共産党の文化大革命に対するリアクションとしての一面が大きいですが、それを機に光復後長く国民党を悩ませてきた「省籍矛盾」を解決しようという願いも含まれていた。

文復運動開始後、謎人は速やかに反応を示した。運動開始以前に各自がもっていた活動目標を「文化復興」の一点に集中させたことが看取できる。文復運動開始3年前の1963年6月に成立した基隆市謎学研究会がその一例である。基隆市謎学研究会は基隆市で活躍していた本省謎人を中心にした謎社であり、研究会組織章程の第二章「任務」には、「政府に協力し、政令及び固有文化の宣伝をする」とあった。そして、第六章「経費」には「政府機関からの援助金」という項目があるため、文復運動開始の前から政府と協力関係を結んでいたと見られる。その一年後の1964年には、会員謎集『雨港春燈』を出版し、文化界有名人や関係機構団体などに寄贈した。当時は「娯楽を風雅に託し、文化の精華を発揚する」とした評価が得られた。文復運動の直前である1966年6月23日には、旬刊『中華燈謎』雑誌を立ち上げ、創刊当初は「固有文化の発揚」というスローガンを掲げていたが、その数ヶ月後に蒋介石の文復運動提唱発言があったため、スローガンがすぐに「文化復興」へと転じた⁵⁹。

同様の変化は外省謎人を中心とした集思謎友社にもあった。陽明山管理局局立図書館館長を務めていた社友蔭樹斌は、文復運動開始後すぐに燈謎を使った文復促進活動にとりかかった。社友の陳祖舜は彼の要請に応じ、日本統治時代に「的社」が残した資料を整理し、1967年12月から「全省燈謎函部」を30年ぶりに再開させた。昔の函部と違って、新しい函部の開催は招致制となっており、謎人有志または謎社、政府機構などの組織が申し出れば、誰でも主催者になることが可能である。開催のペースは平均2ヶ月に1回、5～10の謎底を選出した後、台湾および島外に向けて謎面を募集する。募集

⁵⁶ 陳振鵬主編『謎話』、上海：上海古籍出版社、2003年7月、前言1頁。

⁵⁷ 同上、130頁。

⁵⁸ 菅野敦志「中華文化復興運動にみる戦後台湾の国民党文化政策」『中国研究月報』第59巻第5号、東京：一般社団法人中国研究所、2005年5月、19頁。

⁵⁹ 羅慶雲「創刊周年感言」、羅慶雲主編『中華燈謎』第三十六・三十七期合刊、基隆：基隆市謎学研究会中華燈謎雜誌社、1967年7月25日、第1面。曾武彦「周年雜感」、同第2面。

期間完了後は審査員による審査を経て、選ばれた佳作を集録し、参加者に贈読するという流れである。新「函部」に選ばれる燈謎の主流的なスタイルは清末民初の南宗謎、すなわち張起南を代表とした典故成句を多用する文雅的な作風である。第8回からはタイ、香港、シンガポールからも30人以上の参加者がいたという。それを契機に、集思謎社とタイ在住の謎人の間で謎書の贈呈なども行われていた⁶⁰。陽明山管理局局立図書館が1972年に出版した陳祖舜主編『中国燈謎選』はその交流の延長線上でできた成果である。この書は1ページ目に総統訓詞「わが国の立場と国民的精神」を載せており、序文には文復運動に応じて出版した旨を明確に記している。集録作品は台湾およびタイの華僑界から応募されたものであり、タイ国潮州会館燈謎組、タイ北春燈聯誼社、世界日報謎壇、湄濱謎社、混沌謎社、華風謎社、中タイ謎学聯絡処の協力を得たとある⁶¹。そして、集思謎社は1969年2月から1975年4月にかけて、『集思謎稿』、『集思謎社成立十周年専刊』、『謎材』、『謎穂』、『謎史』、『跬園謎稿詳釈』、『凡民・商旧謎存』、『布衣斎謎集』の集思叢書8種を出版した。そのうち半分ほどは30年代以前に大陸で既に出版された謎書の再版であるが、文復会が定めた重点的に実施する5項目のうちにある「古典・名著の整理出版活動」に該当する。1969年7月に発行した『集思謎社成立十周年紀念特刊』のトップ記事には「国内外の同好者と一緒に中華文化復興運動に呼応し、任務の達成を願う」とあり、袁定華の「発刊献詞」には「文復運動において本社のできることは微かなものであるが、文化復興の面に裨益するところがあると信じている」とある。さらに、

実り多き文化復興運動をしたいならば、早い段階で燈謎を提唱すべきであろう。燈謎遊びを通して、青年に本への興味を惹きつけ、知識を求める環境に彼らの感情を誘導することで、文化復興の土台を作るのだ。もし文化復興の重任を燈謎に託してくれるならば、燈謎は人に文字を知り、多く本を読み、温故知新をさせるなど諸功用があるため、必ずや期待を裏切るようなことはない。

欲求復興文化運動收穫佳果、似宜先提倡燈謎遊戲、用燈謎遊戲誘引青年對於書本發生興趣、將情感放在求知環境裏面、奠定復興文化的基礎：假如將復興文化重任交燈謎弁理、我想燈謎具有要人識字、要人看書、要人多看書、要人知新温故諸功用、必不会有辜期望的。⁶²

との論説も載せられている。ほぼすべての文章に「文化復興」の四文字が入っており、謎人の文復運動に対する期待の大きさが垣間見える。

1971年、嘉義県燈謎研究会と台北県謎学研究会が新たに燈謎社団として登録された。1976年11月12日の中華文化復興節に出版された台北県謎学研究会成立五周年記念刊『淡江廬語』には、「台北県謎学研究会は中華文化復興運動を實踐するために、1971年に政府の許可を得て立ち上げた」⁶³と明記されている。ただ、吳朝綸は序文に、以下のように述べ、危機感をつのらせている。

我々にとっての急務は、十九世紀の訓詁方法に二十世紀の別解機能⁶⁴を加えて、長所を取って短所を補い、この一代の新たなスタイルにすることである（中略）もし旧来のスタイルに固執し、

⁶⁰ 陳祖舜「燈謎函部之探討（続）」、陳祖舜編『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日、第3面。陳祖舜主編『中国燈謎選』、台北：陽明山局立図書館、1972年9月、序A14頁。

⁶¹ 同上、A21頁。

⁶² 王素存「燈謎の功用」、陳祖舜編『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日、第2面。

⁶³ 陳振周「発刊詞」、『淡江廬語』（台北県謎学研究会成立五周年紀念刊）、台北県三重市：台北県謎学研究会、1976年11月12日、5頁。

⁶⁴ 文字の多義性を利用し、別の意味と解説する方法。

変えようとしなければ、進化のルールからすると当然、投壺や射覆⁶⁵などと同じ運命になって自然消滅するでしょう。

倘若以十九世紀訓誥方式、參酌二十世紀別解機能、截長補短、共成一代謎風、以貽後世紀之觀摩、毋甯為吾人當務之急（中略）苟若率由旧章葫蘆依樣不思改進、依天演原則、当然与投壺射覆同一命運自然湮沒無疑。⁶⁶

この呼びかけに応じるように、この本に集録された燈謎には台湾の俗語、諺、地名、商社名及び『国民生活須知』⁶⁷などのローカルな知識が多く含まれている。燈謎に新しい要素を取り入れてスタイルを刷新すべきという呼びかけは、民国初期の謎話や日本統治時代の謝国文の文章などに前例がある。しかし、文復運動が掲げていた目標は主に伝統文化価値の覚醒と再評価であったため、謎人も基本は伝統的なスタイルを重んじる方向をとっていた。文復運動が開始して10年経ったその段階で、新たなスタイルへの期待が述べられるようになったのは、次の時代への転換が意識されたからだと考えられる。

実際、『国民生活須知』の普及を通じて指向された「国民化」は一律には進展しなかった。政策立案者に挫折感を与える結果となった根本的な原因として、文復運動という「文化運動」が一般大衆による下からの自発的な大衆運動でなかったこと、すなわち、変化を希求する大衆の意思と力が欠如した「作られた運動」であったからと指摘されているが⁶⁸、燈謎をめぐる一連の活動を振り返ってみると、それが果たして正しいと言えるだろうか。上から「作られた運動」ではあったが、もともと謎人と謎社がもっていた「固有文化の発揚」という目標と一致する部分が大いに存在していた。文復運動に積極的に参与することによって、台湾における外省/本省謎人の隔たりは確実になくなっていった。その交流の輪は海外華僑にまで拡大し、活動目標の一致によって謎人らの間では曾てない一体感が生まれた。では、なぜその努力はもどかしいものと化したのか。「意思と力が欠如した」からではなく、その意思と力を上まで伝達しうるルートが用意されていなかったからと考えられないだろうか。

民間機構として組織された文復会だが、実際は国民党の主要幹部といった特権的な構成員が占めていた。委員会の下では各種研究委員会が設立され、さらに具体的な活動は全土に散在する政府機関や学校及び海外に数多く設置された支部によって実施されていた。燈謎が活動内容として選ばれた場合は、支部から謎社に依頼するという形になる。その活動にとくに貢献が認められた個人には「全民推行中華文化復興運動省府表揚状」⁶⁹などが送られるようになっていた。台湾謎運衰退の直接的な理由として、運動中に全省燈謎函部を主催した経験のある洪寛志は、真っ先に政府の奨励不当を挙げた。政府が民族文芸を奨励する際にとりわけ小説を最優先し、燈謎などに目を配ることは稀であったことは、当時すでに意識されていた⁷⁰。様々な努力と工夫をして文復運動を盛り上げようとしていた謎人らは、政府に要請できる立場になかったのは明らかな事実である。

許成章は「珽瑜謎稿序」（1975年）にこう書いている。

⁶⁵ 投壺も射覆も中国古代の宴会で余興として行われていたゲームである。投壺は壺に向かって棒を投げ入れるゲームであり、射覆は覆い隠されているものの中身を当てるという、古いに近いゲームである。

⁶⁶ 『淡江廈語』、台北県三重市：台北県謎学研究会、1976年11月12日、16頁。

⁶⁷ 『国民生活須知』は1967年に教育部、内政部、国防部総政治作戰部、台湾省教育庁、台北市教育局、救国団、革命実践研究院、国民党中央第四組・第五組による協議で決議され、蒋介石の批准を経て1968年5月1日に正式施行された国民規範の修身本である。菅野敦志「中華文化復興運動にみる戦後台湾の国民党文化政策」『中国研究月報』第59巻第5号、東京：一般社団法人中国研究所、2005年5月、24頁。

⁶⁸ 同上、26頁。

⁶⁹ 郭自得等編『西瀛燈謎選』（澎湖文献専刊第三輯）、澎湖県：澎湖県文献委員会、1981年5月、4頁。

⁷⁰ 洪寛志等著『鹿港明燈 論語専集』彰化県鹿港鎮：朝陽鹿港協会、2008年12月、18頁。

中華文化復興運動のスローガンが掲げられて10年を迎えようとしている。成果のほうはご覧の通りである。西洋を崇拜し、外国に媚びる傾向は日に日に強くなっており、国民の国文レベルは普遍的に低下し、生活もまた次第に墮落しつつある。これはほかならぬ、運動を推し進める方法が間違っていたか、各地委員の任命が不当だったか、それとも仕事に最善が尽くされていなかったか。否と言う人もいるだろうが、要するに、工業社会を高らかに唱え、時間を徹底的に稼ぐという二つの姿勢がそのようなことをさせたのだ。

中華文化復興運動口号已喊十年於茲矣。成效如何、為有目所共睹。而媚外熱、崇洋病則日漸加劇。國人之國文程度普遍降低、而生活亦日趨腐化。此無他、此運動之推行不得法乎？各地委員諸公之任命不當乎？工作不力乎？或曰否？蓋高唱工業社會入雲、揭櫫爭取時間到底兩事有以致之也。⁷¹

ここで読み取れる「無力感」はおそらく上から下まで、文復運動に携わった人々に共通するものであろう。民国初期に謎人が新文化運動に直面して型破りの新スタイルを作ろうとした時と、日本統治時代に伝統教養の土壌が破壊されて日本語から新素材を取り入れようとした時と同様に、文復運動が収束に向かおうとしていたその時期、謎人らはまたもや燈謎の創作スタイルに限界が来ていることを認識せざるを得なかった。

3. 文化建設から「本土化」へ（1977-現在）

蒋介石が文復運動を開始し、その推進機構として設置した文復会が10周年を迎えた時期に、蔣経国が立法院で「文化建設」の報告を行った。それは大陸の文化大革命が収束した直後でもあった。さらにその5年後、1981年の11月11日に「行政院文化建設委員会」（以下「文建会」）が成立し、文復会の存在感が希薄化していった。文復会と違い、文建会は正式な政府機構として設置された「現代的文化建設機関」である。その成立大会において、行政院長である孫運璿は「下に向かって根を張り、土台を堅固にさせる」⁷²ことの重要性を唱えた。それは、文復運動が台湾の基層社会に具体的な影響を及ぼしていなかったという問題点を踏まえた指摘だった。

その講話に応じる形で、1981年以降になると「民衆に根ざす」という言葉が謎人の間で新たなキーワードとなった。1981年3月に成立した高雄市民謎学研究会は高雄市政府が出版したばかりの『新訳論語読本』の宣伝に駆り出され、「下に根を下ろす」ために、市の教育局に協力して論語を中心とした燈謎大会を開催した⁷³。その後、教育局としばしば協力しあい、市内の中学校、高校で燈謎選手権を行うようになった⁷⁴。また、高雄市で広く読まれる『民衆日報』で「紙上猜謎」のコラムが設けられ、1983年にはそのコラムに出した燈謎を集録する『民衆謎集』が出版された。許成章はその序文で、

文学は時代に合わせるべきであるように、燈謎は工業社会時代における超短編文学であるべき
（中略）現代の燈謎作者は歇後語⁷⁵から学ぶべきだと考えている。歇後語を収集するのが燈謎という文芸が復興するための第一歩である。

⁷¹ 陳瑛琳『斑瑜謎稿』、高雄：富進印書有限公司、1976年、3頁。

⁷² 「孫院長運璿在行政院文化建設委員会成立大会上的講詞」、行政院文化建設委員会編『七一年國家建設研究会—文化教育組文化部分參考資料』、台北：行政院文化建設委員会、1982年、7頁。

⁷³ 高雄市政府教育局編印『論語謎集』、高雄：高雄市民謎学研究会出版、1982年10月、15頁。

⁷⁴ 朱瑞堉『新世紀謎語集』、台北：國家出版社、2011年2月、40頁。

⁷⁵ 歇後語とは、中国における熟語の一種で、二つの部分からなる成句である。前の部分がたとえとなり、それだけを言われたら、後ろの部分を自然に悟らせる。なぞなぞと似ている。

文学と時代結合、而燈謎就是工業社会時代的超短篇文学（中略）我認為現代謎作者、應以歇後語為師。而搜集歇後語、應是燈謎文化復興的首要工作。⁷⁶

と書いている。民衆により近いところにある歇後語に師事するという考えが時代的な特徴を鮮明に表しているのがあった。

しかし、「民衆に根ざす」動きに伴い、活動の形式や内容も低俗化していった。これについて、范勝雄は以下のように書いている。

1982年燈節、遠東百貨公司、新第一百貨公司も便乗して燈謎会を開き始めた。これは商業界が府城〔台南市〕の燈謎活動に参入する発端だった。その後、野外歌舞ショーにまで燈謎が付き物になり、実にどっちつかずの変な光景だった。誤った道に踏み入った燈謎は哀れである。

七十年代（1982）燈節、遠東百貨公司、新第一百貨公司也湊起熱鬧举弁燈謎晚会、這是商界滲入府城燈謎活動的開始。然往後野台歌舞秀居然雜有燈謎猜射、實在不倫不類、燈謎誤入歧途、哀哉！⁷⁷

燈謎は民国初期から商業イベントの余興として行われることがあったが、それは謎社が商会側の要望を受けて主催し、集客のために行われる謎会であり、政府機構が謎社に依頼するのと同じ状況である。つまり、出される燈謎は謎社同人が執筆するため、質の保証が付く。ここで范勝雄が批判しているのは、謎社を依頼せず、レベルの低い燈謎を集めて乱雑な環境で燈謎会をやりたがる商会である。歇後語など民間のものから学ぼうと提唱していても、あくまで文学、または文芸の一種として燈謎を復興させたいという矜持は謎人らが持っていた。なぜならば、「燈謎」が文義謎の代名詞として、民俗的な「謎語」と区別され、漢字文化の一つのジャンルとして成り立つ根本がそこにあったからである。その根本に揺るぎが生じた時、謎人らは自然と自ら築いてきた領域に危機感を覚えざるを得なくなる。陳聯松の「為中国謎運把脈」という文章にはすでに文復運動期の楽観的なムードが見られず、そのような危機感があふれている。彼は当時燈謎の運命を脅かす危機の原因を4つにまとめた。すなわち、（一）民衆が燈謎のことをなかなか理解しないこと、（二）商業的な雰囲気が濃すぎること、（三）素人が謎人のふりをし、「悪貨は良貨を駆逐する」⁷⁸ような現象が起ること、（四）謎界の縄張り意識、である。そして、これらを解決するために、以下のような提案を出している。

- （一）大学などで「謎学」という履修科目を設ける、
- （二）レベル中流以上の学校で謎社を成立させ、「根ざす」という目標を達成する、
- （三）教育部及び各縣市が「文芸賞章」を授与する時、「謎学」という専門項目を作る、
- （四）各地により多くの謎学研究会を成立させ、積極的に補導する、
- （五）全国的な謎学研究会を成立し、全国的な活動を推進する、
- （六）歴代の謎学著作を系統的に整理、出版する、
- （七）国家慶典や文芸祭などの際、政府機関と協力して燈謎大会または燈謎講座を行う。⁷⁹

以上の第1、2条は文建会が提唱する「根ざす」目標に対応しており、第3、6、7条は文復運動期の不足を補充、発展させたものと見られる。そして、第3、4条の提案は台湾における謎社ネットワーク

⁷⁶ 陳聯松等編『民衆謎集』、高雄：高雄市謎学研究会、1983年10月、7-8頁。

⁷⁷ 范勝雄「五十年来的府城燈謎」『台南文化』新三十八期、台南：台南市政府、1995年2月、99頁。

⁷⁸ 金本位制経済学のグレシャムの法則に見られる現象を指す。

⁷⁹ 『高謎通訊』第7期、高雄：高雄市謎学研究会、1986年3月29日、第1面。

の拡大を目指している。全国規模の研究会を作るのは、単に台湾で燈謎活動をより盛り上げるためではなく、1989年から大陸謎人との交流が再開できた後、台湾地域全体を代表する燈謎組織が必要に迫られたことも関係している。

1994年3月、待望の台湾燈謎聯誼会（以下「台湾謎聯」）が成立した。高雄市謎学研究会会長である沈志謙が理事長に就任し、各地方謎社の責任者が委員となる。主な活動目標は、各地の謎人に協力してより多くの地方謎社を作ること、国際的な燈謎大会を開催すること、小中大各学校で燈謎講座を開くことである⁸⁰。台湾燈謎の危機を乗り越えようとする大きな動きのように見えるが、実際には、台湾謎聯と島外の燈謎組織、また、島内各地方の謎社との間は複雑な関係にあった。そういった微妙な状況に陥ったのは、1993年から1994年にかけて文建会が掲げた「文化行政の地方自治化」という推進目標の影響だと考えられる。当時、文建会は各県・市で文化センターを建設し、それを文化政策の地方分権化の基盤としていたが、1999年には、各地方の文化センターは各県・市政府直轄の「文化局」として再生された。その再生過程において、文化センターは中央の文建会との繋がりが薄くなり、やがて、各地方の文化行政の中心となっていった。民間団体として地方政府に登録した謎社も次第に文化センターや文化局の管理下に置かれるようになった。そうすると、地方謎社は地方政府と台湾謎聯に間に挟まれ、活動の自由がますます限られることとなる。

こうした状況に対する地方謎人の不満の声は、台中県謎学研究会が創刊した『謎譚』雑誌からうかがえる。1997年2月の「謎譚新年への期待」には、研究会が台中県政府に燈謎大会の賞品を提供するようお願いしたところ、意外にも断わられたことについて、「せっかく政府に民間団体として登録したのに、まるで意味がない」⁸¹としている。また、6月には「怪獸台湾謎聯」という文章があり、次のような事情を打ち明けている。

台湾謎聯は今まで計4回の活動を行った。それぞれ高雄市、台中県、台北市、台南市に開かれたが、毎回まるでワタリバツタのような光景だった。すべての出費は各地謎会の血と汗によるものであったにもかかわらず、活動の成果と荣誉は台湾謎聯と共有しなければならない。台中県謎学会のほうは、彰化社教館に経費を出してもらったが、見返りとして、社教館は必ず500人以上を動員せよという条件を出した。しかし、それは台湾謎聯の総力を挙げてでも到底達成できない目標であった（中略）台湾には確かに本島、澎湖、金門、馬祖を包括する謎人団体が必要である。しかし、現在台湾各地で正式に登録された謎社の数はまだ多くない。その影響もあり、台湾謎聯という組織には合法性がなく、スポンサーの募集も困難かつ非合法的である。

台湾謎聯、前後挙弁四次活動、分別在高雄市、台中県、台北市、台南市举行。每次活動、猶如蝗虫過境、所有花費俱是各地謎会的血肉、而台湾謎聯相与共荣。其实這些都是周瑜打黄蓋的戲本重演。以台中県謎学会為例、所有經費都是彰化社教館負擔、社教館对活動的要求：人数要有五百人以上。韓信点兵、多多益善。号称總括台湾区謎友聯誼的台湾謎聯、到底有多少實力動員多少人員参加、心知肚明（中略）台湾区非常需要包括台澎金馬謎友的团体組織。但目前台湾各地、正式登記的謎会不多、因此影響台湾謎聯的組織不合法、而連帶關係到籌募經費的困難和不合法。⁸²

さらに、「台湾燈謎の道は何処へ」では、「残りの勇気を振り絞って大衆に謎学を普及するか、それとも燈謎を芸術に昇華させ、お高くとまるか」⁸³と、台湾燈謎界が進むべき方向について問うていた

⁸⁰ 朱瑞堉『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、40頁。

⁸¹ 台中県謎学研究会編『謎譚』77期、台中県：台中県謎学研究会、1997年2月、2頁。

⁸² 同上、81期、1997年6月、2頁。

⁸³ 同上、76期、1997年1月、2頁。

が、答えは出なかった。海外との交流についても、すべてが順調に運ばれているわけではなく、実は負の影響をかなり受けていたとの告白が見られる。1965年頃にタイの華僑謎人と交流した後に当時タイで流行していた変な燈謎スタイルが台湾に持ち込まれたことや、近年大陸謎人との交流で、台湾謎界のハンドルが急に振り回され、向こうの言うままになったことや、離合字や通仮字⁸⁴などを用いた単調な燈謎スタイルがことごとく密輸入されていることなどを訴えている。その最後は「台湾の謎人よ、お前たちは道に迷う羊であろうか」⁸⁵という自嘲で締め括られている。

地方謎社が直面するジレンマは文建時期において最も顕著である。台湾における燈謎の発展を全体的に眺めると、二つの脈絡が雁字搦めになっているのが分かる。一つは燈謎が清代士人によって台湾に持ち込まれた時に受け継いできた文人謎の流れであり、もう一つは日治時代から始まる台湾本省謎人が提唱する本土化・通俗化の流れである。大陸と違うのは、燈謎は台湾に伝入してきた最初の時からすでに高度に文人化した形態だったことである。清代の台湾謎人はほとんどが地方の名流、士大夫だったため、よりいっそう「文人遊戯」のイメージを強くさせたのであろう。謝国文らが本土化と通俗化を提唱するのは、文人謎を発生・発展しうる元来の文化的環境が消えかかった時期であり、謎人自ら選んだ改良の道である。しかし、その道は戦後の「中国化」時期と文復運動期に一度中断され、燈謎が国学の余緒として標榜されるため、再び清代のスタイルに巻き戻された。そして、文建期に入ると、また本土化を推奨する機会が与えられるが、文化の地方自治化という政策を受け、本来つなぎ目となるべきである台湾謎聯がなかなか機能を発揮することができず、台湾の謎人と謎社はいよいよジレンマに立つのである。

こうして地方謎人から非難を受けた台湾謎聯だが、1999年6月に名称を「台湾謎学界研究会」に変更、ようやく正式な民間団体として政府に登録することができた⁸⁶。それを機に、台湾謎人が長年噛みしめてきた苦渋は和らげられるのか、今後の研究で考察を続けたい。

四 おわりに

以上、本章は台湾における燈謎の歴史を整理し、戦後台湾の文化政策という視点から、台湾の謎人と謎社が直面する問題の社会的背景について考察を行った。政体と社会環境の激しい変容がある中、台湾で現在まで燈謎活動が行われ続けてきたのは、科挙時代の儒家的教養が完全に弾圧される時期が短かった、そして、台湾の謎人と謎社が各時期の文化政策に順応しながら活動目標を積極的に変えてきたからである。ただ、文化政策への順応によって解決される問題もあれば、逆に新たに生じる問題も見られる。例えば、戦後の「中国化」時期に露わになった「省籍矛盾」による謎人間の交流不足問題は、本省・外省謎人両方の文復運動への積極的な参入によって徐々に解消された。しかし、文復運動から文化建設へ転換する時期になると、燈謎の文学、文芸として成り立つための根本的な性質を揺るがす事態が発生し、台湾の謎人は新たな危機に直面することとなった。また、文化行政の分権化は地方謎社に苦渋の思いをさせているが、一方、海外との交流を通じて、台湾燈謎が一つの文化的ブランドとしてローカル・アイデンティティを創出する動きも見られ、それは近年台湾政府が唱える「文化の本土化」という目標に合流しつつあるとも看取できる。

文化政策の発展と照らしあわせて台湾における燈謎活動の変容を考察し、明らかになったのは以下のことである。まず、燈謎のような前近代から発展してきた漢字文化の周縁的分野を存続させてきたのは、主に知識人を中心とした民間団体の活動である。台湾においては、政府がそのような民間団体をすべて文化政策の傘下に取り込むのではなく、民間のほうがか文化政策の主旨に呼応して、政府の支

⁸⁴ 中国古典に多く用いられる同音字の借用現象。

⁸⁵ 台中県謎学研究会編『謎譚』76期、台中県：台中県謎学研究会、1997年1月、2頁。

⁸⁶ 朱瑞壙『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、40頁。

援を求めるために自ら文化政策の実行機構に接近していくような構図が見られる。このような構図がもたらす問題というのは、民間が如何に文化政策の主旨を汲んでいるかを政府に証明するために、文化政策が変動するたびに自らの活動形式やスローガンを変えるようになってしまうことである。そうすると、活動目標に一貫性を見失う危険性が生じてくる。また、政府が定めた目標と民間の要望が適合しない場合も多々あるため、具体的な文化事象を発展させるには多方面からの努力が必要である。文化の需要層を創出するのと同時に、文化の生産者を如何に育てるかも同様に重要な課題であり、要するに、需要と供給を均衡させる工夫が不可欠ということである。しかし、文化

政策が実行される際は、政府側の要望が一方的に強調される場合が多く、文化政策に関する研究もまたほとんどが政府側の視点でしか行われていないため、こうした構造上のアンバランスや文化政策の行き渡らない部分を見落としがちである。

本章は先行研究に欠落している文化政策を請け負う側から見る視点として、台湾の謎社・謎人に焦点をあてた。これは燈謎を対象とした近代漢字文化史研究の一環であるが、文化政策研究を見つめなおす切り口としての意味も持っている。台湾と同様に、大陸における燈謎活動の社会的展開も政府の文化政策に大きく左右されてきたと考えられるが、具体的にどのような様相を呈しているか、次章の課題として、それを構造化した上で、台湾との異同を比較し、分析を行いたい。

〔附表〕 台湾謎社簡表

成立時間	社名	場所	主要メンバー	出版物
1919年	万華鶴社	台北庁	施明德、周自然、 黄坤維、黄福臨等	
1920年前後	万華学謎会（艋舺 謎学会）	台北市	楊天賜、蔡石奇等	
1927年	醒廬文虎社	台南市	謝国文等	
1930年	万華高山燈謎文社	台北市	王省三、黄文虎等	
1930年前後	台北天籟燈謎文社	台北市	林述三、林錫麟、 林錫牙等	
1936年	的社	台北市	吳朝綸、蘇得志、 柯子村等	『的社半月刊』
1959年	集思謎友社	台北市	謝国楨、来楚庚、 袁定華、黄文虎、 王素存、吳朝綸等	集思叢書八種等
1963年	基隆市謎学研究会	基隆市	羅慶雲等	『雨港春燈』『中華 燈謎』等
1966年	澎湖県謎学研究会	澎湖県	郭自得、鄭国泰等	『虎嘯西瀛』等
1971年	嘉義県燈謎研究会	嘉義県	邱万福、陳翼炫等	『諸羅謎集』等
1971年	台北県謎学研究会	台北県	吳朝綸、陳振周、 施勝雄、林耀庚等	『北県謎集』『淡江 廬語』等
1981年	台中県謎学会	台中県	李文忠、黄芳照等	『謎譚』『燈謎入門 及欣賞』等
1981年	高雄市謎学研究会	高雄市	邱道得、沈志謙、 徐添河等	『民衆謎集』『論語 謎集』等
1983年	台南市謎学研究会	台南市	王火山、范勝雄等	『古都春燈』『赤崁 虎蹤』等
1983年	高雄県謎学研究会	高雄県	蕭瑾瑜等	『三山文虎集』『高 雄県謎学通訊』等
1983年	嘉義市燈謎研究会	嘉義市	陳翼炫等	
1994年	台湾燈謎聯誼会 （台湾謎学界研究 会）	高雄市	沈志謙等	『台湾謎学』等
1995年	学甲謎社	台南県	莊秋情、王義雄等	『物謎燈華』等

第五章 戦後大陸における燈謎の活動環境

一 はじめに

前章では、戦後台湾の文化政策という視点から、台湾における燈謎活動の変容をめぐって考察した結果、文化政策へ順応することによって解決される問題と新たに生じた問題を分析することができた。終戦直後に露わになった「省籍矛盾」という問題は、本省・外省謎人両方からの文復運動への積極的な参入によって解消されたが、文復運動から文建運動へ転換する時期においては、商業活動との関わりによって燈謎の文学的性質を揺るがすような衝撃を受け、台湾謎人は新たな危機感を覚えざるを得なくなった。その後、文化行政の分権化政策により、地方謎社の活動が思うように展開できず、地方にいる謎人は苦渋の境地に陥ったが、大陸などの地域との交流を通して、「台湾燈謎」を一つのブランドとして、地域色を創出する必要性を認識するに至った。そして、近年台湾政府が掲げる「文化の本土化」目標の一環として、「台湾燈謎」は「本土化」の道を突き進もうとしている。

1989年から大陸謎人と正式に交流を回復した台湾謎人は、文革後、とりわけ改革開放政策実施後の大陸における燈謎活動の豊富さと質の高さに驚かされた。彼らの文章から、大陸謎人に対する羨望の意がしばしば読み取れる。その理由は、単に大陸における燈謎愛好者の層が厚いということだけではなく、政府の燈謎活動に対する支持や大陸謎人の待遇などの面で大きな落差を感じたという¹。

台湾と同様に、大陸における燈謎の実践形態は政府の文化政策に大きく左右されてきた。具体的などのような様相を呈したか、変容の過程において、謎人の主体性がどのような役割を果たしたか、などの問題を考察した上で、台湾との異同を比較したい。また、序章で述べたように、大陸においても、燈謎を学術的に捉える論文はいまだに少ない。特に、文化政策と結びついた検討は欠落している。本章では、戦後から90年代までの大陸に焦点を当て、近代的な文体が形成した漢字文化の新ジャンルである燈謎がどのように中国共産党の文化政策に包括・統制されるようになったか、謎人の主体性と燈謎活動形態の近代化との関係を明らかにしたい。

章末の附表から分かるように、清末民初のブーム的な発展以降、大陸における燈謎活動の発展には二回の断層期があった。そして、台湾に比べ、大陸における燈謎活動の再度活発化は約10年遅かった。

80年代末から2000年にかけて、大陸でいくつかの燈謎工具書が出版された。邱景衡『中華燈謎鑑賞』（人民日報出版社、1988年）、中華謎語大辞典編委会『中華謎語大辞典』（安徽文芸出版社、1989年）、江更生等編『中国燈謎辞典』（齐鲁書社、1990年）、李敬信『中国的謎語』（人民出版社、1990年）、全国燈謎信息社が1997年に出した『中華燈謎年鑑』第一卷（1995年巻）、章品『中華謎典』（大連理工大学出版社、1999年）、江更生『中華謎海』（学林出版社、2000年）などが代表的である。それらの書名からも分かるように、中には「燈謎」と「謎語」の区別をはっきりしないものや、その両者を合わせて中国の「謎」として包括的に書いたものがいくつかある。しかし、内容を検証してみれば分かるように、これらの書籍のほとんどは燈謎をメインとしている。以上挙げた書籍と『中国当代燈謎芸術家大辞典』（劉二安・牛書友、中州古籍出版社、2002年）を元に、まず、戦後から90年代までの大陸における燈謎活動の概要を簡単にまとめた。

二 戦後大陸における燈謎活動の概要

1. 謎社の分布と種類

『中華燈謎年鑑』『中華謎語大辞典』『中華謎典』『中国当代燈謎芸術家大辞典』に付録されている謎社リストによると、各地方行政区域の工人文化宮/倶楽部、民間文芸家協会に属する「燈謎チーム

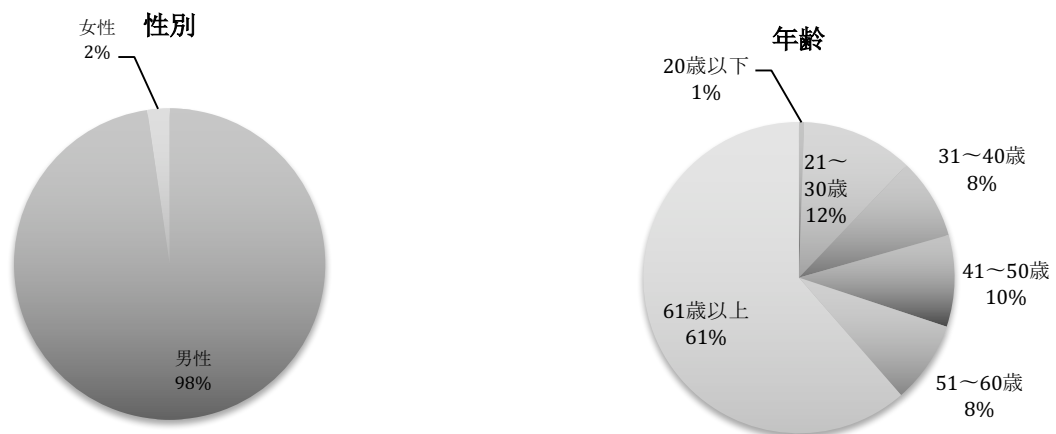
¹ 朱瑞壩『新世紀謎語集』、台北：国家出版社、2011年2月、24頁。

／研究会／協会」と称する謎社が絶対的多数を示している。2001年までのデータによれば、香港・マカオ・台湾を除き、大陸における計29の省級行政区域に上記のような燈謎社団組織が確認されており、そのうち、数が最も多いのは、江蘇省、福建省及び広東省である。一方、地方的な燈謎社団組織が登録されていない行政区域は海南省とチベット自治区のみだった。

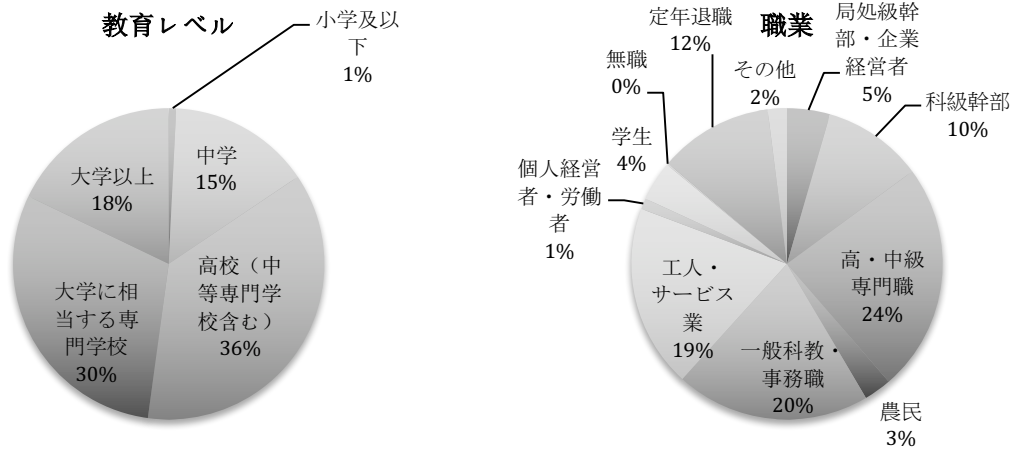
地方の謎社以外に、一般企業（主に国営企業）に属する謎社も積極的に活動していた。その中に、鄭州紡績機械廠や西北アルミ合金加工廠など大企業に属する謎社は、全国規模な企業間燈謎大会を主催した実績があったため、比較的有名である。そのほか、地域を跨る同人謎社というものがあった。例えば、丁卯謎社、金鷄謎社、伏虎謎社、虎友謎社、銀蛇謎社、騰龍謎社、金牛謎社、金猴謎社、諸子謎社、吉羊謎社など、生まれ年の十二支が入会条件とする「生肖（十二支）謎社」がある。そのほか、苗字が「陳」の謎人が集まる華夏潁川謎社のような「宗親謎社」や、教育業界で働く謎人が集まる紅燭謎社のような「業界謎社」などが知られている。また、学生謎社として、大学で最も早く創立したのは復旦大学謎社（1984年12月創立）であり、中学生レベルでは、福建省の莆田第六中学青璜謎社（1986年5月創立）などがある。最も若いメンバーを有する学生謎社として、遼寧省丹東市の金湯小学新芽謎社（1986年7月創立）が知られている。

2. 全国謎人向けアンケート調査の結果²

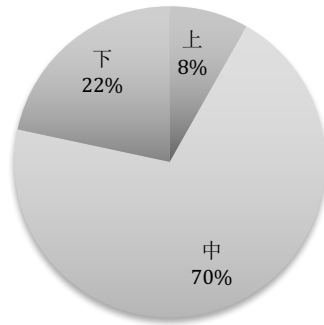
1994年4月、全国的に発行されていた燈謎雑誌『文虎摘錦』は、「中国謎人情況アンケート調査」を行った。半年間をかけ、有効回答計1170人分を採取したもので、これまでに大陸で行われた唯一の大規模な謎人向けアンケートとして知られている。このアンケートは、90年代中期の大陸において、「謎人」という自己認識を持ち、自主的に燈謎活動に参加していた人々の状況を如実に反映したものとされている。アンケートは全66問を設けており、基本状況（性別・年齢・教育レベルなど）、燈謎活動参加状況（参加動機・継続時間・謎社加入の有無など）、燈謎に対する認識（燈謎の社会的作用・佳作の基準・燈謎が学問になる可能性など）の三部分に分けられている。以下は大陸謎人の基本状況に関する一部の調査結果を円グラフにしたものである。



² 中華燈謎年鑑編輯委員會『中華燈謎年鑑』第一卷（1995年巻）、安陽：全国燈謎信息社、1997年10月、139-148頁を参照。



居住地域における収入レベル



基本状況の調査で主に分かったのは、大陸における謎人がほぼ男性であったことや、60代が比較的に多かったこと、高校以上の学歴を持つ謎人が84%以上であったこと、大学相当または大学以上の教育レベルを有する謎人が約半数を占めていたこと、専門職や事務職などのホワイトカラー労働者が比較的に多かったこと、70%の謎人が中レベルの収入を得ていたことなどである。総合的に見れば、一定の教育背景と収入を有する中高年男性が謎人の中堅として活躍していたことが分かった。

燈謎活動の参加状況に関しては、ほとんどの謎人が燈謎社団に参加中（91.11%）、燈謎関連の刊行物購読中（95.8%）だったことが明らかになった。また、謎当てから燈謎に興味を持つようになり、独学で燈謎創作を学んだという謎人は約七割、燈謎活動に参加する経験年数が10年以下である謎人が約半数を占めていた。要するに、文化大革命以前から燈謎活動に触れていた人数と、80年代後半から燈謎活動に参加しはじめた人数はほぼ同じであることが分かった。

燈謎の文化的機能に関しては、「智力の増進」を答えた人数が全体の六割を占めていた。つまり、有益な知能ゲームとして捉えられていたことが多かった。佳作の基準に関しては、「典雅」と答えたのが38%、「精練」と答えたのが32%、半数以上の人々が「巧妙」の項目を選んだ。清末民初の謎話から見られる基準とさほど変わらなかった。さらに、8割以上の謎人は燈謎が今後ひとつの学問として発展できると楽観的な見方を示した。そのほか、燈謎のそれからの発展に関する質問のうち、以下のいくつかは謎人の主体性を明確に表している。例えば、「香港や台湾、海外地域と燈謎の交流をする必要があると思うか」の質問に対し、98.55%の謎人が「ある」と答えている。「全国的な謎協を成立することについてどう思うか」には、「良い」と答えたのが八割近くの927人である。「燈謎界にと

って現段階において最も緊迫な任務」について、六割以上の謎人は「普及」と答えている。これらの回答から垣間見える大陸謎人のスタンスは、台湾謎人が示したものと共通する部分が非常に大きかったと看取できる。

3. 全国的な燈謎刊行物と組織

1994年の時点で、95.8%の謎人が謎報や燈謎雑誌を購読中という状況を実現させたのは、80年代後半から創刊された一連の燈謎刊行物である。その中で最も代表的だったのは、1985年元旦に遼寧省丹東市で創刊された『中国謎報』である。『中国謎報』は1985年から1990年までに四面構成の月報として全国向けに発行され、1987年に中央テレビと『中国電視報』と合同で「中華杯全国テレビ謎解き大会」を開催したことで、一気に知名度が上がった。その後、しばしば中央テレビと協力し、1987年に「双星杯全国燈謎招待戦」を主催し、1988年に中央テレビを通して燈謎知識講座を15回放送し、1989年には中央テレビの春節聯歡晩会で「謎語勝ち抜きバトル」を主催するなど、80年代後半における大陸でのテレビの普及とともに歩んだ軌跡を鮮明に残したのである。その後、資金不足により、2年間の休刊を経て、1992年からは八面構成に拡張して週報として復刊した。大陸以外の地域との交流を意識したからか、紙名は『中国謎報』から『中華謎報』に変え、名誉社長に台湾謎聯理事長である沈志謙とタイの華僑謎人である盧一雄を招いた。『中華謎報』は、1997年12月までの既刊が確認できるが、その後は発行が停止したと見られる。

そのほか、「中国謎人情況アンケート調査」を行った燈謎雑誌『文虎摘錦』が人気であった。『文虎摘錦』は1985年4月に江蘇省淮陰市（現淮安市）で淮陰市工人文化宮／淮陰市職工謎協によって創刊され、1989年までは不定期発行だったが、1990年から1993年までは月刊、1994年から2002年までは隔月刊として発行されていた。また、『全国燈謎情報』が1989年に河南省安陽市工人文化宮によって創刊され、月刊として現在まで継続的に発行されている。

そして、「中国謎人情況アンケート調査」で八割近くの謎人が期待していた全国的な燈謎組織は、1994年8月に河北省保定市にて成立した。正式名称は「中国民間文芸家協会中華燈謎學術委員会」となった。その成立を計画する準備委員会は同年2月に準備会議を開き、中国民間文芸家協会の副秘書長、『民俗』雑誌の編集室主任、保定市人民政府台湾事務オフィス主任などが出席した。準備会議においては、「中国民協が中国文聯、国家民政部に中華燈謎學術委員会創設許可申請を提出したことに関する報告」「中国民協からの保定市にて中華燈謎學術委員会成立慶典活動を行うことに関する許可」「中宣部が中国民協及び中央テレビが中華燈謎国手戦を開催することに関する返答」の三通の公文書が読まれた³。これらの公文書のタイトルからは、以下のような組織間の関係が見られる。まず、中華燈謎學術委員会が所属組織として選んだのは中国民間文芸家協会（略称：「民協」）である。中国民協は1950年に創立され、全国的に民間文学、民間芸術、民俗文化の調査・研究・出版活動を主な任務としている文芸家団体である。中国文学芸術界聯合会（略称：「文聯」）⁴の傘下にある民間団体の一つとして、省レベルの地方組織（分会）を有する。そして、中国民協の下位民間組織として、中華燈謎學術委員会は中華人民共和国民政部から創設許可を受けてから、その機能司の一つである民間組織管理局に登録する必要があった。また、中央テレビと協力して開催する具体的な活動には、国内の新聞、出版物、テレビなどメディア全般の監督権を持つ中国共産党中央宣伝部（略称：「中宣部」）からの返答が必要だった。80年代末から90年代にかけて、省レベル以上の燈謎活動は基本的にこのような図式に沿って展開されていたのである。工人文化宮系統に置かれる多くの地方謎社と中国民協の

³ 「謎壇の喜訊 奮進的起点——中華燈謎學術委員会成立慶典籌備會紀要」『中華謎報』、丹東：中華謎報社、1994年3月3日、第9期第1面。

⁴ 中国文学芸術界聯合会は中国の文芸専門家の団体である。1949年7月、毛沢東の文芸方針に沿った人民文芸を建設するための中華全国文学芸術工作者代表大会（略して「文代会」）で「中華全国文学芸術界聯合会」が成立した。1953年9月の第2回文代会後、「中国文学芸術界聯合会」と改称し、組織化された。

指導下にある中華燈謎學術委員会とがどのような関係性で結ばれていたか、次の節でその経緯を整理する。

三 文革前後における活動様相の変化

1. 復活と統制——戦後から文革まで

終戦直後、大陸での燈謎活動はまず、新聞雑誌の出版が集中だった地域で復活の兆しを見せた。新聞の復刊等にとともに、もともと新聞業界にいた燈謎愛好者は抗戦勝利を祝う燈謎を紙上に載せた。例えば、1945年12月、復刊した蘇州の『大華報』に「文虎欄」が復活し、同じ時期に『蘇州民報』『蘇州明報』なども次々と燈謎欄が設けられた。ただ、1947年に掲載した「文虎欄」の作者附言が書いたように、「或いはこのような雅興が黄金と白米の値上げにより、以前のような盛況には戻れないだろう〔或此番雅興因黄金白米上漲、而不逮以前〕」⁵。戦後の経済的困難期において、江蘇省のような燈謎活動が盛んだった地域でも、燈謎の勢いは戦前のレベルまでには回復していなかった。そんな中、揚州で発行されていた『蘇北日報』は1948年5月に「文虎徵射会」を開催し、燈謎50題のもとへ参加者が100人近く集まった。それが戦後から1949年までの間に見られた揚州謎壇の微弱な回復だったと言われている⁶。

50年代に入ると、北京と上海のような大都市の大衆文化施設を中心に、謎人が活動し始めた。ただ、謎社のような組織はまだ確認されておらず、一般市民や青年の中では燈謎がさほど流行らなかった。政府機関や工場、商店などが開いた週末聯歡会に、時々燈謎が出されるが、燈謎が得意な人は少なかったという⁷。上海では、50年代から工人文化宮、工人俱樂部などで燈謎会が行われるようになったが、そこに集まったのは娯楽を求める中学生たちだった。そこで、敬業中学、三好中学、回民中学など一部の条件の揃った中学では、燈謎チームが成立した⁸。燈謎に興味を持ち始めた若者に燈謎の基本を教えたのが、余真⁹の『打燈謎』という本だった。当時上海では、『新聞日報』『新民晩報』『労働報』『青年報』『遊芸』などの新聞雑誌の余白に定期的に燈謎が載せられていたが、その中で最も人気があったのは、余真が執筆・編集を務めた『新民晩報』の「一日一謎」欄であった。そして、彼が書いた燈謎入門書『打燈謎』が1957年に上海文化出版社によって出版されると、忽ち話題になり、合計10万冊以上発行し、かなりの影響を及ぼしたのである。50年代から、或いは文革以降から燈謎に触れ始めた謎人のうち、多くの人がこの本から燈謎のことを学んだと言っている。この書は64頁しかないが、「漫談燈謎」「燈謎遊戲の一般的なルール」「燈謎の解き方と作り方」「晩会での燈謎活動について」「燈謎作品の紹介と注釈」との五章に分けて、燈謎に関する基礎知識を簡潔にまとめている。第一章の「漫談燈謎」はいわゆる謎話と同じ性質の文章であり、その中に作者の燈謎に関する認識・主張が読み取れる。特に注目に値するのは燈謎と謎語の違いに関する論述である。

燈謎は「文字謎」、謎語は「口語謎」である。謎語は人民が口頭で伝承してきたものであり、燈謎は文字に通じて表現するものである。ゆえに一般的に見れば、謎語のほうが燈謎より通俗的である。

燈謎は「文字謎」、謎語は「口語謎」。謎語は由人民口頭上傳誦出来的、燈謎則是通過文字表現

⁵ 江更生『中華謎海』上海：学林出版社、2000年11月、59頁。

⁶ 同上、68頁。

⁷ 陳振鵬主編『謎話』上海古籍出版社、2003年7月、234頁。

⁸ 江更生『中華謎海』上海：学林出版社、2000年11月、29頁。

⁹ 余真是本名張義璋、1920年に浙江省で生まれた。民国期に大学を卒業した後、上海黄浦区の工商聯に就職。燈謎を愛好するが、謎社に参加した経験はなかった。陳振鵬主編『謎話』上海古籍出版社、2003年7月、234頁。

出来的；因此一般说来、謎語比燈謎要通俗。¹⁰

以上の内容は清末民国期に出版された謎書・謎話に見られないものであり、論者が収集した資料の中では、燈謎と謎語の性質を文字／口語によって区別し、「文義謎」「事物謎」という概念を用いて両者の関係を説明する文章として、これが最初の例である。陸滋源の『中華燈謎研究』はおそらくこの本から用語を採取して、燈謎の定義を整理したのではないかと思われる。『打燈謎』の出版があったことによって、50年代後期という比較的早い段階から、大陸謎人の間で燈謎に対する共通認識がある程度構築されたと言えよう。書の前言には次のように述べている。

昔、燈謎という遊戯は春節や燈会でしか見られなかったが、現在は祝日の前後や週末の聯歡晚会などでも燈謎活動が行われている。昔はただ数少ない知識人の間でしか流行らなかったものが、現在は大衆に好まれる娯楽となっている。燈謎遊戯の大衆的基礎はいま、絶え間がなく拡大し、発展している。

過去、燈謎遊戯只出現于春節或燈会里；現在、逢着節日前後或週末的聯歡晚会、都有打燈謎的遊戯活動。過去只是流行于少数知識分子隊伍中間；現在已成為廣大群衆喜愛的娯樂。燈謎遊戯的群衆基礎、正在不斷地擴大和發展之中。¹¹

この前言に書いている「過去」と「現在」の比較は、民国期と中華人民共和国成立後の状況を表しているであろう。燈謎が「数少ない知識人」の遊戯から「群衆に好まれる」遊戯へ転換することは作者の念願のように思われる。謎話から確認できるように、余真の燈謎に対する主な主張は、「雅俗共賞」を推奨することである。彼は燈謎の意義を高く持ち上げる現象に反対を示していた¹²。彼は「雅俗共賞」な燈謎を押し薦めることで、過去に一部の文人知識人の間でしか流行らなかった遊びを大衆の娯楽として普及させようとした。その目的を達成するには、燈謎が持つ文化的な意義を高く持ち上げるのは適切ではないことを、彼は強調した。彼が叙述の中でしばしば使った「知識分子」「群衆」などの用語から推察すると、その見解は1949年から1958年までの社会転換期に見られる中国共産党文化政策の変動に大きく影響されていた。このような言説は、燈謎が50年代及び文革収束後に工人文化宮系統の施設を拠点に活動してきた理由に繋がるため、以下で簡単にまとめておく。

第三章で述べたように、1928年から30年代にかけて、『謎史』を始めとした「謎」の関係書籍が中山大学民俗学会叢書として次々と出版されるようになり、燈謎も謎の一部として民俗学者の視野に入ったが、民俗学者は批判的な眼差しで燈謎を捉えていた。顧頡剛が『謎史』に寄せた序文の中で以下のように述べている。

戴季陶は「日本論」でとても良いことを言っている。「どんなに反対しても、攻撃しようとしても、要するに、その対象を知らなければならない。」我々は子供がやる謎々を取るに足らないことと思ひ、士大夫がやる燈謎は精神の無駄使いとし、下層社会の隠語などを嫌うかもしれないが、いずれにせよ、そのものを知らなければならない。知ってからはじめて、その対処方法を議論し得るからである。（もう一度丁重に声明しておくが、我々民俗学会の同人は「知」のことだけに関わり、「行」のことは考えないのだ¹³。だから、我々は事実の美醜善悪など関係無く、我々の任務は事実の説明に過ぎない。ただし、政治家が民族精神を発揚しようとする時、教育家が風習を

¹⁰ 余真『打燈謎』、上海：上海文化出版社、1957年8月、6頁。

¹¹ 「前言」、余真『打燈謎』、上海：上海文化出版社、1957年8月。

¹² 陳振鵬主編『謎話』上海古籍出版社、2003年7月、235頁。

¹³ 顧頡剛はここで宋明理学の「知」「行」概念を借りて彼が思う学術と政治・教育の関係を説いているが、朱子学の知先行後説に依拠するものと見られる。

改良しようとする時、我々のところから材料を取って、自分の取捨選択で応用するのは構わない。) 戴季陶先生説得好：「無論是怎样反对他、攻撃他、総而言之、非晓得他不可！」(日本論) 我們對於小孩子猜謎的事情或者以為無足道、對於學士大夫打燈謎的事情或者以為耗費精神于無益之地、對於下等社會的專說隱語也或者以為可厭惡、但是、我們總非晓得他不可。我們必須曉得了他、才可討論对付他的方法。(我再次鄭重聲明一句話：我們民俗学会同人只是只管「知」而不管「行」的、所以一事實的美醜善惡同我們沒有關係、我們的職務不過說明這一事實而已。但是政治家要發揚民族精神、教育家要改良風俗、都可以從我們這裡取材料去、由他們別拮了應用。) ¹⁴

ここでは、「事實の美醜善惡は關係無い」と書いてあるが、文人の謎が時代遅れの旧物であるという意見は民俗学の中で高まっていたことが明らかである。純朴な民間の「謎語」に対する民俗学者の態度は、明らかに士大夫の遊びだった「燈謎」より積極的であった。燈謎は民間のものではなく、士大夫階層の娯楽であるという民俗学者が持つ「知」は、謎人が持つ「知」や、彼らが実際に行っている「行」との間に、かなりの距離と齟齬があった。顧頡剛が取る「『知』のことだけに關わり、『行』のことは考えない」態度は學術の脱イデオロギーの構想から発したものであり、彼が思う「行」の主体は創作者である謎人ではなく、社会レベルで文化の改良に働きをかける政治家や教育家などである。当時の民俗学者の視野に個体としての「謎人」はおろか、燈謎作者の集団さえも見えていなかった。こういった意味で、「行」とは、文化政策を決める現場で行われる政治イデオロギーが反映している動作であると思われていた。実際、どのような「発揚」と「改良」が現場で行われようとしていたかという、「民族形式」をめぐる論争が代表例である。1939年から1940年末にかけて、中国の文学芸術における民族形式をめぐる論争の中、代表的な発言者の一人であった郭沫若は、1940年6月9日と10日の『大公報』で「民族形式私見〔“民族形式”商兌〕」という論説を発表し、次のように述べた。

中国の新文芸は事實上、旧来の二つの形式——民間形式と士大夫形式——の總合体であり、民間形式から通俗性を、士大夫形式から芸術性を取り入れ、さらに外来要素を加えた旧形式と外来形式の總合体である(中略) 現在、大衆を動員し、教育するために、便宜上、当然いかなる旧形式も利用していい。民間形式ばかりでなく、非民間の士大夫形式でさえも利用すべきである。

中国新文芸、事實上也可以說是中国旧有的兩種形式——民間形式与士大夫形式——的總合統一、從民間形式取其通俗性、從士大夫形式取其芸術性、而益之外来的因素、又成為旧有形式与外来形式的總合統一(中略) 在目前我們要動員大衆、教育大衆、為方便計、我們当然是任何旧有的形式都可以利用的。不僅民間形式当利用、就是非民間的士大夫形式也当利用。 ¹⁵

その後、建国初期の文化政策の基礎となった毛沢東の「文芸講話」¹⁶では、

我が知識人出身の文学・芸術活動家が自分の作品を大衆から歓迎されるものにするには、自分の思想・感情に変化をおこさせ、改造を行われなければならない。

我們知識分子出身的文芸工作者、要使自己的作品為群衆所歡迎、就得把自己的思想感情來一個變化、來一番改造。 ¹⁷

過去の時代の文学・芸術の形式に対しても、我々は利用を拒まないが、これらの古い形式が我々

¹⁴ 顧頡剛「關於謎史：謎史序」『民俗』、広州：国立中山大学語言歴史学研究所、1928年第23/24期、19-20頁。

¹⁵ 郭沫若著作編集出版委員会『郭沫若全集』文学編第十九卷、北京：人民文学出版社、1992年1月、34、36頁。

¹⁶ 1942年5月毛沢東が延安の文学・芸術座談会における講話。1943年10月19日の『解放日報』(北京)で公表され、以降、抗日辺区および新中国の文芸運動と知識人の思想改造運動の基本文献となった。

¹⁷ 毛沢東『毛沢東選集』第三卷、北京：人民出版社、1991年12月、851頁。

の手に取られ、改造され、新しい内容が盛り込まれれば、人民に奉仕する革命的なものに変わる
のである。

對於過去時代的文芸形式、我們也並不拒絕利用、但這些旧形式到了我們手裡、給了改造、加進了
新内容、也就變成革命的為人民服務的東西了。¹⁸

とあった。周知のように、「文芸講話」の主な命題は「階級論」と「革命文学」であり、文芸は労働者、農民、兵士に奉仕するものであると主張している。すなわち、士大夫から知識人の転換は近代教育の普及によって完成されたが、士大夫形式を民族形式の一部として取り入れ、中国の新文芸に転換していくことが40年代に新たに提起された任務であった。そして、1949年7月に開催された中華全国文学芸術工作者代表大会（略して「文代会」）では、郭沫若による「文聯」成立の報告とともに、「文芸講話」は新中国の文芸界の基本方針にされた。そして、建国後、新民主主義社会から社会主義社会への転換期になると、知識人の思想改造運動は集中的に行われるようになり、やがて1956年1月の知識人問題会議では、「一連の政治運動を経て、知識人はすでに労働者階級〔工人階級〕の一部である」¹⁹と宣言されたのである。

このように、民俗学との葛藤をはじめ、文化政策の経緯および知識人の階級認定を知った上で、余真の主張を振り返ってみると、それは当時の大陸において、燈謎の発展にとって最も合理的な選択だったのではないかと思われる。自らの思想・感情を改造し、過去の士大夫形式を大衆に好まれる形式に変えてしまえば、人民に奉仕するものとして広く受け入れられ、清末民国期の謎話に多見する「博奕猶賢」と「小道可觀」の論法とは内容的に違うように見えるが、燈謎活動の合法性と有益性を証明しようとする点において、同じ目的として捉えることができる。

知識人が労働者階級として認められたため、1950年6月に公布された労働組合（工会）法に示されるように、その文化活動は労働組合の管理下に置かれるものとなった²⁰。工人文化宮/工人倶楽部は中華全国総工会に属する労働者福祉施設であるとともに、一般市民に向けた大衆文化施設でもある。前述したように、上海では、50年代から工人文化宮などで燈謎会が開かれるようになった。江蘇省の常熟市では、1956年に工人文化宮の中で燈謎室が設けられた²¹。また、蘇州では、1957年1月に教師、労働者、幹部十数名によるアマチュア燈謎研究会（原文「研究組」）が結成され、市工人文化宮を拠点に活動していた。蘇州アマチュア燈謎研究会は1963年に市民向けの燈謎教室を開催し、『燈謎』『創作謎選』『春燈夜話』『雄虎』など六十冊以上の雑誌を発行した²²。このように、文革が開始するまで、大陸の謎人は大衆への普及に心がけ、燈謎の活気を取り戻そうと活動を着々と進めていた。しかし、文革の開始とともに、「謎を話すと顔色が変わる〔談謎色変〕」時期が幕を開いた。前章で述べたように、持っていた謎書が没収されたこと²³や、燈謎が理由で「現行反革命」の冤罪に貶められたこと、燈謎活動が禁止されたことなどが文革中に起こった²⁴。一方、一部の地域では「地下」の燈謎活動が続いたという証言も見られるが、確認できる情報が少ない。蘇州市工人文化宮の燈謎研究会は文革第二段階が終わる直前の1972年から密かに燈謎活動を再開していた²⁵。常熟市工人文化宮の燈謎室は1975年から活動を再開したが、暫く賞品を出さないようにしていた²⁶。そして、1976年以降、北京、上海

¹⁸ 同上、855頁。

¹⁹ 周恩来「關於知識分子問題的報告」、同『周恩来選集』下、北京：人民出版社、1984年11月、162頁。

²⁰ 高慶元「中国労働組合性格の変化に関する分析」『現代社会文化研究』第22号、新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科、2001年11月、53頁。

²¹ 江更生『中華謎海』上海：学林出版社、2000年11月、39頁。

²² 同上、59頁。

²³ 陳振鵬主編『謎話』上海古籍出版社、2003年7月、前言1頁。

²⁴ 同上、130頁。

²⁵ 江更生『中華謎海』上海：学林出版社、2000年11月、60頁。

²⁶ 同上、39頁。

などの地域も徐々に文革の影響から抜け、燈謎活動が再開したのである。

2. 蘇生——文革収束後から八〇年代まで

1979年5月、江蘇省無錫で全国一部の工人文化宮/倶楽部代表が集まる会議が開かれた。会議中、南京市工人文化宮から「燈謎会猜」を開催する提案が出され、大勢の同意と支持を得たことで、同年国慶節に南京で「燈謎会猜」を開催することが決まった。そして、南京市工人文化宮は8月に全国の工人文化宮/倶楽部に招聘状を出し、最終的に上海、瀋陽、長春、蘇州、温州、南通、厦門、漳州、南京の9つの都市の工人文化宮が参加することになった。通称「九城市燈謎会猜」というイベントが9月30日に開幕し、4日間にわたった。南京市からの謎人12名とほかの地域から41名、年齢が18歳から68歳までの謎人合計53名が参加した。「九城市燈謎会猜」は文革後初めての地域間燈謎交流イベントとして、「燈謎の生命力に対するテスト」と言われた²⁷。イベントの主な内容は「会猜」（燈謎大会）と燈謎に関する討論会の二つに分けられた。「会猜」は謎人向けの内部会猜と大衆向けの外部会猜に分けて行われ、討論会では、燈謎の発展にかかわる様々な議題が提起された。例えば、燈謎の社会的機能、謎格など古い形式の継承と取捨、新しい素材をいかに取り入れるか、いかに「四つの近代化〔四個現代化〕」²⁸に貢献するか。これらの問題をめぐって、「双百〔百花齊放・百家争鳴〕」²⁹原則に沿った熱い議論が繰り広げられたという³⁰。「九城市燈謎会猜」が終わった後、参加した各都市の工人文化宮代表は全国の工人文化宮/倶楽部に向けて、

- (1) 各地の工人文化宮で燈謎チームを結成すること；
- (2) 工会組織に関心を呼びかけ、全国的な燈謎研究組織を創立すること；
- (3) 専門的な刊行物を発行すること；
- (4) さまざまな形式の燈謎活動を定期的に行うこと。³¹

の4点を呼びかけた。80年代以降の大陸における燈謎活動は、この呼びかけの方向に沿って動き出したように見られる。まず、燈謎活動の人口が大幅に増えた。各地の工人文化宮では次々と燈謎チームが結成されていったばかりでなく、本来人数が20人以下の「燈謎チーム」は人数の拡大により、「燈謎研究会/協会」（20人以上）に名称変更をすることが一時期集中的に行われていた。

また、「九城市燈謎会猜」のような地域を跨る大規模の燈謎イベントは、その後も江蘇省を中心に次々と行われた。例えば、1982年に蘇州市群衆芸術館では、10日間を亘る新春燈謎会が行われ、参加者が4000人以上集まり、その後の元宵節には、「壬戌元宵姑蘇六市（県）会猜」が開かれた。1986年秋には、蘇州市職工燈謎研究会が成立し、10月には市職工燈謎研究会、市总工会及び市工人文化宮の共催による「姑蘇謎会」が開催され、全国17の地域からの謎人計108名が集まり、謎会の様子は『智力』『今晚報』『蘇州日報』『工人日報』などに報じられた。上海では、80年代に市青年宮³²で数回にわたる「青年団幹部燈謎学習講座」が開催され、その流れで上海青年燈謎学会が結成された。1983

²⁷ 同上、532頁。

²⁸ 現代中国の主な政策目標であり、農業・工業・国防・科学技術の近代化を指す。1964年の第三届全国人民代表大会（全人代）と1975年の第四届全国人代における周恩来の政府工作報告によって提起された。文化大革命の収束を宣言した1977年の中国共産党第11届全国代表大会では、新しい党規約に「四つの近代化」が明記されたことにより、脱文革の表象として認識されることが多い。

²⁹ 1956年から57年初頭、中国共産党が提唱した学問、思想、文化、芸術などの各分野における自由な発言を奨励する運動。

³⁰ 江更生『中華謎海』上海：学林出版社、2000年11月、49頁。

³¹ 同上、532頁。

³² 中国共産主義青年団（中国共産党による指導のもとで14～28歳の青年が加入し、党の若手エリートを養成するための青年組織）所属の青年活動施設。

年9月20日から22日には、上海市青年宮と『解放日報』や上海テレビなどのメディアが「中秋賞月謎会」を開催し、全国21の地域の93ヶ所の青年宮、工人文化宮/倶楽部から、計5000作以上の燈謎作品が投稿された。1984年の元宵節には、上海市工人文化宮と『文匯報』、上海テレビなどによる「春申謎会」が開かれ、全国21の都市からの謎人が参加した。その後、1984年には「中日友好謎会」、1985年には「元宵謎会」、1986年には「元宵家庭猜謎会」など、大型謎会が次々と行われ、大陸の燈謎活動は80年代中期において清末民国期以来の盛況となったのである。専門的な刊行物は、前節で述べた『中国謎報』や『文虎摘錦』などが出版されるほか、『中華燈謎鑑賞』『古今優秀燈謎鑑賞辞典』『中華当代謎海』など燈謎関連の工具書も80年代に次々と出版された。

そのような活況の中、大陸の燈謎活動に二つの傾向が見え始めた。一つは頭脳競技としてのイベントが増加する傾向である。「九城市燈謎会猜」の影響を受け、80年代の大型燈謎イベントは「会猜」、または「謎会」と名付けられるのが一般的であった。しかし、1983年から謎人個人戦、団体戦のような試合形式が多くなり、1984年の遼寧省丹東市で開催された「第一回全国謎海探驪招待戦〔首届全国謎海探驪邀請賽〕」以降、徐々に「招待戦〔邀請賽〕」と名の付く活動が増えていった³³。競技化という現象には、主に以下の理由が考えられる。まず、「九城市燈謎会猜」という前例が成功したことにより、地域を跨る燈謎交流が盛んに行われるようになり、各地の工人文化宮に謎人団体が次々と結成され、自然と各地方の謎人代表チームを簡単に選出できるようになった。そして、テレビなどの現代メディアとの連携が増えるにつれ、伝統的な謎会より、競技形式のほうが現場にいる参加者だけでなく、お茶の間にいる「観衆」にも楽しんでもらえるため、放送内容として大衆に受け入れやすい。また、「○○杯」というタイトルの燈謎競技会にすれば、企業スポンサーが付きやすいため、活動経費と高めの賞金を勝ち取ることができるという利点がある。

しかし、燈謎活動の競技化に疑念を持つ謎人も少なくなかった。『打燈謎』の作者余真もその一人だった。彼は毛沢東の名句「うるわしけれども春を争わず〔俏也不争春〕」³⁴を借りて、自身が思う燈謎のあるべき姿を以下のように説いた。

勾心鬪角（謀略を巡らす）の精神があれば、謎芸の探究に使って、精進を求めるが良い。名利の争いに燈謎を使うと、きっと失敗するだろう。燈謎は最初から名利を逐うための道具ではないからだ。

倘有勾心鬪角的精神、最好用之于探索謎芸、求得精進、如果用之于名利之争、那結果是必然失败的、因為燈謎這玩意本身就不是名利的工具。³⁵

33 『中国当代燈謎芸術家大辞典』（劉二安・牛書友・鄭州：中州古籍出版社、2002年1月）付録「当代省レベル以上謎会」によると、80年代における個人戦または団体戦形式で行われた省レベル以上の燈謎活動は、1983年に「吉林省四市燈謎会猜」「福建省第四届職工謎会」「首届蚌江僑郷謎会（福建省）」、1984年に「首届全国謎海探驪邀請賽」「四川省第一届職工謎会」、1985年に「福建省第六届職工謎会」「永安市第二届燕江中秋謎会（福建省）」、1986年に「一九八六年全国春季燈謎邀請賽（江蘇省）」「四川省精英謎会暨成都市第二届職工燈謎会猜」「天津市職工首届津門謎会」「広東省第三届職工燈謎会猜大会」「姑蘇謎会暨首届燈謎知識競賽（江蘇省）」、1987年に「福建省第八届職工謎会」「広東省第四届職工燈謎会猜大会」「全国『双星杯』燈謎邀請賽」「福建省第九届職工謎会」、1988年に「広東省第五届職工燈謎会猜大会」「河南省首届職工謎会『中州謎会』」「四川省第四届職工謎会」、1989年に「貴陽『甲秀謎会』（貴州省）」「第二届蚌江僑郷謎会」「全国歴史文化名城燈謎邀請賽暨河南省第二届職工謎会『臥龍謎会』」「『再生杯』全国青年燈謎邀請賽」「天津市職工第二届津門謎会」「広東省第六届職工燈謎会猜大会」「吉林省首届職工燈謎精英大賽」「紅樓謎会（上海市）」「『建行杯』陳倉謎会（陝西省）」「広西全区第四届職工燈謎会猜」などがあつた。頭脳競技形式の燈謎活動が広東、福建、四川、江蘇など一部の地域で通例となってだけでなく、全国的に広がりつつあつたと看取できる。

34 毛沢東「卜算子・詠梅」（1961年）より。

35 陳振鵬主編『謎話』上海古籍出版社、2003年7月、235頁。

このような文章を用いて、燈謎が競技化によって「名利を逐うための道具」にされてしまうのではないかという疑念とこの傾向への批判的な態度を表明したのである。80年代以降に徐々に顕になった競技化傾向の中、試合活動に熱中するあまり、謎人が創作を蔑ろにすることを懸念し、南京工人文化宮では、1985年国慶節に「金陵燈謎理論研討会」が開催された。「謎芸の探究」を目的とした学術的なイベントだった。上海では、1989年10月に黄浦芸術祭の重要イベントとして、「紅樓謎会」および「紅樓夢と謎語学術研討会」が開催された。競技化傾向を修正する動きとして捉えることができよう。

3. 組織の移転と競技化ブーム——九〇年代以降

1989年以降、学術的な意味合いを持つ燈謎活動の増加にともない、大陸における一部の謎人組織は工人文化宮から離れ、文聯／民協所属の民間団体となった。例えば、1980年に江西省南昌市工人文化宮で結成した燈謎チームは、80年代に工人文化宮を拠点に活動を展開していたが、1991年2月には、江西省謎学会に改名し、江西省民間文芸家協会傘下の団体となった。したがって、1991年以降、南昌市での燈謎活動は、協力部署として工人文化宮が並べられることもあるが、実際に経費を提供するのは民協であり、活動は民協の指導のもとで行われるようになった。ただ、活動を企画・実施する謎人は変わっておらず、元工人文化宮燈謎チームと同じ人員であった³⁶。

このような組織の移転を招いた理由として、主に三点が考えられる。一つは、中華全国总工会傘下の工人文化宮／倶楽部は、市レベル以下の各行政区域にのみ設置されているため、省レベル以上の燈謎組織を作る際に拠点として適さない。もう一つは、工人文化宮／倶楽部は労働者福祉施設であるのと同時に、一般大衆向けの教育・文化活動を実施する文化施設でもあるため、創作理論を中心とした非大衆向けの交流活動は支持されないおそれがある。三つ目は、燈謎が一般的に民間文学として認識されていることに繋がる。前文で述べたように、民国期以降、中国の「謎」のあり方に対し、民俗学者と謎人の認識が葛藤し続けてきた。しかし、『謎史』など数少ない謎研究書の影響により、いまだに燈謎は文学と民俗学の周縁に置かれる存在として捉えられている。その関係性を考慮した結果、最も違和感のない位置づけは民間文学であり、民間文学の創作者として、謎人が「民間文芸家」という肩書を獲得するのは妥当であるように思われてきた。したがって、謎人が学術的な活動を展開しようとする場合、あるいは、省レベル以上の謎人組織を結成しようとするれば、文聯直属の団体、または民協に所属する民間団体として登録するという二つの選択肢がある。このように、謎人組織が移転する流れは1989年からスタートし、90年代に顕著となった。組織名称も活動目的の転向に合わせて、「〇〇省燈謎学会」或いは「〇〇省民間文芸家協会燈謎專業委員会／燈謎学術委員会／燈謎学委員会」と付けられるのが一般的となった³⁷。

また、90年代には、工人文化宮に所属していた謎人組織が一般企業へ移転するというケースも見られる。南京市職工燈謎協会がその典型的な一例である。文革後、大陸燈謎活動の分水嶺的イベントとなった「九城市燈謎会猜」を主催し、80年代に学術的な燈謎活動をいち早く始めた南京市工人文化宮燈謎チームは、メンバーの増加により、1988年に南京市職工燈謎協会に改名した。しかし、その後まもなくして、活動経費の不足によって解散が余儀なくされた。1995年、南京市工人文化宮燈謎チームの一員だった葉達生が南京新世紀電子電器設備技術社の役員に就任し、取締役社長である弟の支持を得て、元南京市職工燈謎協会のメンバーを招いて、「南京新世紀燈謎サロン」として謎人組織を再結成した。そして、1995年11月2日～5日に、新世紀電子電器設備技術社が活動資金を提供し、香港、台湾、タイを含めた20以上の地域から、百人近くの謎人が参加する「新世紀重陽謎会」を主催した。

³⁶ 中華燈謎年鑑編輯委員会『中華燈謎年鑑』第一卷（1995年巻）、安陽：全国燈謎信息社、1997年10月、51頁。

³⁷ 例えば、1989年成立した河北省民間文芸家協会所属の河北省燈謎学会、1992年に成立した河南省民間文芸家協会燈謎学委員会、1993年に成立した黒龍江省民間文芸家協会燈謎專業委員会、1995年に成立した遼寧省民間文芸家協会所属の遼寧省燈謎学術委員会などが代表的である。そのほか、1982年に成立した甘肅省民間文学研究会燈謎チームは1991年に甘肅省燈謎学会と改名し、甘肅省文聯に直属する団体となった。

謎会は内部向けの会猜と南京大学での展示の二部に構成され、謎人からの評価はおおむね称賛だった。しかし、「近年燈謎競技化ブームがヒートアップする中、勝ち負けへの執着や不正行為などが誘発されているが、今回の謎会でようやく新しい風が吹き始めたという感覚を得た。単純な娯楽として、燈謎は本来あるべき姿に戻され、高いレベルでの復帰が果たされた」というプラス評価の裏に、一部謎人の間では、「いま、燈謎をただの娯楽にしていいいか」と問題視する声もあった³⁸。

このように、拍車がかかった燈謎活動の競技化は止まることなく、ブームとなった。さらに、本来学術的な方向に進もうとして文聯/民協に移転した「謎学研究会」等も、多くの燈謎競技活動を主催するようになっていった。例えば、蘇州市文聯に属する蘇州謎学研究会は1994年に成立した後すぐ、蘇州市の各ラジオ局、テレビ局および長發商厦などのスポンサーと協力し、20日以上に亘る「長發杯姑蘇謎王戦」を開催した。決勝戦はテレビ中継され、市民の間で話題となった³⁹。同じく1994年に開かれた中国民協中華燈謎学術委員会成立大会では、委員会選挙や章程の決定など事務的内容のほか、「青澳湾名商遊艇会杯中華燈謎国手戦」が同時に行われた⁴⁰。結果的に、90年代に出版された燈謎関連書籍のほとんどが「鑑賞辞典」⁴¹あるいは燈謎作品集であり、学術的な著書は現れなかった。

四 おわりに

本章では、戦後から90年代まで大陸燈謎活動の概況と変容を、文化政策の変化や組織の所属関係を手がかりにまとめてみた。以下の三点を結論として提示したい。

第一、「謎人」は近代中国下層知識人の一部として、かなり特徴のある集団である。90年代に行われた謎人アンケートの結果が示したように、大陸燈人の謎社参加率および燈謎刊物の購読率は両方とも90%以上に上っていた。このように、交流の緊密さにより、共通の認識が築きあげられ、活動形式および活動の方向性の選択に強い主体意識が確認できるようになった。戦後大陸における燈謎活動の基盤を作った文化政策的背景として、主に40年代の「民族形式論争」と50年代の「知識分子改造運動」を挙げることができる。前者は燈謎のような非大衆的な旧文芸形式を中国新文芸の一部として改造する方向に導いた。後者は謎人集団の社会的地位を決め、労働者階級による大衆向けの文化活動の場を提供した。以上の二点が謎人の主体性に直接的な影響を及ぼしたからこそ、文革という断層期をうまく乗り越え、燈謎という漢字文化の命は繋ぎ止められたのである。伝統的な謎社と謎会のあり方は、「燈謎」という言葉が誕生した宋代から民国期まで、大きく変わることはなかった。こういった意味で、大陸においては、燈謎活動の形態が50年代にはじめて近代化の段階に入ったと言えるだろう。そして、活動形態の近代化は文体の近代化と同じく、文化生産者（創作者）の主体性によって形成されるものである。

第二、改革開放政策による市場経済化の衝撃及びマスメディアの介入によって、燈謎活動が元来持つ知恵比への要素が頭脳競技として新しく編成され、その様子は大衆の前で展示されるものとなった。潤沢な活動経費を獲得すると同時に、謎人の関心は徐々に創作や交流など本来の目的から離れ、競技力の向上に移っていった。謎人組織の遷移と学術的なイベントの実施がその対抗策として打ち出されたが、競技化の傾向を修正することはできなかった。主な理由として考えられるのは、長期に渡る民俗学との認識の齟齬である。「非民間の士大夫形式であった燈謎」と「民間文学としての謎語」の関係性にまつわる問題はいまだに棚に上げられ、「中国の謎」という枠の中に放り込まれたものの、民

³⁸ 江更生『中華謎海』上海：学林出版社、2000年11月、52頁。

³⁹ 同上、61頁。

⁴⁰ 中華燈謎年鑑編輯委員会『中華燈謎年鑑』第一卷（1995年巻）、安陽：全国燈謎信息社、1997年10月、92頁。

⁴¹ 例えば、呉仁泰・柯国臻『佳謎鑑賞辞典』（合肥：黄山書社1991年1月）、趙首成・邵濱軍『古今優秀燈謎鑑賞辞典』（桂林：漓江出版社1991年6月）がそれである。一部の佳作燈謎に鑑賞的な文章を付け、調べやすいように並べた工具書である。

間文学の方法論を用いて燈謎を研究する動きは全く見られない。なぜなら、燈謎は「無名な作者による集団的創作」ではなく、個人的な文学創作であり、謎語のように知識人によって採取する必要がないからである。中国における民間文学の概念⁴²は基本的に口承文学と同一視され、不特定多数の作者或いは集団によって創作されることが主な特徴とされている。一方、近代的文体が形成した後の燈謎には、謎人の強い主体意識が反映されており、高い独創性と文学性が要求される。また、燈謎の内容は別として、50年代以降の謎人の精神活動は明らかに政治イデオロギーに強く影響されてきた。このように、民間文学との間に性質の違いが鮮明に現われているにもかかわらず、民間文学と同じ枠組みの中で対象化されようとしている現状には数多くの問題点が浮かび上がっている。仮に「非民間的」である、と民俗学者によって仕分けられた燈謎が大衆への普及を通して、民間文学の分野に入れられようとするれば、まず解決すべき問題は「民間」という範疇の再確認と再構築であるように思われる。しかし、この課題が解決されないまま、多くの謎人組織は民協の傘下に入った。そこで感じた違和感が取り除かれずに、鑑賞と研究の区別もはっきりとせず、そのまま競技化の道を突き進むこととなっている。

最後に、近代台湾における燈謎活動の様相との異同をまとめておく。謎人の集団的特徴から見ると、大陸と台湾はほぼ同じであり、旧知識人（士大夫）の嗜好を受け継いだ一部の近代知識人が中堅となっている。両方とも、戦後から文革/文復運動期まで、政治イデオロギーの浸透が顕著であり、具体的な活動は文化政策の変遷に敏感に反応しながら展開されていたと見られる。ただ、台湾の謎人団体は大陸と比べ、それほど均一性を持たない。なぜなら、工人文化宮のような文化施設のネットワーク内で活動していないからである。台湾では、ほとんどの謎社が謎人による自由結社であるため、組織の形態上、前近代の謎社とほぼ変わらない。そして、本省謎人は清末の士大夫流の作風を受け継ぎつつ、日本統治時代にローカル色の強い本土化燈謎を萌芽させたため、大陸から来た外省謎人との間には、言語による隔たりをはじめ、創作スタイルや謎会形式などにおいてかなりの食い違いがあった。その溝は同じ政治イデオロギーと文化政策環境の下で徐々に縮まり、現在は本省・外省の別なしに「台湾燈謎」という文化ブランドを打ち出そうとしている。一方、大陸の燈謎組織は50年代から労働者組合系統に付随し、管理され、比較的安定した活動経費と場所が提供されていた。各地域にある謎社は工人文化宮というネットワークを利用して、地域間の交流活動を簡単に企画することができる。一般的な流れとして、許可を得てから成立する大陸謎社と違い、台湾の謎社は成立した後に該当の政府部門に民間社団の登録を行い、活動の合法性と政府の支持を得る。そのため、政府から提供される経費や場所はごく一部であり、地域間の交流も比較的少ない。80年代以降、大陸と台湾両方において、燈謎活動に商業資本による介入が目立つようになったが、商業資本と謎人の関係性によって異なる結果が導かれた。台湾においては、企業が謎人を介さずに謎会を開く事例が見られ、謎人による批判があったが、大陸のほうは燈謎活動の主導権は依然として謎人にあり、企業はただスポンサーとして資金を提供するというケースがほとんどである。燈謎に関する学術的研究は大陸・台湾両方において少なく、進んでいない状況である。

もちろん、本論では解明できていない課題が多く残っている。第四章と第五章では、謎社の活動に焦点を当てているため、戦後大陸・台湾燈謎の文体上の変化に関する考察はほとんど含まれていない。台湾との比較に関しても、イデオロギーの相違による創作スタイルの差異を検証・分析するところまで進んでいない。今後は戦後の燈謎に関するより緻密な研究に鋭意取り組みたい。

42 鍾敬文『民間文学概論』、上海：上海文芸出版社、1980年7月に参照。

〔附表〕大陸/台湾における文化状況と燈謎事情の略年表

時期	大陸		台湾	
	文化状況	燈謎事情	文化状況	燈謎事情
魏晉		文義謎の萌芽期		
宋	市民文化の開花	「燈謎」の誕生		
～		民俗として定着		
明末	儒家文化の下位化	日常類書による伝播	大陸文化の伝来	
清末	新旧文化の過渡期	章回小説との共生	科挙文化が依然と発達	士大夫文人の間で流行
1895		謎話の誕生	日本統治時代開始	詩社による燈謎会
1905	科挙廃止	謎人・謎社の増加		漢文新聞雑誌に掲載
民国	ナショナリズム	時代に応じた新発展		大陸謎書伝入
1937	日中全面戦争	×	皇民化運動、漢文禁止令	×
1945	終戦	燈謎活動回復	光復	燈謎活動復活
1949	中華人民共和国成立	工人文化宮を拠点に	中華民国政府遷都来台	外省謎人来台
1966	文化大革命開始	×	中華文化復興運動開始	燈謎活動活発化
1976	文化大革命収束	燈謎活動回復	文化建設運動開始	各地で謎社成立
1978	改革開放第一段階	燈謎活動活発化		時代に応じた新発展
1989	改革開放第二段階	台湾などと交流	文化本土化政策	大陸などと交流
～				

終章 結論

以上、本論文では全五章にわたって燈謎を例に、漢字文化における文字遊戯の近代的形成を文体・実践形態の二つに分けて分析し、その変容と創作者である謎人の創作意識を浮き彫りにした。本章では、まず全体を振り返り、各章の結論を改めて簡潔に提示するとともに、それぞれの章で得られた知見が互いにどのように関連するのかを整理してみたい。

第一章では、九種の日用類書を通し、燈謎の属する部門の類書全体における位置、燈謎の分類方法及び収録作品の異同等を比較したうえで、明末社会における燈謎に対する認識の変容を明らかにした。まず、日用類書の想定読者層は識字能力のある民衆であり、士大夫文化と民衆文化の両方にまたがることが分かった。燈謎は士大夫階層が嗜む民衆文化として編集されるが、士大夫文化と緊密に繋がっていることから、民衆の日常生活において実用性が低いと認識されていた。次に、日用類書の特定の部門を通して考察することで、日用類書に収録される燈謎の分類の変遷、また内容的に四書類の拡大から、謎を解くうえで儒教的な一般教養が要求されることが分かった。広い読者層の需要を満たすために、燈謎の掲載形式をより理解しやすく、検索しやすいものに変えていく必要があった。その過程において、燈謎の主流を占める文体形式が、比較的自由に虚字を用いる詩句から、徐々に短い文面で書かれたものへと変わり、これが清代に主流となる、儒家經典の原文を謎面と答えの両方に使う謎へと繋がっていった。要するに、清代の燈謎は日用類書の分類と掲載形式を踏襲し、前代の燈謎が持つ欠点を踏まえたうえで、新しい基準を立てて成し得たものである。「古体」から「今体」に変化するきっかけは、近代に形成した燈謎という漢字文化新分野の内部から起こったのではなく、明末日用類書のような書誌媒体によって間接的に与えられた、という推論を立証した。日用類書による伝播を経由して、清代以降の燈謎は、民俗活動や宴会の場で人々が集まり、謎を解いて楽しむような本来の姿から次第に離れ、漢字や經典をいかに巧みに利用して謎を作ったか、その出来栄を作者同士で競い合うようなものへと変わっていった。言い換えれば、燈謎は一般の人が解いて楽しむためのものよりも、むしろ、漢字と經典に精通した、謎を実作する一部の読書人が技巧を凝らし、作って楽しむためのものになったと言えよう。そこから「謎人」という自己認識が芽生えたと考えられる。

このように、第一章では明末日用類書という今まで気付かれなかった書誌媒体に注目することで、日用類書の編輯が主なきっかけとなり、韻文形式の燈謎が一句ごとに分解され、「古体」から「今体」が生み出されたとの推論を提示した。しかし、「古体」から「今体」への変化は、単に詩詞韻文から短句へと変わるような形式面だけのものではない。もう一つ重要な要素は、創作技巧の精緻化である。したがって、第二章では、燈謎の創作技巧の精緻化が発生する「場」を、中国古典小説の代表的な形態である章回小説の中から見出した。

燈謎と章回小説の結びつきを考察する前に、宋代の説話文芸の一つである「商謎」に遡って、「商謎」と燈謎の関係をあらためて整理した。「商謎」から見られる筆記小説の要素がいかに燈謎と章回小説の結びつきにつながるかを考察することで、清代における「古体」から「今体」への変化を文体論的に理解する手がかりを得たのである。文人筆記小説の中の謎にまつわる逸聞が説話によって俗人向けに翻案され、その表現スタイルが明末以降の章回小説に継承されたことを明らかにした。すなわち、白話小説の系譜に位置する「商謎」は、文語で書かれた筆記小説から、人物の機智を表現する手法として謎を取り入れ、説話人によって演じられたが、説話の底本が文人の手によって章回小説にされ、燈謎の概念が徐々に文義謎に収束し、一般名詞化されたと思われる。したがって、早期の章回小説における燈謎の描写は「商謎」の特徴を色濃く受け継

いだものと看取できる。特に西周生の『醒世姻縁伝』は典型的な一例と見られる。

『醒世姻縁伝』及び『紅樓夢』に対する考察を通して、清代前中期の章回小説に見られる燈謎をめぐる描写は、人物像を表現するための文学的技法の一種であることが分かった。つまり、学力に差のある人物をよりきめ細かく表現するために、趣向の異なる燈謎や、解き方の賢さ、または拙さを利用しながら書かれていた。しかし、清代中期の最盛期以降になると、文人作者による章回小説の創作趣向は筆記小説に戻りつつあった。小説という媒介を借りて文才を寄託するという、曾て筆記小説に見られる創作動機が口語体の章回小説にも現れた。作者の文人化と平行して、読者の文人化も呼び起こされるようになった。そんな中、清代中期の「才学小説」は、筆記小説の伝統を再現しようと、燈謎のような難易度の高い文字遊戯を物語の中に組み込ませ、同好者への呼びかけという意味を含めて、日用類書や謎集などから燈謎の良作を採録しつつ、作者自身と周囲の燈謎愛好者の作品も時に小説に取り入れ、フィクションの場で評議を繰り広げた。その結果、作者自身の燈謎に対する好みや創作の心得が徐々に「表」に露出してきたと同時に、燈謎が明確な創作意識に基づいて書かれる「文学的」なものであるという認識が読者に広まっていったこととなる。そして、『品花宝鑑』や『花月痕』のような、才子佳人小説の延長として創作された狎邪小説においては、主人公のほとんどが才知に富んだ人物にされているため、燈謎のような文字遊戯は学力の差を表現するための手段として使われるよりも、それ自体の優劣に関心が移るようになり、文字遊戯の鑑賞と創作談が一つの目的となった。さらに、清末民国期になると、『鏡花縁』や『二十年目睹之怪現狀』などの章回小説から見出される「燈謎論評／講座」が謎話という専門的な燈謎評論の誕生を促し、「今体」謎の創作ブームを引き起こした。要するに、燈謎が持つ文学性は、自作の謎面であれば、そのオリジナルな文章が持つ文学性であり、經典の原文を借用する場合は、その原典が持つ文学性であり、さらにそれに加えて、解題テクニクの巧妙さによる文学性も含まれる。しかし、それらは全体的にきわめて計量的に評価しにくいもので、明白な基準はなかった。章回小説が燈謎の近代的文体形成に与えた最大な影響は、創作意識の確認よりも、ある程度の評価基準を形成させるきっかけを与えたことである。

以上の変化は、大きく言うと、パロール（口頭文学）からエクリチュール（書かれた文学）へと転換した際に発生する現象として捉えることができる。つまり、口頭文学において人物の言動を表現するためのものが、文字化されることによって、文字の特性を生かした技巧が生まれ、次第にそれが本来の機能から逸れることが発生することである。その過程において、はっきりと確認できるのは、文字遊戯の類が最初から「飾り付け」の素材として入れられているのではなく、小説の物語性から次第に剥離されていったということである。その剥離は意図的なものではなく、明末日用類書で見た燈謎の形式面における変化と類似性があり、目標読者層の性質や作者／編集者のアイデンティティなどと深く繋がる部分もあれば、単純に書誌媒体の形式と機能に応じて生じた変化として捉えられる部分もある。

古来「謎」は、こうして他の文学形態と共生しながら、時代ごとに異なる意味が付与されつつ、生きのびてきた。清代末期に、それ自体が近代的文体を備え、独自のジャンルとして形成しようとした。これこそが燈謎の歴史的発展の本来の姿であると思われるが、民国期に書かれた「謎史」や「謎話」などにおいては、燈謎を古来独立したジャンルであるかのように、その存在痕跡を遡って発見する書き方が一般的であるが、そこには多くの矛盾が現れている。章回小説に収録された燈謎の考察を通して、その技法や文体の発展を如実に反映するためには、燈謎がかつて共生していた他の文学ジャンルと合わせて考えることがいかに重要なのかを第二章で論じた。

第三章では、なぜ現代中国語において「燈謎」と「謎語」の区別が一般化したか、という疑問

から出発し、一次資料として謎話という特徴的な文学スタイルを取り上げた。謎話に見られる文人意識の変化が、清末民国期の社会運動に対する中国文人の独自の解答という側面を有していたこと、謎話が表意文字である漢字の特性と長い科挙時代を経て累積してきた伝統的教養とに基づき、新文学運動による新思潮を吸収しつつ、近代ジャーナリズムの波に押されるだけでなく、自らも積極的に社会に影響を与えてきたことを明らかにした。そして、科挙時代の伝統的教養を存続させながら、執拗に新文化運動に抵抗するのではなく、新旧知識の流れを漢字文化で統合し、独自の道を拓く文人集団としての「謎人」の活動を分析した。謎人らが使った代表的な論点である「博奕猶賢」「小道可觀」「国粹保存」はいずれも一見伝統的な儒家思想だが、それぞれの文脈を考察していくと、どれもが当時の社会的思潮を取り入れており、積極的な意識の変化がその中に現われていた。具体的には、それらの意識変化に四つの段階があり、博奕を超えて啓蒙への変化、「小道可觀」を超えて「小道実難（小道を極めることの難しさ）」への変化、さらに、燈謎に対する認識は「やってもやり損じないもの（文人遊戯）」から「保存すべきもの（国粹）」へと発展していき、最後には、「保存」が新しいスタイルの「創造」に繋がるという変容が確認できる。命脈の経ったはずの燈謎のような旧時代の文字遊戯が、なぜ七世紀もの長きにわたって存続しつづけたのかという問いに、まず一つ挙げられる理由は、中核的な要素である漢字が持つ巨大なる生命力や漢字文化の包容性はもちろん、下層文人集団の意識の変化が大きな推進力となっていることである。近代文学運動の周縁に置かれる人々というイメージで捉えられがちだが、漢字文化の近代的価値を積極的に見出そうとしていた彼らは確実に当時の文化情勢の一翼を担っていたことが分かる。

第一部の論証を通して、燈謎の近代的文体の形成過程を相対的に把握した。燈謎の近代的文体の特徴を、文章表現と趣味の洗練〈雅〉、技巧の精緻化〈巧〉、儒家經典を中心とした伝統教養の駆使〈博〉、との三つにまとめてみる。その特徴だけを取って見ると、あたかも、本来「通俗的」「大衆的」だった燈謎が士大夫文化のイデオロギーに接近していったかのように見えるが、実際は、作者層の複雑な社会的地位やライフスタイルと共振共鳴しつつ形成されたものである。ある意味で、士大夫文化の擬態として捉えることもできる。ところが、各時代の文学評論を読むと、文学ジャンル形成の前後関係を表す「～余」の名称がある。それに沿うかのように、「小道」に言われる文学ジャンルも時代によって変わってきたことが分かる。例えば、かつて「文余」は詩の代名詞であった。詩が文学の正統として認識される時代になると、詞のことを「詩余」と呼んだりする。また、曲（雑劇と散曲を総称したもの）のことを「詞余」と呼んだりして、「～余」というのはすなわち、主流の文学ジャンルを創作する際に「余ったもの」、副産物として捉えられていることを意味する。こうして、一足先に出現した文学ジャンルが全盛期に入ると、その後形成されたジャンルは「小道」とされるのが、中国文学の括りにおいて、一種の習わしのように思われる。実際、謎人が自ずと燈謎のことを「小道」と称したのは、章回小説の全盛期にあたる時代であり、その後、謎話の出現によって、燈謎をめぐる言説が増え、燈謎と謎話が小説雑誌や新聞紙の余白に掲載されるようになり、そのことから、「小説余」「報余」という欄に入れられることがあった。要するに、燈謎は中国伝統文学の末端に位置する。そして、かつて様々な「～余」と称されていた文学ジャンルが徐々に「正統」に吸収されていったように、燈謎のような弱体であり、周縁的な漢字文化もまた、生まれながら「正統」への求心力を持ち、主流に惹きつけられずにいられなかった。そういった心理の現れとして、近代の謎人らは、燈謎の文学的地位の向上を果たそうと、しばしば『漢書・芸文志』『詩賦類』に『隱書』十八篇の書名を挙げるなど、「正統」との関わりを論拠に、燈謎の専門書は漢代からあったと主張し、文学としての由緒正し

さを強調しようとした。そうすることで、詞・曲・小説などかつては「～余」と称されていた、士大夫文化の周縁に置かれている文学ジャンルが正統性を獲得した事例を模倣し、同じような結果を導こうとしたのである。

ただ、その目標を果たすために、まず完成させなければならないのは、燈謎自体のジャンル化である。具体的には、謎人の間である程度固定した創作ルールを共有した上で、謎人をさらに増やし、「今体」謎の社会的認知度を高めていく必要があった。しかし、燈謎に与えられた文化的環境はすでに激変し、ナショナリズムが伝統文学に衝撃を与える中、正統文学の流れは「通俗化」「大衆化」をキーワードとする新文学と、伝統教養を推重する「国学」との間を、幾度も揺らいだのであった。その揺らぎが発生するたびに、謎人たちはどちらの方向に行くかという選択を迫られた。主流イデオロギーの風向きがやがて新文化のほうに向いた時は、科挙時代の儒家教養からなるべく離れて、積極的に新語や白話文を取り入れ、「今体」をさらに「改良」していく動きが見られたが、そこで浮かび上がった問題は、序章で提示したように、近代における謎史構築の問題点に繋がる。燈謎と「謎」の関係は「謎史」によって曖昧化されているが、中国民俗学を始めとする近代学術分野において、「謎」を民間文化の一種として研究対象にした場合、研究者たちはすぐに「燈謎」と「謎語」の異なる性質に気付いた。例えば、鍾敬文は燈謎についてこのように述べている。「作品の階級から論じれば、それらは既に半貴族的なもので、純淨な民間的のものではない。しかし、民衆のことばの中に（燈謎の）勢力はいまだ小さくない〔但就作品的階級論、已可說是半貴族的、而不是很純淨的民間的東西了、雖然在民衆口頭上它的勢力是不小的〕」¹と。近代知識人が使用する「民間」は階級に関わる概念であり、都市文化のみならず、知識人文化とも二項対立される。「民間的」なものはずなわち、政治イデオロギーの制御を受けずに継承されてきたフォークロアであり、主に農村・農民の伝統文化を指す。「民間」は最も純粋な、生命力のある中国文化の象徴として思われていた。ゆえに、旧知識人（士大夫階層）の伝統文学は貴族的な文学として批判の対象となり、燈謎もまたその中の一つと見做されていた。言い換えれば、中国民俗学は、「民間」に属する純粋な「謎」から、燈謎という不純物を排除しようとした傾向がある。ただ、燈謎が今なお民衆の中でかなりの影響力を持っていることを認めざるを得なかった。それは近世から始まった知識人層の拡大と知識人の周縁化による現象であり、知識人文化と民間文化の境界線自体が曖昧になったからである。本論文の第一部の研究成果を一言でまとめれば、燈謎のような文字遊戯が知識人文化と民間文化の境界線上を幾度となく揺れ動く様子を示したことである。

第二部では、燈謎の実践形態の近代化を中心に論じた。具体的には、台湾と大陸の事例を分析し、異なる政治イデオロギーの色を帯びる具体的なコンテキストにおいて、燈謎創作に見られる危機の現れ方、および異なった危機の解決策・言説・実践の派生を考察した。謎社の事例を通して、燈謎の実践形態に見られる転換点に注目しつつ、その連続性を深くまで掘り起こす作業を行った。

第四章では、戦後台湾の文化政策の転換を手がかりに、台湾の謎人と謎社が直面する諸問題の背景について考察を行った。台湾における燈謎の歴史を改めて整理することで、燈謎活動が現在まで存続してきた経緯を明らかにした。文化政策の発展と照らしあわせて台湾における燈謎活動の変容を考察し、明らかになったのは以下のことである。まず、燈謎のような前近代から発展

¹ 「鍾序」、劉万章『広州謎語（第一集）』（1928年初版）、高伯瑜等編『中華謎書集成』（第三冊）、北京：人民日報出版社1994年12月、2529頁。

してきた漢字文化の周縁的分野を存続させてきたのは、主に知識人を中心とした民間団体の活動であり、台湾においては、政府がそのような民間団体をすべて文化政策の傘下に取り込むのではなく、民間のほうが文化政策の主旨に呼応して、政府の支援を求めるために自ら文化政策の実行機構に接近していくような構図が見られる。その構図をめぐる問題について検討した。民間が如何に文化政策の主旨を汲んでいるかを政府に証明するため、文化政策が変動するたびに自らの活動形式やスローガンを変更し、活動目標に一貫性を見失う危険性が生じてくる。文化政策が実行される際は、政府側の要望が一方的に強調される場合が多く、文化政策に関する研究もまたほとんどが政府側の視点でしか行われず、構造上のアンバランスや文化政策の行き渡らない部分を見落としがちである点を指摘した。

第五章では、戦後から90年代までの大陸燈謎活動の概況を、文化政策の変化や組織の所属関係を手がかりにまとめ、以下の三点を結論として提示した。第一、「謎人」は近代中国下層知識人の一部として、かなり特徴のある集団であり、活動形式および活動の方向性の選択に強い主体性が確認できる。戦後大陸における燈謎活動の基盤を作った文化政策的背景として、主に40年代の「民族形式論争」と50年代の「知識分子改造運動」を挙げることができる。前者は燈謎のような非大衆的な旧文芸形式を中国新文芸の一部として改造することに明確な方向性を示し、後者は謎人集団の社会的地位を決め、労働者階級による大衆向けの文化活動の場を提供した。第二に、「非民間の士大夫形式であった燈謎」と「民間文学としての謎語」の関係性にまつわる問題はいまだに棚に上げられ、「中国の謎」という枠の中に放り込まれたものの、民間文学の方法論を用いて燈謎を研究する動きは全く見られないことが分かった。また、50年代以降の謎人の精神活動は政治イデオロギーに強く影響されてきたことを明らかにした。仮に「非民間的」である、と民俗学者によって仕分けられた燈謎が大衆への普及を通して、民間文学の分野に入れられようとするれば、まず解決すべき問題は「民間」という範疇の再確認と再構築であることを示唆した。

そして、第五章の末尾では、第二部で整理した近代台湾と大陸における燈謎活動の様相の異同をまとめた。大陸と台湾における謎人の集団の特徴はほぼ同じであり、旧知識人（士大夫）の嗜好を受け継いだ一部の近代知識人が中堅となっていることが分かった。両方とも、戦後から文革/文復運動期まで、政治イデオロギーの浸透が顕著であり、具体的な活動は文化政策の変遷に敏感に反応しながら展開されていたと見られる。ただ、台湾の謎人団体は大陸に比べ、形態の均一性を持たない。台湾では、ほとんどの謎社が謎人による自由結社であるため、組織の形態上、前近代の謎社とほぼ変わらない。そして、本省謎人は清末の士大夫流の作風を受け継ぎつつ、日本統治時代にローカル色の強い本土化燈謎を萌芽させたため、大陸から来た外省謎人との間には、言語による隔たりをはじめ、創作スタイルや謎会形式などにおいてかなりの食い違いがあった。その溝は同じ政治イデオロギーと文化政策環境の下で徐々に縮まり、現在は本省・外省の別がほとんどないが、近年、「台湾謎人」の間で「台湾燈謎」という文化ブランドを打ち出そうとする動きもみられる。一般的な流れとして、許可を得てから成立する大陸謎社とは違い、台湾の謎社は成立した後に該当する政府部門に民間社団の登録を行い、活動の合法性と政府の支持を得るのが一般的である。そのため、政府から提供される経費や場所はごく一部であり、地域間の交流も比較的少ない。一方、大陸の燈謎組織は50年代から労働者組合系統に付随し、管理され、比較的安定した活動経費と場所が提供されていた。各地域にある謎社は工人文化宮というネットワークを利用して、地域間の交流活動を簡単に企画することができる。80年代以降、大陸と台湾両方において、商業資本による燈謎活動への介入が目立つようになったが、商業資本と謎人の

関係性によって異なる結果が導かれた。台湾においては、企業が謎人を介さずに謎会を開く事例が見られ、謎人による批判があったが、大陸のほうは燈謎活動の主導権が依然として謎人にあり、企業はただスポンサーとして資金を提供するというケースがほとんどである。燈謎に関する学術的研究は大陸・台湾両方において少なく、進んでいない状況であるが、大陸と台湾の比較を通して、謎人の創作意識と主流イデオロギーとの関係性が浮き彫りになった。

本稿は全体を通して、燈謎を例にした漢字文字遊戯の七世紀を亘る変遷を、「エリート-民間」という座標軸において考察した。そこには時代的・イデオロギー的差異を超越した漢字文化の本質が保存されているように思われる。総括的に言えば、漢字の文字遊戯は漢字の完成過程を逆転させ、意味の伝達と意味の解体を同時進行する装置である。本稿で主に取り上げた「今体」燈謎を例にすれば、謎面となる儒家經典の文句が読み取られるのと同時に、文章本来の意味で読むではいけないという真逆な意識が発動される。つまり、文字通りの理解を回避しつつ、別の意味での「文字通り」を再構築していくというアプローチである。漢字語彙の多義性を利用して、別の意味で読み替えていく、または本来の語彙・文字を分解し変形させるなど、多様な技巧が使用されている。それらの技巧は漢字の表意文字としての性質と直結しており、伝統文学の主流に吸引されつつも、近代以降の新しい文化環境への即応性を持ち合わせている。創作意識や実践形態が「文学」と「モダニティ」を介して時代性を露呈していったが、文字遊戯自体は常に漢字と意味の乖離性を礎にしているため、活火山のような瞬発的な破壊力を内包している。時には外来文化に対する抵抗として、時には意義の解消と感覚の再構築として現れ、その成長性と不確定性は歴史化する可能性を秘めている。

本稿では触れなかったが、謎人を知識人文化／民間文化の中間に置かれる表象として分析する際に、大衆側の受容状況についても考察する必要があると思われる。漢字文字遊戯および漢字文化史全体に関して、まだ解明できていない課題が多々残っている。燈謎だけにしても、創作と謎人の生業や学術活動などとの関係、謎話における具体的な創作趣向の形成、個々の燈謎作品に関する分析、戦後大陸・台湾燈謎の文体上の変化に関する考察、イデオロギーの相違による創作スタイルの差異を検証・分析など、さらに緻密な研究が必要である。これらを今後の課題として、引き続き研究を重ねていきたい。

参考文献一覽

[注] * 脚注に明記したもの以外も含む。五十音順。一部新聞雑誌発行月不明。

〔資料〕

<中国語文>

一、単行本（謎書以外）

- 雲南省文史研究館編『滇雲片羽』（蕭乾主編、新編文史筆記叢書第二輯 14）、北京：中華書局、2005 年
- 歐陽脩『歐陽文忠公文集』（四部叢刊本、景上海涵芬樓藏元刊本）、上海：商務印書館、1929 年
- 歐陽脩・宋祁『新唐書』「列伝第四十四・武平一」、北京：中華書局、1975 年 2 月
- 郭沫若著作編集出版委員会『郭沫若全集』文学編第十九卷、北京：人民文学出版社、1992 年 1 月
- 橘中逸叟『來生福彈詞』、上海：商務印書館、1931 年
- 魏秀仁『花月痕』、古本小説集成（光緒 14 年〔1888〕福州吳玉田刊影印）、上海：上海古籍出版社 1990 年 8 月
- 行政院文化建設委員會編『七一年国家建設研究会-文化教育組文化部分參考資料』、台北：行政院文化建設委員會、1982 年
- 洪邁『夷堅志』、北京：中華書局、1981 年 10 月
- 古今文芸叢書社編集『古今文芸叢書第三集』、上海：広益書局、1914 年 3 月
- 吳趸人『足本二十年目睹之怪現狀』、上海：世界書局、1939 年 7 月
- 左丘明『国語』二十五別史 5、濟南：齊魯書社、2005 年 1 月
- 史次耘註訳『孟子今註今訳』、台北：台湾商務印書館、1973 年 3 月
- 司馬遷撰『史記』、北京：中華書局、1959 年 9 月
- 清代詩文集彙編編纂委員會編『澄碧齋詩鈔八』（清代詩文集彙編 315）、上海：上海古籍出版社、2010 年 12 月
- 上海古籍出版社本社編『清代筆記小説大観』、上海：上海古籍出版社、2007 年 10 月
- 上海古籍出版社編『唐五代筆記小説大観』、上海：上海古籍出版社、2000 年 3 月
- 周恩来『周恩来選集』、北京：人民出版社、1984 年 11 月
- 周作人『自己的園地』（晨報社叢書第 11 種）、北京：晨報社、1923 年 12 月
- 周作人／止庵校訂『看雲集』（周作人自選文集）、石家庄：河北教育出版社、2002 年 1 月
- 周作人／止庵校訂『蕪堂雜文』（周作人自選文集）、石家庄：河北教育出版社、2002 年 1 月
- 周密『齊東野語』（王文濡編輯『說庫』第 23 冊）、上海：文明書局；中華書局、1915 年 10 月
- 朱熹撰『四書章句集注』、北京：中華書局、1983 年 10 月
- 彰化県文献委員会編纂組『彰化県誌』（道光版）、彰化：彰化県文献委員会、1969 年 7 月年
- 徐珂編『清稗類鈔』第 29 冊、上海：商務印書館、1917 年 11 月
- 西周生『醒世姻縁伝』、上海：上海古籍出版社、1994 年 11 月
- 曹雪芹・高鶚著『紅樓夢』、東京大学東洋文化研究所所蔵程乙本（倉石武四郎教授旧蔵倉石文庫、乾隆 57 年〔1792〕木活字印本）、東京：汲古書院、2014 年 10 月
- 宗懔『荆楚歲時記』、太原：山西人民出版社、1987 年 9 月
- 孫家洲編『中華野史 先秦至隋朝卷』、濟南：泰山出版社、2000 年 1 月
- 台湾銀行經濟研究室編『安平県雜記』（台湾文献史料叢刊第二輯 35）、台北：大通書局、1959 年
- 張齊賢『洛陽搢紳旧聞記』、『筆記小説大観』第二冊、揚州：江蘇広陵古籍刻印社、1983 年 4 月

張岱『陶庵夢憶』（宋明清小品文集輯注1）、上海：上海遠東出版社、1996年11月
張燾『津門雜記』（沈雲龍主編·近代中国史料叢刊第五十七輯、565）、台北：文海出版社、1970年10月
陳森『品花寶鑑』、古本小說集成（道光29年〔1849〕初刊、上海古籍出版社藏後刊本影印）、上海：上海古籍出版社、1992年
田汝成『西湖遊覽志余』（中国文學參考資料叢書）、北京：中華書局、1958年11月
唐圭璋編『詞話叢編』第1冊、北京：中華書局、1986年1月
班固『漢書』、北京：中華書局、1964年11月
不著撰人『東坡居士印禪師語錄問答』（古本小說集成第五輯）、上海：上海古籍出版社、1995年
馮夢龍『掛枝兒；山歌；夾竹桃』、明清民歌時調集（上）、上海：上海古籍出版社、1987年9月
房玄齡等撰『晉書』（「二十四史」簡體字本）、北京：中華書局、2000年1月
孟元老等著『東京夢華錄（外四種）』、上海：古典文學出版社、1956年11月
毛沢東『毛沢東選集』第三卷、北京：人民出版社、1991年12月
俞達『青樓夢』、古本小說集成（鄭州大學圖書館藏活字本影印）、上海：上海古籍出版社1994年
郎瑛『七修類稿·續稿』、廣州：翰墨園1880年
李開先『李開先集』、北京：中華書局1959年12月
李汝珍『鏡花緣』、上海：亞東圖書館、1923年5月
李治『敬齋古今註（附拾遺）』、上海：商務印書館、1935年12月
劉侗·于奕正『帝京景物略』（宋明清小品文集輯注1）、上海：上海遠東出版社、1996年11月
劉勰著／范文瀾註『文心雕龍註』上下（中国古典文學批評理論叢刊）、北京：人民文學出版社、1962年12月
梁紹壬『兩般秋雨盒隨筆』（明清筆記叢書）、上海：上海古籍出版社、1982年8月
林文龍編『台灣詩錄拾遺』、台北：台灣省文獻會、1979年

二、類書

坂出祥伸·小川陽一編『中国日用類書集成』、東京：汲古書院、2000年7月-2004年10月
徐會瀛編『新鐫燕台校正天下通行文林聚寶萬卷星羅』（北京圖書館古籍出版編輯組編「北京圖書館古籍珍本叢刊」第76）、北京：書目文獻出版社、1988年
『新刻鄴架新裁萬寶全書』、東京大學東洋文化研究所仁井田文庫所藏
張英·王士禎等纂『淵鑑類函』、1887年上海同文書局石印本より影印、北京：中国書店、1985年8月
『鼎鏤龍頭一覽學海不求人』、東京大學東洋文化研究所仁井田文庫所藏

三、謎書

袁定華『布衣齋謎集』、台北：集思謎社、1975年4月
郭自得等編『西瀛燈謎選』（澎湖文獻專刊第三輯）、澎湖縣：澎湖縣文獻委員會、1981年5月
江更生主編『中華謎海』、上海：學林出版社、2000年11月
洪寬志等著『鹿港明燈 論語專集』、彰化縣鹿港鎮：朝陽鹿港協會、2008年12月
高伯瑜等編『中華謎書集成』、北京：人民日報出版社、1991年5月-1997年5月
吳仁泰·柯國臻編『佳謎鑑賞辭典』、合肥：黃山書社、1991年1月

- 吳朝綸『静閣謎話』（台湾文献類編・台湾先賢詩文集彙刊第八輯 15）、台北：龍文出版社、2011年5月
- 蔡建榮主編『謎話匯編十八種』、溫嶺：杏林文虎書齋、2011年7月
- 謝國文『省廬遺稿』（台湾先賢詩文集彙刊第2輯）、台北：龍文出版社、1992年（台北：大明印刷廠、1954年初版）
- 朱瑞墉『新世紀謎語集』、台北：國家出版社、2011年2月
- 徐立『燈謎叢話』、台北縣中和市：民族正氣出版社、1982年2月（1957年初版）
- 蘇州市謎學研究会編『吳人謎話文獻三種』（中華謎書集成・謎話專輯叢書、『蘇州謎苑』增刊）、蘇州：蘇州市謎學研究会、2009年12月
- 台北縣謎學研究会編『淡江度語』、台北縣三重市：台北縣謎學研究会、1976年11月12日
- 高雄市政府教育局編印『論語謎集』、高雄：高雄市謎學研究会出版、1982年10月
- 中華燈謎年鑑編輯委員會『中華燈謎年鑑』第一卷（1995年卷）、安陽：全國燈謎信息社、1997年10月
- 張起南『橐園春燈話』、漳州：福建省漳州市燈謎協會翻印、1986年
- 趙首成、邵濱軍主編『古今優秀燈謎鑑賞辭典』、桂林：漓江出版社、1991年6月
- 陳玦琳『斑瑜謎稿』、高雄：富進印書有限公司、1976年
- 陳振鵬主編『謎話』、上海：上海古籍出版社、2003年7月
- 陳祖舜主編『中國燈謎選』、台北：陽明山局立函書館、1972年9月
- 陳聯松等編『民衆謎集』、高雄：高雄市謎學研究会、1983年10月
- 程哲民『謎海』、台北：世界書局、1974年12月（1952年初版）
- 萍社同人輯『春謎大觀』（國立北京大學中國民俗學會民俗叢書）、台北：東方文化書局、1974年
- 楊文權『四知謎集』、自刊本、2009年
- 余真『打燈謎』、上海：上海文化出版社、1957年8月
- 劉二安·牛書友編『中國當代燈謎藝術家大辭典』、鄭州：中州古籍出版社、2002年1月

四、刊行物

1、新聞

- 『解放日報』、北京：解放日報社、1943年10月19日
- 『警鐘日報』、上海：警鐘日報編輯所、1904年
- 『高謎通訊』、高雄：高雄市謎學研究会、1986年
- 『三六九小報』、台南：三六九小報社、1930-1935年
- 『集思謎社成立十周年紀念特刊』、台北：集思謎社、1969年7月5日
- 『申報』、上海：申報社、1872-1948年
- 『圖畫日報』、上海：環球社、1909年
- 『台灣新報』、台北：台灣新報社、1896-1898年
- 『台灣日々新報』、台北：台灣日々新報社、1898-1937年
- 『中華燈謎』、基隆：基隆市謎學研究会中華燈謎雜誌社、1967年
- 『中華謎報』、丹東：中華謎報社、1994年

2、雜誌

- 『宇宙文摘』、重慶：卓希陶、1948年

『永安月刊』、上海：永安公司、1948年
『衛星』、蘇州：國學會、1937年
『益聞錄』901期、第11冊、上海：徐家匯報館、1889年9月
『華語月刊』、上海：東亞同文書院華語研究會、1936年
『學生雜誌』、上海：商務印書館、1914年
『學生文藝叢刊』、上海：大東書局、1929年
『協力月刊』、北京：平漢鐵路車務見習所學生自治會、1934年
『芸林月刊』、北京：中國畫學研究會、1942年
『現象月刊』、上海：現象月刊社、1936年
『光化』、上海：離石、1944年
『江蘇省立第五中學校雜誌』、常州：江蘇省立第五中學校、1915年
『江南汽車旬刊』、南京：江南汽車股份有限公司、1937年
『公平報』、香港：鄭澄海、1947年
『公餘生活』、桂林：不明、1940年
『虎會』、上海：不明、1948年
『古今半月刊』、上海：古今出版社、1944年
『國學萃編』第3期、晨風閣叢書甲集、北京：國學萃編社、1909年
『黑皮書』、上海：黑皮書發行部、1938-1939年
『國聞週報』、天津：國聞週報社、1934年
『五雲日昇樓』、上海：顧懷冰、1939-1941年
『珊瑚』、蘇州：珊瑚半月刊社、1932-1934年
『詩文之友』、彰化：中國詩文之友雜誌社、1956年
『遊戲世界』、上海：大東書局、1921年
『十日談』、上海：中國美術刊行社、1933年
『小說月報』、上海：商務印書館、1911-1920年
『小說新報』、上海：小說新報社、1916-1918年
『新月』、上海：新月社、1926年
『新上海』、上海：新上海週報社、1947年
『新々小說』、上海：新々小說社、1904年
『新聲』、上海：新聲學社、1921年
『新民報半月刊』、北京：新民報社事業局、1940年
『清華週刊』、北京：北京清華學校、1916年
『清華暑期週刊』、北京：清華暑期週刊經理部、1935年
『錢業月報』、上海：錢業公會、1927年
『前驅』、漳州：國民黨十九路軍第六十師、1932年
『坦途』、北京：坦途社、1927年
『中華小說界』、上海：中華書局、1914年
『鐵路協會會報』、北京：鐵路協會本部事務所、1921年
『東方雜誌』、上海：東方雜誌社、1925年
『東北大學週刊』、瀋陽：東北大學文法科理工科印刷股、1929-1930年
『萬歲雜誌』、上海：現代書局、1932年

『文芸月刊』、北京：文芸月刊社、1929年
『文虎半月刊』、武昌：文虎半月刊社、1936年
『文星雜誌』、上海：中華書局、1915年
『平漢路刊』、漢口：不明、1948年
『北華月刊』、北京：不明、1941年
『墨海潮美術月刊』、上海：海上書畫聯合會、1930年
『民國匯報』、上海：民國匯報發行所、1913年
『民俗』、廣州：國立中山大學語言歷史學研究所、1928年
『謎譚』、台中縣：台中縣謎學研究會、1997年
『庸言』、天津：梁德猷、1913年
『立言畫刊』、北京：立言畫刊社、1939-1942年
『綠洲月刊』、北京：綠洲月刊社、1936年
『蘆墟』、江蘇省蘆墟：唐公盛茶業號、1922年

< 日本語文 >

一、單行本

近藤奎『支那學藝大辭彙』、京都：立命館出版部、1936年12月
西周生著／左並旗男訳『醒世姻緣伝』、東京：兄弟舎、2002年4月
曹雪芹・高鶚著／松枝茂夫訳『紅樓夢』、東京：岩波書店、1973年7月
曹雪芹・高鶚著／飯塚朗訳『紅樓夢』、東京：集英社、1980年1月
曹雪芹・高鶚著／井波陵一訳『紅樓夢』、東京：岩波書店、2013年10月
戸田浩暁『文心雕龍』、新釈漢文大系64、東京：明治書院、1974年11月
松枝茂夫訳『周作人隨筆』（富山房百科文庫）、東京：富山房、1996年6月
吉川幸次郎『論語』（新訂中国古典選第3卷）、東京：朝日新聞社、1966年1月

〔研究〕

< 中国語文 >

一、單行本

歐陽哲生編『胡適文集5』、北京：北京大學出版社、1998年11月
嚴敦易『水滸伝の演變』、北京：作家出版社、1957年3月
黃慧貞『日治時期台灣「上流階層」興趣之探討——以「台灣人士鑒」為分析樣本』、台北縣板橋市：板橋稻鄉出版社、2007年9月
黃霖『中国小説研究史』、杭州：浙江古籍出版社、2002年3月
胡士瑩『話本小説概論』、北京：商務印書館、2011年9月（北京：中華書局、1980年5月初版）
周作人／楊楊校訂『中国新文學的源流』二十世紀國學叢書、上海：華東師範大學出版社、1995年12月
鍾敬文『民間文學概論』、上海：上海文芸出版社、1980年7月
錢南揚『謎史』、廣州：國立中山大學語言歷史研究所、1928年7月
孫楷第『俗講、說話与白話小説』、北京：作家出版社、1956年6月
陳光堯編『謎語研究』（王雲五主編・百科小叢書）、上海：商務印書館、1930年12月
陳幸蕙『「二十年目睹之怪現狀」研究』、台北：國立台灣大學出版委員會、1982年6月

- 陳美林·馮保善·李忠明『章回小說史』、杭州：浙江古籍出版社、1998年12月
- 陳平原『中國小說敘事模式的轉變』、上海：上海人民出版社、1988年3月
- 陳平原·夏曉虹『20世紀中國小說理論資料』第一卷、北京：北京大學出版社、1989年3月
- 任半塘『唐戲弄』、上海：上海古籍出版社、1984年10月
- 繆詠禾『明代出版史稿』、南京：江蘇人民出版社、2000年10月
- 陸滋源『中華燈謎研究』、南京：江蘇科學技術出版社、1986年5月
- 李孝悌『清末的下層社會啟蒙運動：1901-1911』（台灣學術叢書）、石家莊：河北教育出版社、2001年11月
- 劉初棠『中國古代酒令』、上海：上海人民出版社、1992年3月
- 婁子匡·朱介凡編『五十年來的中國俗文學』（現代中國文藝史叢書）台灣：正中書局、1963年8月
- 魯迅『中國小說史略』、同『魯迅全集』第9卷、北京：人民文學出版社、2005年11月

二、雜誌論文

- 于天池·鄭友善「說商謎」『文史知識』2000年1期、北京：中華書局、2000年1月
- 王正華「生活、知識與文化商品：晚明福建版『日用類書』與其書畫門」『中央研究院近代史研究所集刊』第41期、台北：中央研究院近代史研究所、2003年9月
- 王淑蕙「日治時期台灣『燈謎』對『詩經』的運用」、『高雄師大學報』第二十九期、高雄：國立高雄師範大學、2010年
- 葛兆光「一般知識、思想與信仰世界的歷史」『讀書』1998年第1期、北京：生活·讀書·新知·三聯書店、1998年1月
- 何滿子「古代小說退潮期的別格——『雜家小說』——『鏡花緣』膚說」『社會科學戰線』1987年1期、長春：吉林人民出版社、1987年1月
- 居乃鵬「商謎考」『國文月刊』七十八期、上海：開明書店、1949年4月
- 饒龍隼「諸子「小說」正義」、全國重點學科·中國古典文學教育部百所重點研究基地·四川大學中國俗文化研究所編『新國學』第4卷、成都：巴蜀書社、2002年12月
- 黃文虎「台北謎學史」、台北市文獻委員會編『台北文物』第4卷第4期、台北：台北市文獻委員會、1956年2月
- 胡曉真「知識消費、教化娛樂與微物崇拜——論『小說月報』與王蘊章的雜誌編輯事業」『中央研究院近代史研究所集刊』第51期、台北：中央研究院近代史研究所、2006年3月
- 胡瑜「陳森交遊事跡考述」『常州大學學報（社會科學版）』第13卷第4期、常州：常州大學、2012年10月
- 胡瑜「再談陳森生平著作的若干問題」『明清小說研究』2012年第2期、南京：明清小說研究編輯部、2012年
- 商偉／王翎訊「日常生活世界的形成與構築：『金瓶梅詞話』與日用類書」『國際漢學』第21輯、鄭州：大象出版社、2011年5月
- 蕭東發「建陽余氏刻書考略（下）」『文獻』23期、北京：國家圖書館、1985年
- 蕭東發「官私兼辦的書院刻書——中國古代出版印刷史專論之七」『編輯之友』1991年第五期、太原：山西出版集團、1991年5月
- 徐子方「李汝珍年譜」『文獻』2000年第1期、北京：國家圖書館、2000年1月
- 戴健「商謎三題」『古典文學知識』2015年第4期、南京：鳳凰出版社、2015年7月

- 張獻忠「日用類書の出版与晚明商業社会的呈現」『江西社会科学』2013年第12期、南昌：江西省社会科学院、2013年12月
- 鄧洪波・周郁「試論明代書院的藏書事業及特点」『高校図書館工作』2005年第五期、長沙：湖南省高等学校図書館情報工作委員会、2005年10月
- 張毅「關於宋人『說話』的幾個問題」『南開學報』2000年3期、天津：南開大学、2000年5月
- 張政烺「《問答錄》与『說參請』」『張政烺文史論集』、北京：中華書局、2004年4月
- 遲崇起「試論『花月痕』对『品花寶鑑』的模倣和抄襲」『河北師院學報（社会科学版）』1997年第4期、石家庄：河北師範学院學報編輯部、1997年10月
- 范勝雄「五十年来的府城燈謎」『台南文化』新三十八期、台南：台南市政府、1995年2月
- 馮保善「宋人說話家数考弁」『明清小說研究』、2002年第4期、南京：江蘇省社会科学院明清小說研究中心、2002年12月
- 李時人「出入『乾嘉』：李汝珍及其『鏡花緣』創作」『国学研究』第四卷、北京：北京大学中国傳統文化研究中心、1997年7月
- 李拓之「中国的舞蹈（續）」『厦門大学學報（文史版）』1954年第5期、厦門：厦門大学、1954年10月
- 林祖武「福建謎史初探」、福建省晋江県文化館燈謎協會編『晋江謎苑』第二輯、泉州：泉州師專印刷廠、1986年10月
- 劉興漢「南宋說話四家的再探討」『文学遺產』1996年第6期、北京：中国社会科学院文学研究所、1996年11月
- 劉富偉・郭豫適「文人小說和平民小說的分野与兼容——論清代嘉道時期章回小說的創作格局」『學術月刊』第38卷2月号、上海：上海市社会科学界聯合会、2006年2月

三、学位論文

- 王思明「屏東市慈鳳宮、归来慈天宮元宵燈謎研究」、国立屏東教育大学中国語文学系碩士論文、2009年7月
- 王淑芬「鹿港当代燈謎研究」、国立彰化師範大学台湾文学研究所台湾文学教学碩士論文、2012年7月
- 陳淑慧「台語燈謎語義处理認知過程之研究」、国立新竹教育大学台湾語言与語文教育研究所碩士論文、2009年7月
- 林果顯「『中華文化復興運動推行委員會』之研究（1966-1975）」、国立政治大学歷史研究所碩士論文、2001年7月

<日本語文>

一、単行本

- 小川陽一『日用類書による明清小説研究』、東京：研文出版、1995年10月
- 酒井忠夫『中国日用類書史の研究』、東京：国書刊行会、2011年1月
- 菅野敦志『台湾の国家と文化「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』、東京：勁草書房、2011年11月
- 鈴木虎雄『支那文学研究』、東京：弘文堂書房、1925年11月
- 仁井田陞『中国法制史研究』、東京：東京大学出版会、1959年8月-1964年3月
- 林友春『近世中国教育史研究：その文教政策と庶民教育』、東京：国土社、1958年3月

二、雑誌論文

- 池田麻希子「『醒世姻縁伝』研究序説：作者と成書年代を中心に」『藝文研究』第74期、東京：慶應義塾大学藝文学会、1998年6月
- 猪俣庄八「中国小説に關するノオト：白話短編小説の展開」（『北海道大学文学部紀要』2、札幌：北海道大学、1953年3月
- 内山精也「転回する南宋文学—宋代文学は『近世』文学か？—」『名古屋大學中國語學文學論集』26、名古屋：名古屋大學中國文學研究室、2013年12月
- 小川陽一「日用類書『万用正宗』『万宝全書』『不求人』など」『月刊しにか』9-31、東京：大修館書店、1998年3月
- 勝山稔「白話小説研究における『話本』の定義について—中国白話小説研究における一展望(Ⅲ)—」『国際文化研究科論集』7巻、仙台：東北大学大学院国際文化研究科、1999年12月
- 高慶元「中国労働組合性格の変化に関する分析」『現代社会文化研究』第22号、新潟：新潟大学大学院現代社会文化研究科、2001年11月
- 呉修喆「言語遊戯から文字遊戯へ—漢字字謎の形成について—」『伝承文学研究』第八号、東京：國學院大學伝承文学学会、2009年3月
- 呉修喆「近代における漢字文化新分野の形成——文義謎を例として」『アジア地域文化研究』第9号、東京：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2013年3月
- 呉修喆「明末の日用類書から見る燈謎」『中国—社会と文化—』第30号、東京：中国社会文化学会、2015年7月
- 渋谷誉一郎「南宋『説話四家』について」『藝文研究』49期、東京：慶應義塾大学藝文学会、1986年7月
- 菅野敦志「中華文化復興運動にみる戦後台湾の国民党文化政策」『中国研究月報』第59巻第5号、東京：一般社団法人中国研究所、2005年5月
- 那波利貞「元宵觀燈」史學地理學同攷會編『歴史と地理』第一巻、東京：大鐙閣、1917年11月
- 西田真之「近代中国における妾の法的諸問題をめぐる考察」『東洋文化研究所紀要』第166冊、東京：東京大学東洋文化研究所、2014年12月
- 松本光雄「類書に表現される中国社会の特性」『東洋史研究』16巻1号、京都：東洋史研究会、1957年6月
- 三浦國雄「沖縄に傳來した『万宝全書』」『文芸論叢』62巻、京都：大谷大学文学研究会、2004年3月

三、学位論文

- 呉修喆「清末民国における漢字文化新分野の形成—文義謎ブームをめぐって—」、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士論文、2012年3月

<英文>

- “On Chinese Divination by Dissecting Written Characters,” *T'oung pao*, Vol.1, Leide:E. J. Brill, 1890
- Notes on the Riddle in China, Richard C. Rudolph - *California Folklore Quarterly*, 1942